早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）

自己の発達における重要他者の意義

―移行対象を媒介にして―

Significance of significant others in self-development：Transitional objects as mediators

2020 年 7 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

岩﨑　美奈子

IWASAKI, Minako

目次

第１部

第１章　自己と移行対象 *3*

第１節　はじめに 4

第２節　「自己の確立」について 5

第３節　「自己の確立」に寄与する移行対象 14

第４節　まとめ 29

第２章　自己の発達 *30*

第１節　問題と目的 31

第２節　本研究の目的 33

第３節　移行対象の定義 33

第４節　予備調査 36

第５節　方法 47

第６節　結果 50

第７節　考察 75

第８節　課題と展望 80

第２部

第３章　自己の確立と補助の役割を担う移行対象 *81*

第１節　はじめに 82

第２節　問題と目的 82

第３節　予備調査 84

第４節　青年期における移行対象 86

第５節　方法 93
第６節　結果 105
第７節　考察 150
第８節　課題と展望 157

第３部

第４章　自己の臨床 159
第１節　はじめに 160
第２節　神経性無食欲症３症例への介入 164
第３節　継続支援に支障をきたした発達障害児６症例の母親への介入 198
第４節　症例による検討の限界と展望 209
第５章　総合考察と課題 210
第１節　自己と社会の媒介者としての移行対象 211
第２節　心身の媒介者としての移行対象 212
第３節　課題と展望 214

付録 3-1 216
引用文献 217

第１部

第１章　自己と移行対象

― 先行研究とリサーチクエスチョン ―

第１節　はじめに

我が国では，2016 年に公職選挙法の選挙権年齢，2018 年に憲法改正国民投票の投票権年齢が 18 歳に引き下げられ，国政の重要な判断を高校生でも行えるようになった．2022 年には市民生活に関する基本法である民法の改正により，成年年齢も 18 歳に引き下げられる．民法が定めている成年年齢は，「一人で契約をすることができる年齢」という意味と，「父母の親権に服さなくなる年齢」という意味があることから(政府広報オンライン,2018)，若者の自己決定権を尊重して，積極的な社会参加を促すことを目的とした改正であるとされる．

一方で，若者の大人への移行の期間は，安定した就労，離家，結婚といった大人への移行の主要な指標の変化から見て,この 30 年あまりの間に明らかに延長している(乾,2016)．斎藤（2008）は，ひきこもりなどの非社会化の進行を踏まえて，成人年齢は 35 歳～40 歳くらいであるとしている．最高裁判所においても，少年法改正について，若者の成熟度に関して法務省と論争した際に,「社会の発達と複雑化に伴い，精神の成熟時期はむしろ遅れる傾向にある」と指摘している（広井，2010）．すなわち，現代社会は，精神的には未成熟である若者に対して大人並の責任を求めている可能性がある．

成年年齢の引き下げに伴い，若者の自立支援は急務と言える．内閣府が開催した有識者による「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会」の報告書（内閣府，2005）においても,「若者の社会的自立をめぐる問題は，職業的自立を果たせない若者の増加や，さらには社会の中で活動の場を求めることのできない，いわば社会とのつながりを失った若者の増加として現れている．このような社会的に孤立した若者の増加は，本人の幸せや自己実現という点からみても，また我が国の社会の活力という点からみても，将来にわたる重大な問題である．若者の自立支援は国をあげて取り組むべき喫緊の課題となっている」とまとめられている．また，同府による「子ども・若者育成支援推進本部」の「子ども・若者ビジョン」においても,「自立した個人としての自己を確立する」ことが理念として挙げられている．

田中（2009）は，思春期や青年期がとりわけ自己像や他者との関係性の変化に伴う不安が大きいことを指摘し，無事に乗り越えるためには周囲の人たちとの日々のコミュニケーションを通じて，他者との安定した関係や一貫性のある自己をある程度維持することが重要だとしている．ところが，現代社会は多くの個人が成熟による自己の確立ではなく，ま

ずそれぞれのキャラを獲得させられる傾向があり，加えて，かつてリアリティの発生源であった身体固有の重層性は急速にメディアの重層性に置き換わりつつあるために，身体性の衰弱が指摘されている（齋藤，2013）．キャラという固定化された自己は自立に向けた新たなステップへと踏み出すことを困難にするため，「自立した個人としての自己を確立する」ことは非常に難しくなっていると考えられる．

以上より，個人の成熟と社会の要請の不一致が生じる現代社会において喫緊の課題とされ，必要とされている支援とは，希薄になりつつある「自己」を支え，自立の前提となる「自己の確立」へと導く支援と言えるのではないだろうか．

第２節　「自己の確立」について

心理学において，James（1890）が自己を「知る主体としての自己（I)」と「知られる客体としての自己（me)」に区別して自己の二重性を指摘して以来，自己にまつわる様々な研究がおこなわれている．たとえば，Allport（1943）はひとが自己内部の統一を得ようとする希求を持つとして，自分自身のものという感じであるプロプリウム（proprium）の８つの機能を挙げて自己を研究した．また，Neisser（1988，1993）は自己についての情報の形態に焦点を当てて，5 つの自己の側面を明らかにした．さらに，Cooley（1902）や Mead（1934/1973）は自己の社会性を重視して，自己は他者や社会集団全体という一般化された観点から間接的に経験するものであると定義した．加えて，近年では語りを通して自己をとらえる研究者もおり，個人を統一体へとまとめあげるために構築する特別なストーリーは自己物語（Narrative of Self）と呼ばれる（McAdams，1993）．

自己の成り立ちや定義は様々な側面からなされているが，発達臨床心理学を専門とする石谷（2007）は，「自己とは自分についての心理的な経験，自分がまとまっていたりいなかったり，時間的な連続性があったりなかったりする，主観的な経験を表す言葉として再定義されてきている」と述べる．その上で，「自己とは，刻々と変化していく自分についての，その都度オーガナイズ（organize）された経験」であるとして，自己がプロセスであり動的なものであることを示唆している．

さて，自己の確立，特に本論で扱う自立に導く発達的な自己の確立について，最初に言及したのは Jung（1931）である．彼は意識の中心を「自我（ego)」，無意識を含めた心全体

の中心を「自己（self)」と定義して，個人が意識的な自我のみならず，無意識の領域をも統合した全体的な「自己」となることを治療目標とした.「自己」とは生物の成長過程と同様の要件をもって先天的な可能性や能力を持った心を変化させていくものであり，心が発達し，分化し，統合し，個性をもち，その全体性を維持するために中心を定める，自己調節機能をもつように導いていく働きもある（吉田，2002)．すなわち，自己とは動的なものであり，冒頭で述べた様々な側面や特徴を持つ断片的な自己を調節してまとまりを持たせることが，個人としての自己の確立に寄与すると言えるのではないだろうか．対人関係論を提唱したSullivan（1964）は，人は人間関係の数だけ異なる自己を持つと述べ，これらの多重自己がどの程度統合されているかが健康を規定するとしている．ただし，このような異なる対象に対して異なる関係性を作る関係性特異性(relationship specificity)は，乳幼児にはみられるものの成人期にはほぼ消失する（青木，2012)．これは，成長発達に伴って自己がある程度まとまるためではないだろうか．すなわち，自己の確立には様々な自己をまとめ上げる力が必要であると考えられる.

本節では，発達的な自己の確立についてより実証的に示した乳幼児研究の知見から，本論における「自己の確立」を定義したい.

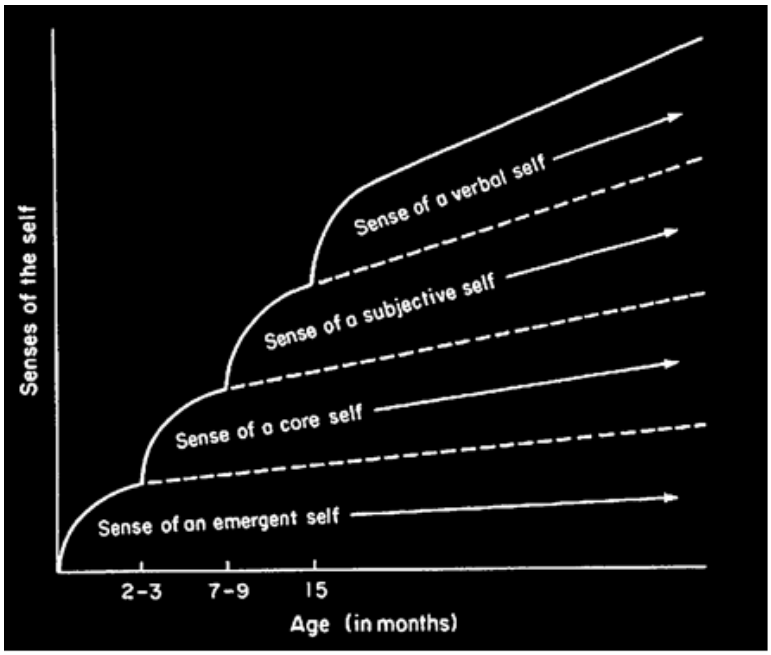
第１項　　自己感理論

Stern(1985)は米国の精神科医であり,実証的なアプローチにより「被観察乳児(observed infant)」（直接観察の中から乳児の発達や行動を理解していく）と「臨床乳児（clinical infant)」（成人患者の回想から遡及的に理解していく）の統合を図り，自己にまつわる感覚を「自己感（the sense of self)」と定義して自己の発達を研究した．彼は,「私たちは自分たちの体験を，それが何か独特で主観的なオーガナイゼーションに属すると思えるようなやり方で，本能的に加工処理します．この主観的オーガナイゼーションを，通常自己感と呼びます」と自己感を定義して,人には日常的な体験を主観的に組織化(organization)して加工処理する作用が備わっており,こうした組織化の主体こそが自己感であるとした.すなわち,自己感は組織化によって生じる感覚であると同時に,組織化の主体とも言える.

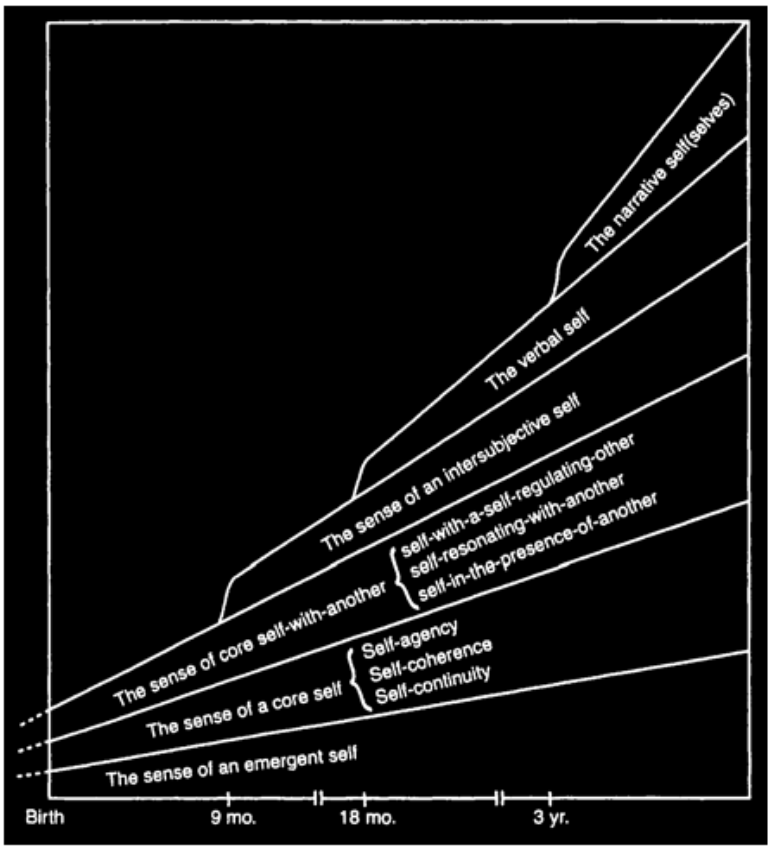
Stern（1985）による自己の発達（図 1-1）では,「新生自己感（sense of an emergent self)」,「中核自己感（sense of a core self)」,「主観的自己感（sense of subjective

self)」,「言語自己感（sense of a verbal self)」という4つの自己感が漸次的に現われるなかで,総体的な自己ができあがると考えられている．その後,Stern（2000）では,「他者とともにいる中核自己感(the sense of core self-with-another)」が新たに想定され,主観的自己感は「間主観的自己感（the sense of an intersubjective self)」に改められた．その背景には，人は生まれながらにして関係性の中に埋め込まれた存在であるということへの気付きがある．すなわち，関係性は自己の組織化（organization）に不可欠な土台であり，関係性という環境の性質によって組織化（organization）される自己は異なったものとなる.Sternの自己感理論は,これまで研究対象とすることが困難であった,James（1890）の「知る主体としての自己（I)」から「知られる客体としての自己（me)」までを発達的に明らかにしたと言える．Stern の自己の確立の達成は個人の中の意識化できない「I」と意識的な「me」を統合し，全体としての自己の感覚をもたらすという点，自己感は生涯にわたって維持され洗練されるという点において,Jungの理論をその後の実証的研究の知見から分かりやすく論じている.

Sternが自己感の確立において重視したのは,乳児と養育者の相互的なかかわりである.「他者とともにいる感覚（sense of core self-with another)」のなか，養育者の情緒調律(affect attunement)によって生じる乳児と養育者の間主観的な関係性が自己感の土台となる．すなわち，関係性は自己感を確立する基本となる概念なのである．これは，健康な自己が幼少期の養育者からの反応によって形成されるとしたKohut（1971, 1977）の見解とも重なる．Kohut は科学的心理学としての経験―観察的アプローチにこだわって自己心理学を提唱し,共感によって自己の損傷している部分を治療することを推奨した.Sternの力動的な自己感理論も，乳児期よりつくられる自己感の未発達な領域にアクセスしてその再編を促す治療論であることから，自己を発達的に捉えることは臨床的にも意義深いと考えられる.



(Stern, 1985)



(Stern, 2000)

図1-1 自己感の発達モデル

第２項　　分離―個体化理論

社会の中での「自立」にかかわる文脈で，自己の確立を論じた精神科医にMahler (1975) がいる．Mahler は実験室での母親と乳幼児の行動観察に基づき，分離―個体化理論（Separation-individuation theory）を提唱した．これは，乳幼児が母親との一体状態から徐々に分離し，過剰な不安や緊張に襲われることなく一人で行動できるようになる過程を描いたものである（図 1-2）．その過程の中で乳幼児の自立を可能とするのは，目の前には見えなくても心の中に母親が存在している状態である，「情緒的対象恒常性（affective object constancy)」の確立とされる．すなわち，分離とは依存できているということの表れであり，子どもの自立に向けた試みは，養育者への依存と養育者による保護を前提として行われていると考えられる．

「分離―個体化」理論では，身体的接触がなければ安全の感覚が得られない物理的な近接優位の状態から，身体的接触がなくてもいざとなれば確実にくっつき得るという見通しによって安全の感覚が得られる，表象的な近接優位の状態へ移行していくと考えられている．すなわち，物理的に母親から離れていても母親から永遠に見捨てられたり，引き離されたりするわけではないという確信があってはじめて，心理的にある程度自立できるということを実証したと言える．Mahler によれば，この「一定時間以上，母親のもとから離れていられる能力」を獲得する為には，「安定した精神内界の自己表象と対象表象の確立」が必要になる．Stern (2000) も自己感が創られることと関連して，乳児が早期に間主観的な体験を抽象化して表象するとしており，間主観的な関係性そのものが表象されると述べている．一方で，分離―個体化を成し遂げた後の表象的な近接優位の状態は，安全感を与えてくれる養育者や他者を直接目にすることができないため，常に養育者や他者への近接可能性を推測しなくてはならない．しかし，その推測がどれだけ確かなものであるかという確証を得ることはできないために，我々は常に自他に対する不安に苛まれることとなる．したがって，分離―個体化は乳幼児期に限った問題とは言えない．Blos (1962) は，青年期における親からの自律願望とそれに伴う不安との間の揺れ動きや心理的葛藤を，「第二の分離―個体化」(second separation-individuation) と名付けている．

以上より，「自己」とは養育者に依存することができ保護してもらえる良好な養育者との関係性において築かれ，個人の「表象機能」によって維持されるものであり，自己と関係性が密接に影響し合いながら発達し，確立されるものだと考えられる．

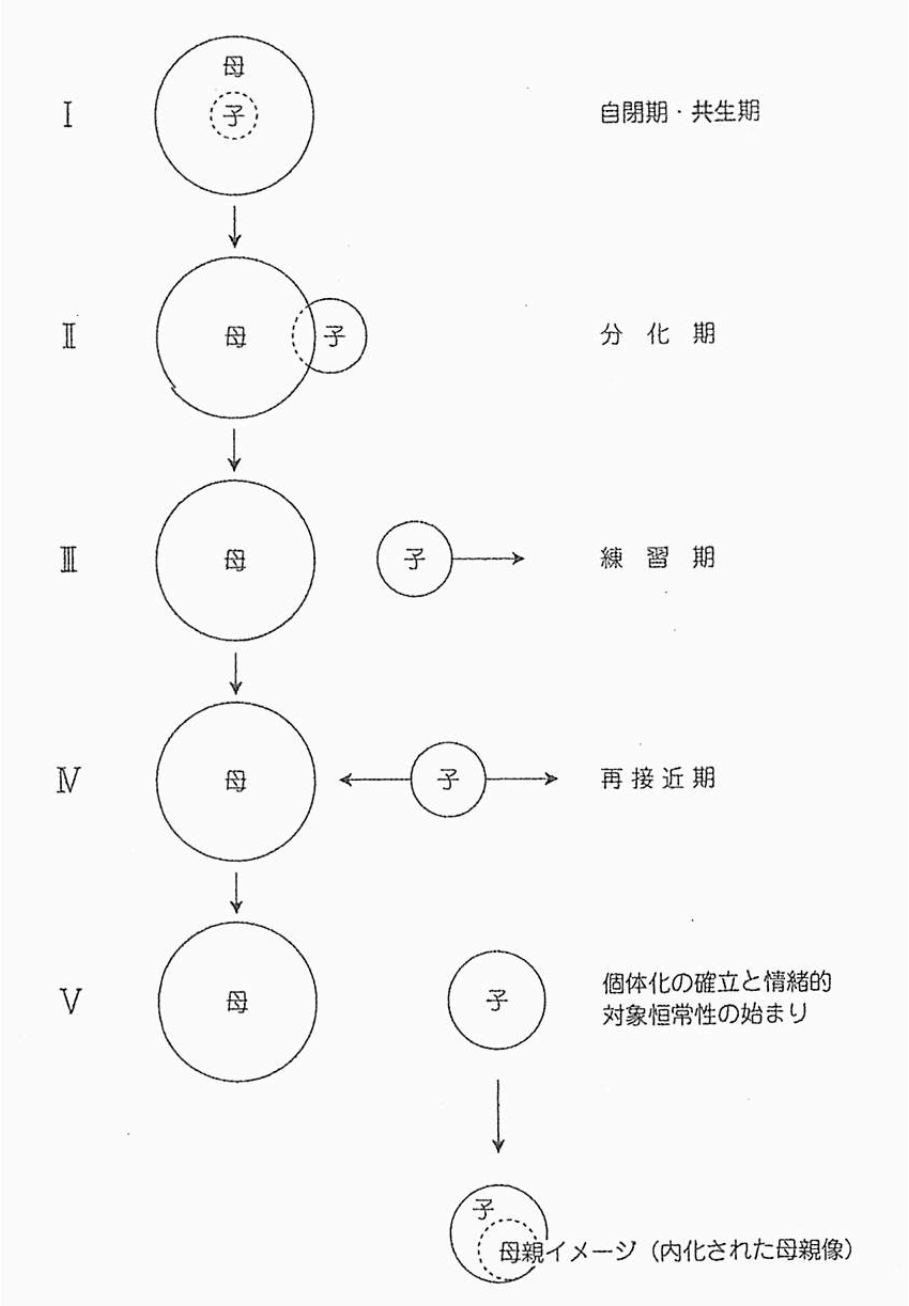


図1-2 分離一個体化のプロセス（井原，2009）

第１項　　アタッチメント理論

表象機能の確立において重要な概念にアタッチメント（attachment）がある．アタッチメント概念を提唱したのは，Mahler と同じく発達早期の母子関係に着目してその重要性を証明しようとした，精神科医の Bowlby（1951）である．Bowlby は精神分析の理論が，母子の結びつきを空腹といった生理的欲求を満たしてもらうことから二次的に生じるものとしていたことに異議を唱え，むしろ乳児は母親との接触を維持しようとする本能的な欲求をもっていると論じた．アタッチメントは「親と子の情緒的絆」と広義に解釈されることもあるが，より厳密には，「個体がある危機的状況に接し，あるいはまた，そうした危機を予知し，恐れや不安の情動が強く喚起された時に，特定の他個体への接近を通して習慣的な安全の感覚（felt security）を回復・維持しようとする傾性」を指して言う（数井・遠藤，2005）．たとえば，子どもが遊んでいる際に転んで泣けば，多くの養育者は急いで近寄って大丈夫かと声をかけたり，傷があれば手当てしたり，痛いの痛いの飛んでいけーとおまじないをするなどして泣きやませようと奮闘するだろう．こうした養育者の様々な働きかけにより，子どもは安全の感覚を回復し，再び遊びに出かけていく．アタッチメント理論で言えば，子どもは何かしらの不快な出来事に対して「泣く」という信号行動（signaling behavior）を通して養育者を呼び寄せ（養育者に接近し），心地よい状態にしてもらい，再び探索に出かけるというサイクルであり，「安心感の輪（Circle of Security）」と呼ばれる（図 1-3）．Mahler（1975）の発達理論は，乳幼児の母親へのアタッチメント過程を観察することで導かれた理論であり，分離―個体化（自己の確立）を成し遂げるための前提としてアタッチメントを位置づけることができる．こうした情緒的な絆は，最初は一番身近な養育者との関係で始まるものだが，その対象を仲間やパートナーなどに変えつつ生涯にわたって続いていくものと考えられている.Bowlby(1995/1973)は青年期の自立について，「しっかりと確立された自立心は他人に頼る能力と矛盾しないばかりか，他人に頼る能力から自立心が育ち，自立心と他人に頼る能力とは補足しあうことは明らかである．（中略）安全な基地や家族の強力な支持はこれまで子どもの自立心を弱めるとされていたが，今後はそれを大いに促進するものと考えるべきである」と述べている．

こうしたアタッチメント対象との持続的な相互交流を通して形成されるアタッチメント対象および自己に関する心的な表象を，Bowlby（1995/1973）は認知心理学を援用して「ワーキングモデル（Working Model）」と呼んだ．アタッチメント対象に関するワーキングモ

デルとは，アタッチメント対象への接近可能性やアタッチメント対象の応答性に関する表象モデルであり，自己に関するワーキングモデルとは，自分が他者から，特にアタッチメント対象から受容され，助けてもらえるような人間であるかどうかといった表象モデルを指している．この 2 つのモデルは相互に補うように，また相互に強めるように発達すると考えられており，個人はそうしたモデルによってさまざまな出来事を知覚し，未来を予測し，自分の行動計画を作成すると仮定されている（久保，2003）．このような親子のアタッチメント・パターンを基盤としたワーキングモデルという概念は，親子の関わり合いを通して子どもが表象機能を培っていくことを示唆している．上述したように，ヒトのアタッチメントは物理的な近接と表象的な近接の二重性によって特徴づけられているため，物理的近接がたとえ叶えられなくても，表象的近接が成り立っていれば心理的な安心感を保つことができ，自立へと導く自己の確立に寄与すると考えられる．

アタッチメントの重要性は，ルーマニアの施設児を対象として 2001 年より開始された「ブカレスト早期介入プロジェクト研究」（Nelson & Zeanah，2014/2018）により，近年さらに注目を集めている.アタッチメント対象との関係が安心できないものであると,特に,自己と社会性の発達に長期的なダメージが現れることが明らかとなった．また，養育者でなくても安定した大人との関係が自己と社会性の発達を補償することも明らかとされている（Heckman，2013/2015）．すなわち，安心感のある（secure）アタッチメント関係を基盤としたワーキングモデルという表象が自己の確立に寄与し，アタッチメント対象である養育者からの分離―個体化や，社会的な個人としての社会性の発達という自立において重要であることが示唆される．

一連の先行研究より，本論における自立へと導く「自己の確立」とは，幼少期の養育者に代表される「重要な他者との安心感のある（secure）関係性から育まれる表象を用いて，自立に際する不安に対処し，まとまりのある自己を維持すること」と定義する．

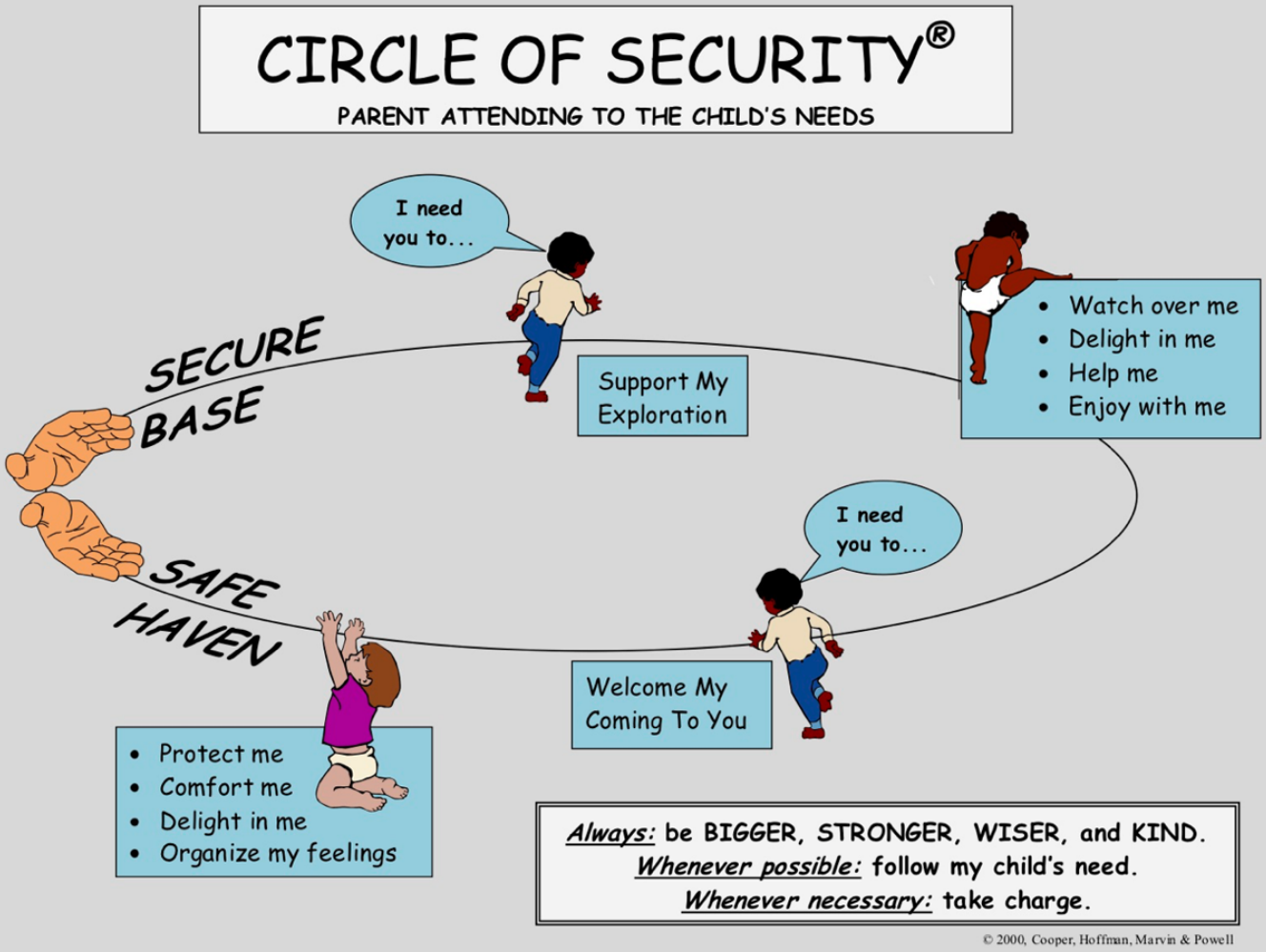


図1-3 安心感の輪（http://circleofsecuritynetwork.org/the_circle_of_security.html）

第３節　「自己の確立」に寄与する移行対象

本論の仮定である「自己の確立」が自立を促すことを実証するためには,「重要な他者との安心感のある(secure)関係性から育まれる表象を用いて,自立に際する不安に対処し,まとまりのある自己を維持する」現象を客観的に捉える指標が必要である.

小児科医である Winnicott（1953）は，以下に詳述する臨床に根ざした独自の発達観を述べたが，彼が発見した移行対象（transitional objects）[1]という乳幼児の愛着物は，本論における「自己の確立」を可視化する対象物であると考えられる.

Winnicott（1953）は，子どもが母子分離できずに養育者に絶対的に依存する段階から，自己を確立し，探索できる相対的依存の段階へと移行する際に，毛布やぬいぐるみなど特定の対象に夢中になる様子を移行対象や移行現象（transitional phenomena）と名付け，それらが自己の確立にポジティブな影響を与えることを明らかにした.これらは,「乳児側の移行を，つまり，母親と融合している状態から母親の外部にあり独立したものとして存在する状態への移行」(Winnicott,1953）を表しており，子どもが分離の不安に持ちこたえるために創造した対象物とされる（表 1-1).「ジェインの毛布（Miller, 1971/1963)」や「くまのプーさん（Milne, 1940/1926)」などの文学作品では，移行対象である毛布やぬいぐるみと子どもとの関係が感動的に描かれている.

---

[1] transitional objects の「transitional」の邦訳について，橋本（1979）および北山（1990）では「移行」という訳語を用いており，現在，一般的にはこの邦訳が用いられている．しかし，牛島（1982）はそれを「過渡」と訳し，その理由について,「過渡」には「移行」という言葉が持つ「移り行く」という意味に加えて,「旧いものから脱して新しいものへ移る」という意味が含まれていると述べ,「移り行く」だけではあまりにも現象的で，transitional objects の transition にはこの加えられた意味がほしいとしている．また，北山（2003）も,「移行」という訳語を用いながらも，transition がもつ「はかなさ」や「通り過ぎていく」という情緒的な意味を考察し,「日本の移行対象は過渡的である」と述べている．ここでは，transitional objects の邦訳として一般的な,「移行対象」という訳語を用いることとするが，このような論を参考に，transition のもつ過渡的な部分も移行対象の重要な要素として認識しつつ論を進めていくこととする.

表1-1　移行対象の特性の概要　(Winnicott, 1971)

1.	幼児は移行対象に対して，自らが所有権を持っていると思っており，我々はこの仮定に同意する．とはいえ，初めから，全能感のいくらかは破棄されているということが特徴である．
2.	移行対象は激しく愛され，台無しにされることと同様に，愛情をこめて抱きしめられる．
3.	幼児によって変えられない限り，移行対象は決して変わってはいけない．
4.	移行対象は，本能的な愛や憎しみ（純粋な攻撃性）から生き残らなければならない．
5.	移行対象は，幼児に暖かさを与えたり，心を動かしたり，感触を与えたり，あるいは，それ自体に生命力や現実性のある何かでなければならない．
6.	移行対象は，我々の視点から（客観的に）現れるものでも，赤ちゃんの視点から（主観的に）現れるものでもない．それは内側からくるが，幻覚でもない．
7.	移行対象は，数年のうちに徐々に放棄される運命にあり，それは忘れ去られるというよりも，リンボ界(注1)に追いやられる．これは健康的であり，移行対象は「内面へ行く」のではなく，それについての感覚が必ずしも抑圧をうけるものでもない．それは忘れ去られることも嘆かれることもない．それは意味を失う．これは移行現象が，『内面の心的現実と，二人の人間によって共通に知覚されるような外的世界』の間の中間領域全体，つまり文化的領域全体に拡散し，広がっていくためである．

注1：リンボとは「縁」を意味するラテン語のlimbusに由来し，リンボ界とは地獄と天国との中間にある霊魂の住む場所をいう。イエス・キリストが死後復活までの間にとどまった場所とされる。

第１項　　移行対象理論

Winnicott (1953) によれば，母親は「原初的没頭 (primary maternal preoccupation)」により始めのうちは非常に献身的で，乳児の欲求にほぼ完全に適応している．そのため乳児が欲しいと思ったちょうどその時，その場所に実際の欲しいものが差し出され，乳児は自分の創造能力に対応する外的現実があるという錯覚 (illusion) を持つことができるようになる．その後少しずつ乳児の認知能力が発達すると，それに応じて適応の完全さを減少させる「ほどよい母親 (good enough mother)」の存在によって，内的世界と外的現実は魔術のようにいつも重なり合うわけではないという現実を体験することとなり，脱錯覚 (disillusion) のプロセスへと進んでいく．このような脱錯覚の過程において，乳幼児は思い通りにならない外的現実を知ることとなり，この時に移行対象を用いることで，これまで養育者との間で経験していた錯覚を反芻し，脱錯覚の不安や恐怖を乗り越えて一人でいられる能力 (capacity to be alone) を獲得することができるとされる．Winnicott における発達は直線的ではなく螺旋状に展開していくものであり，前進はほとんどいつも退行を伴い，その退行は病的なものではなく休息場所として機能する．すなわち，移行対象は，安心感の輪 (Circle of Security) (図 1-3) の「SECURE BASE」に戻ることであると言える．

移行対象が現れる場を,Winnicott(1953)は「体験することの中間領域(the intermediate area of experiencing)」と呼ぶ．移行対象はここで，内的対象と外的対象の両方と関連をもっているが，そのどちらとも明確に区別される「最初の自分ではない所有物 (the first not-me possession)」として発見される．移行対象は歳をとるにつれて次第に忘れ去られるが，その要素は遊ぶこと (playing) という中間領域―芸術，宗教，夢などへと拡散し，現実受容という重荷を生涯背負い続ける人間の休息地として貢献し続けるとされる (Winnicott, 1953) (図 1-4)．このように，乳幼児期の移行対象が使用されなくなった後に，子どもの発達過程のなかでその機能を果たすものが存続することはよく知られている (Downey, 1978 ; Horton, 1981 ; Shafii, 1986).

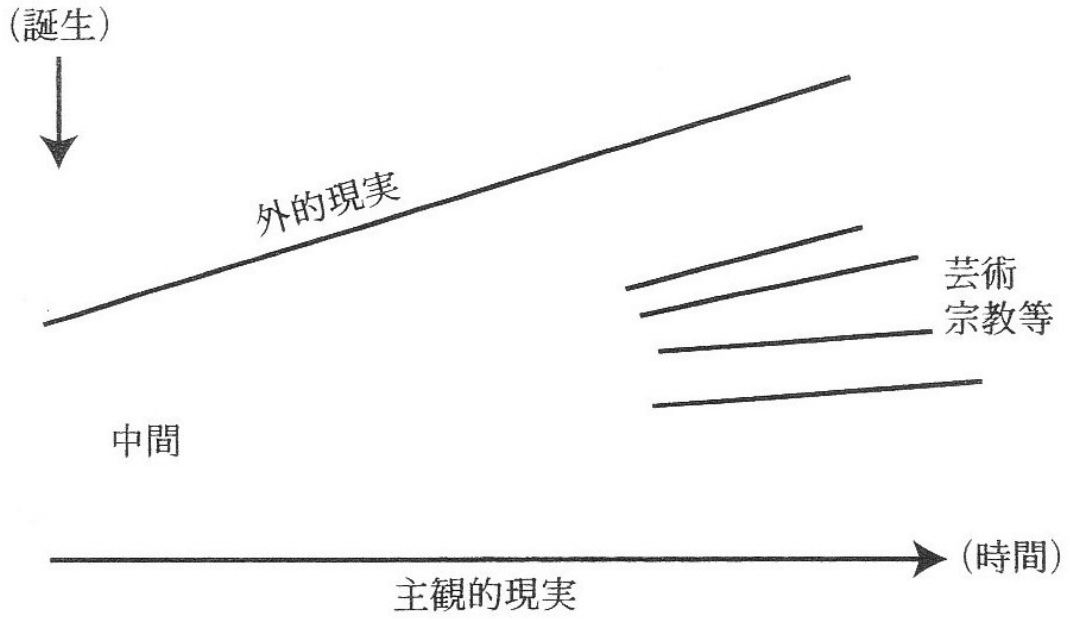


図1-4 中間領域の概念図（山崎, 2003）

第２項　　移行対象の同定基準

移行対象の同定基準は，移行対象の有無を判断するために非常に重要な指標である．しかし，Winnicott（1953）が移行対象の多様性を重んじたこともあり，研究者によって異なるものとなっている．黒川（2004）が，「移行」には母子分離や無統合から統合へという目的や方向をもつ移行と，目的をもたない移ろいの体験としての移行が含まれていると指摘したように,移行対象は発達的視点だけでは分類できない性質をもっている.Horton(1981)のように，触れ得る，触れ得ない，生，無生ということには関係なく，移行的な体験様式として意味をもつものは全て移行対象と捉える立場もある．しかし，本論では,「重要な他者との安心感のある（secure）関係性から育まれる表象を用いて，自立に際する不安に対処し，まとまりのある自己を維持する」事象を客観的に捉える指標として移行対象を採用することより，以下の同定基準を参考に定義したい.

移行対象理論が提出された当初，Stevenson（1954）は，子どもが発見して選び出した特定の物に愛着を示すようになる時期が１歳前後と２歳前後に集中することを見出し，それぞれを一次的移行対象および二次的移行対象と呼んで区別した．これを踏まえて,Busch ら（1973）は，１歳頃と２歳頃では物の永続性の獲得など認知様式が質的に異なるという観点からそれらを厳密に区別した（表 1-2）．その後，　Hong（1978）は様々な移行段階に現れ，移行的様式の体験や内的および外的現実の双方を体験する中間領域を提供するあらゆる現象を「移行現象（transitional phenomena)」と再定義した上で，移行対象先駆物などの移行対象等価物（transitional object equivalent）が現れる生後３ヶ月頃の「第一の過渡期」，一次的移行対象が現れる１歳半を過ぎた頃の「第二の過渡期」，二次的移行対象が現れる２歳前半頃の「第三の過渡期」という３つの過渡期を示し，それぞれの発達的特徴を示した（表 1-3）.

また，移行対象を持っている子どもの多くが指しゃぶりをしていることが指摘されているが（Hong & Townes, 1976 ; Mahalski & Silva, 1985 ; Wolf & Lozoff, 1989)，牛島（1982）は，即時的に満足を得られ未だ対象となっていない指しゃぶりと，自らの想像力により表現可能な具体物としての移行対象とは本質的に異なり，指しゃぶりが本能的な与楽剤（comforter）であるのに対して，移行対象は鎮静剤（soother）として機能する指摘した．移行対象が外の世界に開かれているのに対して，指しゃぶりは子ども自身の領域でのみ繰り広げられる閉鎖系の刺激サイクルになっており，移行対象のような他のものへと

発展していく要素は指しゃぶりには見当たらないと言える．

森定（1999，2001）は，移行対象の本質的部分がどのように「中間領域」に拡散していくかに焦点を当てて慰める存在についての調査を行い，移行対象の変遷について図式化した（図 1-5）．森定（1999，2001）の調査結果によると，毛布やぬいぐるみといった乳幼児期の移行対象は慰める存在として，最終的には現実の対人関係につながっていくことが明らかとなっている．

以上を踏まえ，本論における移行対象とは次のものであると定義する．

「移行対象とは乳幼児が肌身離さず持ち歩く特定の可視的な対象物であり，特に重要他者との分離時に不安を慰めるものとして機能する．その種類として，毛布などの無形の一次的移行対象と，ぬいぐるみなどの有形の二次的移行対象がある．移行対象とのかかわりは，その後の対人関係に発展していく」．

表1-2　一次的移行対象と二次的移行対象の基準（Busch, 1973）

一次的移行対象		二次的移行対象
１．	愛着は1歳までに明らかとなる.	2歳かそれ以降に現れる，一次的移行対象とは質的に異なる，柔らかいおもちゃ
２．	長期間（たとえば1年かそれ以上）継続する.	
３．	慰めをもたらしたり、不安を鎮静させる.	
４．	たとえば乳房やおしゃぶりのような，口唇愛的なものではない.	
５．	子どもが創造したものであり，おしゃぶりのように親から直接与えられたものではない. より発見され，選ばれたものである.	
６．	親指や指のように，子ども自身の身体の一部ではない.	

表1-3　移行対象の種類（Hong,1978）

	移行対象等価物	移行対象	
		一次的移行対象	二次的移行対象
種類	子守唄，童話，リズミカルな動き，ぽんぽん叩くことや擦ること，就寝時の儀式や習慣（例えば母親や親指）など	毛布，おむつ，布の切れ端，シーツの切れ端	ぬいぐるみ，柔らかい人形や玩具，あるいは硬い玩具
形態	物ではない	無形のやわらかい物	形のある物
発現時期	生後６カ月	生後7～12カ月	２，３歳
消失時期	－	５～６歳	４歳以降
対象への愛着	なし	強い（愛着対象）	時々（お気に入りの遊ぶ対象）
役割	－	接触欲求・分離不安	自律性や自立

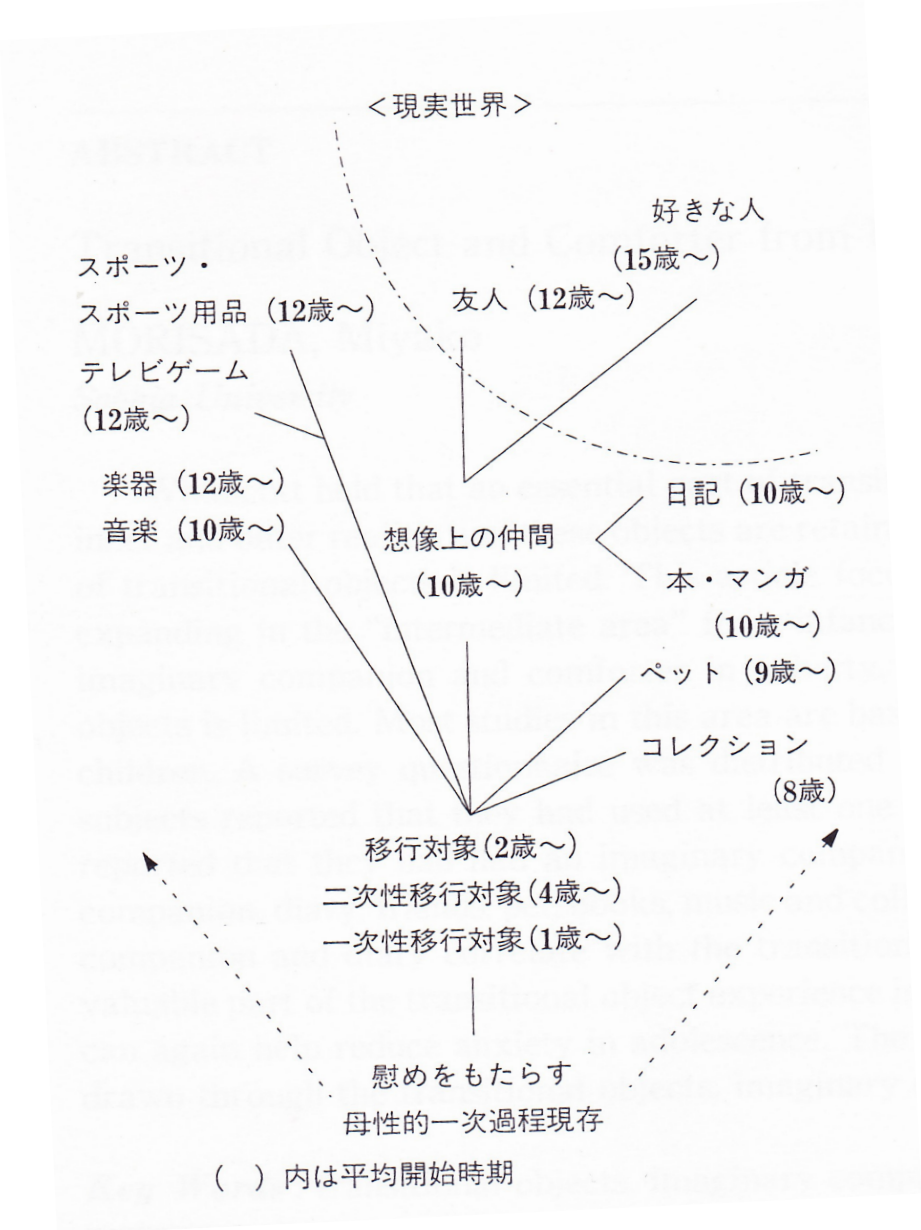


図1-5 乳幼児期から思春期における慰める存在（森定, 1999）

第３項　　移行対象の発現率

Winnicott (1953) は移行対象を健康で普遍的な現象であるとしている．それを裏付けるように，Busch ら（1973）は 67.5%の子どもに移行対象が現れることを明らかにし，Litt（1986）も 77%，Mahalski（1983）は 74%に移行対象の使用を認めている．井原・木村（1986）によれば欧米圏の移行対象の発現率は平均 66%と高率であり，移行対象の普遍性を支持する論拠としている．また，Provence ら（1961）は施設児に移行対象を持つものが少ないことを示し，その理由を母性的関わりの不足により象徴的に代理する表象を確立することができず,移行対象を創り出すことが困難なためであると考察した.Mannoni(1982)もある許容域を越えて母親から離れる時間が長くなる時に母親を内的表象として保つことができず，移行対象を創造できなくなると論じている．また，心身症の子どもに移行対象発現率が低いことを指摘した Gaddini（1979）は，それは象徴化能力の未発達の表れであり，身体という次元に即時的に表現してしまわざるを得なくなったためだと指摘した．井原（1988）も心身症児とその同胞の移行対象発現率を調べ，心身症児本人が 32.5%であるのに対してその同胞は 58.8%であり，同胞の方が有意に多くの移行対象を所有していることを示している．また，Triebenbacher と Tegano（1993）は乳幼児の行動観察を行い，移行対象が不安を鎮めて分離を促すことを実証的に示した.加えて,Sherman と Hertzig(1983)や Jonsson と Taje（1983）が精神遅滞児や発達障害児に移行対象の発現率の低さを指摘したことから，移行対象は健康的な発達の指標として注目された.

臨床例の研究においては，Arkema（1981）は境界性人格障害の患者が幼児期に移行対象を経験した割合が低率であることを報告しており，Horton ら（1974）や Lobel（1981）も，人格障害者，特に境界性人格障害者が移行対象を所有していない傾向を明らかにした．このような，幼少期に移行対象を所有していた者の方がそうでない者よりも精神的に健康であるという結果は，移行対象が子どもの情緒発達において健康で普遍的であるという Winnicott の見解をより一層支持し，移行対象が発達の達成における目に見える指標となり得るということを明らかにした.

一方で，主な移行対象研究をまとめると，移行対象の発現率には文化差がみられることがわかる（表 1-4）．日本における移行対象の発現率は，藤井（1985）で 31.1%，遠藤（1990）で 38.0%，Hobara（2003）で 38.0%，黒川（2004）で 33.4%であり，約３割と低率である．その要因について，遠藤（1990，1991）は母親の養育態度（授乳様式や就眠様式）や母子

間ストレスとの関係で考察している．すなわち，移行対象は育児習慣などの文化的背景を持ちながら，母性的関わりを中心とする様々な環境側の外的要因と，子ども自身の気質などの内的要因とが合わさり，その子どもにとって相対的にストレスが多いかどうかによって必要とするか否かが決まるという（遠藤，1990，1991）．したがって，移行対象への愛着を示さない子どもには，その能力の欠損に起因して移行対象を使用し得ない（欧米においての移行対象欠如例のような）より病理的色彩の濃い子どもと，潜在的にはその能力を有しながらも，単に必要とされる状況にさらされないがゆえに使用する必要のない，健常な発達の枠内にある子どもの両者を峻別して仮定すべきと言える．

Gaddini と Gaddini（1970）や Hong と Townes（1976）は，文化差が生じる要因として，授乳様式や就眠様式，身体接触の多少などを挙げている．また，Hong（1978）は，①養育者との就眠様式，②就眠時の様子，③授乳様式，④身体接触の頻度や程度の 4 項目にまとめている．これらの指摘はある程度支持されている（Green et. al.，2004；遠藤，1990，1991 など）が，Hobara（2003）の調査では，移行対象の発現率と「母親が子どもの思い通りになる時間」に違いがないことを指摘している．また，富田（2007）は母親のかかわりが減衰しやすい中間子において移行対象の発現率が低いことを指摘し，中村（2004）は別室就寝と移行対象との間に関連はないことを報告している．これらの結果は，母親との直接的な接触頻度を最有力とする移行対象の発現仮説に疑問を呈するものであった．Litt（1986）は移行対象研究を概観し，就眠場所，授乳様式，性別，生まれた順番，兄弟の数，離乳年齢，養育者の数と移行対象の発現率には関連がないことを指摘し，関連があるのは社会的経済的に中流から上流に位置するということと，養育者の教育レベルや子どもを尊重する（child-centered）態度であるとした．

移行対象の発現機序を子どもの外的な環境因のみで捉えようとする研究に対し，遠藤（1991）は授乳様式（外的なストレッサーの指標）と子どもの不安に対する反応性の閾値（気質）との関連性を指摘し，移行対象の発現機序として「母子のほど良い関係」→「母親の内的表象の獲得」→「母子関係の気質・愛着欲求が相対的に満たされない状況」→「母親の代理・適応の術としての移行対象の必要」という図式を仮定している．さらに，池内・藤原（2004）は遠藤（1991）を援用した発現過程モデルを示し，その決定因を「内的表象の獲得」と「不安に対する許容範囲」から説明した．しかし，移行対象の機能，すなわち，養育者を象徴的に代理し分離の不安を慰める機能や，移行対象の発現に際する３つの過渡期（Hong，1978）からは，内的表象の獲得が前提となって移行対象が現れるのではなく，

むしろ，内的表象の獲得は移行対象との関係の中で段階的に達成されるものだと考えられる．

以上の先行研究から示唆されることとして，移行対象の発現機序には外的な環境因と内的な個人内要因が関係していると考えられる．ここでは，発現率が約 70%と比較的高い欧米と，約 30%と比較的低い日本における考察から発現機序を考えてみたい．

環境要因としては，先行研究からも就寝様式の違いの影響が際立っている．欧米では，子どもの自立性を育むために一人で寝させることが重要であり，親子が別々に就寝する「就寝分離」が昼間の親子の分離も容易にさせると考えられている（Morelli & Tronick，1992）．そのため，欧米の多くの子どもは乳幼児期から個室を与えられ，一人で就寝することが習慣となっている（北浦，2004）．一方で，日本では親子が川の字に寝ることが多く，親子が寄り添いながら就寝する「添い寝」が一般的な文化である．したがって，移行対象を必要とするような環境要因は欧米では相対的に高く，日本では相対的に低いことがうかがえる．

個人内要因としては，移行対象を創造し利用できる能力の差が挙げられると考えられる．先行研究では移行対象の発達的側面が示されており（表 1-3），子守唄など，重要な他者から直接的に得られ個人内で完結するものから，重要な他者を象徴してやり取りする物へと変遷していく．このような目に見えない現象から目に見える対象物への移行の有無が，発現率の差を生み出しているのではないだろうか．上述した Stern（1985）は，「言語自己感（the sense of a verbal self）」を検討する際に，2 歳になる女の子の「お寝床でのお話」において「移行現象に没頭している」様子を提示し，お話は彼女の内部に存在する養育者を再活性化するだけでなく，言語の練習にもなっていたことを考察している．これは Freud（1920）の糸巻遊び[2]で「オーオー」が「Fort Da」へと移行する過程と似ており，表現することと分離不安を慰めることが結びついているようである．実際に，欧米は文脈情報にあまり頼らず細部まで明確に言葉で表現する言語文化であり，これは人種や民族の異なる人々から構成される欧米において，相互理解や自己主張のためにコミュニケーション・スキルを獲得することが生きるために不可欠なためとされている（三宮，2004）．したがって，幼少期より自分を表現するための英才教育を受けており，この点で島国の日本とは異なっ

[2] Freud（1920）は孫のエルンストが母親が外出するときに木製の糸巻をベッドの下に投げ込んでは「オーオー」と意味ありげに叫び，そこから紐をひっぱって糸巻を引き出して「ダー」と嬉しそうに言う遊びを繰り返すことを観察し，「いない（fort）−いた（da）」遊びとして意味を見出した．現実には不在の時には存在しない母親を，遊びの中では不在においても「不在」として表象することにより存在を獲得していると捉えたのである．

ている．日本では社会のメンバーは家族のような親密な関係で結ばれており，それゆえ曖昧で省略の多い話し方で事足りる．また，集団のメンバーが同じ意見でまとまることに価値が置かれるため，個人はまず集団の規範に従い個を前面に押し出すことは避けるべきであると考えられている（三宮，2004）．そのため，欧米の子どもたちに比べると，日本の子どもたちの自己表現能力は低いことが予想される．自らを慰めるために積極的に新しい何かを生み出す力は，欧米の子どもたちの方が日本に子どもたちよりも長けている可能性が高い．井原（2009）は母子関係において，言語的コミュニケーション（象徴化）を促進することに力点のある西欧社会では，移行対象は象徴化能力の有無の問題として現れるが，日本のように身体接触を重視する育児文化においては，性格などの内的要因や，育児環境などの外的要因の問題として現れることを指摘している．

以上より，移行対象は「環境における必要性」と「子どもの表現能力」によって捉えることができると考えられる（図 1-6）．例えば「就寝分離」の場合は，慰めてくれる重要な他者を頼ることはできないために，「添い寝」よりも「環境における必要性」は高くなる．また，明確な自己表現を要求される欧米の子どもたちは，個を前面に押し出すことを避ける日本の子どもたちよりも「子どもの表現能力」は高くなる．したがって，欧米の子どもたちの移行対象の出現率は相対的に高くなると考えられる．反対に，「添い寝」が常であり，控えめな自己主張を要求される日本の子どもたちの移行対象の出現率は，相対的に低くなると考えられる．

表1-4 先行研究における移行対象の発現率

文献	対象者数	調査対象者	対象国	移行対象の発現率
Gaddini&Gaddini(1970)	682(Rural), 450(City), 52(Foreign)	母親	イタリア	4.9%(Rural)，31.1%(City)，61.5%(Foreign)
Hong&Townes(1976)	169(U.S.), 50(U.S.K.), 60(Korea)	母親	アメリカ，韓国	毛布：54%(U.S.)，34%(U.S.K.)，18%(K) ぬいぐるみ：24%(U.S.)，22%(U.S.K.)，50%(K)
Green et al.(2004)	171	9－13歳	アメリカ	54%
Litt(1981)	285	母親	アメリカ	77%(middle class)，46%(low SES)
Kleoner(1983)	180	母親	イスラエル	27%
Mahalski(1983)	1197	母親	ニュージーランド	2歳：74%，3歳：63%，5歳：53%，7歳：43%
藤井(1985)	415 (男205,女210)	母親	日本	31.10%
Shafii(1986)	230 (男119,女111)	13－14歳	アメリカ	男71%，女88%
遠藤(1990)	951	母親	日本	38%（男32.8%＜女43.9%）
中根(1994)	91	大学生	日本	54.90%
Eytan et al.(1998)	871 (男375,女496)	平均16.7歳	イスラエル	30.40%
森定(1999)	343 (男121,女222)	平均23.3歳	日本	62%（男35%＜女77%）
森定(2001)	804 (男430,女374)	平均13.2歳	日本	35%（男24%,女48%）
Hobara,M.(2003)	100 (日本:男27,女23 米国:男29,女21）	母親	日本，アメリカ	日本38%,アメリカ62%
Green et al.(2004)	275 (211名が高接触群)	母親	アメリカ，カナダ	18.20%
池内・藤原(2004)	211 (男115,女93)	母親	日本	39.8%（男38.79%，女41.1%）
黒川(2004)	296 (男154,女142)	母親	日本	33.40%
石谷(2005)	66	大学生	日本	35.40%
富田(2007)	261	保護者	日本	31%
服部(2008)	314 (男156,女158), 154 (男56,女98), 384 (男121,女263)	中・高・大学生	日本	中学生35%，高校生40.3%，大学生45.6%
Erkolahti et al.(2009)	1054 (男465,女589)	平均14.5歳	フィンランド	男18%＜女37%(現在の所有率)

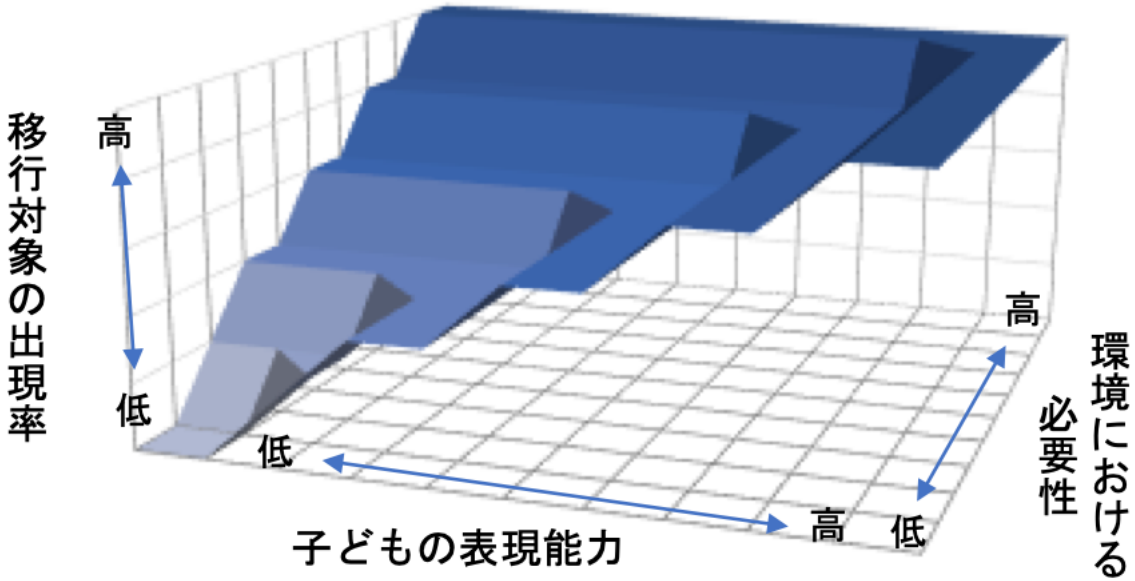


図1-6　移行対象の発現機序

第４節　まとめ

第１章では，個人の成熟と社会の要請の不一致が生じる現代社会において喫緊の課題である，希薄になりつつある「自己」を支え，自立の前提となる「自己の確立」へと導くことについて，先行研究の知見より本論における「自己の確立」を定義した．

「自己」は重要他者（幼児期においては主に養育者）との良好な関係性において築かれ，表象機能によって維持されるものであり，自己と関係性が密接に影響し合いながら発達する中でまとまりを持つものとして確立されると考えられる．したがって，本論における自立へと導く「自己の確立」とは，幼少期の養育者に代表される「重要な他者との安心感のある（secure）関係性から育まれる表象を用いて自立に際する不安に対処し，まとまりのある自己を維持する」ことと定義した．そして，この事象を可視化できる対象物として移行対象（transitional objects）を取り上げ，先行研究から詳細に述べた．

第２章では，移行対象を独立変数として「自立」にかかわる変数との関連を検討することにより，「自己の確立」が「自立」に及ぼす影響について調査研究により明らかにしたい．

第２章　自己の発達

― 自己開示と移行対象 ―

第１節　問題と目的

第１項　　自立における自己開示の重要性

現代社会において個人の成熟と社会の要請の不一致が生じる理由の一つには，価値観の多様化が進み社会が複雑になっていることが影響していると考えられる．したがって，個人と社会の溝をなるべく広げないようにする工夫が大切であると考えられるが，そのためには社会に出ていくこと，すなわち，他者との交流を欠かすことはできない．

近年，対人関係が個人の精神的，身体的健康の維持・促進に肯定的影響を及ぼすことが数多く指摘されている．しかし，対人関係は肯定的影響をもたらす反面，深刻なストレッサーとして否定的影響をもたらすこともある．青年期における対人ストレスと適応に関する諸研究においても否定的影響の重要性が指摘されており（Compas, Orosan & Grant, 1993），対人関係がインパクトの大きいストレッサーとして精神的健康に否定的影響を及ぼすことが示されている．また，大学生を対象とした尾関（1994）によるストレス研究においても，人間関係における対人ストレスがストレスイベントの中でも比較的大きい割合を占めていることが明らかになっている．

現代の青年にこうした対人関係上の問題が生じやすい要因のひとつに，ソーシャルスキルの欠如を挙げる報告がある．青年の対人方略とスキルを検討した橋本（2000）は，対人関係を深化させないのは個人が主体的に望んでいるわけではなく，スキルの欠如に由来する可能性が考えられると考察している．また，我が国では，以前より青年の対人関係の希薄化が指摘されており，信頼して相談できる他者を見つけることが困難であり（岡田，1991 ； 天野ら，2001），友人関係も希薄化していると言われる（岡田，2002 ； 諸井，1999）．このような背景を踏まえて青年のコミュニケーションの事実と解釈を検討した白井(2006)は，友人関係の深まりには自己開示の交換が重要であることを指摘している．

Jourard（1958）は，他者に対して自己の個人的情報を言語的・非言語的に伝えることを「自己開示（self-disclosure)」という用語で示し，「自己開示はパーソナリティの健康のしるしであり，健康的なパーソナリティを至高に達成する手段である」とした（Jourard, 1971）．実際に，これまで自己開示と精神的健康の間には相関関係が見出されている．たとえば丸山・今川（2001）によると，自己開示得点の高群では被開示者の受容と自己開示に

よって，低群では相手の受容に関わらず，自己開示することによってストレス行動・感情が低減したという結果がある．また，自己開示が，認知的・行動的なストレス反応と情緒的なストレス反応の低減に安定的な効果があるという結果も示されている（丸山・今川，2002）．

自己開示には，自身の情動を解放して今後の指針を得るなどの開示者自身の内面に作用する効果と，自己開示によって互いを理解し親密な関係を築くといった対人関係に作用する効果があるとされる（安藤・小口，1989）．また，相手からのソーシャルサポートを引き出す可能性も指摘されており（Coates & Wiston, 1987），対人関係においても非常に重要な概念であると考えられる．現代の社会的問題である「いじめ」における，被害にあっている当事者からの訴えがなく表面化しにくいという問題は，当事者からのいじめの事実に対する自己開示が行われないために，他者がいじめの問題に援助的に関われないということにもつながっている（熊野，2002）．また，臨床場面などの援助関係における土台・基礎となる良好な関係性に共通する要素は，援助者との間の信頼関係と被援助者の自己開示であるとされる（林，2010）．

以上より，自己開示は個人の精神的健康における重要概念として注目されてきたが，現在では対人関係の形成や発展を考える上でも不可欠な概念となっており，社会的な自立の達成においても非常に重要であると考えられる．

第２項　　重要他者との関係性を可視化する移行対象

乳幼児がお気に入りの毛布やぬいぐるみを肌身離さず持っている光景を思い浮かべてほしい．このような乳幼児特有の愛着物を概念化した Winnicott（1953）は，それを「移行対象（Transitional objects）」と名付け，愛着を形成した養育者との分離の過程において，養育者を象徴的に代理して慰めるもの（soother）として機能することを明らかにした．

では実際に乳幼児が移行対象とかかわるとき，そこにはどのような事象が現れているだろうか．育児雑誌「プチ・タンファン」（井原，1989）に，「うちの子のお気に入りの品」というテーマで集められた読者からの手紙には，毛布やぬいぐるみをまるで一人の人間であるかのように大切に扱う子どもたちの様子が報告されている．ある子どもはお気に入りの毛布にも自分と同様に耳掃除をしてくれと言って母親を困らせたり，ある子どもはぬい

ぐるみを洗濯するとかわいそうと言って泣いたりする．ここで繰り広げられる乳幼児と移行対象とのかかわりは，相手の気持ちを推し量り意思や感情を伝達し合う行為，つまり，二者関係のはじまりと捉えることができないだろうか．もちろん，このとき乳幼児に応じる毛布やぬいぐるみは乳幼児が創り出したものであるから，その応じ方も乳幼児自身に依拠している．そのため，互いに異なる心を持つ実際の二者関係，対人関係とは大きく異なることは事実である．しかし，不可視的な部分を想像力で補いながら対象と関わるという意味においては，移行対象との関係は対人関係の雛形と言える．加えて，乳幼児が移行対象の気持ちを推し量り母親に訴えかけるとき，そこには自分の気持ちを開示する，開示できる環境が整えられているということを表している．さらに同雑誌より，布団が手放せなくなった娘を見て，その母親は，「私が無理矢理おしゃぶりを取ったせいだなあと，心苦しい母親です」と記している．これは，移行対象と子どもとのかかわりを通して，非言語的に子どもの自己開示に応えている環境が存在することを示唆しており，「自己の確立」における重要他者との関係性と見て取ることもできるだろう．

第２節　本研究の目的

本章の研究は，「自己の確立」を可視化すると考えられる移行対象とのかかわりが，後の青年期の自立を促す対人関係，特に自己開示に与える影響を明らかにすることを目的とした．

第３節　移行対象の定義

移行対象を一変数とする場合には，明確な移行対象の基準を定義する必要がある．なぜなら，第１章で述べたように，Winnicott は移行対象を具体物に限定せずに母親の子守唄や身体の一部をも含めており，たとえば，幼児期の指しゃぶりや母親の身体なども「慰めるもの」として移行対象と想定されることがあるためである．しかし，即時的に満足を得られ未だ対象となっていない指しゃぶりと，自らの想像力により表現可能な具体物としての移行対象とは，本質的に異なると考えられる．また，指しゃぶりが本能的な与楽剤

（comforter）であるのに対し，移行対象は鎮静剤（soother）として機能していることも指摘されている（牛島，1982）.

母親の身体に関しては，Gaddini ら（1970）が移行対象について，「母親との分離後の再結合を象徴し，幼児によって発見，考えだされたもの」とし，幼児自身の身体やおしゃぶり，哺乳瓶，母親の身体を移行対象先駆物（precursors of transitional objects）として区別している．Hong（1978）も移行対象相当物（transitional object equivalent）を設け,幼児の外側にあり具体的な無生物の対象である移行対象とは区別している.さらに，黒川（2004）は，就寝時の移行対象先駆物や移行対象相当物を含む広義の移行対象が，発達的視点だけではなく現象的視点を含んでいることを示唆している．このように，移行対象先駆物や移行対象相当物と具体的な移行対象を異なるものとするこれらの定義は，母親との分離や自他の分化といった発達ラインで捉えたものである．したがって，移行対象を対人関係の雛形という発達的視点で捉える本研究では，Hong（1978）の定義（表 2-1）を参考として，具体物である移行対象のみを対象とした.

移行対象を所有する時期については，Downey（1978）によれば，幼児期の移行対象と思春期以降の移行対象は密接に関係している反面,同一のものではないとされる.なぜなら，慰める機能の内在化が重要な発達課題となっている幼児期の移行対象と，内在化が確立された後に，人生の節目でストレスから不安に陥った時に必要とされる幼児期以降の移行対象では，慰めをもたらす本質は同じでもその発達的な意味は異なると考えられるためである．本研究は，移行対象との関わりが後の対人関係に及ぼす影響を明らかにすることが目的であるため，慰める機能が内在化される前の，対人関係の雛型である重要他者との関係性を重視している.したがって,本研究においては乳幼児期の移行対象のみを対象とした.

表2-1　Hong(1978)の移行対象の定義

	移行対象等価物	移行対象	
		一次的移行対象	二次的移行対象
種類	子守唄，童話，リズミカルな動き， ぽんぽん叩くことや擦ること， 就寝時の儀式や習慣 （例えば母親や親指）など	毛布，おむつ，布の切れ端， シーツの切れ端	ぬいぐるみ，柔らかい人形や玩具， あるいは硬い玩具
形態	物ではない	無形のやわらかい物	形のある物
発現時期	生後６カ月	生後7～12カ月	２，３歳
消失時期	－	５～６歳	４歳以降
対象への愛着	なし	強い（愛着対象）	時々（お気に入りの遊ぶ対象）
役割	－	接触欲求・分離不安	自律性や自立

第４節　予備調査

第１項　　目的

予備調査では,青年期の対人関係における自己開示と移行対象についての関連を検証し,本調査の仮説を生成することを目的とした.

第２項　　方法

予備調査は 2007 年 3 月～4 月に実施した．調査方法は質問紙とし，調査者から直接配布し，回収した．調査協力者は東京都内の大学に通う学生（平均年齢 21.3 歳±1.09 歳）55 名（男性 22 名,女性 33 名）であった.

質問紙の質問内容は，移行対象について，①所有の有無（「あった」,「なかった」,「覚えていない」の 3 件法），②対象の内容，③所有時期，④所有状況，⑤必要性（0 を「特になくても大丈夫」，10 を「なくてはならないもの」として 0 から 10 までの数字で回答），⑥所有時の気持ちを尋ねた．移行対象については,『あなたが幼い頃（小学校入学前まで）「持っていると安心できるもの」,「とても気に入っていて，一緒にいないといられないほど大切にしていた特定のもの」，例えば，毛布，タオル，ぬいぐるみ，おもちゃ等はありましたか』と尋ねた．所有の有無と必要性の項目以外は自由記述とした.

また，対人関係について，自己開示とソーシャルスキルについての項目を設定した．前者は遠藤（1989）の開示状況質問紙（表 2-2）から 10 項目を選択し，開示の程度について,「表面的な話しかしない」から「自分の気持ちを分かってもらうために，できるだけ詳しく話す」までの 5 段階で尋ねた．その際には質問の意味が回答者に伝わりやすいように,「乗り物」を「バスや電車など」,「ボーイフレンド（ガールフレンド）」を「気心の知れた親密な相手」と修正した．後者は菊池（1988）の Kiss-18（表 2-3）から 8 項目を選択し,「いつもそうだ」,「たいていそうだ」,「どちらとも言えない」,「たいていそうでない」,「そうでない」の 5 件法で尋ねた.

表2-2　遠藤の開示状況質問紙(1989)の質問項目

1.	友人と２人で喫茶店で雑談をしているとき
2.	数人の友達とコンパ・クラス会などに参加しているとき
3.	教室で数人のクラスの人たちと重要なテーマについて討論しているとき
4.	乗り物の中で、隣席の人が話しかけてきたとき
5.	友達の家族と初めて出会ったとき
6.	知人と街の道端で出会ったとき
7.	乗り物の中である友人と一緒のとき
8.	知人たちが自分の家に遊びにきたとき
9.	１人で食事中、ある人が相席をしてよいかと尋ねてきたとき
10.	レストランで友人たちと食事を一緒にしているとき
11.	公園でボーイフレンド(ガールフレンド)と散歩しているとき
12.	ある知人に喫茶店にさそわれたとき
13.	初めてのクラスでまったく知らない人たちの前で自己紹介をするとき
14.	居酒屋で知人数名と一緒になったとき
15.	ボーイフレンド(ガールフレンド)と自宅で2人きりでいるとき
16.	乗り物の中でたまたま知人たちと一緒になったとき
17.	家族と自宅で夕食をしているとき
18.	何人かの人に自宅で紹介されたとき

表2-3　菊池のKISS-18(1988)の質問項目

1.	他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか
2.	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか
3.	他人を助けることを、上手にやれますか
4.	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか
5.	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか
6.	まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか
7.	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか
8.	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか
9.	仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか
10.	他人が話しているところに、気軽に参加できますか
11.	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか
12.	仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか
13.	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか
14.	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか
15.	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか
16.	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか
17.	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか
18.	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか

第３項　　結果

移行対象の実際

移行対象の発現率は 32.7%（18 人）であり，男性は 31.8%（7 人），女性は 33.3%（11 人）であった．性別による発現率の有意差はみられなかった．Hong（1978）の定義（表 2-1）を参考に，1 歳ごろに見られる布などの一次的移行対象と，それより遅く出現するぬいぐるみなどの二次的移行対象を分類したところ，一次的移行対象が 31.6%（6 人），二次的移行対象が 68.4%（13 人）であり，性別による有意差はみられなかった．

移行対象の所有時期は開始時の平均が 2.3 歳（*SD* = 1.07），終結時の平均が 7.8 歳（*SD* = 4.85）であり，性別，移行対象の種類別による有意差はみられなかった．

必要とした状況としては，「寝るとき」などの就寝時が 44.4%（8 人），「起きている間ずっと」，「肌身離さずいつでも」などの常時が 38,9%（7 人），「外へ行く時」，「旅行に行く時」などの外出時が 16,7%（3 人），「遊ぶとき」，「家の中（室内遊び）での友達」などの遊ぶときが 16.7%（3 人）であった．いずれの状況も性別，移行対象の種類別による有意差はみられなかったものの，外出時と遊ぶときはいずれも二次的移行対象の場合のみにみられた．すなわち，二次的移行対象に，外に持ち歩くような遊び相手の要素が強いことが予想された．その他は，「体調が悪いとき」，「家で手持ち無沙汰なとき」，「食事のとき」といった状況であった．

移行対象所有時の気持ちとしては，「もっていると落ち着くことができた」，「いるとほっとする」，「安心する」といった回答が 77.8%（14 人）であり，Winnicott による「慰めるもの」という移行対象の機能を反映したものであった．その他は，「触り心地が良かった」，「楽しかった」といった理由であった．

必要性については，平均値 8.3（*SD* = 1.53），中央値 8.5，最頻値 10 であり，非常に重要なものであったことがうかがえた．性別，移行対象の種類別による有意差はみられなかった．

対人関係尺度と移行対象の関連

対人関係の尺度として用いた「自己開示」尺度と「ソーシャルスキル」尺度に対して，原典の尺度構成を採用したところ，信頼性が不十分であったため再構成を行った．

＜自己開示尺度の分析＞

自己開示尺度 10 項目の平均値と標準偏差を算出したところ，4 項目に天井効果またはフロア効果が見られたが，「自己開示」という尺度における回答の偏りを考慮し，すべての項目に対して主因子法による因子分析を行った．固有値の変化(2.86,1.88,1.07,.95,.82…)と因子の解釈可能性を考慮すると，2 因子構造が妥当であると考えられた．そこで，再度 2 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った．その結果，十分な因子負荷量を示さなかった 2 項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行ったところ明確な 2 つの因子が得られた．また，2 つの因子間の相関が.18 であったため，主因子法・Varimax 回転による因子分析を行った（表 2-4）．なお，回転前の 2 因子で 8 項目の全分散を説明する割合は 55.45%であった．

第 1 因子に高い因子負荷量を示した項目は 4 項目であった．いずれも親密な相手への開示項目が高い負荷量を示していたので，「親密開示」因子と命名した．第 2 因子は，「数人の友達とコンパ・クラス会」や「知り合い数名と居酒屋」などの状況における，比較的希薄な相手への開示項目 4 項目に高い負荷量を示していた．そこで，「希薄開示」因子と命名した．そして，それぞれの因子に.40 以上の因子負荷量を示す項目から，因子名と同名の下位尺度を作成した．下位尺度得点は 2 つの下位尺度に相当する項目の平均値とし，それぞれ「親密開示」下位尺度得点，「希薄開示」下位尺度得点とした．Cronbach の α 係数は，「親密開示」で α＝.70，「希薄開示」で α＝.67 であった．また，両下位尺度の合計の平均値を「自己開示」得点とした．α 係数は α＝.70 であった．

表2-4　自己開示尺度の因子分析結果(Varimax回転後の因子行列)

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	共通性
5.気心の知れた親密な相手と公園で散歩しているとき	**.85**	.05	.72
8.気心の知れた親密な相手と自宅で２人きりでいるとき	**.72**	.01	.52
10.家族と自宅で夕食を食べているとき	**.53**	.03	.28
3.教室で数人のクラスメイトと重要なテーマについて討論しているとき	**.41**	.33	.28
2.数人の友人とコンパ・クラス会などに参加しているとき	.19	**.77**	.64
9.バスや電車などの中で隣席の人が話しかけてきたとき	-.23	**.59**	.23
7.居酒屋で知り合い数名と一緒になったとき	.20	**.52**	.40
6.初対面の人たちに自己紹介をするとき	.02	**.48**	.31
累積寄与率	22.72	42.22	

＜ソーシャルスキル尺度の分析＞

ソーシャルスキル尺度 8 項目の平均値，標準偏差を算出したところ，天井効果，フロア効果共に見られなかったため，すべての項目に対して主因子法による因子分析を行った．固有値の変化（3.10,1.40,.89,.80,.62…）と因子の解釈可能性を考慮すると 2 因子構造が妥当であると考えられた．そこで，再度 2 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った．その結果十分な因子負荷量を示さなかった 1 項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行ったところ，明確な 2 つの因子が得られた（表 2-5）．なお，回転前の 2 因子で 7 項目の全分散を説明する割合は 59.94%であった．

第 1 因子に高い因子パターン値を示した項目は，「知らない人とでもすぐに会話が始められる」,「他人との会話が途切れない」,「周りの人たちとのトラブルをうまく処理できる」など 6 項目であり，他者へ積極的に働きかける項目であったので「積極対処」因子と命名した．第 2 因子は 1 項目のみ.96 の因子パターン値であり，その他の項目は.30 以下であった．高い因子パターン値を示した 1 項目は,「相手が怒っているときにうまくなだめることができる」という項目であったので,「感情処理」因子と命名した．これらの第 1 因子に高い因子負荷量を示した項目から同名の下位尺度を作り，項目の平均値を算出して「積極対処」下位尺度得点とした．なお,「感情処理」下位尺度は 1 項目のみであったため，分析には用いなかった．

表2-5　ソーシャルスキル尺度の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	共通性
4.知らない人とでもすぐに会話が始められる	**.82**	-.16	.60
1.他人と話している時はあまり会話が途切れない	**.68**	-.12	.42
5.周りの人たちとの間でトラブルが起きてもそれをうまく処理できる	**.57**	.08	.37
7.他人が話しているところでも気軽に参加できる	**.57**	.10	.38
8.相手から非難されたときにもそれにうまく対処することができる	**.47**	.26	.37
2.やってもらいたいことを他人にうまく伝えることができる	**.45**	.30	.39
3.相手が怒っているときにうまくなだめることができる	-.09	**.96**	.86
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	
Ⅰ	-	.36	
Ⅱ		-	
累積寄与率	36.09	48.37	

＜対人関係尺度と移行対象の関連＞

移行対象と対人関係の関連を検討するため，性別と移行対象の有無（移行対象の所有について「覚えていない」とした者の回答は除いた）を独立変数，各対人関係尺度得点を従属変数とした分散分析を行った．

分散分析の結果（表 2-6)，「積極対処」下位尺度において性別の主効果のみが有意であり（$F(1, 40) = 7.78$，$p < .01$)，男性よりも女性の方が得点が高かった．すなわち，対人関係において，女性の方がより積極的に対処していることが示された．一方，移行対象の有無の主効果はみられなかった．また，「自己開示」，「親密開示」，「希薄開示」および「積極対処」下位尺度においては，いずれの主効果も有意な結果は得られなかった．また，すべての下位尺度において交互作用はなかった．

表2-6　移行対象の有無と性別による各対人関係尺度得点の平均値（SD）および分散分析結果

	移行対象 有り		移行対象 無し		主効果		
	男性	女性	男性	女性	T0	性別	交互作用
自己開示	3.17	3.13	3.08	3.33	.10	.34	.65
	(0.92)	(0.57)	(0.60)	(0.39)			
親密開示	3.75	3.86	3.9	4.16	0.793	0.557	0.087
	(1.60)	(0.41)	(0.84)	(0.47)			
希薄開示	2.58	2.39	2.25	2.5	0.199	0.012	0.825
	(0.94)	(0.93)	(0.76)	(0.55)			
積極対処	2.916	3.545	2.7	3.402	0.57	7.78**	0.024
	(1.17)	(0.55)	(0.67)	(0.71)			

N=44（有り・男性：6名, 無し・男性：10名, 有り・女性：11名, 無し・女性：17名）

上段：平均値, 下段：SD

** p<.01

考察

予備調査の結果より，移行対象と対人関係の有意な関連はみられなかった．しかし，移行対象の発現率は決して低い値ではなく，その必要性は高いことから，移行対象が所有者にとって何らかの心理的役割を担っている可能性が示唆される．また，二次的移行対象に遊び相手の要素がみられたことは，移行対象の使用と対人関係の発達における関連をうかがわせる。

移行対象と自己開示やソーシャルスキルの関係を精査したところ，有意差はみられなかったものの，親や気心の知れた相手への自己開示量とそうでない相手に対する自己開示量に違いがみられた．移行対象は，ソーシャルスキルといった社会生活を営むために必要なスキルというよりも，自己開示といった対人関係を円滑に運ぶためのスキルとの関連があるのかもしれない．臨床場面においては，セラピストとクライエントがお互いに自己開示をした方が治療はスムーズに運ぶことが知られている（Stern, 1995）．そこで，本調査では自己開示尺度のみを用いて移行対象との関連を検討することとした．

仮説

予備調査の結果から以下の 2 つの仮説を立てた．

①対人関係が親密であるほど，自己開示量は増加する．

②移行対象所有者は，親密な相手でなくても多くの自己開示を行う．

第５節　方法

第１項　　調査時期と調査協力者

本調査は 2007 年 5 月～7 月に実施した．調査方法は質問紙とし，大学の講義終了後に調査者から直接配布し，回収した．調査協力者は首都圏内の大学に通う学生（平均年齢 19.4 ±1.48 歳）857 名（男性 407 名, 女性 450 名）であった.

第２項　　質問項目

質問紙の内容は，１.移行対象について，①所有の有無（「あった」「なかった」「覚えていない」の 3 件法)，②対象の内容，③所有時期，④必要性（0 を「特になくても大丈夫」，10 を「なくてはならないもの」として 0 から 10 までの数字で回答)，⑤気に入っていた理由（予備調査の結果から,「肌触り，感触が良い」「匂いが良い」「安心感がある，落ち着く」「その他」の 4 項目の選択肢を設け，当てはまるもの全てを選択してもらい,「その他」は自由記述とした)，⑥必要とした状況（予備調査の結果から,「起きているときは常に」「寝るとき」「体調が悪いとき」「外出するとき」「一人で遊ぶとき」「二人以上で遊ぶとき」「食事のとき」「その他」の 8 項目の選択肢を設け，当てはまるもの全てを選択してもらい,「その他」は自由記述とした）を尋ねた．なお，移行対象の有無についての尋ね方は予備調査と同様であった．次いで，２.自己開示について，榎本（1997）の自己開示尺度（表 2-7）から 24 項目を抜粋し，開示の程度を「表面的な話しかしない」から「自分の気持ちを分かってもらうために，できるだけ詳しく話す」までの 5 段階で尋ねた．その際に質問の意味が回答者に伝わりやすいように,「親の長所や欠点」を「親の長所」のみにし,「性に対する関心や悩み事」を「性に対する関心」と「性に対する悩み事」に分け,「人生における仕事の位置づけ」を「職に就くことの意義」と修正した．また，親密度の異なる相手への自己開示量を測定するために①［家族］，②［気心の知れた相手］，③［会えば話す程度の相手］，④［会って間もない相手］の 4 条件を設け，それぞれに対して上記 24 項目の回答を求めた．そして条件ごとの親密度を測るために「あなたは上記質問で想定していただいた

相手を，どの程度親密な存在だと感じていますか」という質問を設けた．回答は 0 を「親密さはまったく感じていない存在」，10 を「非常に親密な存在」と教示して，0 から 10 までの数字で尋ねた．

表2-7　榎本の自己開示尺度(1997)の尺度側面と質問項目

精神的自己		知的自己	1.	知的能力に対する自信あるいは不安
			16.	興味を持って勉強していること
			31.	知的な関心事
		情緒的側面	2.	心をひどく傷つけられた経験
			17.	情緒的に未熟だと思われる点
			32.	嫉妬した経験
		志向的側面	3.	現在持っている目標
			18.	拠りどころとしている価値観
			33.	目標としている生き方
身体的自己		外見的側面	4.	容姿・容貌の長所や短所
			19.	外見的魅力を高めるために努力していること
			34.	外見に関する悩み事
		体質・機能的側面	5.	運動神経
			20.	体質的な問題
			35.	身体健康上の悩み
		性的側面	6.	性的衝動を感じた経験
			21.	性に対する関心や悩み事
			36.	性器に対する関心や悩み事
社会的自己	私的人間関係の側面	同性関係	7.	友人に対する好き・嫌い
			22.	友人関係における悩み事
			37.	友人関係に求めること
		異性関係	8.	過去の恋愛経験
			23.	異性関係における悩み事
			38.	好きな異性に対する気持ち
	公的役割関係の側面		9.	職業的適性
			24.	興味を持っている業種や職種
			39.	人生における仕事の位置づけ
		物質的自己	10.	こづかいの使い道
			25.	自分の部屋のインテリア
			40.	服装の趣味
		血縁的自己	11.	親の長所や欠点
			26.	家族に関する心配事
			41.	親に対する不満や要望
		実存的自己	12.	生きがいや充実感に関する事
			27.	人生における虚しさや不安
			42.	孤独感や疎外感
		趣味	13.	休日の過ごし方
			28.	芸能やスポーツに関する情報
			43.	趣味としていること
		意見	14.	文字や芸術に関する意見
			29.	最近の大きな事件に関する意見
			44.	社会に対する不平・不満
		うわさ話	15.	友達のうわさ
			30.	芸能人のうわさ
			45.	関心のある異性のうわさ

第６節　結果

第１項　　移行対象の実際

移行対象の発現率は 36.6%であり，男性（30.2%）よりも女性（42.4%）の方が有意に高かった（t（527）= 3.476，p = .001）．Hong（1978）の定義（表 2-1）を参考に移行対象を分類したところ，一次的移行対象が 34.7%，二次的移行対象が 59.3%，判別がつかない対象と未記入な回答が 6.1%であり，性別による有意差はみられなかった．所有時期は，開始時の平均が 2.5 歳（SD = 2.02），終結時の平均が 8.3 歳（SD = 5.14）であった．開始時において一次的移行対象の方が二次的移行対象よりも有意に早かった（t（285）= 4.451，p = .000）が，終結時では有意差はみられず（t（275）= 1.738，p = .083），いずれの所有時期も性別による有意差はみられなかった（順に t（286）= 1.879，p = .061 ；t（275）= .286，p = .775））．

移行対象所有時の状況と理由における回答を表 2-8，図 2-1，図 2-2，図 2-3，図 2-4 に示した．「その他」の状況は「落ち込んでいるとき」，「家にいるとき」，「一人が怖いとき」，「さみしいとき」などであり，「その他」の理由としては，「楽しい」，「かわいい」，「遊ぶとき必要」，「覚えていない」などであった．所有時の状況を分析した結果，就寝時には半数以上の移行対象所有者が移行対象を用いていたこと，「安心感」や「落ち着き」を求めて移行対象を用いていたことが明らかとなった．ここで，所有時の状況，理由における回答について，「当てはまる」を 1，「当てはまらない」を 0 として合計し，各状況，各理由に対する下位尺度得点を算出した．そして，移行対象の種類と性別を独立変数，各状況と各理由における下位尺度得点を従属変数として分散分析を行った結果，「起きているときは常に」という状況下位尺度において性別の主効果が有意であり（F（1,331）= 4.32，p = .038），男性よりも女性の得点が高かった（表 2-9）．すなわち，女性の方が移行対象を常にそばに置いておく傾向が強いことが示された．

一方で，「寝るとき」，「外出するとき」，「一人で遊ぶとき」，「二人以上で遊ぶとき」という状況下位尺度および，「肌触り，感触が良い」，「匂いが良い」という理由下位尺度において，移行対象の種類別の主効果が有意であった（順に F（1,331）= 32.39，p = .000 ；F（1,331）= 5.50，p = .020 ；F（1,331）= 73.25，p = .000 ；F（1,331）= 10.99，p = .001 ；F（1,331）= 52.23，p = .000 ；F（1,331）= 26.38，p = .000）．「寝る時」と

いう状況と，「肌触り，感触が良い」，「匂いが良い」という理由では一次的移行対象の得点が高く，「外出する時」，「一人で遊ぶとき」，「二人以上で遊ぶとき」という状況では二次的移行対象の得点が高かった．すなわち，一次的移行対象には感覚的な要素が強く，二次的移行対象には対人的な要素が強いことが示された．また，いずれも交互作用はみられなかった．

表2-8　移行対象所有時の状況，理由

	項目内容	移行対象全体	一次的移行対象	二次的移行対象
状況	起きているときは常に	90（23.8%）	27（20.6%）	57（25.4%）
	寝るとき	209（55.3%）	100（76.3%）	105（21.9%）
	体調が悪いとき	37（9.8%）	13（9.9%）	21（9.4%）
	外出するとき	48（12.7%）	8（6.1%）	35（15.6%）
	一人で遊ぶとき	115（30.4%）	8（6.1%）	102（45.5%）
	二人以上で遊ぶとき	28（7.4%）	2（1.5%）	24（10.7%）
	食事のとき	9（2.4%）	2（1.5%）	7（3.1%）
	その他	20（5.3%）	4（3.1%）	13（5.8%）
理由	肌触り，感触が良い	176（46.6%）	94（71.8%）	79（35.3%）
	匂いが良い	59（15.6%）	39（29.8%）	18（8.0%）
	安心感がある，落ち着く	239（63.2%）	88（67.2%）	140（62.5%）
	その他	57（15.1%）	7（5.3%）	48（21.4%）

※ 複数回答あり

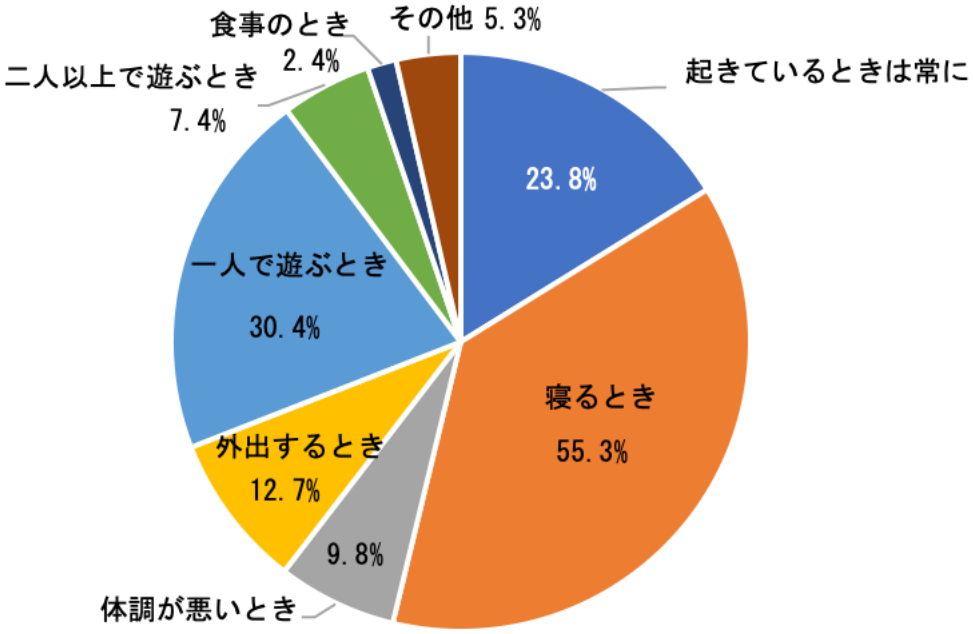


図2-1　移行対象所有時の状況

※ 複数回答あり

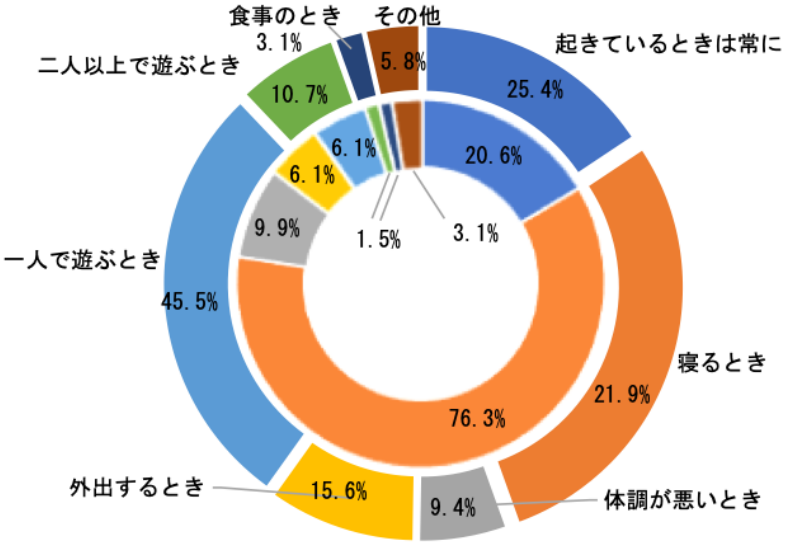


図2-2　移行対象の種類別における所有時の状況

※ 内側が一次的移行対象，外側が二次的移行対象
※ 複数回答あり

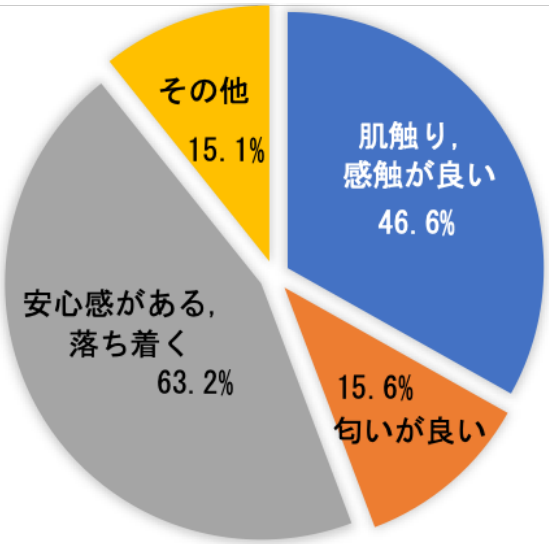


図2-3　移行対象所有時の理由

※ 複数回答あり

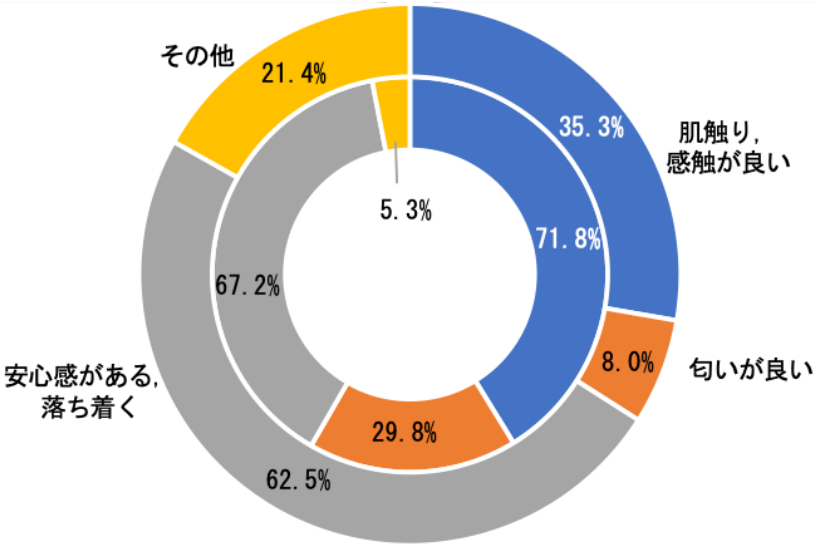


図2-4　移行対象の種類別における所有時の理由

※ 内側が一次的移行対象，外側が二次的移行対象
※ 複数回答あり

表2-9　移行対象の種類と性別による所有時の状況，理由の平均値（SD）および分散分析結果

		一次的移行対象		二次的移行対象		主効果		
		男性	女性	男性	女性	移行対象の種類	性別	交互作用
状況	起きているときは常に	.16	.24	.19	.32	1.03	4.32*	.30
		(.37)	(.43)	(.39)	(.50)			
	寝るとき	.79	.80	.40	.56	32.29***	2.22	1.98
		(.41)	(.41)	(.49)	(.50)			
	体調が悪いとき	.14	.08	.07	.12	.28	.00	2.27
		(.35)	(.28)	(.25)	(.33)			
	外出するとき	.09	.05	.15	.18	5.50*	.03	.96
		(.29)	(.22)	(.36)	(.39)			
	一人で遊ぶとき	.07	.06	.52	.47	73.25***	.35	.16
		(.26)	(.24)	(.50)	(.50)			
	二人以上で遊ぶとき	.00	.02	.12	.11	10.99**	.07	.26
		(.00)	(.15)	(.33)	(.32)			
	食事のとき	.02	.01	.04	.03	.81	.31	.00
		(.15)	(.11)	(.20)	(.17)			
理由	肌触り，感触が良い	.84	.70	.33	.40	52.23***	.39	3.54
		(.37)	(.46)	(.48)	(.50)			
	匂いが良い	.33	.30	.12	.07	26.38***	.81	.11
		(.47)	(.46)	(.33)	(.25)			
	安心感がある，落ち着く	.65	.72	.65	.68	.14	.77	.17
		(.48)	(.45)	(.48)	(.47)			

N=335（一次的・男性：43名，二次的・男性：75名，一次的・女性：83名，二次的・女性：134名）

上段：平均値，下段：SD

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

第２項　　移行対象の所有と自己開示の関連

尺度の構成

「自己開示」尺度に対し原典の尺度構成を採用したところ，信頼性が不十分であったため再構成を行った．

「家族」,「気心の知れた相手」,「会えば話す程度の相手」,「会って間もない相手」への自己開示尺度において，24 項目すべての項目に対し主因子法による因子分析を行なった．その結果,「気心の知れた相手」への自己開示尺度における，主因子法・Promax 回転による 4 因子構造がすべての自己開示尺度において妥当であると考えられた.表 2-10 に Promax 回転後の因子パターンを示す．なお，回転前の 4 因子で 24 項目の全分散を説明する割合は 59.61%であった．

第 1 因子に高い因子パターンを示したのは,「職業」や「目標」など，将来への開示項目 9 項目であった．そこで,「将来開示」因子と命名した．第 2 因子は,「異性」や「友人」に対する開示項目に高い因子パターン値を示していた．そこで,「人間関係開示」因子と命名した．第 3 因子は,「性」に関する開示項目が高い因子パターン値を示していた．そこで,「性開示」因子と命名した．第 4 因子は,「家族」や「親」に対する開示項目が高い因子パターン値を示していた．そこで,「家族開示」因子と命名した．そして，それぞれ.30 以上の因子パターン値を示した項目から因子名と同名の下位尺度を作成し，各下位尺度に相当する項目の平均値を「将来開示」下位尺度得点,「人間関係開示」下位尺度得点,「性開示」下位尺度得点,「家族開示」下位尺度得点とした．それぞれの Cronbach の α 係数は,「将来開示」で α＝.94,「人間関係開示」で α＝.91,「性開示」で α＝.85,「家族開示」で α＝.84 であった．各開示相手に対する下位尺度得点，標準偏差，α 係数および下位尺度間相関を表 2-11 に示した．すべての開示相手において，4 つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示していた．

表2-10　気心の知れた相手に対する自己開示尺度の因子分析結果
（Promax回転後の因子パターン）

	項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
14.	興味を持っている業種や職種について	**.82**	-.07	.03	.02	.63
24.	趣味について	**.79**	.10	-.07	-.14	.54
18.	目標としている生き方について	**.70**	-.04	.10	.03	.57
8.	休日の過ごし方について	**.63**	.16	-.13	-.01	.47
22.	職に就くことの意義について	**.61**	-.04	.03	.09	.45
2.	現在持っている目標について	**.61**	-.03	.14	.01	.46
16.	芸能やスポーツに関する情報について	**.55**	.27	-.15	-.16	.34
6.	職業の適性について	**.55**	-.03	.11	.18	.52
10.	拠りどころとしている価値観について	**.50**	.02	.11	.11	.44
13.	異性関係における悩み事について	.03	**.88**	.05	-.12	.73
21.	好きな異性に対する気持ちについて	.01	**.81**	.06	-.06	.67
5.	過去の恋愛経験について	-.05	**.65**	.16	.05	.57
12.	友人関係における悩み事について	.19	**.64**	-.16	.13	.63
17.	嫉妬した経験について	-.06	**.47**	.16	.16	.43
1.	心をひどく傷つけられた経験について	.06	**.45**	.08	.09	.37
4.	友人に対する好き・嫌いについて	.17	**.43**	-.02	.04	.34
20.	友人関係に求めることについて	.31	**.33**	-.05	.16	.48
3.	性的衝動を感じた経験について	.00	-.03	**.88**	-.07	.68
11.	性に対する関心について	.05	.06	**.82**	-.08	.72
19.	性に対する悩み事について	-.06	.22	**.59**	.07	.56
15.	家族に関する心配事について	-.08	.03	-.02	**.86**	.67
23.	親に対する不満や要望について	-.02	.08	-.08	**.64**	.42
7.	親の長所について	.26	-.11	-.04	**.51**	.40
9.	情緒的に未熟と思われる点について	.27	.11	.07	**.32**	.45
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
	Ⅰ	-	.71	.51	.73	
	Ⅱ		-	.61	.66	
	Ⅲ			-	.50	
	Ⅳ				-	
	累積寄与率	41.21	46.76	49.85	52.28	

表2-11　開示相手別による開示内容の下位尺度得点の平均値（SD），
α係数および下位尺度間相関

家族

	平均値	SD	α係数	将来開示	人間関係開示	性開示	家族開示
将来開示	3.52	(1.06)	.92	-	.70**	.34**	.71**
人間関係開示	2.36	(1.02)	.90		-	.58**	.67**
性開示	1.55	(1.84)	.82			-	.40**
家族開示	2.98	(1.15)	.80				-

気心の知れた相手

	平均値	SD	α係数	将来開示	人間関係開示	性開示	家族開示
将来開示	3.95	(.83)	.89	-	.73**	.50**	.69**
人間関係開示	3.84	(.94)	.88		-	.60**	.65**
性開示	3.18	(1.27)	.84			-	.43**
家族開示	3.25	(1.05)	.76				-

会えば話す程度の相手

	平均値	SD	α係数	将来開示	人間関係開示	性開示	家族開示
将来開示	2.45	(.84)	.88	-	.73**	.58**	.68**
人間関係開示	1.95	(.78)	.88		-	.71**	.71**
性開示	1.70	(.87)	.81			-	.57**
家族開示	1.75	(.75)	.75				-

会って間もない相手

	平均値	SD	α係数	将来開示	人間関係開示	性開示	家族開示
将来開示	1.91	(.77)	.87	-	.68**	.56**	.67**
人間関係開示	1.40	(.57)	.87		-	.76**	.77**
性開示	1.31	(.64)	.80			-	.64**
家族開示	1.37	(.59)	.76				-

N=538, 男性：395名,女性：439名

** p<.01

移行対象の所有と自己開示の関連

移行対象の所有と自己開示の関連を検討するため，性別と移行対象の有無（移行対象の所有について「覚えていない」とした者の回答は除いた）を独立変数，各自己開示下位尺度得点を従属変数として分散分析を行った．なお，各開示相手への自己開示得点の平均値を［家族］下位尺度得点，［気心の知れた相手］下位尺度得点，［会えば話す程度の相手］下位尺度得点，［会って間もない相手］下位尺度得点とし，すべての自己開示得点の合計の平均値を［自己開示］尺度得点とした．それぞれの α 係数は，［家族］.95，［気心の知れた相手］.94，［会えば話す程度の相手］.94，［会って間もない相手］.94，［自己開示］.97であった．

分散分析の結果（表 2-12），移行対象の主効果はすべての下位尺度において有意であり（自己開示：F (1, 533) = 13.76, p = .000 ；家族：F (1, 533) = 11.24, p = .001 ；気心：F (1, 533) = 3.90, p = .049 ；会えば話す：F (1, 533) = 7.47, p = .006 ；会って間もない：F (1, 533) = 9.03, p = .003)，移行対象所有群の自己開示得点が高かった．また，［気心の知れた相手］，［会えば話す程度の相手］，［会って間もない相手］に対する下位尺度においては性別の主効果が有意であり（順に F (1, 533) = 3.90, p = .049 ；F (1, 533) = 6.51, p = .001 ；F (1, 533) = 7.52, p = .006)，［気心の知れた相手］に対しては女性の自己開示得点が高く，［会えば話す程度の相手］と［会って間もない相手］に対しては男性の自己開示得点が高かった．いずれも交互作用はみられなかった．

開示内容では，移行対象の主効果はすべての下位尺度において有意であり（将来：F (1, 532) = 14.49, p = .000 ；人間関係：F (1, 532) = 10.49, p = .001 ；性：F (1, 532) = 6.40, p = .012 ；家族：F (1, 532) = 7.09, p = .008)，移行対象所有群の自己開示得点が高かった．また，＜人間関係開示＞，＜性開示＞下位尺度においては性別の主効果が有意であり（順に F (1, 532) = 5.52, p = .019 ；F (1, 532) = 49.06, p = .000)，＜人間関係＞に関しては女性の自己開示得点が高く，＜性＞に関しては男性の自己開示得点が高かった．いずれも交互作用はみられなかった．

したがって，移行対象を所有していた者はそうでない者よりも自己開示傾向が高いことが示された．また，女性は男性に比べて親密な相手に対して自己開示を多く行う傾向があり，男性は女性に比べてそれほど親密でない相手に対しても自己開示を行う傾向が示された．さらに開示内容としては，男性に比べて女性は人間関係に関する話題が多く，性に関

する話題は少ないことが示された.

表2-12　移行対象の有無，性別による各自己開示下位尺度の平均値（SD）および分散分析結果

	移行対象 有り		移行対象 無し		主効果		
	男性	女性	男性	女性	移行対象の有無	性別	交互作用
自己開示	2.64	2.62	2.44	2.45	13.76***	.00	.08
	(.64)	(.51)	(.54)	(.56)			
家族	2.86	2.96	2.54	2.75	11.24**	3.65	.56
	(.89)	(.86)	(.86)	(.95)			
気心の知れた相手	3.70	3.83	3.55	3.70	3.90*	3.90*	.03
	(.85)	(.73)	(.89)	(.79)			
会えば話す程度の相手	2.23	2.12	2.10	1.89	7.47**	6.51*	.63
	(.78)	(.73)	(.70)	(.69)			
会って間もない相手	1.75	1.58	1.57	1.46	9.03**	7.52**	.48
	(.70)	(.55)	(.51)	(.53)			
将来開示	3.10	3.06	2.84	2.86	14.49***	.03	.71
	(.75)	(.63)	(.65)	(.76)			
人間関係開示	2.39	2.52	2.24	2.35	10.49**	5.52*	.01
	(.65)	(.54)	(.56)	(.54)			
性開示	2.23	1.80	2.06	1.69	6.40*	9.06***	.19
	(.74)	(.65)	(.62)	(.53)			
家族開示	2.40	2.23	2.46	2.32	7.10**	1.89	.05
	(.72)	(.59)	(.62)	(.64)			

N=537（有り・男性：116名，無し・男性：125名，有り・女性：185名，無し・女性：111名）

上段：平均値，下段：SD

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

第３項　　移行対象の所有と開示相手別にみた自己開示量との関連

自己開示と親密性の関連

各開示相手の親密性と自己開示の関連性を検討するために，まず各開示相手の自己開示量に対し分散分析を行った．表 2-13 に各開示相手の自己開示得点の平均値，標準偏差および分散分析結果，図 2-5 に自己開示得点の平均値を示した．分散分析の結果，各開示相手の自己開示得点に有意な差がみられた（F (2.17，1801.27) = 2000.17，p = .000）．多重比較（Bonferroni 法，5%水準）を行ったところ，すべての開示相手間で有意な差がみられた．次に各開示相手の親密性を検討するため，同様に分散分析を行った．表 2-14 に各開示相手の親密得点の平均値，標準偏差および分散分析結果，図 2-5 に親密得点の平均値を示した．分散分析の結果，各開示相手の親密得点に有意な差がみられた（F (2.35，2012.50) = 3833.91，p = .000）．多重比較（Bonferroni 法，5%水準）を行ったところ，すべての開示相手間で有意な差がみられた．これらの結果から，本研究においては，[気心の知れた相手]，[家族]，[会えば話す程度の相手]，[会って間もない相手] の順に親密な関係であり，親密な関係であるほど自己開示が行われやすいことが示された．

表2-13　開示相手別の自己開示得点の平均値（SD）および分散分析結果

	自己開示得点		
	平均値	SD	F値
家族	2.79	(.89)	
気心の知れた相手	3.70	(.82)	2000.17
会えば話す程度の相手	2.07	(.71)	p<.001
会って間もない相手	1.58	(.58)	

N=831, 男性：392名, 女性：439名

多重比較の結果：会って間もない相手＜会えば話す程度の相手＜家族＜気心の知れた相手

表2-14　開示相手別の親密得点の平均値（SD）および分散分析結果

	自己開示得点		
	平均値	SD	F値
家族	8.19	(2.07)	
気心の知れた相手	8.44	(1.51)	3833.91
会えば話す程度の相手	4.26	(1.72)	p<.001
会って間もない相手	1.85	(1.54)	

N=857, 男性：407名, 女性：457名

多重比較の結果：会って間もない相手＜会えば話す程度の相手＜家族＜気心の知れた相手

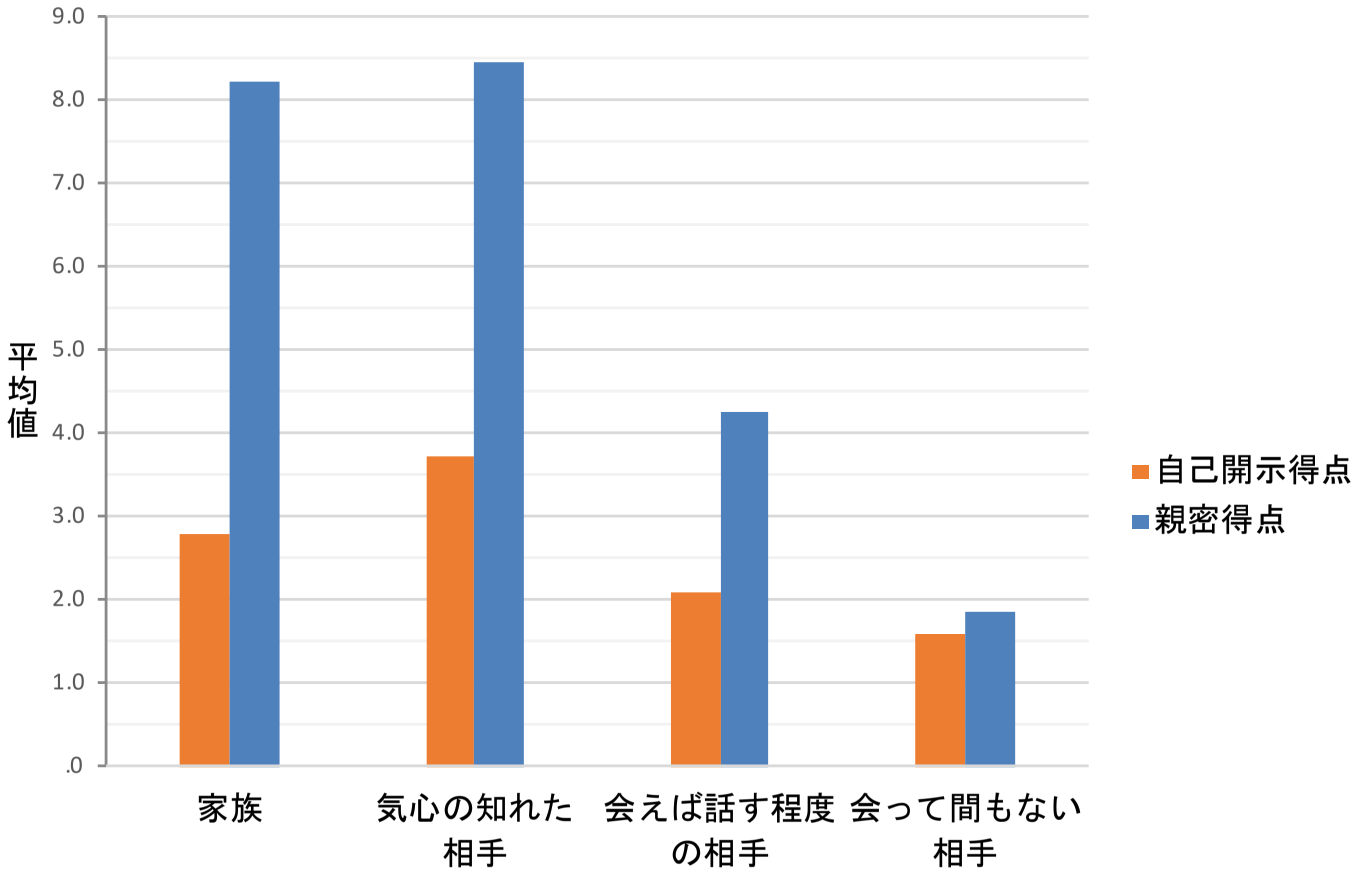


図2-5 各開示相手への自己開示得点と親密得点の平均値
（すべての開示者間で0.1%水準の有意差あり）

開示相手別にみた移行対象の所有と自己開示の関連

開示相手別の自己開示量について，性別と移行対象の有無を独立変数，開示内容の下位尺度得点を従属変数とした分散分析により検討した．その結果，性別と移行対象の有無に交互作用はみられなかった．そこで，本研究のリサーチクエスチョンである移行対象の有無による自己開示量の差について焦点を当てて検討するため，移行対象の有無と開示内容の下位尺度得点の差について t 検定を行った．

［家族］への自己開示は，すべての下位尺度において有意であり（将来：t = 3.29，df = 481.56，p = .001 ；人間関係：t = 3.34，df = 544，p = .001 ；性：t = 2.73，df = 544.16，p = .009 ；家族：t = 2.36，df = 546，p = .019），いずれの開示内容においても，移行対象所有群の方が［家族］に対する自己開示得点が高かった（表 2-15, 図 2-6）．

［気心の知れた相手］への自己開示は，＜将来開示＞下位尺度（t = 2.46，df = 543，p = .014）と＜人間関係開示＞下位尺度（t = 2.04，df = 546，p = .042）において移行対象所有群の方が有意に自己開示得点が高かった．＜性開示＞下位尺度（t = .50，df = 546，p = .616）と＜家族開示＞下位尺度（t = 1.71，df = 546，p = .087）においては，移行対象の有無による自己開示得点差は有意ではなかった（表 2-16, 図 2-7）．

［会えば話す程度の相手］への自己開示は，＜将来開示＞下位尺度（t = 2.92，df = 542，p = .004）と＜家族開示＞下位尺度（t = 2.11，df = 544，p = .035）において，移行対象所有群の方が有意に自己開示得点が高かった．＜人間関係開示＞下位尺度（t = 1.93，df = 545，p = .054）と＜性開示＞下位尺度（t = .58，df = 545，p = .565）においては，移行対象の有無による自己開示得点差は有意ではなかった（表 2-17, 図 2-8）．

［会って間もない相手］への自己開示は，＜将来開示＞下位尺度（t = 2.85，df = 542，p = .005）と＜人間関係開示＞下位尺度（t = 2.38，df = 543.84，p = .018），＜家族開示＞下位尺度（t = 2.16，df = 542.40，p = .031）において，移行対象所有群の方が有意に自己開示得点が高かった．＜性開示＞下位尺度（t = .47，df = 544，p = .640）においては，移行対象の有無による自己開示得点差は有意ではなかった（表 2-18, 図 2-9）．

以上の結果から，全体的に移行対象所有群の方が自己開示得点が有意に高かった．開示内容でみると，＜将来開示＞下位尺度は，開示相手の親密度にかかわらず移行対象所有群の自己開示得点が有意に高かった．＜人間関係開示＞下位尺度は，［会えば話す程度の相手］以外の開示相手に対して，移行対象所有群の自己開示得点が有意に高かった．＜性開示＞

下位尺度は，［家族］に対してのみ移行対象所有群の自己開示得点が有意に高かった．＜家族開示＞下位尺度は，［気心の知れた相手］以外の開示相手に対して，移行対象所有群の自己開示得点が有意に高かった．

表2-15　移行対象の有無による家族への各下位尺度の平均値（SD）
およびt検定の結果

	移行対象 有り		移行対象 無し			
	平均値	SD	平均値	SD	t値	
将来開示	3.66	1.02	3.35	1.13	3.29	**
人間関係開示	2.46	1.03	2.17	1.01	3.34	**
性開示	1.61	0.92	1.42	0.69	2.73	**
家族開示	3.10	1.14	2.87	1.15	2.36	*

N=538（有り・男性：117名,無し・男性：126名,有り・女性：184名,
無し・女性：111名）

上段：平均値, 下段：SD

* p<.05　** p<.01

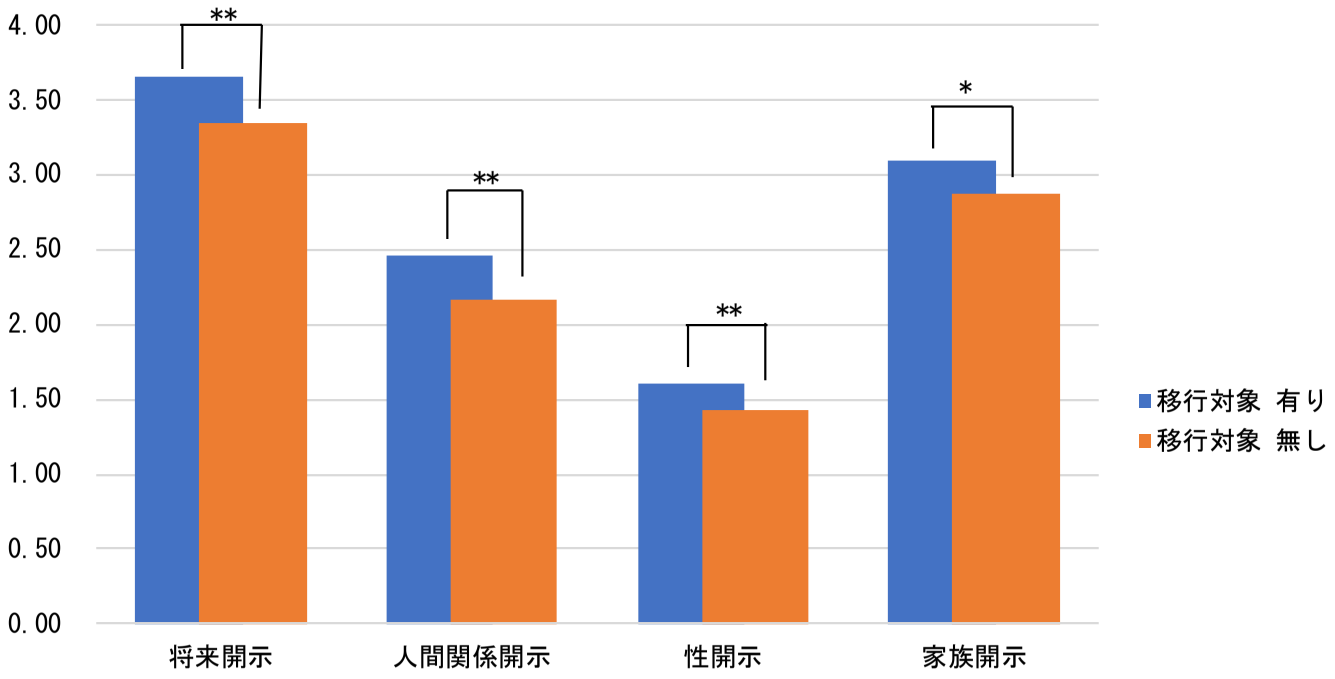


図2-6　移行対象の有無による家族への自己開示下位尺度得点の平均値

＊ p<.05　＊＊ p<.01

表2-16　移行対象の有無による気心の知れた相手への各下位尺度の平均値（SD）およびt検定の結果

	移行対象 有り		移行対象 無し		
	平均値	SD	平均値	SD	t値
将来開示	4.04	0.78	3.87	0.88	2.46 *
人間関係開示	3.92	0.91	3.75	0.98	2.04 *
性開示	3.20	1.29	3.15	1.24	0.50
家族開示	3.36	1.05	3.20	1.08	1.71

N=538（有り・男性：118名,無し・男性：127名,有り・女性：184名,
無し・女性：112名）

上段：平均値, 下段：SD

* p<.05　** p<.01

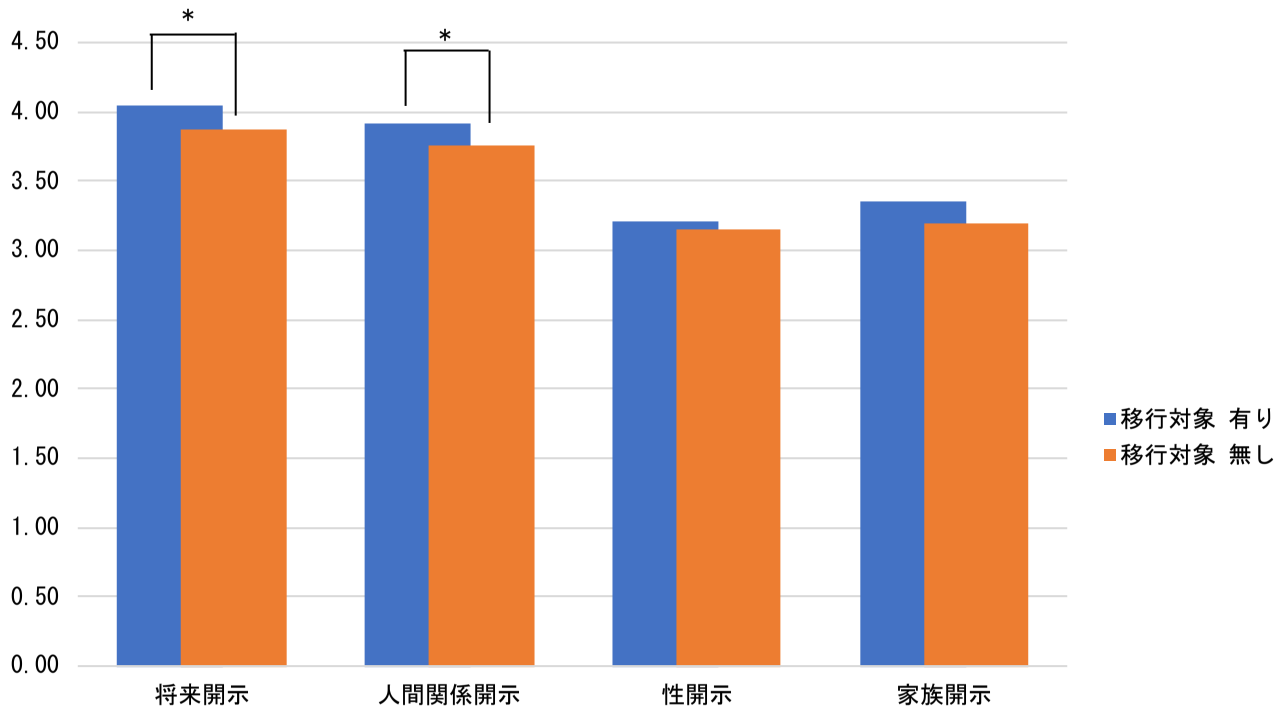


図2-7　移行対象の有無による気心の知れた相手への自己開示下位尺度得点の平均値

＊ p<.05

表2-17　移行対象の有無による会えば話す程度の相手への
各下位尺度の平均値（SD）およびt検定の結果

	移行対象 有り		移行対象 無し		
	平均値	SD	平均値	SD	t値
将来開示	2.56	0.86	2.35	0.86	2.92 **
人間関係開示	2.03	0.82	1.89	0.75	1.93
性開示	1.74	0.91	1.69	0.86	0.58
家族開示	1.84	0.79	1.70	0.73	2.11 *

N=538（有り・男性：118名,無し・男性：126名,有り・
女性：184名,無し・女性：111名）

上段：平均値, 下段：SD

* p<.05　** p<.01

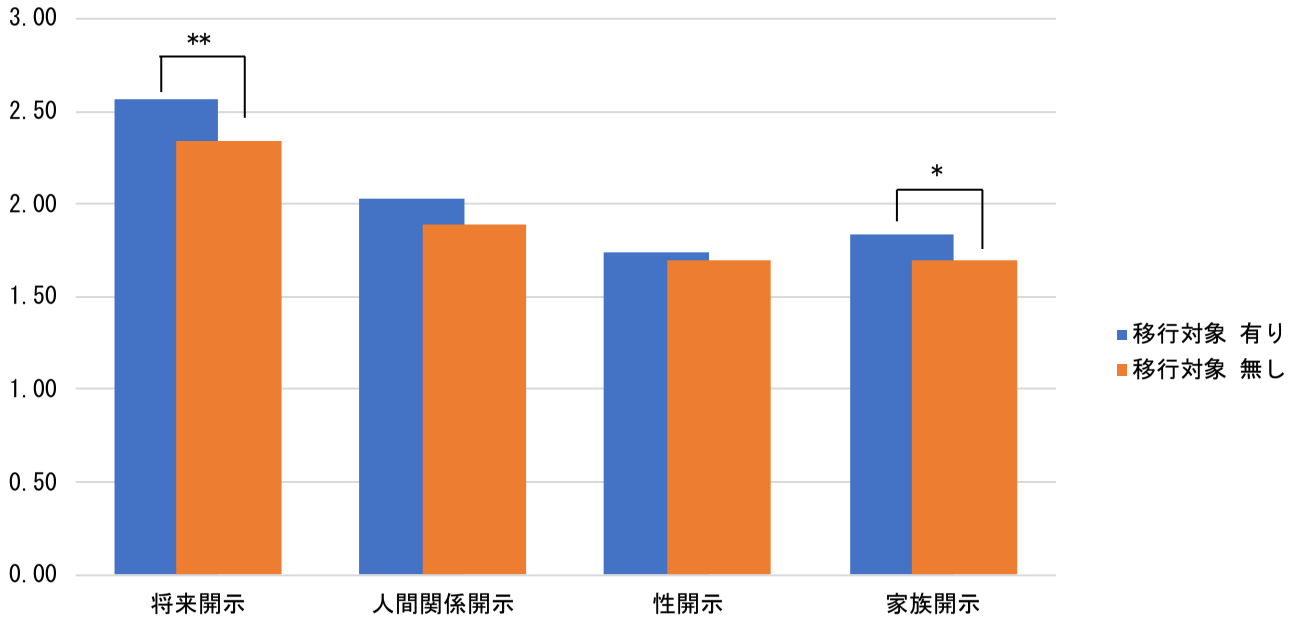


図2-8　移行対象の有無による会えば話す程度の相手への自己開示下位尺度得点の平均値

＊ p<.05　** p<.01

表2-18　移行対象の有無による会って間もない相手への各下位尺度の平均値（SD）およびt検定の結果

	移行対象 有り		移行対象 無し		
	平均値	SD	平均値	SD	t値
将来開示	2.03	0.80	1.84	0.73	2.85 **
人間関係開示	1.46	0.63	1.34	0.50	2.38 *
性開示	1.33	0.66	1.30	0.62	0.47
家族開示	1.43	0.63	1.32	0.52	2.16 *

N=538（有り・男性：117名,無し・男性：125名,有り・女性：184名,
無し・女性：111名）

上段：平均値, 下段：SD

* p<.05　** p<.01

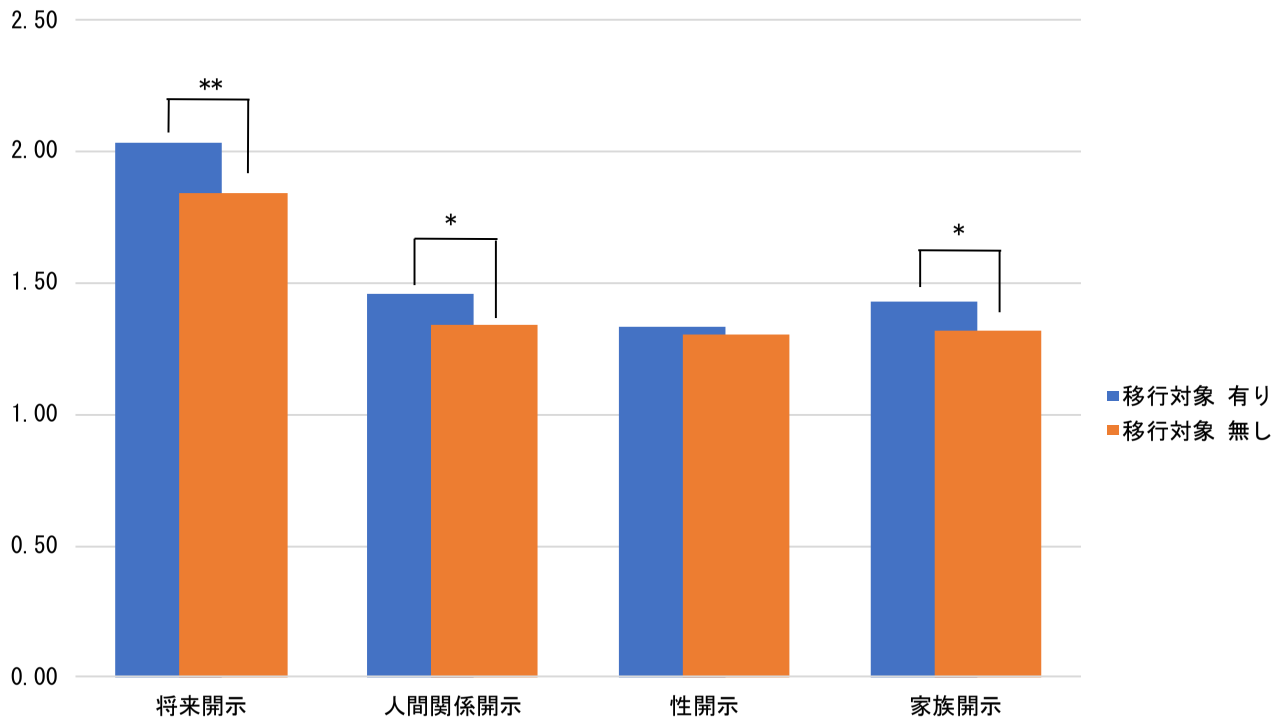


図2-9　移行対象の有無による会って間もない相手への自己開示下位尺度得点の平均値

＊ p<.05　＊＊ p<.01

第７節　考察

第１項　　移行対象の実際

移行対象の発現率は，予備調査で 32.7%，本調査で 36.1%であり，遠藤（1990）らの過去の研究結果とほぼ一致している．やはり欧米に比べて，日本の移行対象発現率は低い傾向にあると言える．また，女性の発現率が男性よりも多いという結果においても，男女比を算出している先行研究と一致している（表 2-19）．これについては，男らしさや女らしさという言葉で表現されるような,心理社会的な性別の概念であるジェンダーの視点から，女の子は移行対象になりやすいぬいぐるみなどのおもちゃを与えられやすいことが考えられる．しかし，子どものおもちゃについてのメタアナリシスからは，子どものジェンダーの違いには社会や文化といった要因だけではなく，生物学的な背景も影響を及ぼしていることが示唆されている（Brenda, K. T. et. al, 2017）．したがって，移行対象の発現率の男女差は，環境要因だけでは説明ができない．第１章の移行対象の発現機序（図 2-10）に示したように，女性の方が男性よりも分離不安を抱きやすく，環境における移行対象の必要性が高かったり，女性の方が男性よりも表現能力に長けていたりするということがあるのかもしれない．

移行対象の出現時期を一次的移行対象と二次的移行対象に分類して考察すると，ぬいぐるみやおもちゃなどの二次的移行対象への愛着は，素材の感触や温かさによっては一次的移行対象と同時期に現れることが示唆される．また，所有状況や理由では，一次的移行対象には就寝時での「肌触り」や「匂い」といった感覚的な要素が強く，二次的移行対象には外出時での「遊び相手」としての対人的な要素が強いことが示唆される．したがって，二次的移行対象が対人関係に影響を与えている可能性が指摘できる．このとき，仮に一次的移行対象の所有者がその後二次的移行対象を所有するのだとすれば，移行対象は段階的に移行していくものであると考えられ，その段階によって対人的な発達レベルを確認することができるかもしれない．また，一次的移行対象と二次的移行対象がどちらかしか現れない場合もあるとすれば，両者は異なる発達的意味を持つと考えられる．対人関係で言えば，人格的要素を強く持つ二次的移行対象のみが自己開示をはじめとする言語的コミュニケーションに影響を与えている可能性が示唆される．

表2-19　先行研究における移行対象の発現率

文献	対象者数	調査対象者	対象国	移行対象の発現率
Gaddini&Gaddini(1970)	682(Rural),450(City),52(Foreign)	母親	イタリア	4.9%(Rural), 31.1%(City), 61.5%(Foreign)
Hong&Townes(1976)	169(U.S.),50(U.S.K.),60(Korea)	母親	アメリカ，韓国	毛布：54%(U.S.), 34%(U.S.K.), 18%(K) ぬいぐるみ：24%(U.S.), 22%(U.S.K.), 50%(K)
Green,K.E.,Groves,M.M.,Tegano,D.W.(2004)	171	9－13歳	アメリカ	54%
Litt(1981)	285	母親	アメリカ	77%(middle class), 46%(low SES)
Kleoner(1983)	180	母親	イスラエル	27%
Mahalski(1983)	1197	母親	ニュージーランド	2歳：74%, 3歳：63%, 5歳：53%, 7歳：43%
藤井(1985)	415（男児205,女児210）	母親	日本	31.1%
Shafii(1986)	230(男子119,女子111)	13－14歳	アメリカ	女子88%, 男子71%
遠藤(1990)	951	母親	日本	38%（男児32.8%＜女児43.9%）
中根(1994)	91	大学生	日本	54.9%
Eytan et al.(1998)	871(男子375,女子496)	平均16.7歳	イスラエル	30.4%
森定(1999)	343（男子121,女子222）	平均23.3歳	日本	62%（男性35%＜女性77%）
森定(2001)	804（男子430,女子374）	平均13.2歳	日本	35%（男子24%,女子48%）
Hobara,M.(2003)	100（日本,男児27,女児23；アメリカ,男児29,女児21）	母親	日本，アメリカ	日本38%,アメリカ62%
Green,K.E.,Groves,M.M.,Tegano,D.W.(2004)	275（211名が高接触群）	母親	アメリカ，カナダ	18.2%
池内・藤原(2004)	211（男児115,女児93）	母親	日本	39.8%（男児38.79%, 女児41.1%）
黒川(2004)	296（男児154,女児142）	母親	日本	33.4%
石谷(2005)	66	大学生	日本	35.4%
富田(2007)	261	保護者	日本	31%
服部(2008)	314（男子156,女子158）, 154（男子56,女子98）, 384（男性121,女子263）	中・高・大学生	日本	中学生35%, 高校生40.3%, 大学生45.6%
Erkolahti et al.(2009)	1054(男子465,女子589)	平均14.5歳	フィンランド	男子18%＜女子37%(現在の所有率)

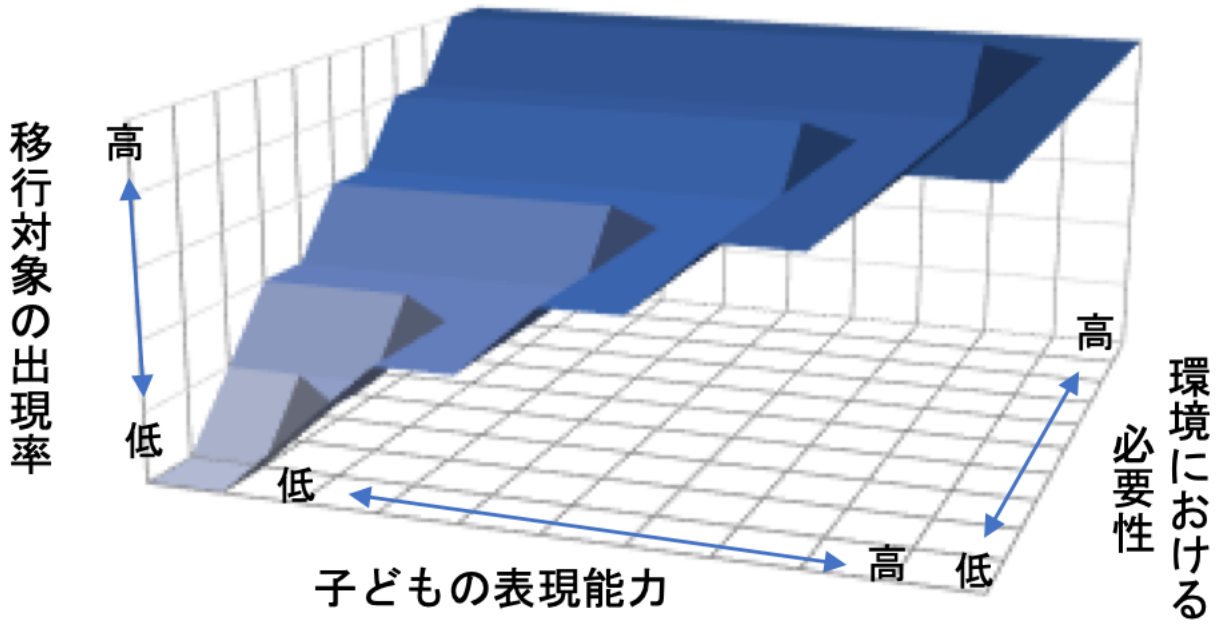


図2-10　移行対象の発現機序

第２項　　仮説の検証

結果より，本研究では［気心の知れた相手］，［家族］，［会えば話す程度の相手］，［会って間もない相手］の順に親密な関係であり，親密な関係であるほど自己開示が行われやすいことが示された．したがって仮説①は支持された．また，移行対象所有者は，親密な相手に対しても親密でない相手に対しても，移行対象非所有者よりも多くの自己開示を行うことが示された．したがって，仮説②も支持されたといえる．ただし，自己開示の話題によっては，移行対象の有無と自己開示量に有意差がみられない場合もあった．特に，性に関する話題はいずれの開示相手であっても全体的に開示量が少なく，［家族］以外の相手への開示量について，移行対象の有無による有意差はみられなかった．

第３項　　移行対象が自己開示に与える影響

移行対象所有者の方が移行対象非所有者よりも自己開示量が多いという結果から，移行対象の所有が自己開示を促進することに何らかの影響を与えている可能性が示唆される．移行対象は子ども独自の意味を持つ非常に個人的な対象であると同時に，誰の目にも触れ得る客観的な対象物でもある．したがって，子どもが移行対象を用いるとき，移行対象は，子どもの不安な気持ちや心地よい気持ちといった内的なものを，重要な他者や家族といった外の世界につなぐ対象物として機能していると言える．自己開示は「他者に対して自己の個人的情報を言語的・非言語的に伝えること」であることから（Jourard，1971），移行対象を介したかかわりは，自己開示の練習になっていたことが考えられ，移行対象が自己開示の促進要因として機能している可能性が示唆される．

下位尺度を用いた分析結果からは，特に性についての自己開示において，家族以外の相手では移行対象の有無と自己開示量に有意な差がみられなかった．この結果については，性に関することの表現がタブーとされる日本の社会文化的要因が考えられる．歴史的にみると，日本の性教育は「純潔教育」として始まっており，その後，欧米にならい性教育が普及した．しかし 2002 年には，性器の名称を小学校で教えたり，中学校で性交や避妊法を教えることが問題視され，それ以降性教育にブレーキがかかっている現状がある（西岡，2018）．したがって，対人関係を円滑にするためには，性に関する話題は開示しない方が良

い場合もあると考えられる．そのため，対人関係の雛形と考えられる移行対象の有無と自己開示量に有意な差はみられなかったのではないだろうか．一方で，家族においては，性の話題であっても移行対象所有者の方が移行対象非所有者よりも多くの自己開示を行う傾向にあった．性に関する事柄は，たとえタブーな文化であっても自分一人で判断することにリスクが伴う場合が多い．その際に，他人ではなく家族に話せるということは適応的であると考えられないだろうか．移行対象所有者は相手の親密度によって話題を選択していることが示唆され，このことは対人関係を円滑に進めるための重要なストラテジーとなっている可能性が示唆される．また，移行対象と家族との関係が，家族以外の相手との関係と異なっていることを推察させる．移行対象が家族との関係性のなかで育まれ，主に家族とのあいだで用いられるという性質に由来するかもしれない．

最も開示されやすい将来についての話題では，移行対象の有無と自己開示量で顕著な差がみられた．これは，移行対象とのかかわりが不可視的な部分を想像力で補うことを前提としたものであり，そうした移行対象とのかかわりが影響している可能性が示唆される．Stern (1985) が移行現象として質的に提示した 2 歳になる女の子の「お寝床でのお話」は，移行対象との関わりが言語能力の前駆物あるいは言語表現の補助スキルであることを示唆している．今回の量的研究における結果も，コミュニケーションの前提となる自己開示能力が移行対象非所有者に比べて移行対象所有者の方が有意に高いことを示しており，移行対象との関わりが言語表現の補助スキルであることを示唆していると言える．

以上より，移行対象と自己開示の関連においては，最も親密な存在である［気心の知れた相手］と，移行対象所有時に最も身近な存在であった［家族］，さらに［会えば話す程度の相手］と［会って間もない相手］を含めた他人とでは様相が異なっている．しかしいずれも，自己の確立を可視化する移行対象の存在が自立に不可欠なコミュニケーション能力の前提である自己開示能力の高さにプラスの影響を与えることを否定しないことが示唆される．したがって，本研究を踏まえて次のような仮説を立てることができる．

移行対象を所有した幼児は，移行対象を用いることにより自己の内と外につながりを見出して対人コミュニケーションの前駆的な働きを洗練させる．その後，移行対象とのかかわりは言語表現の補助スキルとなり，他者への自己開示へと発展することで自立につながる．

第８節　課題と展望

本研究は移行対象との関係を「自己の確立」と捉え，社会的自立を促す対人コミュニケーションの前提である自己開示と移行対象の関連を検討することで,「自己の確立」が「自立」に与える影響を考察した.

本研究の結果は，移行対象を用いることで言語表現能力が培われることを示唆するものであった．一方で，自己開示に影響を与えると考えられる個人特性を扱っていないことから,移行対象の所有と自己開示量の直接的な因果関係を認めることは難しいと考えられた．また，質問紙調査による量的分析であったために，どのようにして移行対象の所有が後の社会的自立の場面で個人の成熟と社会的要請の不一致における解消に影響を与え自立を促すかということについては，より個別性に基づいた研究が必要だと考えられた．移行対象が言語表現能力の補助スキルであるということを実証するためには自己開示につながる内的指標を探る必要があり，探索的な質的研究を行うことが有用であろう．また，質的研究を行うことで，本研究における量的研究の結果から得られた理論を補完できると考えられる.

第２部

第３章　自己の確立と補助の役割を担う移行対象

第１節　はじめに

第２章の研究では，移行対象の所有者が非所有者よりも自己開示量が多く，移行対象の経験が自己開示に何らかの影響を与えている可能性を示唆するものであった．一方で，家族のあいだでの自己開示量の多さや，移行対象のどのような働きが自己開示をはじめとする社会的自立に影響を与えるのか等については,量的研究で考察することが困難であった．そこで，本章では移行対象所有者の個別性に着目した質的研究を行うことにより，詳細な検討を試みたい．

なお，本研究では予備調査の結果新たなリサーチクエスチョンが生じたため，予備調査の後に再び先行研究のレビューに戻る構成となっている．これは，質的研究がデータ収集やデータ分析の過程の中で新たな発見にたどり着けるような発展的な特徴を持つことを表していると考えられるため，敢えてこのような異例な構成をとることとした．

第２節　問題と目的

第１章でまとめたように，移行対象は養育者をはじめとした子どもの周囲の環境によって用意されたものであると同時に，子ども自身の表現力といった創造性によって見出される（発見される），内的主観的世界（inner）と外的客観的現実（outer）を併せ持った中間領域で生じるものである．したがって，移行対象自体に曖昧さが含まれるものであり，多くの先行研究をはじめ，第２章で実施した量的研究では曖昧な部分がどうしても残ってしまう．移行対象研究においても移行対象と同様に，outer―客観的なデータを用いて量的に分析するような方法と inner―主観的なデータを質的に分析するような方法の両者からの視点で行なうことが，移行対象が「自立した個人としての自己を確立する」ことにどのように寄与するのかを検討する上で重要であると考える．

Arthern と Madill（1999，2002）は大人を対象とした心理療法の中で，どのように移行対象が機能するのかという問題に対して，セラピストとクライエントそれぞれ６名に半構造化面接によるインタビューを行い，グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質

的に分析した．彼らはまず，精神力動的対人関係療法を行うセラピスト３名（男性セラピスト２名と女性セラピスト１名）とゲシュタルト療法を行うセラピスト３名（男性セラピスト２名と女性セラピスト１名）に対して，治療場面で用いられる移行対象についてのインタビューを行った（Arthen & Madill, 1999）．その結果，６人のセラピストの説明は，「想起（remind）理論」と「変化（transform）理論」が相互に連結した理論の連続体として表されることが明らかとなり，この理論から，移行対象が対象恒常性を発達的に促進する働きを持つことを示唆している．そして，セラピストを対象とした研究で彼らが示したモデルは，「具体化の過程（process of embodiment）」を中核カテゴリーとして身体的段階（Physical Level）から概念的段階（Conceptual Level）までの４段階でまとめたものであり，このモデルによって，セラピーにおいてどのように移行対象が出現し，それがクライエントのためにどのように機能するのかを明らかにした．また，クライエントの移行対象を，（感触や匂いのような）発達的な文脈上で捉えることにより，セラピストは経験の非言語的要素への気付きを得ることができることを指摘した．さらに，移行対象の使用状況によってクライエントの対象恒常性の段階を評価することができることを示唆している．

その後，彼らは人間性心理療法を受けている６名の白人女性のクライエントに対しても同様のインタビューを行い，心理療法においてどのように移行対象が機能するのかという問題に，クライエントの視点から取り組んだ研究を行っている（Arthen & Madill, 1999）．その結果，クライエントが，a）セラピストの連続性，b）セラピストとのつながり，c）新たな自己感の発達という連続する３つのテーマを順に統合する中で，各テーマにおいて移行対象が５段階の「抱えることの過程（process of holding）」として機能していることを明らかにした．そして，Winnicott（1953）の概念より広い自己対象の機能（Kohut, 1971）を含むものとして移行対象の機能を論じ，a）セラピストの連続性とb）セラピストとのつながりがテーマとなる時期においては分離という問題を持つWinnicott理論が，c）新たな自己感の発達がテーマとなる時期においては自己対象理論が関連していることを示唆している．しかし，holding プロセスは両者の異なる機能を含む概念であることから中核カテゴリーとされている．そして，先のセラピストに焦点を当てた研究を踏まえて，移行対象の使用はクライエントとセラピストの関係を強化することだとしている．また，それはクライエントが①セラピストの連続した存在を感じ，②対象恒常性を発達させることで達成されることだと述べている．しかし，彼らが研究の展望として治療関係外での移行対象の使用を挙げたように，臨床例を除くと，移行対象に関するこのような質的研究は行われて

いない．

そこで本研究では，健康な個人を対象として，移行対象を使用するということが使用する当事者にとってどのような意味を持つのか，主観的な側面に焦点を当てた質的研究を行なう．そして，量的な分析では扱いきれない移行対象の本質的な機能・役割を考察することを目的とする．

第３節　予備調査

第１項　　目的

予備調査の目的は，①青年期の協力者が幼少期の移行対象についてどの程度語ることができるのかについて，本調査の実行可能性を検討することと，②本調査に向けてのインタビュー・ガイドの検討・作成を行うことである．

第２項　　手続き

調査時期および調査協力者

予備調査は 2008 年 8 月～9 月に実施した．調査協力者は 23 歳会社員の女性，22 歳会社員の女性，23 歳大学院生の女性 3 名であった．移行対象は，それぞれ順に，抱き枕，毛布とタオルケット，子供用の毛布であり，2 名の協力者は移行対象を現在も継続して使用していた．

手続き

調査は，筆者と協力者一対一の半構造化面接（平均約 60 分）により行なった．はじめに研究の趣旨や調査内容について筆者から説明を行い，協力者から質問や不明な点を伺う質

疑応答の時間を設けた．続いて，研究協力の了承を得た上で承諾書に署名をいただき，面接を実施した．面接は客観的事実（移行対象の内容や所有時期，使用状況，就寝様式，母親の忙しさ，きょうだいの有無など）を明らかにした後，主観的な内容（移行対象の必要性や気に入っていた理由，使用方法，周囲との関係性，移行対象の所有感，記憶に残るエピソードなど）について自由に語っていただいた．なお，その内容は協力者の承諾を得た上で IC レコーダーに録音した．

分析

インタビューの内容を逐語録としてデータ化した後，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Strauss, A & Corbin, 2004/1999）を参考に分析を行った．なお，方法論の選択や分析方法の詳細については本調査の項で述べる．

第３項　　結果と考察

結果

3 名の青年期女性の語りから，移行対象についての語りは大きく３つの側面から成ることが示唆された．1 つ目は，移行対象が「ボロボロであること」，移行対象に対して「所有感が強いこと」，移行対象によって「安心したり落ち着いたりすること」，移行対象の「感触がよいこと」などの①移行対象の特徴についての語りであり，これが内容の 6 割程度を占めていた．2 つ目は，移行対象がボロボロになることによって捨てられそうになる危機をめぐって，捨てたい母親と捨てたくない自分との間で生じる葛藤や，何とか捨てないための方略を見出し実行するといったような，移行対象を「失う危機」や移行対象を失う危機における「危機への抵抗」，そしてそのような危機を乗り越えて体験したこと，あるいは，移行対象を用いて行なわれる家族とのやりとりといった，②移行対象とのかかわりから語られたものであった．そして 3 つ目が，移行対象からの卒業をテーマとして語られたもので，移行対象を手放しても残る「感覚的な記憶」や移行対象を「捨てられない心性」，捨て

られずに使用し続けることに対する「一般的でないという感覚」といった，③移行対象からの卒業に関して語られたものであった.

また，移行対象を現在も所有し続けている協力者と，児童期に手放した協力者を比較すると，語りの質や量といった語りの豊かさについては，現在も所有し続けている協力者の方が豊富であった.

考察

予備調査で明らかとなった，移行対象の不安を鎮める機能や心理的・生理的に重要な対象であるといった特徴は，移行対象が内的主観的世界（inner）と外的客観的現実（outer）を併せ持つことを示唆しており，Winnicott の理論的考察と一致する結果であることが示唆される． このことより，移行対象の主観的体験をインタビューにより明らかにすることは可能だと考えられる.

一方で，現在も所有し続けている協力者の語りからは，青年期でも幼少期と同様の特徴を持つ移行対象を所持し続け，可視的な外的対象物に安心感を抱き，頼り，慰められている者の存在が明らかであった．また，その使用方法は明らかに与楽剤としてのフェティッシュ（牛島，1982）ではなく，第二の分離個体化期の危機における移行対象の「再燃」（Tabin, 1995）でもなかったことから，理論的にはずいぶん前に手放しているはずの移行対象を所有し続けることにどのような意味があるのかといった，新たなリサーチクエスチョンが生じる.また，現在も所有し続けている協力者の方が語りの量が多く豊かであったことから，本調査においては，現在も所有し続けている青年期の女性の語りも積極的に分析することが有意義であると考えられる.

また，本調査のインタビューガイドについては，予備調査の結果より，①移行対象の特徴，②移行対象とのかかわり，③移行対象からの卒業の 3 領域を大きなテーマとして取り上げて作成することが妥当であると考えられる.

第４節　青年期における移行対象

予備調査の考察から，青年期においても使用され続ける移行対象の主観的役割について新たなリサーチクエスチョンが得られた．Winnicott（1953，1971）は移行対象のその後に関して，「リンボ界に放擲される」という表現を用いて，それは忘れ去られないが嘆かれることもなくただ意味を失うだけであるとして，移行対象から自発的に卒業することが重要だと述べる．では，予備調査の協力者のように移行対象を所有し続けることにどのような意味があるのだろうか．本節では，予備調査によって得られた新たなリサーチクエスチョンを踏まえて，青年期における移行対象についての先行研究を概観する．

第１項　　移行対象の消失と発展

一般的に幼児の移行対象は徐々に，特に文化的関心が発達するに従いエネルギーが注がれなくなる（Winnicott，1953）．先行研究より，可視的な移行対象は３歳以降，遅くても6，7歳にはその役目を終えて文化的な活動へ拡散していくとされる（Winnicott，1971 ；Bush，1977 ；Litt，1986）．それは，子どもが内面と外界を別々に，しかし相互関係を保ちつつ「自分」と「自分でないもの」を区別し，さらに，第三の領域で生活できるようになるためである．このような子どもの成長に伴い，移行対象それ自体はもはや幼児に必要とされなくなり，いわば移行対象の役目は終わりを告げられることとなる．しかしそうはいっても，移行対象が存在した空間はその後も必要なものとして残る．なぜなら，現実を受容するという課題は大人になっても決して解決されることはなく，内的主観的世界（inner）と外的客観的現実（outer）とを関連付ける際の緊張から逃れられる人間はいないためである．その際に，この空間，すなわち挑戦されることのない経験の中間領域（たとえば芸術や宗教など）がこの緊張を和らげるとされる（Winnicott，1971）．

Downey（1978）は，幼児期の移行対象と思春期の移行対象は密接に関係している反面同一のものではないと指摘し，幼児期における移行対象や移行現象が思春期に多様化し，それらが音楽，映画などの文化芸術領域の形をとって移行現象として拡散する過程について論じている．慰める機能の内在化が重要な発達課題となっている幼児期の移行対象と，内在化が確立された後に人生の節目でストレスから不安に陥った際に必要とされる幼児期以降の移行対象とは，慰めをもたらす本質は同じでもその発達的な意味は異なるとしたのである．そして，それが幼児期以降の拡散した移行対象の機能を担うものの形態の多様化や，

所持・使用の仕方の相違を生むのであろうと述べている.

このような発展・拡散した移行対象について，日本では森定（1999，2001）が大学生や中学生を対象として詳細に検討している.彼女はそのような拡散した移行対象や移行現象，移行対象との関連が指摘されている想像上の仲間について,「慰める」という共通の心理的機能をもつ一つのカテゴリーとして捉えて,「慰める存在（Solace)」として位置づけている．このような慰める存在は，大学生では音楽・楽器，本・漫画，スポーツ，日記などの無生物や，ペット等の動物，友人，好きな人等の実在する人物が挙げられており，慰める存在としてペットを挙げた人の 81%，日記を挙げた人の 88%が移行対象を所有していたという．このような研究結果を踏まえて，森定（2001）は慰める存在の概念図を描いている（図 3-1)．その図式モデルでは，全ての慰めとなるものの基盤としてある母性的存在を受け継ぐものとして，1 歳頃から移行対象が現れ，幼児期にはともに遊び新しい世界を共有するぬいぐるみが出現し，この要素がその後の遊びの領域（中間領域）へと引きつがれて，想像上の仲間や音楽，映画，本，漫画，アニメ，テレビ番組，テレビゲーム等の文化領域が慰める存在として意味を持ち始めるという．同時に，想像上の仲間が果たしていた機能は友人や好きな人に移行し，現実の人間関係の中で慰め合う関係が成立していくと考えられている．これを裏付けるように，屋宮（2008）は大学生活に不適応状態であった学生たちによるサポート・グループの事例を検討し，学生相談室におけるサポート・グループが学生たちの青年期の自己確立の課題，自立の課題を達成するための移行対象の役割を果たしていたことを報告している.

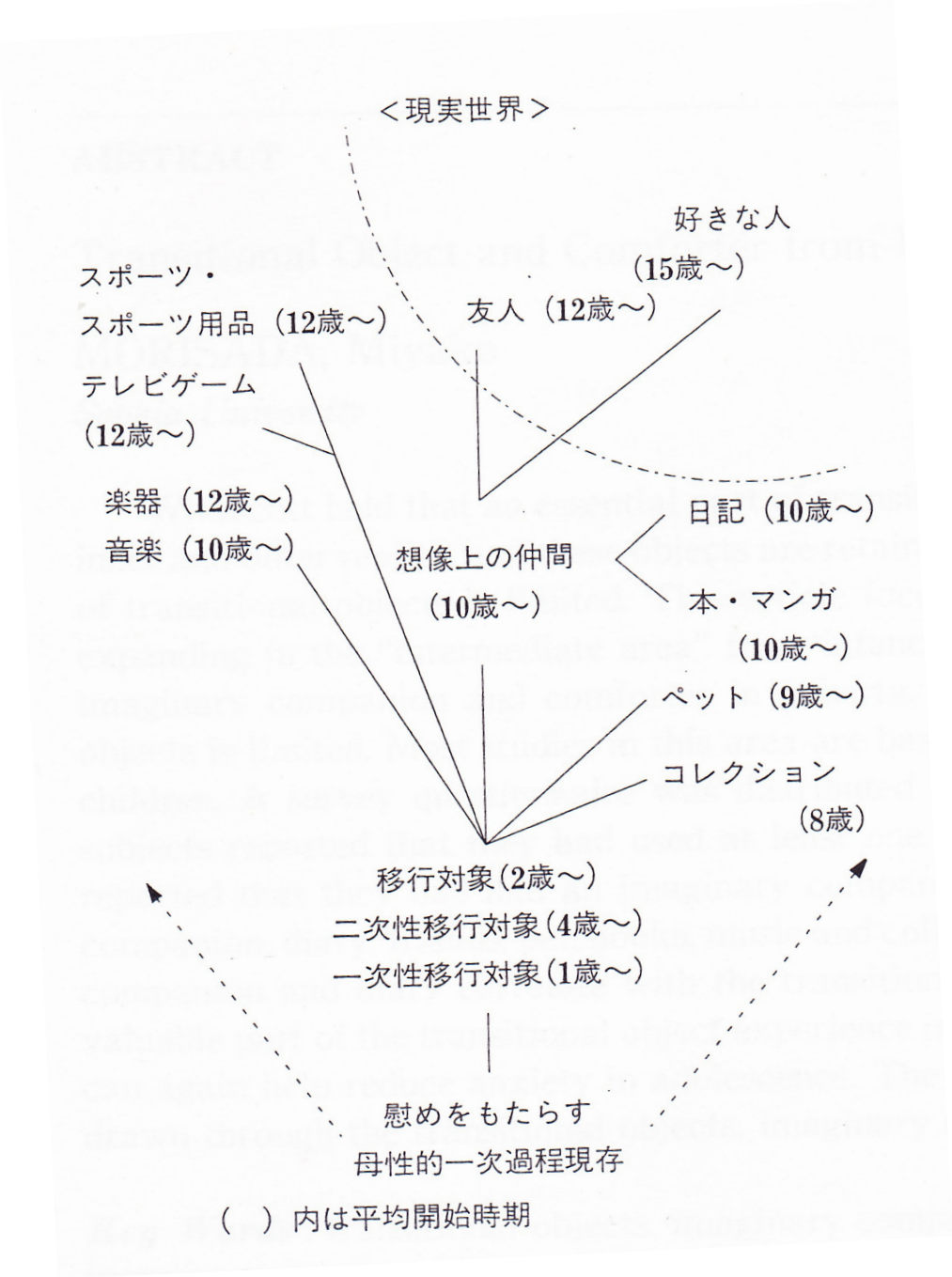


図3-1 慰める存在の概念図（森定, 1999）

第２項　　青年期における移行対象の実際

青年期における移行対象の発現率

移行対象は子どもの発達とともに形を変えて発展していくと考えられることから，青年期以降も移行対象を所有し続ける本研究の予備調査の協力者は特別な存在のように映る．しかし諸外国の先行研究には,青年期に出現する移行対象についての興味深い研究がある．Shafii（1986）は 13 歳と 14 歳の男女 230 人を対象として質問紙調査を行なった結果，移行対象が 5～7 歳の間に消失することを示し，10 歳での使用は普通（normal）ではないとした．ただし，女性の 73%，男性の 45%が卒業した移行対象の所在について知っており，女性の 21%，男性の 12%が現在も使用していることを報告した（Shafii，1986)）．また，フィンランドで 1054 人（男性 465 人，女性 589 人，平均年齢 14.5 歳）を対象に質問紙調査を行った Erkolahti と Nystrom（2009）は，28.7%（285 人）が移行対象を現在も所有しており，女性（37%，208 人）の方が男性（18%，77 人）よりも有意に多かったことを明らかにした．さらに，イスラエルで 871 人（男性 375 人，女性 496 人，平均年齢 16.7 歳）を対象に質問紙調査を行った Bachar ら（1998）は，家を離れる時やストレスフルな状況時に移行対象を使用する人が 13%（112 人）いることを報告した．そして，移行対象研究を概観した Litt（1986）は，更なる研究が必要な領域ではあるとしながらも，移行対象は 7～8 歳あるいは初期青年期（early adolescence）まで続くものであると述べた．したがって，青年期まで移行対象を持ち続けることは決して稀ではない可能性がある．

青年期における移行対象の使用と精神病理

Litt（1986）は長期の（prolonged）移行対象の使用について，決して異常なことではないとして，長期の移行対象と精神病理との関連も否定した．しかし，青年期における移行対象を精神的な不健康の指標として捉える先行研究もある．イスラエルで 871 人（男性 375 人，女性 496 人，平均年齢 16.7 歳）を対象に質問紙調査を行った Bachar ら（1998）は，家を離れる時やストレスフルな状況時に移行対象を使用する人が 13%（112 人）いるとし

て，そのうち3分の1（37人）が幼少期に移行対象を所有していなかったが，3分の2（75人)は所有していたことを報告した.彼らはBSI(Brief Symptom Inventory)とGWB(General Well Being Questionnaire）の結果から，幼少期に移行対象を使用していたことと青年期におけるメンタルヘルスとの関連はないとしたものの，青年期での移行対象の使用は精神的苦痛（mental distress）の指標であると指摘した．特に，情緒的（emotional）傾向や社会的な混乱（turmoil）傾向があり，苦痛に感じていることを話すことや助けを求めようとしない傾向があると述べた．また，フィンランドで1054人（男性465人，女性589人，平均年齢14.5歳）を対象に質問紙調査を行ったErkolahtiとNystrom（2009）は，移行対象の使用とCDI（Children’s depression inventory）の結果から，女性に限って移行対象使用者はCDIの下位尺度であるsadness得点が高い傾向にあったとして，青年期の移行対象の使用と抑うつとの関連を指摘した.

一方で，12～21歳（平均15.1歳）の27人の精神病理群（パーソナリティ障害75%，精神病 20%，神経症 5%）と 30 人の健康な対照群とその母親を対象に構造化されたインタビュー調査を行ったFreeとGoodrich（1985）は，移行対象が青年期において初めて使用された場合に精神病理や治療状況と関連があることを報告した．彼らは，移行対象の使用について，精神病理群と健康な群ではその機能が異なるだろうと考察し，精神病理群にとっての移行対象へのアタッチメントは，分離の問題の解決や青年期の自己感などを発達させるのを助ける機能があると述べた.

治療場面における青年期の移行対象の貢献

青年期における移行対象については，その出現が精神的不健康の指標となり得ると考えることもでき，幼少期のポジティブな意味合いが色濃い移行対象とは異なっている．一方で，それが治療場面で現れるときには，青年期の移行対象であっても歓迎されることが知られている．Tabin（2005）は青年期のクライエントの3症例を示し，治療における青年期の移行対象や移行現象は自律的自我（autonomous ego）が出現するサインであり，深いレベルの情緒的体験（emotional experience）に達したことを示していると考察した．彼女は，青年期の心理的治療における移行現象は，クライエントが子どもと自立した大人になることの間のギャップに橋をかけようとする自己イメージについての情報をセラピストに

もたらすと述べた．また，4名の青年期のクライエントの症例を考察したSteude（1985）は，青年期における移行現象の重要性を述べ，境界例だけでなく全ての青年期のクライエントとの治療において，移行現象はセラピーの進展を示していると述べた．さらに，セラピストとクライエントそれぞれ 6 名にインタビューを行い質的に分析した Arthern と Madill（1999，2002）は，大人を対象とした心理療法における移行対象の機能について，クライエントとセラピストの関係を強化することだとして，治療場面での移行対象の出現を歓迎している．

第３項　　幼少期から所有し続けられる移行対象

青年期における移行対象について，先行研究では，日常場面と治療場面では異なる解釈となっている．しかし，日常場面においての「精神的不健康の指標」という視点は，見方を変えれば，ストレスフルな状況に陥ったときなど精神的安定が保たれなくなった状況において，精神的破綻をきたさないために移行対象を使用していると捉えることもできる．先行研究での考察が精神病理の指標ではなく，あくまでもその「傾向」の指標であることからも，移行対象を使用することで適応的に社会とかかわっている可能性も示唆される．

ただし，ここで論じた先行研究は，その対象物が幼児期の移行対象と同様に毛布やぬいぐるみであったとしても，幼少期から所有し続けている移行対象ではなく幼少期の移行対象から発展した対象物や，青年期になって初めて所有した対象物である．したがって，これらの先行研究は，青年期における移行対象の心理的役割については興味深い示唆を与えてくれるものの，本研究で取り上げる，「幼少期の移行対象を所有し続ける」ということの心理的役割は明らかとならない．

幼少期の移行対象を所有し続けることについて論じた研究はほとんどなく，Laura(1995)がその論文の一部で考察を加えているくらいである．彼女はアメリカの 14～18 歳の男性 119 人と女性 130 人に，「あなたが持っている物の中で，最も特別な物，宝物，重要な物は何ですか」と質問紙調査で尋ね，幼児期と現在の回答を比較した．その結果，移行対象を所有していた人は全体の 79％であり，そのうち 52％が現在も所有していた．また，その人数は女性（63％）の方が男性（37％）よりも有意に多かった．そして，その幼児期からの移行対象を宝物として回答したのは 18％（女性 25％，男性 9％），「最も大切な宝物」とし

て回答したのは 8%（女性 13%，男性 2%）であり，やはり女性の方が有意に男性よりも多かった．一方で，それを慰めるもの（comfort）として使用している人は 4%にとどまっていた．所有し続けることの理由については，①まだ愛着が残っている（31%），②自分の一部あるいは過去の一部とみなされている（27%），③単純に捨てられない（7%）であった．このような結果を踏まえ，Laura（1995）は，移行対象を所有し続けることは過去とのリンクであり，自我の発達に重要な要素であるとして，幼少期の移行対象の積極的な（active）使用は年齢とともに減少してこれらの対象物は滅多に使われないが，心理的な重要さは維持されており，特に女性においてそうであると述べた．

Laura（1995）の研究は示唆に富むものであるが，これが幼児期の移行対象を所有し続けるという現象に焦点を当てた研究ではないことと，質問紙調査であるためになぜ青年期のある人びとの幼少期の移行対象は発展・拡散せずに存在し続けるのかといったことや，それが青年期の当事者にとってどのような心理的役割を持って日常生活場面で役立っているのかということについては十分に論じられていない．

第５節　方法

第１項　　調査協力者

調査協力者は青年期の女性であり，幼少期に移行対象を所有しており現在は所有していない「幼少期所有者」5 名と，現在も幼少期の移行対象を所有している「青年期所有者」5 名の計 10 名であった（表 3-1）．

協力者を青年期に限定した理由は，移行対象を所有している最中の幼少期の時期よりも言語表現に優れておりインタビューに適していることと，本研究が，特に青年期に移行対象を所有することの意味について考察したいためである．回顧的なインタビューはエビデンスに欠けるという批判が生じる可能性があるが，成人を対象とした移行対象研究の妥当性について，Horton（1981）は次のように述べている．「①真の移行対象は忘れられず，その記憶は抑圧されることはないのであり，②前言語期の子どもの，触れ得ないものへの愛着を明らかにしようとする際に起こる観察上の限界に左右されることはない．また，③慰めるもの（soother）は容易に，また当惑なしに想起されるため，soother と fetish を区

別できる．したがって，成人に移行対象について問う方法は，幼児期の移行対象を評価する上で妥当なやり方である.」

また，女性に限定した理由は，男女比を報告している先行研究において女性の所有者の方が多く（Shafii，1986；Erkolahti & Nyström，2009），日本においてもそうである（遠藤，1990；森定，1999，2001；池内・藤原，2004）ことから，より典型例だと考えられるためである．加えて，第２章の研究結果より，女性の方が移行対象を常にそばに置いておく傾向が強いこと,移行対象の心理的重要さが特に女性において維持されている(Laura，1995）こと，移行対象と抑うつの関連が女性のみに示されている（Erkolahti & Nyström，2009）ことから，移行対象による貢献は特に女性において強いと考えらる．したがって，女性に限定することで移行対象が役立っている場面，すなわち，移行対象の心理的役割の語りが得られやすいと考えたためである.

表3-1　協力者の属性と所有する移行対象および発現・消失時期

	協力者	年齢	職業	きょうだい	移行対象	発現時期	消失時期
青年期所有者	A	23	銀行員 （窓口業務）	妹・弟	１．うさぎの枕 ２．（うさぎの枕を入れた）抱き枕	物心ついた頃 １．の消失時	中学校に上がる前 現在も使用
	B	22	会社員 （事務）	兄・兄	１．タオルケット（夏） ２．毛布（冬）	幼稚園の頃 小学1年生	現在も使用 高校卒業時
	C	24	出版社 （編集業務）	妹・弟	１．大人用の毛布 ２．犬のぬいぐるみ	4～6歳 5歳より前	24歳 6,7歳頃
	D	22	大学院生 （文系修士課程）	姉	１．じゃじゃ丸とぽろりのぬいぐるみ ２．アザラシのぬいぐるみ	1,2歳 3,4歳	２．の出現時 現在も使用
	E	20	大学生 （文系）	弟	くまのぬいぐるみ	小学2年生	現在も使用
幼少期所有者	F	23	大学院生 （文系修士課程）	姉	かいまき	幼稚園の頃	小学1年生
	G	21	大学生 （文系）	姉	１．ハンドタオル ２．猫のぬいぐるみ	幼稚園の頃 幼稚園の頃	小学校に上がる前 小学1年生
	H	23	大学院生 （文系修士課程）	妹	子供用の毛布	1歳	4歳
	I	22	大学生 （文系）	兄・妹	毛布	5歳	小学校高学年
	J	26	大学院生 （文系修士課程）	弟	１．らっこのぬいぐるみ ２．ミッキーのぬいぐるみ	幼稚園前 4,5歳	幼稚園 中学生

第２項　　手続き

調査時期と面接構造

2008 年 8 月～2009 年 9 月に本調査を実施した．構造は筆者と協力者一対一の半構造化面接として，基本的には筆者の所属する大学の面接室で行ったが，協力者の希望により協力者の所属する大学の面接室で実施したケースが 1 例あった．

面接時間は 1 回平均約 60 分であった．より詳細な語りを得るために，フィードバックを兼ねて 2 回ないし 3 回の面接を行った．なお，その内容は協力者の承諾を得たうえで IC レコーダーに録音した．

面接の実施手順

実施に際して筆者の自己紹介を行い，承諾書に沿って，協力者に研究の主旨やプライバシーの保護を徹底すること，インタビューはいつでも中断できること，インタビュー内容の録音とデータの管理などについて説明を行った．その後，不明な点や不安な点などを確認した上で承諾書に署名を求めた．なお，本研究の論文を希望する方へは郵送する旨をお伝えし，その場合は住所の記載も求めた．

続いて，想起を促すために移行対象をクレヨンで画用紙に描いていただいた．なお，事前に移行対象あるいは移行対象が写った写真があれば持参していただく旨をお願いしており，持参していただいた場合は画用紙に描く作業は省いた．そして，移行対象や移行対象の写真，移行対象の絵が描かれた画用紙を見ながら，まずは幼少期の記憶を時系列で語っていただくことで想起を促した．

面接は半構造化されたものであり，基本的にはインタビューガイド（付録 3-1）に沿って面接を進めた．ただし，協力者の語りの速度や方向性を重視して，面接者（筆者）が主導権を握るような進め方はしないように努め，協力者が話し始めた話題から質問を行うようにした．

面接内容

面接における質問事項は予備調査の結果を踏まえ，①移行対象の特徴，②移行対象とのかかわり，③移行対象からの卒業の 3 領域を大きなテーマとして，それに具体的な質問文を加えることでインタビューガイドを作成した.主な質問項目は,「気に入っていた理由」,「必要とした状況」,「どのように使用していたか」,「移行対象にまつわるエピソード」,「手放した（手放せない）理由」などであり，その内容を自由に語っていただいた.

2 回目以降の面接では，前回の面接内容をフィードバックして筆者の理解を確認したり，その内容を深めたりした.

第３項　　分析方法

本研究は,「人間の行動の説明と予測に有効であって，同時に，研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって，限定された範囲内における説明力に優れた理論」（木下，2003）の生成に有効とされているグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した．本項では，まず本研究で質的な手法を用いた理由を述べる．続いて，グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した理由を述べた上で，具体的な方法について説明する.

移行対象を質的に分析することの意義

先行研究を概観すると，これまでの移行対象研究は量的な分析に偏りすぎていたといえる．すでに述べたように，移行対象という対象物はそれ自体に矛盾や曖昧さが含まれているため，客観的な現象を捉える量的研究のみでは不十分であると考える．移行対象研究も移行対象と同様に，客観的な側面（outer）と主観的な側面（inner）の両者が揃って初めてその本質がみえてくるのではないだろうか.

また，数量的なデータを扱う場合には測定前に測定すべき項目を決めておかなくてはな

らないが，移行対象のように矛盾や曖昧さを含み，複雑な相互作用が含まれる現象を研究しようとする場合には，数量的データを得ようとすると測定すべき項目が非常に多くなってしまう．さらに，ある現象のプロセスや行為の意味などは数値に還元しにくく，そのため言葉で記述や分析をする必要性が生じる．

戈木(2006)は質的研究のおもしろさについて，データ収集やデータ分析の過程の中で，もともとの自分なら考えつきもしなかった「発見」にたどり着けることであり，そんなことは誰でも知っているよ，という現象にも構造やプロセスが明らかにされていないものが多く，明らかにすることには意味があり新しい発見であるとしている．すなわち，質的な研究方法はほとんど誰も知らないような領域での研究や，誰でも知っている領域での全く斬新な研究の可能性をもっているといえる．したがって，本研究は，これまでの研究に相乗効果をもたらし，移行対象の本質に迫ることができると考えられる質的な分析を選択した．

分析方法にグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した理由

グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，GTA）は，２人の社会学者であるバーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウス（Glaser & Strauss, 1967）を生みの親として発展してきたものであり，当時の社会学のあり方（量的な研究による理論検証に偏っており，現場のデータに基づいた実証的な理論生成がなされていない）に対する新たな研究法として提案されたものである．そのため，特に現場を持つ実践家に支持されている方法論である（Strauss, 1998）．

GTA は理論生成を目的とする研究法であるが，研究者の頭の中や研究者の個人的体験の中で理論を生成するのではなく，インタビューや観察等でデータを収集し，そのデータを基に実証的な理論を生成していく．したがって，この方法論ではデータ収集，分析，そして最終的な理論が相互に密接な関連をもっており，GTA によって生成された理論である「グラウンデッド・セオリー」は，体系的に収集され，研究プロセスを通じて分析されたデータに基づいて構築された理論といえる．

この方法論は，研究者の分析方法に対する考え方の違いから４つのタイプに分けられる．オリジナル版，グレイザー版，ストラウス・コービン版，修正版 GTA である．ただし，ど

のタイプも基本的な立場は共通しており，共通した基本的な分析方法としては，データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であること，分析ではコーディング方法としてのオープン・コーディングと選択的コーディング，継続的比較分析，理論的サンプリング，分析終了の判断基準となる理論的飽和化の 5 点が不可欠な条件とされる（木下，2003）．本研究では，ストラウス版（Strauss，1998）と修正版の M-GTA（木下，2003，2007）を援用して分析を行った．

質的研究法の中でも GTA に準拠する理由としては，まずその結果として導き出されるものが実践場面やその後の研究で応用されやすい理論（理論の枠組み）であるということがある．事例研究やエスノグラフィは，ある個人や場面に関して記述された内容の詳細さや物語性，リアリティから有用な示唆を与えることを目指す，いわば「ある個人や場面に関する記述」が研究の前面に出てくるものである．一方で，GTA は基本的には実践現場でのデータに基づき，当該現象を説明できる概念やカテゴリーを生成し，データ・概念・カテゴリー間での「継続的比較分析」を行うことで，説明概念やカテゴリーから構成される理論の生成を目的としている．つまり，GTA は研究対象とする現象を抽象化して概念を作り，概念間が相互に関係する「構造」や「骨組み」を抽出する．そのため，研究対象とする「ある個人や場面に関する記述」は研究結果として前面に出るのではなく，研究のための「素材」となる．したがって，エスノグラフィや事例研究に比べると，各事例に関する物語性は希薄になるという短所はあるものの，まとまりのある仮説として提示されるために実践場面で活用されやすいという長所がある（木下，2003）．本研究は，客観的事実に焦点を当てた量的分析によって移行対象の特徴を実証的に明らかとした，多くの先行研究結果との相乗効果によって移行対象研究の更なる深化を目指したり，その「現象」を説明することで，臨床現場に示唆を与えたりすることを期待している．そのため，GTA に準拠したデータ分析を行うこととした．

また，この方法論では「シンボリック作用論」，すなわち，データ提供者にとっての意味を重視し，その視点から研究者がデータを解釈することに力点が置かれている（三毛，2003）．したがって，移行対象所有者の移行対象を使用するということに関する内的な意味を探ろうとする本研究には適切な方法だと考えられる．

さらに，データ提供者である行為者にとっての「意味」を把握することに力点がおかれるということは，焦点を当てたい「そのとき」に行為者がどのような意図で行為を行っていたのかを探りたいということであり，その場合には面接型調査の方が多くの語りが得ら

れ，調査者もそれらを尋ねることができるので把握しやすいことが推測できる．一方で，観察法では行為者の意図を尋ねることは一連の行為の妨げになるために困難である．したがって，本研究のように観察が難しい研究内容においては，面接型調査に有効性が発揮されるGTAに準拠した分析が有効だと考えられる．

グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析手順

GTA は①データを解釈し，②概念を生成し，③研究対象とする現象を説明できる理論を生成することを目的としている．本研究ではこれに倣い，①データの読み込みと②コーディングによって③理論的飽和化を目指すことを目的として分析を行った．以下に具体的な分析手順を示す．なお，本研究においての分析はStrauss（1998）と木下（2003，2007）に準拠した．

まず，録音したインタビュー内容から逐語録を作成して文脈を重視しながらデータをじっくりと読み込んだ．その後データを何度も読み返しながら，現象をラベル付けするコーディング作業を行った．コーディングの種類は分析の進み具合によって異なっており，分析の初期から終期へと①オープン・コーディング（Open coding），②軸足コーディング（Axial coding），③選択的コーディング（Selective coding）と３種類のコーディング方法がある（Strauss，1998）．

オープン･コーディングでは切り分けられたデータにその内容を表現する簡潔な名前(ラベル）をつけていった（概念化）．概念が蓄積されてきたら，それらを抽象度の高い説明力のある用語，すなわちカテゴリーの元にグループ化や分類を行なった．このとき，特性（プロパティ）と次元（ディメンション）という属性も付記した．特性とは１つのカテゴリーの一般的なあるいは特定の特徴あるいは属性である．一方で，次元とはある範囲をもつ連続上に示される特性の位置を表す．たとえば，「心地よさ」というカテゴリーには，「感触」という特性と「やわらかさ」という次元がある．それぞれの特性ごとに次元を一列に並べて，各次元上のどこかにその対象物の特性が位置しているのかを明らかにしていくことによって，パターンは形作られていく．

次に，カテゴリーとサブカテゴリー（いつ，どこで，なぜ，誰が，どのように，どんな結果となったか，など）を関係づけて現象を表すことで，カテゴリー同士がどのように特

性と次元上を交差し，また相互に結びついているかを見ていった（軸足コーディング）．そして，現象を幾つも集めて，より大きい現象を説明する理論を作る選択的コーディングを行なった．選択的コーディングとは諸カテゴリーを統合して精錬するプロセスであり，統合の最初のステップは中心となるカテゴリーを決定することである．中心となるカテゴリー（中核カテゴリー）は研究全体の主題を表している．

また，質的研究法ではデータ分析とデータ収集が関連しあって進むために，コーディング作業はサンプリング（データ収集）過程と連携して進められる．Strauss ら（1998）は３種類のコーディングと連携するサンプリングとして，オープン・サンプリング，関係・バリエーションサンプリング，限定されたサンプリングの 3 種類を提案している（表 3-2）．ただし，ここでのサンプリングは新たにデータを収集することばかりを指すのではなく，すでに収集されているデータの中から特定のデータを選び出すことも含まれる．なお，実際の分析においてはこれらの方法は重なり合って使われた．

分析の終了に関して言われていることが,「理論的飽和化」である．これはオリジナル版で提示されたもので，分析結果がまとまっていき新たに重要な概念が生成されなくなったり，理論的サンプリングで新たにデータ収集して確認すべき問題点がなくなったりしたときをもって飽和化したと判断される（木下，2007）．Strauss ら（1998）では，a）あるカテゴリーに関して，新たな，あるいは重要なデータがもう現れてこない，b）カテゴリーが，バリエーションを示す特性と次元という点で十分に発展している，c）カテゴリー間の関係が十分に精緻化され妥当性が確認されたという 3 つが満たされることによって，飽和したとされる．本研究においてもこれらの定義に準拠して，逐語録や分析で用いたメモを読み返しても新たに重要な概念が生成されなくなったときをもって分析の終了とした．

表3-2　コーディング方法とサンプリング方法

分析時期	分析初期～中期	分析中期	分析中期～後期
コーディング方法	オープン・コーディング カテゴリー、特性、次元を生成する	軸足コーディング カテゴリー間の関連付けを探る。 カテゴリー、特性、次元を階層的に組織する。	選択的コーディング 仮説および理論を生成し、精緻化する。
サンプリング方法	オープン・サンプリング 研究課題に関係ありそうな事例を探して、オープンマインドでデータを採って比較をする。 カテゴリー、特性、次元が浮かび上がってきたら、それらが関わっていると思われる事例を探す。	関係・バリエーションのサンプリング ひとつのカテゴリーについてその特性の次元がさまざまに異なると思われる事例を探して比較し、特性や次元の多くのバリエーションを調べ上げる。 複数のカテゴリーの関係を調べるために、それらカテゴリーが同時に関わっている事例を探して比較し、複数のカテゴリーを次元レベルで関連づける仮説を生成していく。	限定されたサンプリング 比較分析を最大限に進めていったり、対極例を探索したりして、理論的飽和化を目指す。

データの解釈と概念の生成方法

実際に分析する上ではデータの解釈が一番重要であるとされる（木下，2007）．解釈とは意味を読み取ることであり，質的なデータを一定の手順で進めていけば解釈になるというのではなく，そこには研究者の着想が必要となってくる．すなわち，データに基づいた概念というのがこの方法論の主要な要素であるが，研究者の持つ創造性も欠かすことのできない構成要素であるとされている．ここで行われる分析とは，帰納的な方法や演繹的な方法とは異なる研究者とデータとの相互作用であり，体系的であると同時に創造的でもある（Strauss，1998）．したがって，解釈という行為はデータを単に整理してまとめていくことではなくて，意味を読み取る側，解釈する側である研究者に試行錯誤の作業があって初めて成り立つものであるといえる．

概念の生成方法についてはストラウス版と M-GTA では方法が異なっており，M-GTA ではデータの切片化をしない．なぜなら，切片化は分析の厳密さを担保するために導入された方式であり，解釈が拡散するためである．M-GTA が強調するのは切片化の方向での厳密さの重視ではなく，研究者の問題意識に忠実にデータをコンテキストでみていき，そこに反映されている人間の認識や行為，それに関わる要因や条件などを丁寧に検討していくやり方である（木下，2007）．筆者は基本的にはこのような方法を採用したが，本研究の面接内容が協力者の主観的な側面を重視して聞いていくものであったため，筆者の固定観念を取り払うためにも語りの一言一言を切片化して丁寧に分析する必要があった．そこで，適宜切片化が必要だと思った語りにおいては，Strauss（1998）にならって切片化を行った．

また，M-GTA ではデータの解釈から直接概念を生成している．データからコードをつくり，次にコードから概念をつくっていくコーディング方式では，分析者が分析作業を外化して手順重視で進めることが危惧されるためである．中間に構成要素の段階をおかないことは説明力に優れた概念を生成でき，そうした概念関係によって説明力のあるグラウンデッド・セオリーが提示できるとされる（木下，2007）．したがって，本研究においても，データの解釈から直接概念を生成する M-GTA の方法を採用した．

第４項　　方法論への批判に対して

前項で説明した方法を用いて結果として提示されるグラウンデッド・セオリーは，その領域に詳しい人から見ればすでにわかっていることをあれこれ羅列的にまとめたもののように思えてしまうことがある．しかし，GTA による分析であればこれは当然のこととされる（木下，2007）．データに密着した分析であるから，すでに理解されていることがいろいろと組み合わさって出てくるのは当然であって，そのことは分析が適切に行われたひとつの証左と言える．重要なのは，既知の事柄を含みつつも分析結果であるグラウンデッド・セオリーがどのような新しいオリジナルな知見を提示できているのかを示せることである（木下，2007）．

また，方法論に関して提起される批判としては，結果がデータから都合の良い部分を恣意的に選び抜いたのではないか，あるいは典型例だけを使っているのではないかといったことや，分析結果と相容れないデータや例外となる部分は捨象したのではないかという指摘が考えられる．しかし，GTA での分析作業はデータに根ざしたものであり，データの解釈や概念生成，カテゴリー生成のすべてにわたり継続的比較法を組み込んでいる．ここで重要なのは類似比較ではなく，対極比較の方である．自分の解釈に対して，データの中の具体例に対して常に反対の場合を想定して，データでその有無を確認していく．両レベルにおいて反対の場合を継続的に検討していくことは，現象の取り得る最大幅と解釈が許容される最大幅を確認することになるため，研究者が意識せずに一定方向に解釈を進める危険を回避することができると考えられる．同時に，この方法により例外を排除するのではなく，例外を取り込みながら分析を進めることができる．対極例があればそこから新たな概念生成をするし，検討の結果対極例が見つからなければ自分の概念の有効性を確認できるのである．

第５項　　質の確保

質的研究法は調査者自身の技量等によって結果が左右される面があり,質的研究法の「質」の確保のためには「信頼性」と「妥当性」が求められる．この「信頼性」と「妥当性」は，量的データを統計的に分析している場合は，「何度測定しても同様の結果」であるという

「信頼性」と，「測定したいものが測定できているという保証」である「妥当性」の確保といえる．しかし，このような研究の前提である，「客体は主体を離れて存在する」，「主観をなるべく排除すれば正しい認識に到達できる」という認識論は質的研究法には合致せず，質的研究法における「信頼性」と「妥当性」は，量的研究法のそれらとは異なると考えられる．

本研究では，信頼性や妥当性を高めるための方策として，①IC レコーダーでデータを記録することによって結論の信憑性を他の研究者が確かめることを可能にすることや，②複数の研究者間で分析内容を議論するための勉強会を開くことでその質を確保するように努めた．また，③面接内容を協力者にフィードバックすることで，それらが彼らの経験を正確に表しているかどうかを判断してもらった．さらに，分析過程では，④筆者の考えている理論に逆らうような事例，あるいは当てはまらないような事例についても漏れなく検討し，それらがなぜ理論とは異なるのかを明確にして，必要であればその理論を改訂することで信頼性と妥当性を高められるように努めた．

第６節　結果

幼少期所有者 5 名と青年期所有者 5 名，計 10 名の移行対象所有者の語りを分析した結果，当事者にとっての移行対象の心理的役割が明らかとなった．それは幼少期から青年期へと変遷をたどることが示唆され，その変遷は，「移行対象によって自己感[3]を強め，個体化を促すプロセス」として一つの中心となるカテゴリーに集約された．

この中心となるカテゴリーは 4 つのカテゴリーと 14 の概念から成っており，各カテゴリーと各概念の定義を表 3-3，図 3-2，事例マトリックスを表 3-4 に示した．それらの詳細は次項で述べることとし，ここでは協力者の語りから得られたストーリーラインを提示し，カテゴリー間や概念間の繋がりを説明する．

なお，協力者の語りを分析した結果，青年期所有者において，例えば嗜癖のような移行対

[3] 本研究における「自己感」とは，「肯定的な情動喚起」（Fonagy, 2006）を伴う自己にまつわる何かしらの感覚（the sense of self）（Stern, 1985）を指している．「肯定的な情動喚起」は自己組織化において重要であることが知られており，安心型のアタッチメント関係に寄与する（Fonagy, 2006）．

象への特別な執着はみられず，青年期所有者と幼少期所有者の移行対象は同質のものと考えられた．そのため，青年期所有者と幼少期所有者の語りは区別せずに分析することとした．

また，本研究における自己感とは，刻々と変化する自分についてのその都度オーガナイズ（organize）された経験を指し，情動調整とは，自分の情動状態をある一定の範囲内に保つことを指す（石谷，2007）．

ストーリーラインを以下に示した。なお，カテゴリーは【】，概念は［］で示した．

移行対象の心理的役割は，乳幼児期には移行対象の［感覚的な心地よさ］や［心理的な心地よさ］が【情動調整の手段】として機能しており，特に就眠時などの［怖い場面でその必要性は増し］ていた．その後，情動の自己調節ができるようになる頃には，移行対象に［命名する］ほどに［強い所有感］を抱くようになり，それは［ボロボロ］になっても用いられるような【唯一無二の存在】となっていく．そのような存在は［物的に存在すること］が重要であり，［思いやる］対象となる．そして，次第に［主体性のない］移行対象は，所有者の思い通りに用いられることで［複数の役割を担う］ようになり，成長とともに思い通りにならない状況が増えていく所有者の【自己効力感を獲得】する機会となる．また，常にそばにいて欲しい存在であった移行対象は，［必要なときだけに使われる］ようになり，物的に存在する必要性は薄らいでいく．以上の過程を経て長年使用された移行対象は，青年期には［幼少期の象徴］として，社会の一員としての自立という課題に直面させる契機にもなるが，肯定的な［家族とのかかわり］を内包し，［自己を肯定し続けてくれる］対象として，所有者の【自己感の強化】に寄与するようになる．

以上より，幼少期には情動調整が主な心理的役割であった移行対象は，児童期に至って自己効力感の獲得に寄与し，青年期には自分を再確認して自己感を強めることに貢献していた．そのプロセスを図 3-3 に示した．

次項からは，各カテゴリーと，各カテゴリーが内包する各概念の詳細を特徴的な協力者の語りを抜粋して引用しながらより具体的に示していく．そして，第六項ではそれらのカテゴリーや概念に当てはまらなかった対極例を検討することで，本研究の結果が示した現象の取り得る最大幅と解釈が許容される最大幅を確認する．

なお，本研究では青年期においても移行対象を手放さずに所有し続けることの心理的な意味を探るために，インタビューガイドにおいて“移行対象からの卒業”という項目を設けて質問を行った．しかし，分析の結果，幼少期から青年期における移行対象の機能の変遷と移行対象を手放すか手放さないかという問題は，近接領域ではあるが異なる論題だということが示唆された．そこで，移行対象の機能の変遷とは別に移行対象を手放すことについての結果を述べることとした．

表3-3　語りから得られたカテゴリーと概念

中心となるカテゴリー	カテゴリー	定義	概念	定義
移行対象によって自己感を強め個体化を促すプロセス	情動調整の手段としての移行対象	特に恐怖心や不安が生起される場面において，移行対象の心地よさは揺れ動いた情動を落ち着かせ，一定の情動状態でいられるようにすることを助ける。	移行対象の感覚的な心地よさ	移行対象の感触や匂いなどの生理的で感覚的な心地よさによって，安心感を得る。
			移行対象の心理的な心地よさ	移行対象の存在自体で安心感が得られ，落ち着く。
			怖い場面で増す移行対象の必要性	就寝時の暗さや親からの叱責などにより恐怖心が生じたときに，移行対象により安心感を得る。
	唯一無二の存在としての移行対象	移行対象に強い所有感を持ち，命名したりボロボロになるまで使うことで，それは他の何物にも代えられない特別な対象となる。また，このような対象だからこそ，捨てずに使い続けることに意味が生じたり，思いやりの能力が培われたりする。	移行対象への命名	移行対象に自分だけの名前を付け，暗に自分だけの所有物であることを訴える。
			移行対象に対する強い所有感	移行対象は他の誰でもない自分の物であるという強い思いが生じ，他者に貸したり，他者に触られることを拒む。
			移行対象がボロボロであること	長年愛用した移行対象はボロボロになり，その状態に気が付くことで，ずっと移行対象が自分と供に存在したということに気が付く。
			移行対象が物的に存在すること	古びた移行対象は幾度も物的に失う危機を迎えるが，本人の抵抗や親の助けによりその危機は乗り越えられる。
			移行対象に対する思いやり	移行対象に気持ちが付与され，移行対象を邪険に扱うと罪悪感に駆られるなど，思いやりの能力が培われる。
	移行対象による自己効力感の獲得	移行対象は必要な時にだけ使われるようになり、その時々の状況によって様々な役割を担うようになる。したがって、自分の思いのままに主体的に使用するようになり，自己効力感を得ることができる。	移行対象の主体性のなさ	移行対象自体に主体性はなく，思い描く通りに使用できる。
			複数の役割の担い手としての移行対象	移行対象は様々な場面で様々な役割を担う。
			必要なときだけに使われる移行対象	移行対象が物的に常にそばにいなくても平気になる。
	移行対象による自己感の強化	移行対象に内包されている家族との温かい関係性や，いつも傍で見守っていてくれた移行対象の存在自体が，自己肯定感を与え，自己感の強化につながる。加えて，幼少期の象徴として自立という発達課題への挑戦をも促し，課題解決へのエネルギーを与える。	移行対象の存在を肯定する家族とのかかわり	幼少期より移行対象と本人の関係を見守り，移行対象の存在を肯定してかかわってくれた家族の存在に気が付く。
			移行対象による自己肯定感の維持	幼少期より変わらずに味方で在り続けてくれる移行対象により，自己肯定感が維持される。
			幼少期の象徴としての移行対象	幼少期に頻繁に使用していた移行対象は幼少期の象徴として認識され，自立という発達課題との直面を促す。

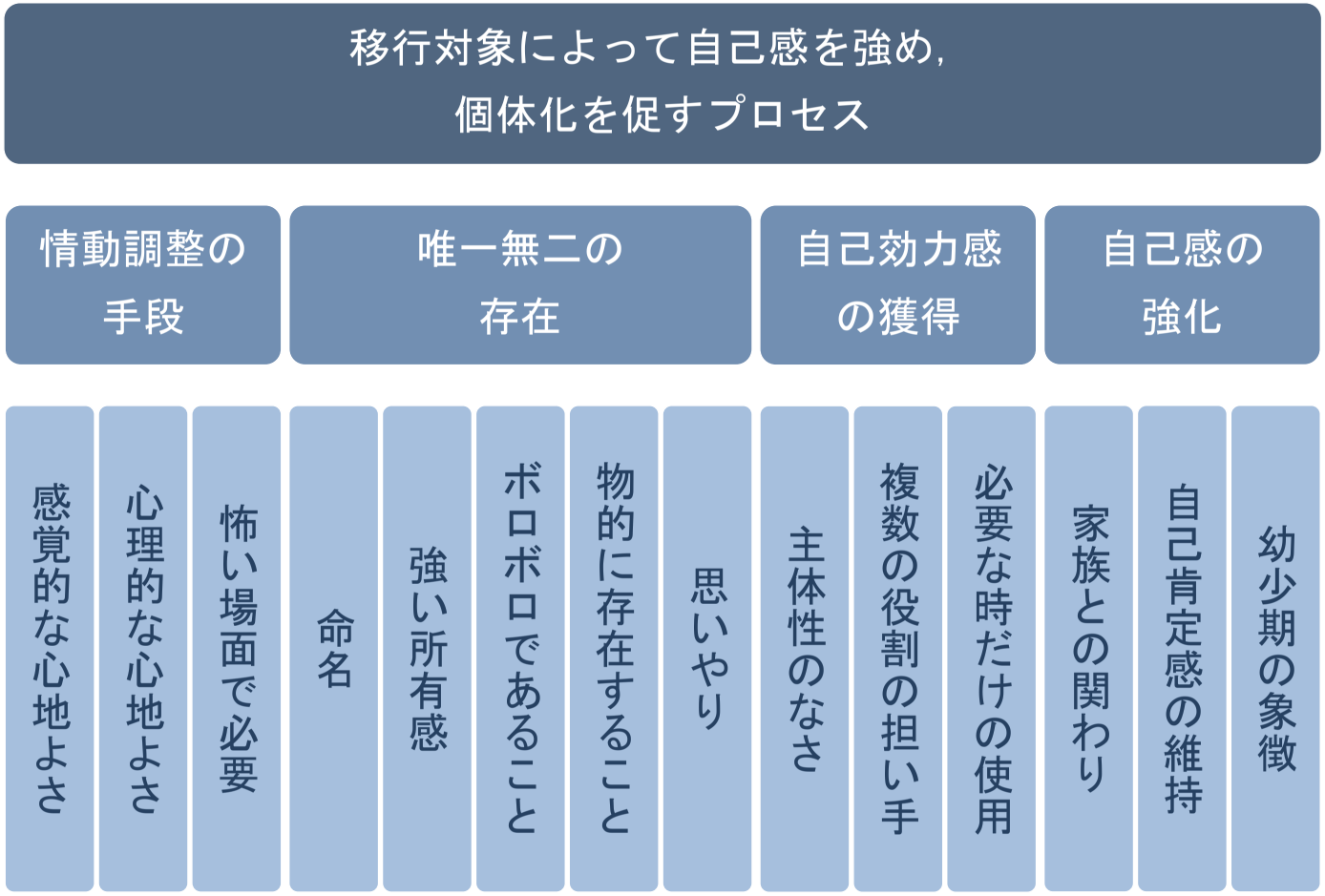


図3-2　語りから得られたカテゴリーと概念

表3-4　事例コードマトリックス

		情動調整の手段としての移行対象			唯一無二の存在としての移行対象					移行対象による自己効力感の獲得			移行対象による自己感の強化		
		移行対象の感覚的な心地よさ	移行対象の心理的な心地よさ	怖い場面で増す移行対象の必要性	移行対象への命名	移行対象に対する強い所有感	移行対象がボロボロであること	移行対象が物的に存在すること	移行対象に対する思いやり	移行対象の主体性のなさ	複数の役割の担い手としての移行対象	必要なときだけに使われる移行対象	移行対象の存在を肯定する家族とのかかわり	移行対象による自己肯定感の維持	幼少期の象徴としての移行対象
青年期所有者	A	●	●		●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	B	●	●	●	●	●	●	●		●		●	●	●	●
	C	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	D	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
	E	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●		●
幼少期所有者	F	●	●	●		●	●	●					●		
	G	●	●	●	●	●	●	●		●	●		●		
	H	●	●	●		●	●	●		●			●		
	I	●	●			●	●	●		●			●		
	J	●	●		●	●	●	●	●	●	●		●		

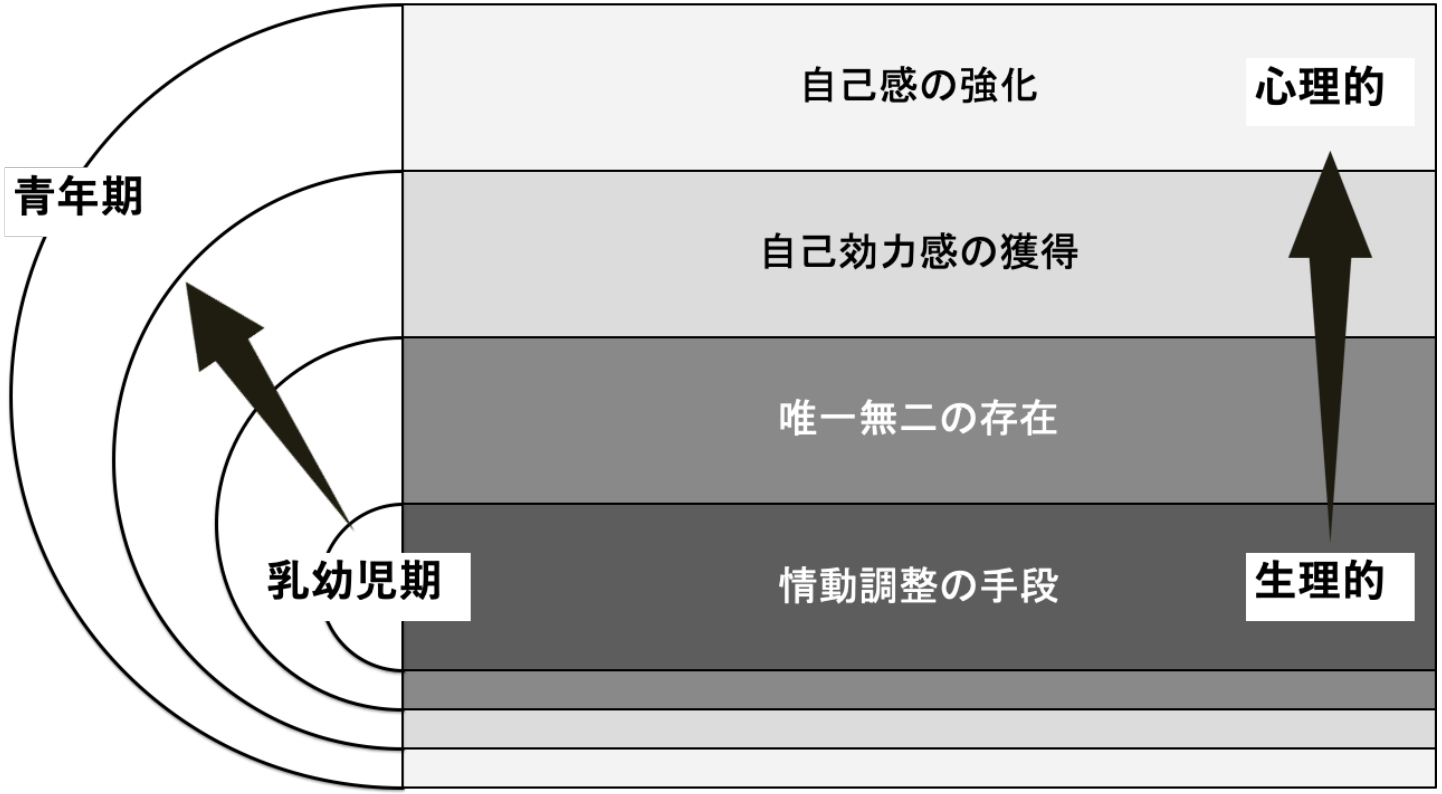


図3-3　移行対象の心理的役割の変遷

第１項　　情動調整の手段としての移行対象

「移行対象によって自己感を強め，個体化を促すプロセス」は４つのカテゴリーから成っており，その１つ目が【情動調整の手段としての移行対象】である（図 3-4）．情動調整とは覚醒度や興奮度といった生気情動の側面であろうと，快や不快，喜びや楽しさといったカテゴリー性の情動であろうと自分の情動状態をある一定の範囲内に保つことを指す（石谷,2007）．このカテゴリーには［移行対象の感覚的な心地よさ］,［移行対象の心理的な心地よさ］,［怖い場面で増す移行対象の必要性］という３つの概念が含まれており，主に幼少期の移行対象の機能がこのカテゴリーに集約された．

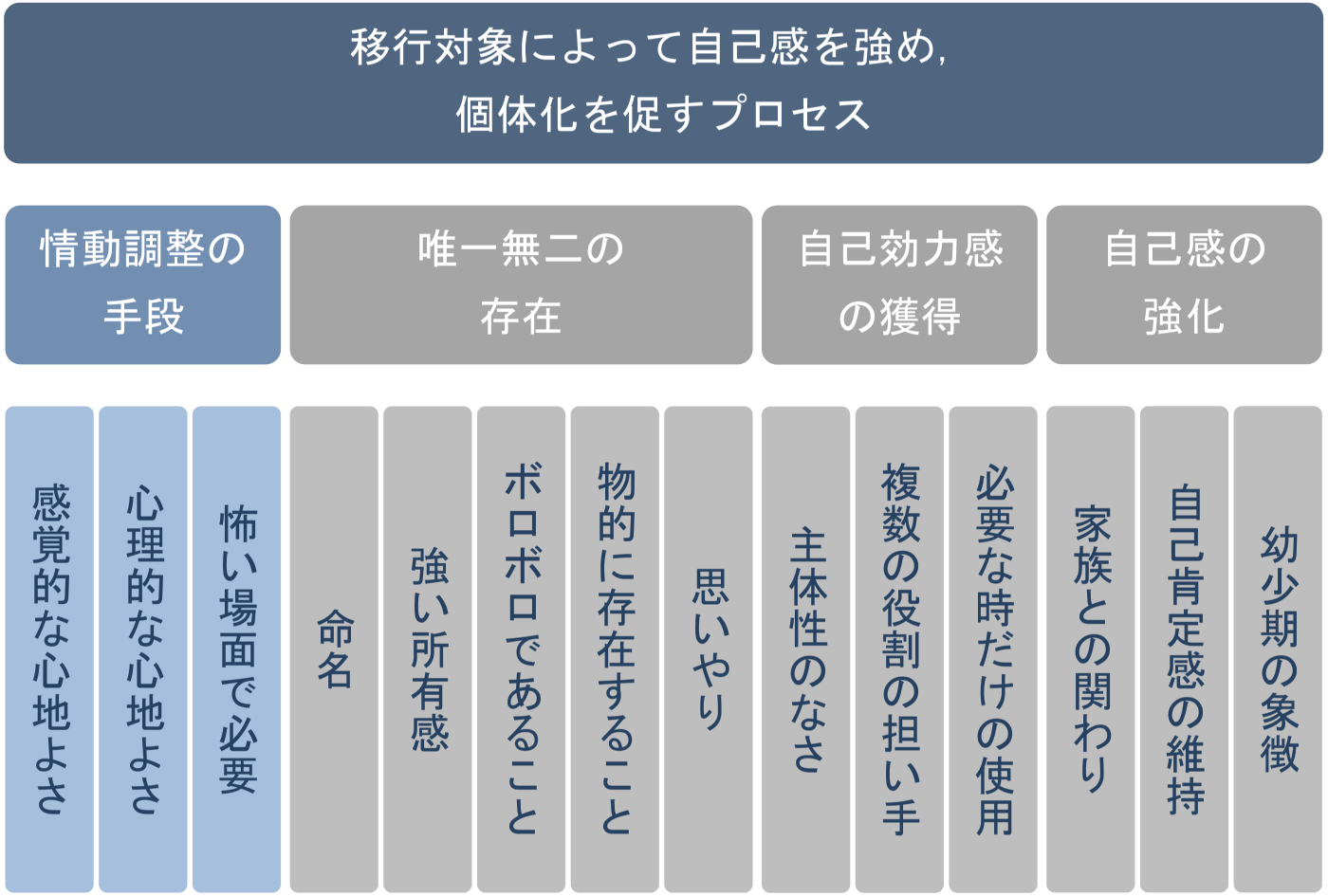


図3-4　情動調整の手段としての移行対象

移行対象の感覚的な心地よさ

幼少期に移行対象を使用した体験は，以下に抜粋した「寝ながら捜す」といった語りに表されるように，生理的，感覚的なものが多く，毛布やぬいぐるみの感触に心地よさを覚え，同時に安心感を抱いていることが理解できた．このような［移行対象の感覚的な心地よさ]については協力者全員の語りのデータから得られたものであり,以下の語りのほか,移行対象の匂いや肌触りなどに心地よさを感じる協力者もいた.

大学院生のＤさんは，移行対象である白いアザラシのぬいぐるみの必要性を，幼少期の就寝時のエピソードを引き合いに出して語った.彼女は川の字に並んで家族と寝ていたが,必ず耳元に移行対象を押しつけて，その感触を楽しみながら寝ていた．しかし，寝相が悪いために目が覚めると移行対象が耳元から離れてしまっていることが多く，その時は必死で捜したという．以下の語りは，彼女が寝ている状況でさえも，移行対象に触れることによって得られる心地よさ，安心感を求めている様子がうかがえた.

> あと，これは私が寝てる時なんで親から聞いた話なんですけど，寝てて，こう持ってるんで，寝相が悪いんで，上のほうとかに，どっか手の届かない所にいっちゃったりすると，もう寝ながらこうやって探してるらしいんですよ．こう探して，で，ああこれきっと探してるんだろうなって思って，はいって持っていくと，安心して寝るっていうふうに（笑い）言ってました．(D)［移行対象の感覚的な心地よさ］

この語りは，まるで母親の乳房を必死に捜し求めるような，本能的あるいは生理的に移行対象を欲する姿が鮮明に表れており，感覚的な心地よさを与えることによって所有者に安心感を与える移行対象の心理的役割が示唆された.

移行対象の心理的な心地よさ

また,［移行対象の心理的な心地よさ］という概念も，協力者全員の語りから抽出されたものであった．移行対象は，その存在自体で所有者に心地よさを与え,「心の安定剤」として機能しているようであった.

大学 4 年生の I さんは，5 歳という比較的遅い時期に毛布に強い愛着を示すようになった．以下の語りは，家族とけんかをしたり親に叱られたりしたときに，移行対象の「安心要素」によって，移行対象が傍に在るだけで心理的に落ち着くことができたときの経験が語られていた．

なんかでも，家族とかがぐっちゃぐちゃになったりすると，ぐっちゃぐちゃっていうか喧嘩とかしちゃうと，毛布があるとやっぱすごい安心したので，安定剤みたいなところはあったと思います，すごく．(I)［移行対象の心理的な心地よさ］

幼い子どもにとって家族は生きていく上での頼みの綱であり，そのような存在がぐちゃぐちゃになるということは大変な危機的状況である．このような時に移行対象を安定剤として使用する様子は，移行対象に心理的な心地よさがあり，それによって所有者を安心させる心理的役割が備わっていることが明らかであった．

怖い場面で増す移行対象の必要性

怖い場面，特に就寝時での「暗さ」という恐怖場面においても，移行対象はその機能を発揮するようであった([怖い場面で増す移行対象の必要性]).真っ暗になり何も見えない，自分が存在しているのかさえ危ぶまれるような状況で，移行対象は,「精神的な安定剤」として機能していた．このような怖い場面での移行対象の使用に関する語りは，協力者 10 名のうち 7 名から得られた．それは特に，毛布を主とする一次的移行対象の所有者に多く語られていた．

タオルケットを移行対象として使用している B さんは，幼稚園の頃，夜中に目が覚めたときの恐怖場面で移行対象の心地よさが「寝るスイッチ」となり，安心して眠ることができたときの経験を以下のように語った．

そうそう，あれを小さい時からずーっとくしゅくしゅく触りながら寝てたらしいんですよ．記憶にない頃から．だから，夜中に目が覚めて，小さい頃ね，目が覚めて，怖いじゃ

ないですか．そういうときには触ってるのは覚えてます．それで触って目をつぶって，そのうち寝たりとか．(B)［怖い場面で増す移行対象の必要性］

乳幼児にとって,眠るということは自らの連続性が断たれてしまうような行為である(黒川，1999)．B さんの語りは，夜中に目が覚めて，周りの暗さに自分の存在さえも見えなくなってしまうような状況で，その恐怖を和らげて安心して受け容れさせてくれる移行対象の心理的役割がうかがえた．

移行対象を使用することで得られる安心感によって,所有者が自らの情動を調整する【情動調整の手段としての移行対象】の機能は，協力者 10 名全員の幼少期における移行対象の使用の語りの中に含まれていたが，青年期所有者の現在における語りの中にも，感覚的な心地よさを求めて移行対象を使用し，安心感を得る場面が語られていた（5 名中 3 名）．したがって，感覚的な心地よさによって安心感を与え，情動を調整するという移行対象の機能は，青年期においても失われずに続いていくものと考えられた．

第２項　　唯一無二の存在としての移行対象

「移行対象によって自己感を強め，個体化を促すプロセス」の 2 つ目のカテゴリーは，【唯一無二の存在としての移行対象】である．このカテゴリーには,［移行対象への命名］,［移行対象がボロボロであること］,［移行対象に対する強い所有感］,［移行対象が生き残ること］,［移行対象に対する思いやり］という 5 つの概念が含まれていた（図 3-5）．

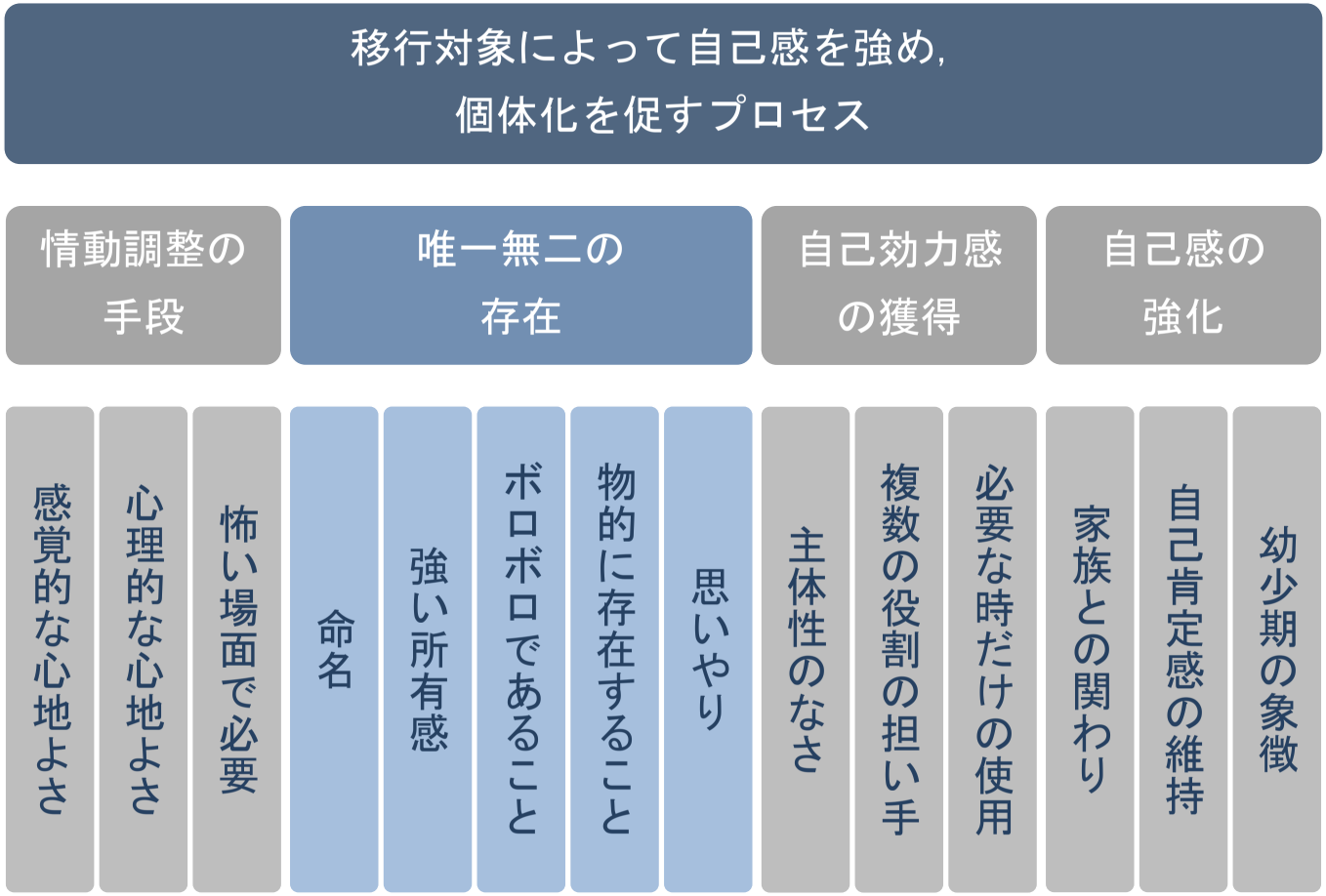


図3-5　唯一無二の存在としての移行対象

移行対象への命名

心理的な心地よさや身体的・感覚的な心地よさを与える移行対象は，次第に無くてはならない，他のものでは代用がきかない特別な対象物となっていくようであった．それを用いる幼児は，移行対象に自分で名前をつけること（[移行対象への命名]）によって，移行対象を自分の最初の所有物だと主張しているように感じられた．このような移行対象に名前を付けていたと語った協力者は 7 名であり，名前をつけていなかった協力者の移行対象は，毛布などの一次的移行対象であった．

G さんは，両親との別室就寝ではなかったが，毎晩就寝時になるとハンドタオルを母親に要求し，それを手にしっかりと握って寝ていたと語った．そのハンドタオルがないと，「寝ることは無理」だったそうである．そのハンドタオルは目が覚めると不思議と必要性がなくなり，母親によって布団と一緒に片付けられてしまっても平気であったが，また布団に入る頃になると再び母親にせがむのであった．そのとき，ハンドタオルは所有者である彼女なりの呼び名で呼ばれていたという．インタビュー時の彼女は，その呼び名を恥ずかしそうに教えてくれた．

でも，親のところ行って，タオルに名前があったんですけど（笑い），チュッパって言ってたんですよ．なんでそういう名前がついたのか思い出せないんですけど，いつもなんかチュッパちょうだいって．そう言って，いつも寝る前にそう言って親に出してもらって，で，夜中に鼻の下つけたら落ち着いたってことを思い出します．(G)［移行対象への命名］

この語りから,彼女が寝る時に握り締めるハンドタオルは単なるハンドタオルではなく，「チュッパ」という彼女独自の対象物となっていることが理解できた．このように所有者自身が命名するということは，移行対象が他の類似物とは区別されているということであり，移行対象が唯一無二の特別な存在として位置づけられたことを示していた．

移行対象がボロボロであること

特別に大切な存在である移行対象は，毎日毎日使い続けられるうちに次第にボロボロに

なっていくが，代用がきかないために，傍に置かれ続けた（[移行対象がボロボロであること]）．このような，移行対象がボロボロであるという語りは協力者全員から得られたものであり,移行対象の主要な特徴の一つとして,「ボロボロである」ということが挙げられた．

幼少期の移行対象を現在も所有し続けているBさんは，移行対象が現れた時期について尋ねられると，少し間を置いて，移行対象であるタオルケットが他のタオルケットとは異なる特別なタオルケットであるということに気付いた瞬間について以下のように語った．

いや，親じゃなくて自分で気付きました．もう，ボロボロなんで，明らかに（笑い）．新しいのも買うわけですよ．買うんだけど，タオルケットも買ったんですよ，一人暮らしの時とかも使ってるのもあるし．あるんだけど，でも，やっぱこっちの方が寝心地がいいって思って，新しいの閉まってしまうんですよね．(B)［移行対象がボロボロであること］

この語りは，移行対象がその対象物の持つ道具的な要素，機能性によって必要とされているのではないということを表していた．もはやタオルケットとしての機能は十分に発揮されておらず，新しいものを購入するほどではあるが，その安心感，寝心地のよさは他のどのタオルケットよりも心地よく,したがってボロボロであっても使用し続けられていた．

移行対象に対する強い所有感

命名し，ずっと傍に在り続けることでボロボロとなった移行対象を前に，所有者にとってこの移行対象は他の誰の物でもない,「自分の物」であるという感覚が強くなっていくようであった（[移行対象に対する強い所有感]）．このような移行対象への強い所有感は，協力者全員によって語られたものであった．

Eさんは，小学校2年生のときの引越しを契機に小さなくまのぬいぐるみを移行対象として使用し始めた．その後，父親の仕事の関係で海外生活を経験するが，その際もこのくまのぬいぐるみは自分の心強いパートナーとして，手放せない存在であったと語った．そのような移行対象への所有感について筆者が尋ねた際に即答で返ってきた答えが，以下の語りであった．

なんか・・・当たり前のように自分のものだと思ってました！（笑い）(E)［移行対象に対する強い所有感］

この語りは非常に短いものではあるが，端的に移行対象への強い所有感を表している語りであった．このような，他の誰かのもの，あるいは一般的なくまのぬいぐるみとして考えたこともないと言う，ある種の錯覚の中で使用できた対象こそが移行対象なのであった．

また，以下の語りは，移行対象を他人に貸すということに対してBさんが語ったものであった． Bさんは現在も移行対象であるタオルケットを所有しているが，もし誰かが自宅に泊まりに来ても絶対に貸さないと語り，万が一使おうとしたら，「他のにすれば？」と断ると語った．そして，なぜ貸さないのかと尋ねた筆者に対しての返答が，以下の語りであった．

貸したこと無いから分かんないんですけど，貸すと，とられちゃうって感じがしますね．安心要素が．他人が使ってるの見たら，落ち着かないですもんね，きっと．独占欲強いから（笑い）(B)［移行対象に対する強い所有感］

彼女にとって，移行対象が彼女の安心感そのものであるということが，この語りからありありと感じることができた．移行対象に対する強い所有感は，移行対象自体が所有者の一部として認識されているということを表しているようであった．

移行対象が物的に存在すること

長年使用される移行対象は，劣化して損傷したり，出かけた先で忘れられたりされることが度々あり，所有者は「移行対象を失う危機」を何度も経験していた．しかしその度に，修繕されたり発見されたりして，移行対象は再びその場に在ることができた（[移行対象が物的に存在すること]）．このような，移行対象が捨てられそうになる危機に対して所有者が抵抗し，すぐには捨てられずに修繕されたり発見されたという語りは，協力者全員から得られた．

D さんは，3，4 歳頃からアザラシのぬいぐるみを移行対象として使用し始め，現在も所有し続けている．小学校高学年以降は外に持ち出すことはなかったというそのぬいぐるみは，就寝時こそ肌身離さない存在であったものの，それ以外は必要となった時に使用する程度で，家のどこかに置いてあった．しかし，移行対象がなくなってしまうことは絶対にあってはならないことだと語り，中学生の頃に室内犬に噛まれて移行対象が壊れかけた恐怖の出来事について，以下のように語った．

なくなることはすごい・・・恐怖を感じてるんだろうなっていうのは，自分でも思いました．なんか，室内犬を実家で飼ってて，変なところに置いとくと，持ってっちゃうんですよどっかに．で，置いたところにない！みたいな感じで，なって，まあ犬がちょっと遊んだ形跡が，ちょっとボロッとなって出てきたりするとめそめそめそめそしてたりとかして（笑い）．あまりにめそめそしてるもので，母親が裁縫道具を持ってきて，縫って，はい修復って言って（笑い）．(D)［移行対象が物的に存在すること］

この語りからは，自分がきちんと管理していなかったために移行対象が壊れてなくなってしまうという， D さんの自責の念と恐怖感が伝わってきた．しかし，それを見かねた母親が縫ってくれることにより，移行対象は再び所有者の手に戻って来たのだった．このような一連の出来事からは，親など周囲の力を借りながら，移行対象が壊れずに（捨てられずに）その場に存在し，所有者の傍に居続ける体験がうかがえた．

移行対象に対する思いやり

幾多の危機を乗り越えながらも傍に在り続ける移行対象は，特別な対象として所有者によって命を吹き込まれ，それ自体に気持ちが付与されるようになった．移行対象は一個の生き物として扱われ，邪険に扱えば，「かわいそう」という気持ちが移行対象に向けられた（[移行対象に対する思いやり]）．このような移行対象に対する思いやりについての語りは，人格的要素をもつ二次的移行対象を所有する 3 名の協力者のみに語られた．

D さんは，人間関係や家族とのかかわりの中でイライラしたり，そのことで自分自身に嫌気が差してどうしようもなくなった時に，ものを投げてその気持ちを発散させることが

あったと語った．そして，その標的は移行対象にも及ぶのだが，それはまた別の感情を引き起こした．そのときのことをＤさんは以下のように振り返った．

なんか，自分自身内面的に荒れてた部分もあって，なんか小さなことでカーッと来て，そのボルテージが一定ラインを越えると，なんかアーってものを投げるときがあって（笑い），その時に投げたことがあるかもしれないみたいな．けど，投げた後ものすごい罪悪感に駆られて，これだけちゃんと拾いに行ったっていう記憶があります．あとはいいやみたいな感じで，これだけ拾いに行ってごめんっていう（笑い）．(D)［移行対象に対する思いやり］

この語りには，移行対象をストレス発散のための八つ当たりの道具の一つとして用いたときに，咄嗟に生じた罪悪感が表れていた．もはや移行対象は単なる物ではなく，人格を有した特別な対象となっているようであった．

しかし，どの移行対象でも同様に罪悪感を感じるわけではないということが，C さんの語りから示唆された．C さんは，一次的移行対象と二次的移行対象の両方を所有していた．どちらも就学前の同時期に所有し始めたものであり，前者は大人用の毛布で，祖母と二人で寝始めた時の誕生日プレゼントとして買ってもらったものであった．後者は犬のぬいぐるみで，旅行先で父親にねだって買ってもらったものであった．インタビューで，犬のぬいぐるみへの少し乱暴な扱い方に対して，筆者が八つ当たりですか？と尋ねたときの返答が，以下の語りであった．

八つ当たりもしたような気もしますけど，投げちゃだめって思った気が．ごめんね！って．チョップとかはしたことあるかもしれないです（笑い）．でも毛布って，八つ当たりしても，ちぎれたりしないじゃないですか．いぬ（のぬいぐるみ）に対しては罪悪感を感じるんですけど，毛布は感じない．（毛布の）裏側にはうさぎ描いてないし（笑い）．(C)［移行対象に対する思いやり］

この語りからは，一次的移行対象と二次的移行対象とでは，罪悪感についての感じ方が違うということが示された．ぬいぐるみのように人格的要素を強く持つ移行対象の方が，

所有者がそれに気持ちを付与したり，所有者に罪悪感のような思いやりの気持ちを生じさせたりする対象となりやすい可能性が考えられた．

以上の，【唯一無二の存在としての移行対象】についての語りは，協力者全員の語りから得られるものであった．他の何にも代えられない自分だけの特別な所有物となった移行対象は，この段階に至っては，所有者自身の情動を調整してくれる存在であるばかりでなく，そのかかわりの中で，社会に出ていく一人の人間として価値のある，有意義な情動体験の担い手となっているようであった．また，このカテゴリーに含まれる語りは，学童期以降の移行対象とのかかわりについての語りの中で多くみられたものであり，第 4 項で詳述する，移行対象の存在を肯定する家族（主に母親）とのかかわりに関する語りも多く含まれていた．

第３項　　移行対象による自己効力感の獲得

「移行対象によって自己感を強め，個体化を促すプロセス」の 3 つ目のカテゴリーは，【移行対象による自己効力感の獲得】である．このカテゴリーには，［移行対象の主体性のなさ］，［複数の役割の担い手としての移行対象］，［必要なときだけに使われる移行対象］という 3 つの概念が含まれていた（図 3-6）．

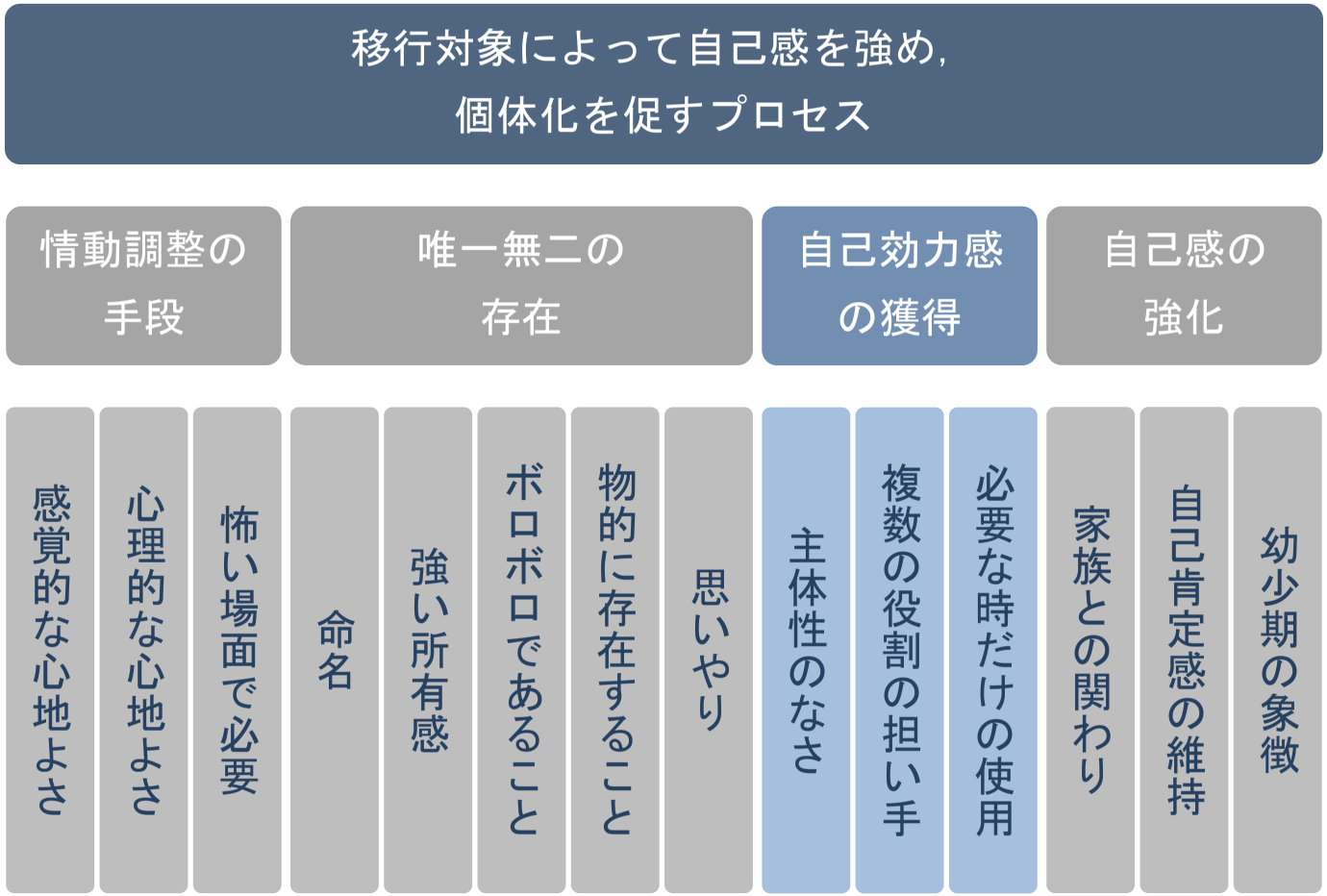


図3-6　移行対象による自己効力感の獲得

移行対象の主体性のなさ

長年傍に在り続け，唯一無二のかけがえのない存在となった移行対象には，様々な役割が付与されるようになった．たとえば，所有者の様々な気持ちに耳を傾ける「聞き役」に徹することもあれば,「戦友」として母親への交渉に共に挑んでくれることもあった.また，所有者の都合の良い時間や場所に，所有者の望む遊び方で遊んでくれる「遊び友達」にもなってくれていた．このような［移行対象の主体性のなさ］という概念は，9 名の協力者の語りから抽出されたものであり，以下の語りに特徴的に表れている．

C さんは，4 歳頃から 6，7 歳頃まで犬のぬいぐるみに強い愛着をもっていた．近所に同年齢の子どもがいない環境で一人遊びが主だった C さんは，犬のぬいぐるみを遊び相手とすることが多かったと語った．しかし，いつも肌身離さず傍に置いていたわけではなく，その辺にぽいと置いておくことも日常茶飯事だったと語り，そのときの移行対象の二面性について，以下のように語った．

うーん，一緒に遊んでる時とか一緒に手に持ってる時は犬なんですけど，なんかごはん食べる時とか，他の友達が遊びに来た時は物ですね．なんか，ぽいって．(C)［移行対象の主体性のなさ］

この語りは，移行対象が所有者の置かれた状況，すなわち所有者が一人でいる場面か否かによって，その役割をいとも簡単に変えてしまう様子が端的に表されており，移行対象の主体性のなさを的確に描写していた．また，移行対象が所有者独自の主観的な要素と客観的な対象物としての要素を持ち合わせた，中間領域に位置する対象だということが，この語りから容易に推察できた．

複数の役割の担い手としての移行対象

主体性の無い移行対象の役割についての決定権は，全て所有者に委ねられることとなった．そして，所有者が移行対象に対する主導権を獲得し，様々な状況で，様々な様式で移行対象を使用することにより，移行対象は複数の役割を担うようになった（［複数の役割の

担い手としての移行対象]). そしてこの主導権の獲得は，所有者の主体性を強め，自己効力感を高めることに貢献していた．このように，所有者の都合で移行対象を複数の役割で使用したという語りは，6名の協力者によって得られた．

Dさんは，3歳頃から現在まで，アザラシのぬいぐるみを「ごまちゃん」と呼んで愛用している．ごまちゃんは，主に就寝時に安心要素として機能していたが，D さんの成長に伴って，その機能はひろがりをみせるようになった．以下の二つの語りは，ごまちゃんの普段の使い方について，2回目のインタビューの中でDさんが語った内容であった．

なんか，これで遊ぶっていうのもあったし，これと遊ぶっていうのもあったから，多分人とか物みたいに見立てて遊んでたっていうのもあると思います．これで遊んでたっていうのは，家を作って，服を作って，とか．チョッキみたいのだったら簡単にできるんですよ．フェルト切って，手が通る部分に穴だけあけて（笑い）．よく作ってましたね．おばあちゃんがすごい縫いものが得意だったので，これ母方のおばあちゃんなんですけど，スカートみたいなのを作ってくれたりとか．遊んでましたね，いろいろ．これと遊ぶっていうのは，アザラシが好きだというのもあって，いくつか実家にアザラシのぬいぐるみがあるんですけど，それをいろいろ持ち出して，なんか，人形劇みたいな（笑い）ことをやったりしてた記憶があるんですよ．なんかさみしい子だけど（笑い）．全部登場人物はアザラシなんですよ．アザラシ，好きみたいですね．名前がもう，これがごまちゃんで，こっちがこまちゃんで，とか（笑い）．今思うとややこしいよって思うんですけど．(D)［複数の役割の担い手としての移行対象］

なんか，今ふと思い出したのが，ハムスターを一時期すごく飼いたかった時期があったんですよ．親がすごい反対して，どうせちゃんと世話できないんだからって言って．で，ものすごく欲しかったんで，自分の部屋の押し入れの中に立てこもり作戦をしたんですよ（笑い）．その時は多分これを持って，体育座りをして，ひたすら何も言わずに，私は欲しいのに欲しいのに世話も頑張るのにって思ってただけだと思いますね．声をあげずに．耐えてたっていうのはあると思うんですけど,その時も多分これは持ってたと思うんですよ．なんか，うーん，なんだろ，置いとく，ほんとにその時も持ってるというよりは置いとくに近いと思うんですけど．なんだろうな，置いとくことで，味方みたいな感じに思ってた

のかもしれないなっていうのは今ふと．怒られたりすると，わりと極端な方向に考えが飛んでくんで，お母さんなんか私の敵だ！みたいな感じで思うところは多分あったと思うんですよ小さい頃から．そういう時にこれを置いとくことで，なんか，味方が一人？ひとつはあるみたいな感じを思ってたのかなって感じはします．(D)［複数の役割の担い手としての移行対象］

以上の語りからは，移行対象が遊び道具となったり，遊び仲間となったりする様子がうかがえた．また，味方であってほしい母親が敵に回ってしまうという追い詰められた状況の中で，唯一の味方となって，所有者を励ます存在としても機能している様子が生き生きと伝わってきた．これらは，移行対象の主観的役割が多岐に渡って存在することを示唆していた．

必要なときだけに使われる移行対象

移行対象が所有者によって様々な役割を担うようになると，移行対象はもはや慰めるだけの対象ではなくなり，所有者自身によっていかようにもその役割を変えられる，従属的な対象となった．したがって，乳幼児期のような，移行対象が在れば絶対に安心できるとか，移行対象が唯一の慰めの対象であるから，常に傍に置いておかなければならないといった感覚は薄れていった（[必要なときだけに使われる移行対象]）．このような，幼いころの移行対象への絶対性が薄れていく様子についての語りは，青年期所有者全員に語られたが，幼少期所有者には語られなかった．幼少期所有者は，移行対象の必要性が弱まった段階でそれらを手放しているために，移行対象の必要性が弱まっていく過程や，その後の体験を有していないようであった．

E さんは，小学校二年生から現在まで，くまのぬいぐるみを移行対象として所有している．小学生のときは，バッグに忍ばせておいた移行対象を眺めて不安な気持ちを静めたり，励まされたりしていたと語り，高校生くらいまでは，修学旅行や家族旅行には必ず連れて行き，自分と同じ体験を積ませていた．特に家族と離れる時は必須で，家族の一員としての役割を移行対象に付与し，家族と共にいる安心感を得ていたと語っていた．しかし，次第に家族と離れる時であっても，よほどのことがなければ連れて行くことはなくなり，移

行対象の定位置であった自室の小さな椅子の上に座らせておくようになった．E さんはそのときのことを振り返って，以下のように語った．

うーん・・・なんていうんだろ，ずっと大切だとか，絶対に頭のどこかにこの子がいるとかいうよりも，自分がすごく大変なときとかにふと出てくるような感じで，だから，どんどん薄れていって．結果的には忘れるとかそういうことじゃなくて，何かがあるたびに思い出すけど，何かがあるっていうか，嫌な時とか，自分にとってすごいつらいこととか，乗り越えなくちゃいけないときとかには出てくるんですけど，でもそれ以外はあんまり覚えていなくて．なんか，都合がいいというか（笑い）．(E)［必要なときだけに使われる移行対象］

E さんは，歳を重ねるにつれて移行対象が「都合の良い存在」となったことを語った．この語りには，小学生の頃に学校に持っていき，休み時間に眺めるほどであった移行対象の必要性が弱まったことが確かに表れていた．ただし読み違えてならないのは，彼女が語ったことは，移行対象が常に自分にとって必要であるといった絶対的な存在ではなくなったという現象であり，安心させたり励ましたりする移行対象の心理的役割は薄れることなく，現在も機能し続けているということであった．

以上の，【移行対象による自己効力感の獲得】というカテゴリーは，協力者 10 名のうち 6 名の語りから抽出された．このカテゴリーの語りが得られなかった 4 名は，いずれも小学校でそれらを手放した幼少期所有者であった．したがって，所有者が移行対象を思うままに主体的に使用することで自己効力感が獲得されるといった移行対象の心理的役割は，児童期以降に現れると推測できた．

第４項　　移行対象による自己感の強化

「移行対象によって自己感を強め，個体化を促すプロセス」の 4 つ目のカテゴリーは，【移行対象による自己感の強化】である．このカテゴリーには，［移行対象を介した家族とのかかわり］，［移行対象による自己肯定感の維持］，［幼少期の象徴としての移行対象］と

いう 3 つの概念が含まれていた（図 3-7）．なお，このカテゴリーは，青年期における移行対象の機能をまとめたものであるため,対象となる協力者は青年期所有者の 5 名であった．

それぞれの概念を説明する前に，青年期所有者に特徴的な心情を的確に表していると考えられた A さんの語りを紹介する．青年期所有者は，幼少期から変わらず安心感を得たり励まされたりしている移行対象を前にして，いつまでも幼少期と同様に移行対象を持ち続け，それに頼っていても良いのだろうかという葛藤が表れる場合もあった．抱き枕を移行対象として所有し続ける A さんは，1 回目のインタビューでは社会人一年目であった．その当時，A さんは同期の女性たちと自分の嗜好の違いや考え方，価値観の違いに戸惑っており，自分が他の同期の女性たちに比べて子どもっぽいのではないかと心配していた．A さんは，このような社会に出ていく中で受けたカルチャーショックについて，以下のよう語った．

> 結構社会人になるといろんな人に出会うじゃないですか．私大学生の頃って，同世代の人もいっぱいいたけど，すごい狭い範囲で，価値観の似た同世代の子しか付き合ってなかったんですよね．でも社会人になると，同世代は同世代でも全然違う人生を過ごしてる，それが結構，社会人になってびっくりしましたね．（中略）みんなが大人に見えてきて，なんとなく．私がしたことない経験ばっかりしているので．私，ちょっと子どもっぽすぎるのかな，と思って．だから，抱き枕も卒業した方がいいのか，いや，これはとっといた方がいいのか，どうしようかなあと思って．(A)

この語りには，青年期後期の人々が出会うであろう新しい世界に対する違和感や戸惑いが表現されていた．そして，この時期に使用される移行対象について，青年期所有者 5 名の語りを分析した結果，移行対象が「自分の歴史の一部」として存在しており，幼いころから傍に在り続けた移行対象は，青年期になると，幼少期とは異なる心理的役割によってその所有者に貢献していることが明らかとなった．

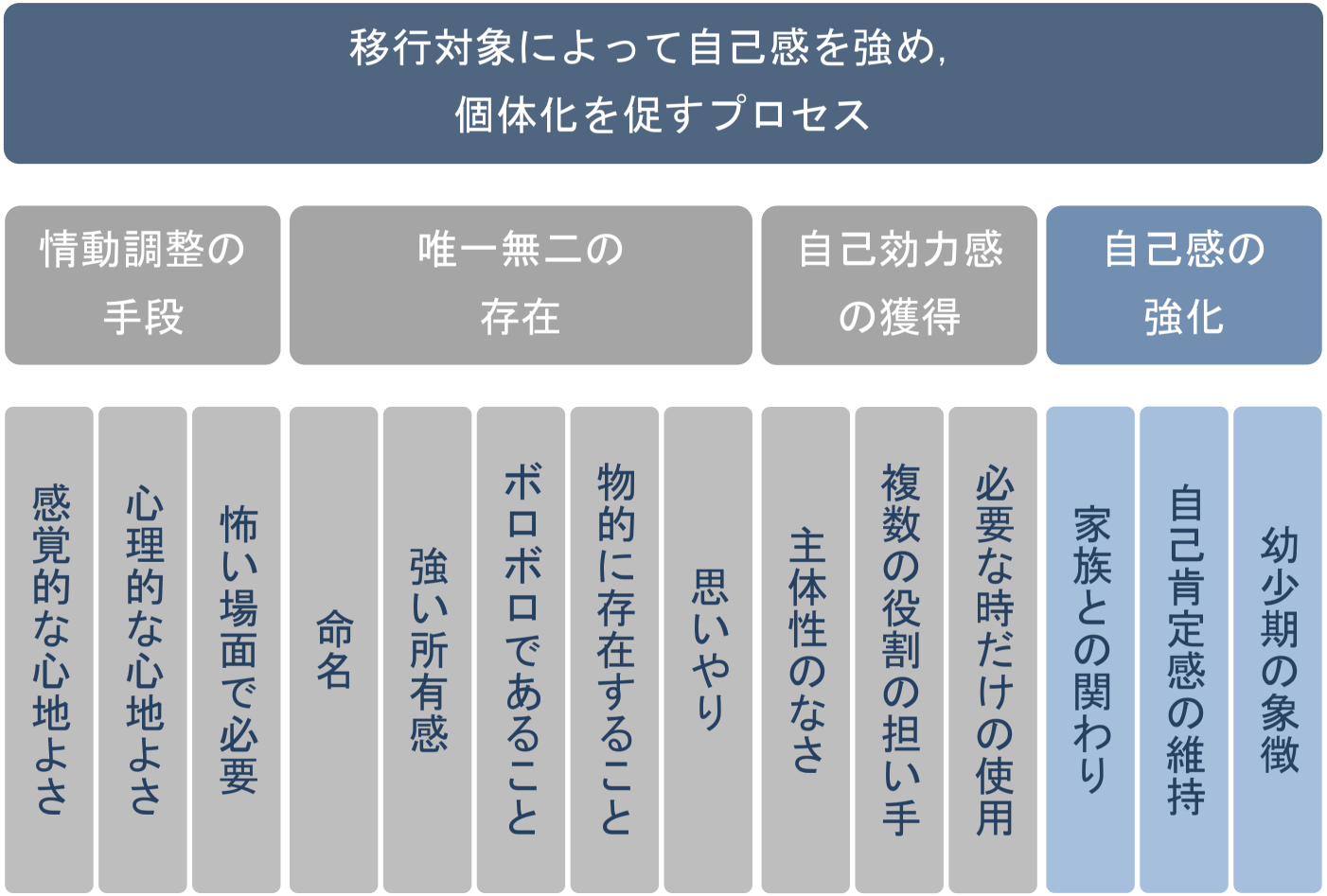


図3-7　移行対象による自己感の強化

移行対象の存在を肯定する家族とのかかわり

このカテゴリーにおいて特に目立った語りは，幼少期から現在までずっと自分を支えてくれた家族とのかかわりであった（[移行対象の存在を肯定する家族とのかかわり]）．この語りは，頻度やその質に差はあるものの，協力者 10 名全員の語りを通して，乳幼児期から児童期，そして青年期に至るまで随所にみられるものであった．ここでは，青年期所有者が現在の移行対象とのかかわりにおいて語る内容の分析結果のみを示すが，この概念は，乳幼児期から存在してこそ青年期の今に影響を与えるのだと考えられた．

B さんは，夏用のタオルケットを幼稚園の頃から現在に至るまで所有し続けている．そのタオルケットが特別な移行対象となった理由について，感触と大きさだと語る B さんは，昔はこのタオルケットに泣きついて涙や鼻水を吸い取ってもらったり，親にタオルケットをかけてもらったりすることで安心していたと語った．移行対象はその大きさによって，B さんの不安な気持ちごと包んで慰めてくれたようであった．しかし，ボロボロになったタオルケットは，次第にそのような使われ方はされなくなり，現在はベッドの足元に置いてあり，触って安心感を得ていると語った．2 回目のインタビューで，昔のように機能していないタオルケットをなぜ捨てられないのかとの筆者の問いに，B さんは次のように語った．

単に捨てられないとかじゃなくて，わりと何でも捨てるし（笑い）．たぶん小さい頃に戻りたいんじゃないですかね．小さい頃っていうか昔に．小さいころのことを思い出すとかじゃなくて，寝てたらお父さんお母さんがこれかけてくれたりとか，あとお兄ちゃんとお揃いも大きいかも．他にも似たようなものがあって，でも思い出せない．だから普段はそんなに必要としてなくて・・・あー小学校の入学おめでとうのお花．あんな感じです．ちゃんと育てられて私はここまできたんだな，家族大切にしようって思えるようなもの．だから毛布も，ずっとちっちゃい頃からあるじゃん．お父さんとかお母さんとか，家族みんながこの存在を知ってて，なんか“みんなが知ってるこれ”が好きなんです．みんなが，私がこれを使ってることもこれを好きなことも知ってるもの．ある意味，“私”っていうもの．すごく無意識の中で役に立ってるんだと思います．明確なものはないですよね．なんか，自分のことを考えるのが好きで．私ってなに？って．そのとき，最後は家族に行き着きますね．この人たちを裏切ることはできないっていう．別にこれまで波乱万丈な人生

を歩んできたわけじゃなくて，むしろ超ぬくぬく幸せな平凡な，甘ったれた生活してきたんですけど．なんか，家族のために頑張ろうみたいな．そんな結果で落ち着きますね．(B)［移行対象を介した家族とのかかわり］

彼女にとって家族は彼女自身そのものであり,家族も,彼女が在っての家族であるから,両者は補完しあって成り立っているのだということがこの語りから理解できた．また，ここで機能しているのは，移行対象自体に内包された家族とのかかわりを体感することで,彼女を補完する家族を感じることができるという移行対象の心理的役割であった．家族との温かな歴史が，移行対象を使用することで実感できるようであった．言い換えれば，家族との関係性の象徴として，移行対象が使用されていることが示唆された．

移行対象による自己肯定感の維持

移行対象は，自分のこれまでの人生と共に歩んできた存在であり，移行対象の存在自体が，自分を肯定し，励ましてくれる要素となるようであった（[移行対象による自己肯定感の維持]）．このような語りは，青年期所有者の中でも，就職している 3 名の語りに含まれるものであり，社会への新参事である後青年期（post adolescence）（Blos，1962）特有の心理的葛藤が,「自己肯定」という移行対象の機能を顕在化させているようにも考えられた．

A さんは，母親が作ってくれたうさぎの枕を，抱き枕に入れ込む形で現在まで使用し続けている．小学生や中学生の頃は，その日にあった辛い出来事や嫌な出来事，悩みなどを，母親に言ったら心配させると思い,代わりに打ち明ける相手としてその枕を使用していた．そして現在では，自分の弱い部分や，うまくいかなかった出来事を全て知っていて，それでも受け容れ続けてくれたものだからこそ，自分を肯定するものとして機能しているのだということを以下のように語った．

意識して使うときは，自分に自信なくしたときですかね．そういう時は，見つめてため息とかつくかも（笑い）．仕事で失敗するとか注意されるとかは大して落ち込まないんですよね．それはだって自分の能力の問題もあるけど，もっと事務的なことじゃないですか．それはいいんですけど，自分の価値観とあまりにも離れるとか，否定されるっていう経験

をしたときには，すごく，より落ち込むというか，ダメージが大きいというか．価値観の否定って，自分自身を否定されるようなところがあるじゃないですか．そういう時にはより自信をなくしますよね．そういう時に，やっぱ（移行対象が）無いときついかな．（中略）長年持ってるっていうだけなのかもしれないですよね.ずっと自分の古い記憶の中にいて，自分の人生を肯定できる，という気がします．でも，不思議．よくここまで一緒にいるなって思いますもん．(A)［移行対象による自己肯定感の維持］

この語りからは，社会に出て，自分の価値観，すなわち自己が否定されるような状況において，移行対象が自己を慰め，励まし，大丈夫だよとAさんの背中を押してあげている様子がうかがえた.移行対象は,所有者の自己肯定感の維持に役立っているようであった.

幼少期の象徴としての移行対象

青年期に使用される移行対象は，子ども時代を回想させるような，子ども時代の象徴としての心理的役割も持ち合わせているようであった（[幼少期の象徴としての移行対象]）．そこでは,「確かに子どもではないが，子ども時代の象徴である移行対象を手放して大人となりたくない」といったような，モラトリアム（moratoriuum）（Erikson, 1973/1959）の只中にいる青年期の心理的様相が語られていた．このような,［幼少期の象徴としての移行対象］という概念は，青年期所有者全員の語りから抽出されたものであり，以下の二つの語りがそれを特徴的に表していた.

Cさんは，4，5歳の誕生日に買ってもらった大人用の毛布を，2回目のインタビューの前まで継続して使用していた．大学入学を機に一人暮らしを始めた後でも，就寝時には必ずその毛布で寝ていた．しかし，最近友人にその毛布を貸したことがきっかけで，何度も何度も洗濯を繰り返したために，さらにボロボロとなってしまったと悔やんでいた．そのことに対して，筆者がなぜそのように毛布としての機能を果たすことができない状態の毛布を現在も使い続けているのかと尋ねると，Cさんは以下のように語った.

最近は，この毛布がなくなっちゃうと，もう大人にならなきゃいけない気がして，ちょっとね，区切りが・・・．小さい頃自分が使ってたものがもう，全部ないじゃないですか.

家もそうだし．生活グッズ？なんか，蚊取り線香とか，風鈴とかも絶対使わないし，うちわとかも使わないじゃないですか．クレヨンで絵描いたりしないし．なんかそういうのとか全部なくなっちゃうのさみしかったかな，と思って．(C)［幼少期の象徴としての移行対象］

この語りからは，移行対象が子どもの頃のＣさんの象徴として機能しており，それを失うことで大人になってしまうことを憂慮しているＣさんの心情がうかがえた．また，移行対象のこのような機能は，幼いころ身近にあったものがどんどんなくなっていってしまっている状況で発揮されていた．すなわち，現実には自分は成長しており，もう子どもではいられず，その事実は承知しているのだけれど，内的世界ではそのような状況を受け入れられず，両者の間で葛藤状態にある様子が語られているようであった．

また，以下のＡさんの語りは，その状況がより深刻に，鮮明に表現されていた．

Ａさんは，社会人二年目となった２回目のインタビューのはじめで，社会人としての苦労を語っていた．社会人１年目の頃は同期の女性たちとの価値観の違いに戸惑う中で，焦る自分をなだめ，自己肯定できるものとして移行対象を使用していた．しかし，社会人二年目になると，自分にしかできない仕事がしたいと，自分の存在意義を求める中で，自己肯定できるものとしてだけではなく，いつまでも幼少期の残存物に頼る自分の不甲斐なさを責めるものとしても移行対象を使用するようになっていた．Ａさんは，移行対象を見て否定的な気持ちになるときの様子について，以下のように語った．

社会にでると，本当の自分でそこにいられない機会が増える気がするんですよね．飲み会の席でおもしろいこと言わなきゃとか上司に気を使わなきゃとか，違うタイプの人間に合わせなきゃだめかな，とか思ってると，あれ？本当の私の考え方って何だっけって思っちゃうときもあるんですよね．こういうことを，合わせてるとはいえ言えちゃうってことは，もしかしてそうなのかな？って．そういう時にうさぎちゃん見ると，なんか，自分は変わってないのに年だけとっちゃったって思うのかもしれないです（笑い）．年相応の成長をしてない気がするんですよね．（中略）うさぎちゃんを見たときに開き直っちゃってて，いいじゃん別に成長なんかしなくたって！って思ってるときに見れば，いいやって励まされたりもするんですけど，逆の時は，私もっと変わんなきゃだめかな，とか，（うさぎちゃんを）持ってちゃいけないんじゃないかなとか思ったりします．最近は，自分が大人にな

りきっちゃうべきなのか，そうならなくてもいいのか，誰かに決めてほしいって思います（笑い）．でもそのくせ，大人になるのは嫌なんですよね．もう，どうしたらいいか・・・．
(A)［幼少期の象徴としての移行対象］

A さんは，外（社会）で繕っている自分が本当の自分ではないという事実に直面したときに移行対象を使用することで，社会で繕う術を知らずに本当の自分でいられた幼少期の自分を思い出していた．このことは，「周りに合わせている自分」という現実を強調し，このままではいけないのではないかと自分を否定的に捉える結果となっていた．そしてここでは，移行対象を手放すことが，幼少期の自分である「本当の自分」を手放すことと同義で捉えられていた．

以上の【移行対象による自己感の強化】についての語りは，青年期所有者全員の語りのデータから得られた．青年期になり，家族という安全基地を離れて社会へと出て行く時期において，移行対象は所有者の発達段階に見合う葛藤を所有者に与え，同時にその葛藤を乗り越えていくためのエネルギーを与えているようであった．そして，その移行対象の機能を，必要な場面で必要なだけ使用することによって，所有者は自身の自己感を強め，個体化を成し遂げて社会へと一歩を踏み出していこうとする様子が感じられた．

このように，幼少期には情動調整が主な機能であった移行対象は，児童期に至って自己効力感の獲得に寄与し，そして青年期には自己感を強めることに貢献しているようであった．

第５項　　移行対象を手放すことについて

分析の結果，移行対象を手放すか手放さないかという問題は，幼少期から青年期における移行対象の機能の変遷とは，近接領域ではあるものの異なる論題であると考えられたため，別に一項を設けて扱うこととした．移行対象を手放すことについて，①そのきっかけと②手放した後の体験，③手放せない理由，④平均的な消失時期における青年期所有者の幼少時代の様子を順に，特徴的な協力者の語りを抜粋して引用しながら，より具体的に示した．なお，移行対象を手放した経験を持つ協力者は，B，C，D，F，G，H，I，Ｊの８名で

あり，現在も移行対象を所有し続けている協力者は，A，B，C，D，E の 5 名であった（表 3-1）．したがって，①移行対象を手放せない主な理由が本章第 4 項で示した移行対象の心理的役割にあることや，②分析する語りの量が少ないため，考察が論理の飛躍となる恐れがあるために，移行対象を手放すことについての考察は控えることとした．

移行対象を手放すきっかけについて

幼少期所有者や，青年期所有者の中でも移行対象を手放した経験を持つ者の語りより，手放すきっかけとしては，①やむを得ず手放したという者と，②自ら手放したという者がいた．②自ら手放したという者の中には，「自分から離れていった」というような，自然に手放した者（次の移行対象に移った者も含む）と，親の介入により手放した者とがおり，前者は 2 名，後者は 3 名であった．以下に，特徴的な協力者の語りを抜粋して引用しながら，説明を加える．

まず，①やむを得ず手放した者の特徴的な語りを示した．

夏用のタオルケットと冬用の毛布を移行対象として使用していた B さんは，飼いネコのおしっこがきっかけで，冬用の毛布を手放すまでの経過を以下のように語った．

> 実際，冬の毛布は，猫におしっこされちゃって，超臭いじゃないですか．で，わ，くっさーと思いながら，しばらく我慢したんですけど，もうなんか自分の匂いというよりは猫臭なので（笑い）．それで，これはもう駄目だと思って，しばらくほんと頑張ったんですよ，臭い中．毎晩寝返り打つたびに臭いなーって（笑い）．離したくなかったんですよね．でも，あまりの臭さに，何しても臭くて，洗濯してもファブリーズしても．仕方ないと思って．でもその時にはもう新しい毛布もあったんですよ，使ってなかったんですけど．じゃあそっちを使おうと思って，世代交代しました．(B)

この語りからは，移行対象の匂いが，所有し続けるうえで B さんにとっては特に重要であったことがうかがえた．また，新しい毛布がありながらも，しばらくは臭くて古い毛布を我慢して使い続けており，「離したくなかった」という B さんの語りからは，移行対象である毛布が彼女にとってかけがえのない存在であったことがひしひしと伝わってきた．

続いて，②自ら手放した者の特徴的な語りを示した．

F さんは幼稚園の頃に，綿を薄く入れた袖付きの夜着であるかいまきの一部分を移行対象としていた．それはＦさんにとって，寝るための必需品であった．しかし，Ｆさんが小学校にあがり，汚くなったかいまきをいつまでもくちゅくちゅと触っていてはよくないのではないかと心配した彼女の母親は，それを少しずつ小さくしていって，彼女がかいまきを手放すための手助けをしていった．その頃の母親の介入について，F さんは次のように語った．

お母さんが，その，元々はかいまきについてたから，かいまきを含めればすごい大きかったじゃないですか．それを，それだけ切って，普通のタオルにして，で，その大きさだとちょっとおっきいよねって言って，で，なんか，一番肌触りのいい部分？この周りはちょっと硬いじゃないですか．だから，気持ちいい部分だけ，半分かなんかにこう切って，で，ちっちゃくしてったような気はするんですけど，それを離したときどうかっていうのはあんま印象はなくて，あんまりやめるのは苦労しなかったような気がします．(F)

「やめるのは苦労しなかった」というＦさんの語りから，特にＦさんからの抵抗はなく，スムーズに移行対象を手放したということが想像できた．一方で，ここでの母親の介入は非常に重要で，F さんのかいまきをいきなり全て取り上げることなく，徐々にその存在を小さくしていっていた．さらに，重要な部分は最後まで残すというある種の戦略は，幼児にとって，母親が幼児の移行対象を手放させるという側面よりも，母親が幼児の心地よさを得たいという欲求を認め,尊重しているという側面の方が強く感じられるものであった．したがって，幼児にとってこの経験は，母親に移行対象を「取り上げられた」経験ではなく，自ら移行対象を「手放した」経験として記憶されていたのだと考えられた．

移行対象を手放した後について

移行対象を手放した経験のある所有者 8 名のうち，2 名は手放した後について「覚えていない」と答えたため，手放した後については 6 名の協力者の語りを分析した．

移行対象を手放した後について，協力者は，①手放したことに対して後悔はない（1 名），

②手放した移行対象を発見しても再燃することはない（2 名），③感覚的な記憶の中にその移行対象が存在している（3 名）と語っており，中には，移行対象が拡散したことを端的に語る者もいた．以下に，特徴的な協力者の語りを抜粋して引用しながら，説明を加えた．

B さんは，以下の語りに示されるように，移行対象を手放したことに対する後悔はないと語った．しかし，上述の「やむを得ず手放した者の語り」で引用した彼女の語りを読むと，これは予想外で興味深いものであった．

手放した後は，最初は，新しい毛布のふわふわさに感動してました．なんかもう，古い毛布はごわつくじゃないですか．全然違うなあと思って．こっちの方があったかくないか自分，みたいな（笑い）．ああ捨てなきゃよかったっていう後悔はそんなになかったです．(B)

手放すことには非常に強い抵抗を示し，何とか手放さないように努力を惜しまない一方で，いざ手放してみると，手放したことに対する後悔はなく，むしろ，新品の毛布に実用性を感じて喜んでいた．B さんのように健康で適応的な発達を成し遂げている個人は，もはや移行対象が可視的に存在しなくても，特に精神的な問題を抱えることなく十分に適応的な生活を営むことができるのだろうと考えられた．

次に，②手放した移行対象を発見したが再燃することはなかったと語った協力者の特徴的な語りを示した．

G さんは猫のぬいぐるみを，幼稚園の頃から小学校 1 年生まで移行対象として使用していたが，知らぬ間にどこかへ行ってしまったと語った．その後，偶然にも猫のぬいぐるみを発見するも，以前のように特別な対象として使用することはなかったとして，以下のように語った．

昔すごい気に入って，一人で遊んでたんですけど，そのうちどっか行っちゃって，小３か小４くらいに，なんか整理してたら見つかって，懐かしくなってもう一回飾ろうと思って机の上に置いてたんですけど，やっぱりなんか，もういいやみたいな（笑い）．１ヶ月くらいで飾らなくなったっていうのを覚えてるんですけど．ちっちゃい頃はよく眺めて遊ん

でたっていうのありますけど．(G)

この語りは Winnicott（1953）が論じたように，可視的な移行対象はなくなってしまうのではなくリンボ界へ放擲されその意味を失くし，その後は文化的領域へと拡散されていく様を表しているようであった．G さんにとっての移行対象の役割は，平均的な移行対象の消失時期である小学校 1 年生で全うされたと考えられた．

続いて，③感覚的な記憶の中に手放した移行対象が存在していると語った協力者の特徴的な語りを示した．

H さんの移行対象は子ども用の毛布で，1 歳から 4 歳まで使用していたものであった．筆者が，＜今，その毛布はどこにありますか？＞と問いかけると，しばらく考えた後，次ののように語った．

うーん・・・あー，おばあちゃんが，同じ質の，その毛布と同じ質の色違いのやつで，今も寝てて，それを見てそれを触ると，必ず思い出します．この感触あれと一緒みたいな．(H)

この語りは，【情動調整の手段としての移行対象】に含まれる［移行対象の感覚的な心地よさ］の機能が，移行対象を手放した後でさえも残っているということを示唆するものであった．したがって，乳児期の感覚的に体験した情動的経験は，たとえ言葉を介して語り継がれなくても，自身の体験の一部として感覚的に記憶の中に留められていると推察できた．

最後に，移行対象の拡散についての語りを示した．

毛布を移行対象とした C さんは，1 回目のインタビュー時はまだ使用していたが，2 回目のインタビュー時には，成人しても幼い頃の汚い毛布を使い続けることを懸念する母親からの説得もあって，新しい毛布と取り替えていた．その毛布は，捨てない約束で実家に送ったが，捨てられていそうで怖いため，実家に帰っても探してはいないとのことであった．C さんは 2 回目のインタビューで，手元に毛布がなくなったことについて以下のように語った．

でも，なんだろ，それがなくなって，身近にあっていいものが，自分の故郷みたいな，幅が広がった気がします．モノっていう一個の物質じゃなくて，空間？みたいな．よくわかんないんですけど．(C)

この語りは，移行対象が一つの可視的な対象物から，それが存在していたある意味不可視的な空間という概念に展開していった様が感じられる語りであった.このような展開が，Winnicott が主張する文化的領域への拡散であると考えられた.

移行対象を手放せない理由について

青年期所有者が語る移行対象を手放せない理由としては，本節第 4 項までの移行対象の心理的役割により手放せなくなったという語りが協力者全員より得られた.

A さんは，筆者が移行対象を手放せない理由について尋ねた際に，少し間を置いて感慨深げに以下のように語った.

（移行対象がなくなることは）やっぱり，自分がなくなる感じですかね．今まで自分が積み上げてきた人生の全部を知ってるっていう意味では，それを捨てるっていうのは，すごいことだと思う．(A)

彼女の現在の移行対象は抱き枕であるが，それは幼少期の移行対象を中に入れ込んだものであり，その事実が非常に大切だと語っていた．ここで移行対象は，彼女の存在の連続性を可視的に示してくれる存在であると考えられた.

また，このように移行対象を手放せないことについての語りの中には，①移行対象が可視的であることの重要性を語る者や，②青年期に移行対象を所有し，使用することに対する社会的なうしろめたさを語る者もいた.

①移行対象が可視的であることの重要性や，移行対象がなくなって不可視的な存在になることへの懸念は，青年期所有者全員の語りから得られた.

父親の仕事の都合で引っ越すことが多かった E さんは，移行対象であるくまのぬいぐる

みを引越し先の自分の机の上に置き，自分の部屋だということを実感していたと語った．現在もそれはよく見える場所に置いてあり，特に寝るときには視線に入るため，心の中でおやすみと言って寝ているという．E さんは，移行対象を持ち歩かなくなった後の移行対象の置き場所について，次のように語った．

> そうですね，ずっと家に置いてありました．（中略）家にずっと，見えるところに置いておいたのかな，と．絶対見えるところに．あとたまに，ライトがあって，置くところが，棚みたいな小さいのがあるんですけど，そこの上に置いてたりとか．たとえば，整理して箱の中にしまっておくとかはないですね．その，引越しとかの時は必ず自分の手荷物の範囲で．小さいからなくなっちゃいそうだし．(E)

この語りは，移行対象が拡散していくという理論的展開がみられなかった理由として，可視的でないことに対する不安感を示唆していた．その不安感は，移行対象を失うこと，移行対象が「なくなる」ことに対する恐怖感とも感じられた．

続いて引用するのは，②青年期に移行対象を所有し，使用することに対する社会的なうしろめたさを語った者の語りである．このような語りは，アザラシのぬいぐるみを移行対象にしている D さんと，くまのぬいぐるみを移行対象にしている E さんの 2 名の語りから得られたものであった．したがって，毛布や抱き枕など，家から外へ出す機会が滅多にない移行対象をもつ所有者は，家族に受け入れられている限り，このような社会的うしろめたさや非常識性の感覚は得られにくいということが示唆された．

D さんは，3，4 歳の頃に習い事の先生からプレゼントされたアザラシのぬいぐるみを現在も所有し続けており，実家に帰るときなど数日間家を離れるときは，今でも必ず持っていくと語った．しかし最近は，いつまでも持ち続けているということに対する非常識的な感覚が芽生えているとして，次のように語った．

> なんか，こう，他の親戚，叔母だとか，ちっちゃいころからお世話になってる習い事の先生だとかにポロっと話をすると，まだもってんの？っていう怪訝な目をされるんですよね，やっぱり（笑い）．母親はもう諦めた部分も多分あるんだろうなとは思うんですけど，まあ好きにすればみたいなところもあるし，逆に私が，さすがに，自分が家庭を持つとか

なったときに,さすがにこれをベッドに持ち込むわけにはいかないだろうっていうのが(笑い). 旦那ひくだろさすがにっていうのがあって. でも, じゃあどうすればいいんだ. 急に離れるわけにも多分いかんぞ私って思ってたら,(母親が) 飾っとけばいいんじゃないの? ガラスケースとかに入れてっていう微妙な案をくれたりだとか (笑い). (D)

この語りは, 青年期以降も移行対象を所有し続けて安心感を得ているということが, 社会的に認められていない恥ずかしい行為であると所有者が認識していることを示していた. それは, 結婚という将来の自分の大きなイベントにおいても立ちはだかるであろう問題として, D さんには捉えられているようであった. 移行対象を手放すということにも苦労するが, 移行対象を手放さないが故の心配事も小さいものではないようであった.

移行対象の平均的な消失時期の様子について

移行対象を手放す平均的な時期とされる 6, 7 歳の頃の様子について協力者に尋ねると, 感情表出を苦手とする一連の語りがあった. 以下の語りは, 3 回目のインタビューを行なった 3 名に対し, その頃の様子について筆者が尋ねた際に語られた内容であった.

A さんは, 都内出身で 3 人兄弟の長女である. 母親は専業主婦で, 移行対象に対して好意的であり, 現在の移行対象の中に入れ込んであるうさぎの枕は彼女の母親が作ったものであった.

あ, でも 1 年生の時は, それがきっかけかわかんないけど, すごい内弁慶っていうか, 外じゃ一言も話さない子だったんですよね. 特に小学校 1 年生なんて, 外じゃ一言も喋らない子だった. 家では普通で, 家の中ではよくしゃべるし, 元気なんだけど, 外では一言も喋らなかったんですよね. 高校ぐらいからかな, 外に出るっていうことを覚えたのは. 自分を外にアピールする方法みたいのを身につけたのは高校生くらいですね.それまでは, どっちかっていうとおとなしかったです. まあでも, そういう風に外に出て行く方法を身につけたのにまだ一緒にいるっていう (笑い). (A)

C さんは地方出身で 2 人姉妹の姉であり, 両親は共働きであった. 彼女の幼少期の移行

対象は犬のぬいぐるみと毛布で，毛布は最近まで使い続けていたが，母親がそのことをあまり良く思わず，彼女はその意向を尊重して捨てない約束でその毛布を実家に送った．

外では全然遊ばない子で，昼休みとかは，大体教室にいた気がします．学校が終わった後に友達と遊ぶとかも全然しなくて，まっすぐ家に．家が学校から遠いので．小学校 4 年生くらいになったら一緒に帰ってくる女の子と一緒にクッキー作ったりとかはしてたんですけど，近所に同級生とかいなかったので．(C)

B さんは首都圏内出身で 3 人兄弟の末っ子であり，両親は共働きであった．彼女の移行対象は夏用のタオルケットと冬用の毛布で，冬用の毛布は匂いが変わりやむなく手放したもの，夏用のタオルケットは現在も使用している．

えっと，なんだろ，真面目．頑固．自分ルールがあって，それを崩されるとなんか，不機嫌になったりしてました．＜自分ルール？＞なんか，布団のしわは嫌いとか，そういう細かいことをいちいち気にするタイプで，ランドセルの中身は，その日の科目の教科書を，1 時間目，2 時間目，3 時間目，4 時間目，5 時間目ってきっちり上から順番に入れるタイプでした．筆箱はここにこうやって入れるとか，給食袋はこうたたんでこれをここに入れてこの順番で入れるとか．それを勝手に誰かが，時間割り揃えたよとか，給食袋セット作ったよとかって，お兄ちゃんとかお母さんとかがやると，一回全部出してもっかいやり直したりとかするタイプでした（笑い）．あと，あんまり家族に甘えない．全部自分でやるとか，すごく体調が悪くても，自分で処理しますみたいな（笑い）．一年生でインフルエンザにかかって，その時お兄ちゃんも一緒にかかったんですけど，お兄ちゃんは助けてーって感じだったんですけど，私は，自分でいつでも吐けるように，ごみ箱とかごみ袋とか持って歩いてました（笑い）．自分でトイレに行くとかして，自分でじーっと我慢してました．(B)

以上の 3 名の語りから，移行対象を所有し続ける者の特徴的なパーソナリティとして，他者との情緒的な交流を苦手とする一面が読み取れた．しかし，わずかな語りであるため，憶測の域を出ない．

第６項　　対極例の検討

本項では,「移行対象によって自己感を強め，個体化を成し遂げるプロセス」の下位カテゴリーや概念に当てはまらなかった語りを検討することで，それらがなぜ筆者の考える理論とは異なるのかを明確にし，本研究が扱う現象が取り得る最大幅と解釈が許容される最大幅を確認した.

まずはじめに,【情動調整の手段としての移行対象】に内包される［怖い場面で増す移行対象の必要性］という概念に当てはまらない語りを検討した結果，乳幼児期以降に使用され始めた移行対象には，この概念が適合しない可能性が考えられた.

続いて,【唯一無二の存在としての移行対象】に内包される［移行対象への命名］という概念を検討した結果，移行対象が一次的移行対象か二次的移行対象かによって，この概念に適合しない可能性が考えられた.

そして,【唯一無二の存在としての移行対象】に内包される［移行対象に対する思いやり］という概念に当てはまらない語りを検討した結果，移行対象にそのような機能を付与する青年期所有者と移行対象との関係は，対人関係の雛形として機能している可能性が考えられた.

さらに,【移行対象による自己効力感の獲得】というカテゴリーや，内包される［移行対象の主体性のなさ］,［複数の役割の担い手としての移行対象］,［必要なときだけに使われる移行対象］という概念に当てはまらない語りを検討した結果，乳幼児期所有者の場合には，“主体性”という概念による説明付け自体が成り立たないような移行対象とのかかわりがうかがえた.

最後に,【移行対象による自己感の強化】に内包される［移行対象による自己肯定感の維持］という概念に当てはまらない語りを検討した結果，社会人と学生という社会的立場の違いが，移行対象に本概念のような心理的役割を付与するか否かの決定因となっている可能性が考えられた.

以下に，これらの内容を詳述した.

［怖い場面で増す移行対象の必要性］における対極例の検討

［怖い場面で増す移行対象の必要性］という概念で括った，特に就寝時の怖い場面での移行対象の使用に関する語りは，協力者 10 名のうち 7 名から得られたものであり，特に毛布を主とする一次的移行対象の所有者に多く語られていた．一方でこの概念に当てはまらなかった語りは，くまのぬいぐるみを移行対象とするＥさんと猫のぬいぐるみを移行対象とするＦさん，らっこのぬいぐるみを移行対象とするＪさん 3 名の語りであった．

しかし，Ｆさんと Ｊさんの場合は，就寝時に移行対象を用いなかったわけではなかった．Ｆ さんはハンドタオル，Ｊ さんはミッキーのぬいぐるみという同時期に所有されたもう一つの移行対象が，就寝時に使用されていた．したがって，Ｆ さんと Ｊ さんの語りは，就寝時に安心感を与えるという移行対象の心理的役割を否定するものではなく，必ずしもこの概念に当てはまらない語りではないと考えられた．また，この語りからは，移行対象が一つだけとは限らず，状況によって目的別に異なる移行対象を使い分ける場合があるということを示唆していた．さらに，Ａ さんや Ｄ さんのように，ある移行対象が消失したことによって新たな移行対象が出現するといった，一時期に一つだけ所有されるものでもないということも推察できた．

次に，Ｅさんの語りを検討する．Ｅさんは，移行対象であるくまのぬいぐるみを就寝時に傍に置くこともあったと語る一方で，必ずそうしていたわけではなく，それがないと眠れないだとか，就寝時などの怖さによって移行対象を欲した経験は思い当たらないと語った．ただし，ここで注目したいのは，くまのぬいぐるみが移行対象として機能し始めた頃の Ｅさんの年齢である．この移行対象は叔母さんからのプレゼントだが，Ｅ さんはもらった当初はあまり大切にしておらず，小学校 2 年生の引越しを機に，不安を鎮める対象として使用するようになった．この事実は，就寝時をはじめとする怖い場面で所有者を落ち着かせ，安心して眠りに誘うという移行対象の心理的役割は，乳幼児期を過ぎて使用し始めた所有者には当てはまらない場合があるということを示唆していた．「就寝」が心理的な負担とならない，母子分離が達成された後で出現する移行対象には，この概念は当てはまらない可能性が考えられた．

しかし，以上のように解釈すると，そもそもの移行対象の定義が乳幼児期の母子分離を促進させる対象物であるために，Ｅさんのように小学生以降に顕在化した移行対象は，「移行対象」という概念に当てはまらない可能性が考えられた．とはいえ，Ｅ さんの語りは，

他の乳幼児期に顕在化した移行対象の所有者の語りと質的に異なるものではなく，他のカテゴリーや概念にも当てはまるものであった．したがって，E さんのくまのぬいぐるみが移行対象か否かという議論は，さらに理論的サンプリングを行い検討すべき課題であると考えられた．

［移行対象への命名］における対極例の検討

心理的な心地よさや身体的・感覚的な心地よさを与え，情動調整の手段として機能する移行対象は，次第に無くてはならない，他のものでは代用がきかない特別な対象物となっていった．それを用いる幼児は，移行対象に自分で名前をつけることによって，移行対象を自分の最初の所有物だと主張しているようにみえた．このように移行対象に名前を付けていたと語る協力者は７名であり，名前をつけていなかったと語る協力者は，夏用のタオルケットと冬用の毛布を移行対象とするＢさんと毛布を移行対象とするＩさん，らっこのぬいぐるみとミッキーのぬいぐるみを移行対象とするＪさんの３名だった．

この対極例の検討には，C さんの語りが参考になった．大人用の毛布と犬のぬいぐるみを移行対象とするＣさんは，犬のぬいぐるみには名前を付けていたが，毛布には付けていなかった．この事実とＢさんやＩさんの語りから，毛布などの一次的移行対象には名前を付けない場合が多いと考えられた．Stevenson（1954）が述べたように，二次的移行対象は一次的移行対象に比べてより人格化されたものであり，人間的な感情が投影されるようになる．したがって，所有者は移行対象に名前を付けるのではないかと考えられた．

しかし，ぬいぐるみに対して名前を付けないＪさんや，かいまきやハンドタオルに名前を付けたＦさんやＧさんは，これらの対極例といえた．外見が人格的である移行対象には名前が付けられ，人間味のない移行対象には名前が付けられないという結論には，さらなる検討が必要であると考えられた．

［移行対象に対する思いやり］における対極例の検討

移行対象は長年愛用されることでボロボロになり，捨てられそうになったり糸がほつれ

て壊れそうになったりした．しかし，所有者の必死の抵抗や母親の修繕行為になどによって，移行対象はその危機を乗り越えていた．このように，失いそうになりながらも手元に残った移行対象は，特別な対象として所有者によって命を吹き込まれ，それ自体に気持ちが付与されるようであった．移行対象を邪険に扱えば，「かわいそう」という気持ちと同時に罪悪感が所有者に沸き起こり，ここで移行対象は，幼児の思いやりの能力を発揮させる対象として機能しているようであった．

この概念で重要な点は，移行対象に怒りをぶつけることによって所有者に罪悪感が沸き起こるということであり，このような移行対象に対する思いやりについての語りは，青年期所有者 3 名（A，B，D）から得られた．移行対象に怒りをぶつけるという語りだけであれば幼少期所有者 2 名（H，I）からも得られたのだが，彼女たちは移行対象に怒りをぶつけたことに対して罪悪感を感じたり，移行対象をかわいそうだと感じたりはしていないという点で，類似例と言えない理由があった．つまり，幼少期所有者も青年期所有者も移行対象に怒りをぶつけることはあるが，そのことで罪悪感が生じるのは青年期所有者だけであった．このことは，幼少期所有者が移行対象をいまだ自分の延長として捉えていることを示唆していた．言い換えれば，移行対象を青年期まで所有し続ける者は，移行対象に罪悪感を感じるまでにそれを客体化しているということがいえると考えられた．幼少期所有者は，移行対象を他者というよりは自分の分身と感じている者が多かったが，青年期所有者は，自分の分身だけではなく遊び相手や戦友といった，良きパートナーとして捉える傾向にあった．これは，青年期所有者が，移行対象とかかわっているときに移行対象を自分とは別の個体としても認識していることを示唆していた．移行対象との関係が，対人関係の雛形として機能し得ることを，所有者の語りからも明らかになった．

一方で，青年期所有者の中にも本概念に当てはまらない者（B，E）の語りを検討すると，彼女たちはそもそも移行対象に怒りをぶつけていないかもしれないということが示唆された．夏用のタオルケットを現在も移行対象として使用し続ける B さんは，イライラすると物に当たる方だと語るも，その標的は B さんにとって「どうでもいいもの」であり，移行対象に気持ちをぶつけることはないと語った．移行対象は「包んでくれる側」であり，B さんが落ち込んだり不安になったときにそれにくるまることで落ち着いたり安心したりする対象なのであった．

このように，同じ青年期所有者であっても，移行対象に時には八つ当たりのように自分の感情をぶつける者とそうでない者がいること，移行対象の側からみれば，怒りに関与す

るものとしないものがあるということが推察でき，これらの違いに関してどのような意味があるのかという点は，今後の検討課題であると考えられた．

［移行対象による自己効力感の獲得］における対極例の検討

長年傍に在り続け，唯一無二のかけがえのない存在となった移行対象は，もはや単なる「所有物」ではなくなっていった．主体性のない移行対象は所有者の思い通りに使用されることで複数の役割を担うようになり，移行対象を思うままに主体的に使用した所有者は自己効力感を得ることができた．その一方で，複数の役割を担うことによって，乳幼児期に絶対的であった移行対象の安心要素という機能は薄らぐこととなった．このような，【移行対象による自己効力感の獲得】というカテゴリーは，協力者 10 名のうち 6 名の語りから抽出された．

このカテゴリーの語りが得られなかった 4 名（F，G，H，J）は，いずれも小学校でそれらを手放した幼少期所有者であった．また，このカテゴリーが内包する［必要なときだけに使われる移行対象］という概念に当てはまらない 5 名（F，G，H，I，J）の語りも全て幼少期所有者によるものであった．このことは，【移行対象による自己効力感の獲得】というカテゴリーが特に青年期所有者に当てはまるものであり，青年期所有者の移行対象には，幼少期に限る移行対象とは異なる機能が付与されているということがうかがえた．しかし，ではその機能がどのように付与されていったのかという部分に関しては，本研究では扱うことができなかった．理論的サンプリングを行い，より詳細な所有者の心の動きや，周囲との相互作用を検討していくことが必要だと考えられた．

また，このカテゴリーが内包する［移行対象の主体性のなさ］と［複数の役割の担い手としての移行対象］という概念について検討すると，両者とも当てはまらないのは I さんの語りのみで，幼少期所有者であっても，F さん，G さん，H さんの語りは，前者の概念を含むものであった．しかし，「移行対象自体に主体性はなく，所有者が思い描く通りに移行対象を使用できる」と定義した［移行対象の主体性のなさ］という概念は，青年期所有者の場合は，「自分が必要なときにその対象を使用する」という意味において語られていたのに対して，幼少期所有者の場合は，「自分が気持ちをぶつけたいときにぶつけられる」という意味において語られていた．つまり，青年期所有者は自分と周囲との相互作用を含めた

「環境－移行対象」という関係においてこの概念を語っていたのに対して，幼少期所有者はあくまでも「自分－移行対象」という関係においてこの概念を語っていた．また，I さん，F さん，G さん，H さんに共通してみられた語りとして，移行対象が「自分の分身」あるいは「自分に近い存在」であるという語りがあった．幼少期所有者にとって，移行対象はいまだ自分との関係しかもたない対象であると考えられた．したがって，自分の中で繰り広げられる世界の中では,「主体性」という説明付け自体が成り立たない可能性があった．ただし，本研究は青年期所有者の語りに比べると幼少期所有者の語りが少ないため，幼少期所有者の語りをさらに集めて豊富なデータを得た上で，これらは議論されるべきであると考えた．

［移行対象による自己肯定感の維持］における対極例の検討

青年期所有者にとっては,幼いころから傍に在り続けた移行対象は「自分の歴史の一部」であり，自分のこれまでの人生と共に歩んできたという移行対象の存在自体が自分を肯定し，励ましてくれる要素となっていた．このような語りは，青年期所有者の中でも，就職している 3 名（A, B, C）の語りに含まれるものであり，大学院生の D さんと大学生の E さんには語られなかった．このことは，社会人と学生という社会的立場の違いが，移行対象が所有者に自己肯定感を与えるという心理的役割を付与するか否かの決定因となっていることをうかがわせると同時に，移行対象が，所有者の置かれた状況に応じて，その心理的役割を変えたり増やしたりするということが示唆された．特に社会への新参者でもある後青年期（post adolescence）（Blos, 1962）の女性にとっては，移行対象の「自己肯定」という機能が大いに役立っているようであった．ただしこの考察を裏付けるには，協力者のパーソナリティや社会的背景をも含んだ,より客観的なデータが必要になると考えられた．また，本研究で得られた青年期所有者の語りは 5 名と少なく，論理の飛躍を避けるためにも，より多くの語りのデータからさらなる分析を行う必要があると考えられた．

第７節　考察

結果より，幼少期から青年期にかけての移行対象の心理的役割が明らかとなり，その心理的役割は，所有者の発達段階に伴って変遷していくことが示唆された．

本節では，はじめに移行対象の心理的役割の変遷について，①乳児期，②児童期，③思春期・青年期に分けて考察する．続いて，先行研究で定義される乳幼児期に限定される移行対象と，本研究が対象とした青年期まで継続して使用される移行対象について論じる．最後に，従来の移行対象概念では見落とされていた移行対象の機能について考察する．

第１項　　移行対象の心理的役割の変遷

移行対象が情動調整の手段として用いられる乳幼児期から，自己感を強化し個体化を促す機能を担うようになる青年期までのプロセスをまとめて，図 3-3 に示した．本項では，その詳細について，①就学前の乳幼児期，②小学生時代に当たる児童期，③中学生以降の思春期・青年期という発達段階に分けて述べることとする．

乳幼児期における移行対象の心理的役割

乳幼児期の移行対象に関する語りとしては，その対象の感触や匂いなどによって安心感を得られるといった，より生理的で身体的な要素が中心であった．この感覚は乳幼児期以降であっても同様に感じられるものであり，既に移行対象を手放した者にとっても，同じ匂いや感触に出くわし，それらを嗅いだり触ったりすると思い出されるものであった．つまり，移行対象の感覚的・心理的な心地よさは，手続き記憶のように，「自分の中にある」感覚として感じられるものだと考えられる．関係性に現実感をもたらしてくれるのは，原初的知覚としての力動感（vitality affects）であり，原初的知覚の最大の特性は，当事者自身の身体性に依拠した感性であると言われる（小林・遠藤,2012）．身体性の衰弱（齋藤,2013）がコミュニケーションを通じた他者との安定した関係や一貫性のある自己の維持を困難にし，自立を遅らせていると考えられることから，移行対象による身体性の感覚

は，自己の確立を促すものである可能性が示唆される．

また，この頃の移行対象は主に就寝時に用いられ，周囲が見えない「真っ暗」という状況での「独り」という恐怖体験が，移行対象使用の契機となっているようである．ここでは，母親を主とする養育者からの分離がテーマとなっており，先行研究が明らかとしたような，一者関係のように見える段階（主体性のある母親を認識していない段階）から二者関係の段階へ移行することを促す対象として，移行対象を位置づけることができると考えられる．必ずしも望み通りに振舞ってくれない（万能感を感じさせてくれない）母親との間で葛藤が生じたときに，かつての母－子のユニットとしての体験へと退却することを促し，万能感を与えて慰めてくれる対象が，移行対象であると推測される．

幼児期に入ると，移行対象を特別な存在であると意識し始め，名前を付けたり，遊び相手としたりして，強い所有感を持ち始めることが明らかとなった．加えて，叱られたときや一人で遊んでいるときなど，「使いたい時に使う」ことができるようになる．Blos（1971/1962）によると，不安を調節する機構は，早期に両親（特に母親）によって形成され，部分的に子どもによってひきつがれ，進行的に子どもの意思に従うようになるとされる．この時期に至って，移行対象は所有者である子ども自身のニーズで使用されるようになるのだと考えられる．

以上より，乳幼児期，特に乳児期の移行対象の心理的役割としては，生理的な部分が色濃く，母親との分離を促す対象として機能していることが示唆される．これらの機能は，乳児期以降は感覚的・心理的な「心地よさ」として体験されるもののようである．そして幼児期には，移行対象に強い「所有感」を持ち，自分が必要だと感じた時に，その機能を発揮させることができるようになっていくと考えられる．

児童期における移行対象の心理的役割

児童期における移行対象とのかかわりにおいては，移行対象が inner と outer を併せ持つといった「二面性」（例えば，一人で持っているときは犬だが，周りに人がいる時はモノとなるというような移行対象との関係）の語りが出てくるようになる．このような移行対象の主体性のなさによって，次第に様々な役割が移行対象に付与されるようになる．すると，今度は，「移行対象＝安心」といった方程式だけが，移行対象に当てはまるわけではな

いということが実感され，移行対象の物的存在さえあれば万事うまくいくという心性は薄らいでいくと考えられる．しかし，移行対象の機能が薄まったわけではない．小学校に入学するこの時期は，家族以外の他者と過ごす時間が多くなり，自分の思い通りに物事が進まないという経験も多くなると考えられる．そのような状況下では，所有者自身が主導権を持って移行対象を使用できるという体験自体が，自己効力感の獲得へとつながると推測できる．

また，他者と過ごす時間が増え，社会性が求められるような時期における移行対象とのかかわりの中では，社会で生きていく上で糧となるような体験が語られている．それが，ボロボロになった移行対象を修繕したり，失くした移行対象を捜索して発見したりするといった体験である．このような，対象が何度も壊れたり失われかけたりしたとしても，そのたびに回復することができるといった体験は，安定性の起源となる外界が存在するという感覚を発達させることにつながり（Grolnick，1998/1990），物事は修復できるという感覚の獲得にもなるだろう．また，八つ当たりの相手とした移行対象に罪悪感を感じる体験は，思いやりを持って他者に接するという体験へと通じることが推測される．

以上より，児童期における移行対象の心理的役割としては，安心要素といった乳幼児期においての機能はそのままあり続ける一方で，様々な役割を付与されることによって，自己効力感の獲得を促す対象として機能するようである．また，移行対象が在り続けたり，思いやりを持って遊んだりする体験は，社会性の獲得を促すもの，あるいは社会性が獲得されつつあるその芽生えとして捉えられる可能性が示唆される．

思春期・青年期における移行対象の心理的役割

青年期所有者の語りから，思春期・青年期では，幼少期以降持ち続けている移行対象を使用することで，一貫したまとまりのある自己を再確認し，自己感を強め，個体化を促している様が感じられる．

Blos（1971/1962）は思春期を五つの時期に分け，固有の思春期である思春期中期を中心として各時期の特徴を明らかにしている．そして，思春期は，身体的変化によって最も顕著に特徴づけられ，複雑な個性化の段階，すなわちErikson（1973/1959）のいう同一性の形成が行われる時期であると論じている．乳幼児期においての移行対象の機能は，生得的

な衝動のようなものと関係を持つような欲求を満たして万能感を与えてくれる母親からの分離の促進にあり，児童期を経て自己感を強める機能を新たに備えた移行対象の機能は，社会へ出て行く青年期において，家族という概念を含んだ環境としての母親からの分離を促進させ,個体化を促すものとして発揮されると考えられる.幼少期の移行対象の機能が，社会や親の要請する望ましさや自身の欲求を満たすこととの関係において，内的衝動を統御して現実との間を調整するような役割を担っているのに対して，青年期の移行対象の機能は，自己価値（self-esteem）や自己評価（self-evaluation）に重きを置いた所有者自身の理想と現実との間を調整するような役割を担っているのではないだろうか．青年期では，かつて親に帰属した信頼感は自己に帰属されたものとなるために，移行対象の自己感の強化という機能は，青年期所有者にとって力強い助けになると考えられる．

心理社会的発達論において発達段階を８つに分けたErikson(1973/1959)は,青年期を,「自分が自分であると感じる自分に比べて，他人の目に自分がどう映るかとか，それ以前の時期に育成された役割や技術を，その時代の理想的な標準型にどうむすびつけるかといった問題に，時には病的なほど，時には奇妙に見えるほどとらわれてしまう．そして新しい連続性と不変性の感覚を求めて，ある種の青年たちは，子ども時代の危機の多くと改めて戦わねばならない」と述べている．子ども時代を終えて大人として社会に出る時期に，「本当の自分とは何か」をテーマとし，自分自身に対しても他者に対しても，自分は自分であるという確固たる自信を持とうとするのである．同時に，この時期は病的なほど慎重になり不安になる．ただでさえ安心できにくい状態である上にさらに困難な状況が生じると，自分で自分がわからなくなり，さまざまな形で逃避を企てるようになる．これをErikson（1973/1959）は「同一性の拡散」という言葉で論じた．同一性の感覚（sense of identity）は，子どもが個体として外界の対象とともに，世界の中に存在することを意識したときから始まるとされ，このような同一性の感覚は，自己の表象に裏付けられ，個人の内的独立性と連続性を保持する自己意識の中核をなすものとされる．その意味では，幼少期から一貫して「自分の所有物」として機能し続けてきた移行対象は，まさに同一性の感覚を与えてくれる存在であると考えられる．したがって，青年期における移行対象の使用は，同一性の感覚を得られるという意味で，発達的にみても適応的であることが示唆される．

また，幼少期に頻繁に使用していた移行対象は，青年期所有者にとっては幼少時代の象徴でもある．この事実は，否応無しに自身の成長，すなわち自分が子どもではないことを

実感させられる機会となり,子どもと大人の間で苦悶する体験へと発展する.したがって,「子どもの象徴」として機能する移行対象には，子どもから大人へ移行する青年期の発達課題である，親からの心理的独立や自我同一性の確立の危機に直面させることを促す役割も担っていると考えられる．Erikson（1973/1959）は，青年の自我が発達していくには，必然的にこの危機に直面しなければならないと述べている．したがって，ここでも青年期に移行対象を使用することの適応的な側面が推察される．

第２項　　手放されない移行対象の心理的役割

先行研究で示されているように，Winnicott（1953）が概念化した移行対象は6，7歳には手放されるものであり，それは宗教や芸術といった文化的な活動へ展開し拡散していくものと考えられている．このように移行対象が手放されることを前提とする理論では，重要なのは移行対象という対象物ではなく，移行対象が存在した「空間」であると言える．移行対象が存在した領域，すなわち内的主観的世界（inner）と外的客観的現実（outer）との間の中間領域を体験できることが，健康的な精神活動につながると考えられている．Ogden（1996/1986）は，中間領域である可能性空間（potential space）での体験は幻想と現実との弁証法的対話であり，幻想が優勢になって外的世界を呑み込んでしまい，主観に左右されて外的な現実を体験できなくなってしまったり，外的現実が優勢となって主観的な体験ができなくなってしまったりするような可能性空間の崩壊は，幻想と現実との想像的響き合いが損なわれた姿だとしている．我々は，感情や情緒と結びついた主観的世界が外的現実にうまく反映されてこそ，あるいは外的現実が主観的世界を裏付けてこそ，健康な現実感覚を生きることが可能であると考えられるが，この主観的世界と外的現実のかけ橋が，移行対象が存在した中間領域である．Winnicott（1953）は,「健康な個人は結局孤独になるし，他人の存在は（うまくいっても）永遠の存在になるほどに内在化されない．結局我々のほとんどは，過度な内在化と外在化の均衡を得るために，現実の遊び仲間や仕事仲間を必要とするのである」と述べている．したがって，中間領域の萌芽である移行対象は重要な現象であり，言い換えれば，中間領域で自由に文化的活動ができてしまえば，その存在は必要とならないと言える．

以上より，幼少期に限定される従来の移行対象概念においては，移行対象の心理的役割

は,中間領域を体験することで健康的に内的主観的世界(inner)と外的客観的現実(outer)の緊張を解決して両者の均衡を保つことにあり，突き詰めればそれは「一人でいられること」，すなわち母子分離の促進にあるといえる.

しかし，幼少期の移行対象を手放さずに継続して使用する青年期所有者の語りは，移行対象が所有者の発達に応じて新たな機能を持つようになることを示唆している．このことから，移行対象は必ずしも手放されて文化的活動へ拡散していくもの，拡散していかなければならないものではなく，所有者が移行対象の心理的役割を見出したその瞬間に，移行対象は発見され続けるものであると考えられる.

Grotevant と Cooper（1985）は個体化過程について，独自性（individuality）と結合性（connectedness）の二つの概念で説明し，青年期の親子関係は必ずしも分離が必要ではなく，個体化は家族との情緒的結びつきを維持しつつ，相対的に一方向の権威的関係から，相互的な関係に変容することを通して形成されるとしている．また，Allen ら（1994）は，青年期の重要な発達課題は親との良好な関係を維持しながら自立を達成することである，ということが徐々に認識されてきていると指摘する．日本の文化風土としては，自律的な個人が，被保護の必要性が消失してもなお安全基地としての他者のもとに留まり続けるということへの許容性，あるいはむしろ積極的にそうした状態を選好する傾向は相対的に高いと言える（小林・遠藤，2012）．すでに述べたように，分離―個体化には依存が伴うものであり，「甘え」文化（土居，2007）である日本においては，青年期においても幼児期の重要な他者への依存が顕在化して現れやすいと言えるかもしれない．実際に，子どもの養育者へのアタッチメントの示し方を観察した，短時間の母子分離を伴う実験において，日本ではうまくいかない可能性が報告されている（Miyake, Chen, & Campos, 1985 ; Takahashi, 1986）．養育者が目の前からいなくなるという実験によってかかるストレスが，母子分離を日常あまり経験することのない日本の子どもには過大であり，そのために個々の子どもの日常本来のアタッチメントの質が結果には反映され得ない可能性があるためである（Takahashi, 1986, 1990）．したがって，養育者との分離が積極的に経験されない日本においては，移行対象を手放す時期も相対的に遅くなり，幼少期のあいだに移行対象を手放すか否かといったことは問題とならないのではないだろうか．むしろ，分離の脅威が強い日本の子どもにとっては，養育者との関係を体感することができ，自己感の強まりを感じさせてくれる移行対象の存在が，乳幼児期以降の自立すべき時期においても必要とされることは想像に難くない．本研究では，すべての協力者が移行対象の存在を肯定する家族と

のかかわりについて語っていることから，養育者との肯定的な関係を体感できる移行対象の存在が,乳幼児期以降の自立すべき時期においても必要とされる可能性をうかがわせる.

第３項　　自己の確立に寄与する移行対象概念

青年期以降も幼少期の移行対象が必要とされるのは，分離不安が特に脅威となる可能性がある日本の文化的背景や,「自己感の強化」という乳幼児期の移行対象には無い新たな心理的役割が存在するためであるかもしれない.「自己感の強化」は，移行対象を使用することで得られる自己肯定感に由来し，そこには家族との関係性が内包されることが想定される.「移行対象の存在を肯定する家族とのかかわり」という概念は，青年期所有者が現在の移行対象の使用について語る際に特に多く語られたものではあるが，乳幼児期から児童期にかけても,家族,特に母親との移行対象にまつわる語りは随所にみられた.この語りは，移行対象が純粋に所有者個人だけから考察できる概念ではないのと同時に，それが所有者自身あるいは家族の誰かといった特定の対象者を象徴したものではないことを示唆している．移行対象は，所有者とその家族との相互作用を含んだ関係性の現象であり，それは母親あるいは所有者の象徴というよりも，そこでの家族間のかかわりや関係そのものであると考えられる.

石谷（2007）は，自己と他者（社会）は相互に影響を与え合い，一方の発達や展開なくして他方の発達や展開はあり得ないとして，自己と社会との不分離・不可分の関係を述べている．また，個人には間主観的なかかわり合いを希求する動機づけと，自己というまとまりを組織し自己を主体として維持発展したいという動機づけの両者が働いていることを指摘している（石谷，2007）．本研究で提起したい移行対象の新たな心理的役割は，まさにここに現れてくる．すなわち，児童期以降の移行対象には，家族以外の他者との交流の中で，個人が自己と社会とのバランスを欠いて葛藤状態に陥った時に，自己感を強化して，その緊張を適応的に調節していく役割があるのではないだろうか.

青年期の自己の多面性を実証的に検討した木谷・岡本（2018）は，現代の青年について，適所を選択し，重要他者からの承認によって内的な同一性と社会的な同一性を確立するErikson（1973/1959）の在り方と，それぞれの場面に応じて自己を変化させ，異なるアイデンティティを形成する辻（2004）の在り方の２つのタイプの存在を認めている.個人は，

自己としてのまとまりを維持したいという欲求と，社会人として外的現実に折り合いをつけて社会に貢献したいという欲求を両方とも持ち合わせており，それは日常の様々な場面でその比重が変化しているのかもしれない．このようなことにエネルギーを要する青年期において，移行対象は，社会への適応と自己感の維持との均衡を保つために機能している可能性が示唆される．

人は自分とつながることで人ともつながることができるものであり，一貫した自分や主体としての「自分」があるという感覚が人を支える（田中，2009）．社会人として活躍することが自他共に求められる青年期では,社会との関係性を維持する方の比重が大きくなり，自己のまとまりや一貫性に揺らぎが生じることも多くなると考えられる．このようなときに移行対象を用いることで，かつて両者共に満たしてくれた家族との関係性の中に再び浸ったり，幼少期からずっと側にいる移行対象によって自己の一貫性を味わったりして自己感を強化することで，独自の主体としての個に至る過程を促すことができるのではないだろうか．すなわち，青年期に用いられる移行対象には，自己と社会のあいだで葛藤状態に置かれた個人の自己治癒的な側面が示唆される．

第８節　課題と展望

本研究は，移行対象を所有する者の語りを質的に分析することで，移行対象の心理的役割が発達段階に伴って変遷していく様を明らかにした．移行対象は従来の乳幼児期の母子分離のみにその役割があるのではなく，その後も様々な心理的役割が付与されながら，青年期においては子どもから大人への自立を促すような，自己の確立と補助の役割を担うことが示唆された．しかし，質的な移行対象研究が数少ない中で，本研究の示唆は理論化には不十分であると言える．本研究における課題と展望を以下に述べる．

本研究は，量的なデータを扱った研究に比べると，協力者数の少なさや筆者の主観的な分析が課題として挙げられる．一方で，協力者数の少なさについては，一人一人の語りを丁寧に拾い上げて分析に生かすことができたという点で利点ともなるだろうし，筆者の主観的な分析については，第５項で述べた方法で，妥当性や信頼性の確保に努めてきた．もちろん，本研究が提起した理論を一般化するためには，幅広くより多くの協力者を募って研究しなければならないし，より分析の質を高めるには，複数の研究者と共同で行うこと

も有効であり，これらの課題は筆者自身が分析を進める過程で感じたことである．

また，協力者の語りにおいて，児童期から思春期に当たる小学生時代や中学生時代の語りが他の時期に比べると少なかったことは，単純に筆者がその頃の語りを引き出せなかったからなのか，その頃に移行対象があまり使用されなかったからなのか定かではない．今後，児童期や思春期に焦点を当てた移行対象研究が行なわれることで移行対象概念への多角的な示唆が得られ，より豊かな考察が行なえると考えられる．

また，青年期頃になると，移行対象は親友や恋人などの「人」や，「宗教」，「芸術」といった文化的活動に発展していくとされている．本研究における青年期の移行対象所有者も，自己を保障し補助する誰かあるいは何かに出会ったときに移行対象が手放されるのかもしれない．言い換えれば，本研究の協力者にとって自己を保障し補助してくれるものが，現段階では家族との関係性を含んだ幼少期から継続している移行対象なのだと考えられる．したがって，家族からの自立を達成する時期には，移行対象の心理的役割がどのように変化するのか，あるいは変化しないのか，あるいは手放されているのかといった事柄は検討課題と言える．

さらに，協力者の性質，背景についても課題である．まず，より一般的な理論とするためには，女性だけでなく男性をも含めた研究が求められだろう．また，先行研究（Bachar et. al., 1998 ; Erkolahti et. al, 2009 など）が示唆したように，移行対象を所有し続ける者のパーソナリティの特徴についても客観指標を用いた検討が必要であると考えられる．移行対象が特定のパーソナリティ特徴をもつ者に継続して所有されるのだとしたら，Downey（1978）が述べたように，幼児期の移行対象と思春期以降の移行対象は質的に別物であり，青年期まで継続される移行対象は，「移行対象」という概念名も改めなくてはならないかもしれない．

第３部

第４章　自己の臨床

― 母子関係の促進と理解のための移行対象 ―

第１節　はじめに

第１項　　重要他者との肯定的かかわりの重要性

自己を補助し，自己感を強める移行対象には，幼少期からの肯定的な家族との関わりが内包されていることがこれまでの研究により示唆された（図 4-1）．自立した個人としての自己の確立には，幼少期からの家族といった重要他者との肯定的なかかわりが影響を与えていることが推察される．これは，第１章で概説した，自己の発達における諸概念を裏付けるものであり，重要他者とのあいだに肯定的なかかわりがあるからこそ自立できる，というプロセスを示していると考えられる．先行研究では，古市（2008）が自閉症男児の事例を用いて，移行対象が自己を支えるとともに，移行対象を共有しようとする他者の存在が心理的発達を促すことを報告している．また，屋宮（2008）は，長期不適応状態だった学生達のサポート・グループの展開を検討するなかで，サポート・グループが，学生達の未解決の自立の課題を達成するための移行対象の役割を担っていたことを考察している．移行対象は，重要他者との肯定的かかわりのもとで現れ，また，そのかかわりを促進することで自己の確立に寄与していると言える．

Arkema（1981）は，境界性人格障害の患者は幼児期に移行対象を経験した割合が低率であることを報告しているが，Horton ら（1974）や Lobel（1981）も，人格障害者，特に境界性人格障害者が移行対象を所有していない傾向を明らかにしている．近年も，抜毛症の患児に移行対象の経験がなかったことが報告されており（Keren,2006），移行対象研究の知見の臨床的応用が期待できる．第１章より，移行対象の発現機序は環境における必要性と子どもの表現能力（図 4-2）であると仮定される。そのため，何らかの精神的な不調を抱えて相談機関を訪れる子どものうち，移行対象を持ち得ない子どもの場合には，表現能力の低さがその不調の個人内要因として示唆されるかもしれない．したがって，支援者が子どもの自己を支え，内的な気持ちを外へ表現する媒介者としての移行対象の役割を担うことが，支援に役立つ可能性が考えられる．

Arthern と Madill（1999,2002）や Volkan と Kavanauh（1978）は治療中に移行対象が現れた症例を報告し，治療のプロセスの中で重要な働きをしたことを考察している．井原（1987）は，母子関係が修復されるにつれて移行対象が出現することを指摘し，移行対象には子どもから母親への合図（sign）としての機能があり，この sign によって生まれる母

子間コミュニケーションが，子どもの表現につながることを示唆している．

また，Kerns（2008）によれば，児童期のアタッチメント対象は依然として養育者のままであることが圧倒的に多いとされる．そのため，特に子どもの臨床において，日常場面での重要他者である養育者と子どもの関係を良好に保っておくことは，予防的観点からも重要であると言える．具体的には，子どもが支援者，すなわち移行対象とのあいだで獲得した自己表現を受容し，さらに発展させる他者としての機能が養育者には求められると考えられる．そこで，子どもと養育者の関係性に焦点を当てたアプローチは，支援者が移行対象として機能することと併行して進められる必要があると言える．すなわち，支援者が媒介者（移行対象）となり親子関係を良好に保つことで，子どもが移行対象を創造し，利用できる環境はつくられると考えられる．

重要他者である養育者との肯定的関係を支援する心理療法としては，アタッチメント理論に基づくものが挙げられる．これらの支援の根拠は，健全なアタッチメント形成が子どもの発達や精神的健康に長期的で重大な影響を及ぼすという知見である（Nelson & Zeanah, 2014）．アタッチメント研究では，養育者のアタッチメント・スタイルが養育行動に影響し，子どものアタッチメントの質に寄与すると仮定されており，子どものアタッチメントを健全化するためには，養育者へのアプローチが介入の焦点となる．北川（2013）は親子関係支援のプログラムとして，敏感性に焦点づけた介入，内省機能に焦点づけた介入，作業モデルと養育行動を扱う介入を紹介している．しかし，いずれも欧米のモデルであり，実施も複雑で，日々の臨床で実践することは容易ではない．

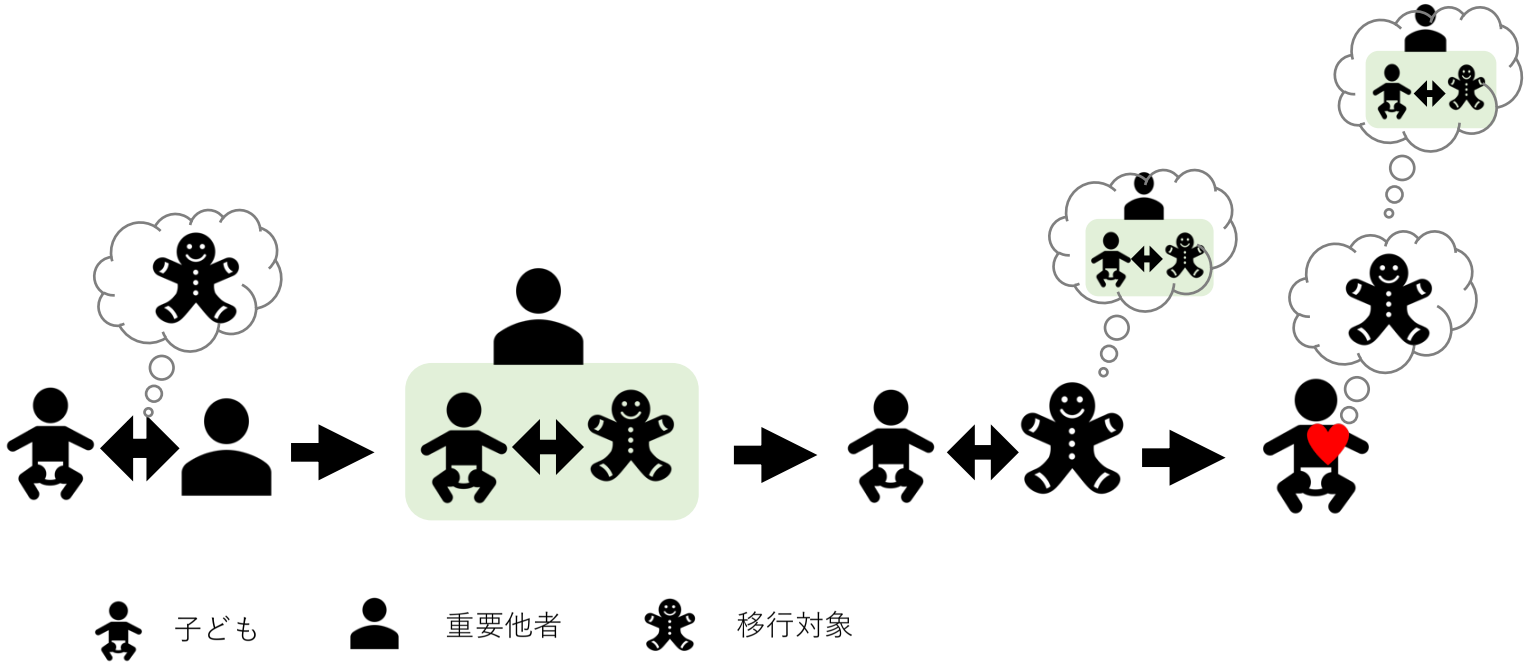


図4-1 移行対象が自己の確立に寄与するプロセスのイメージ

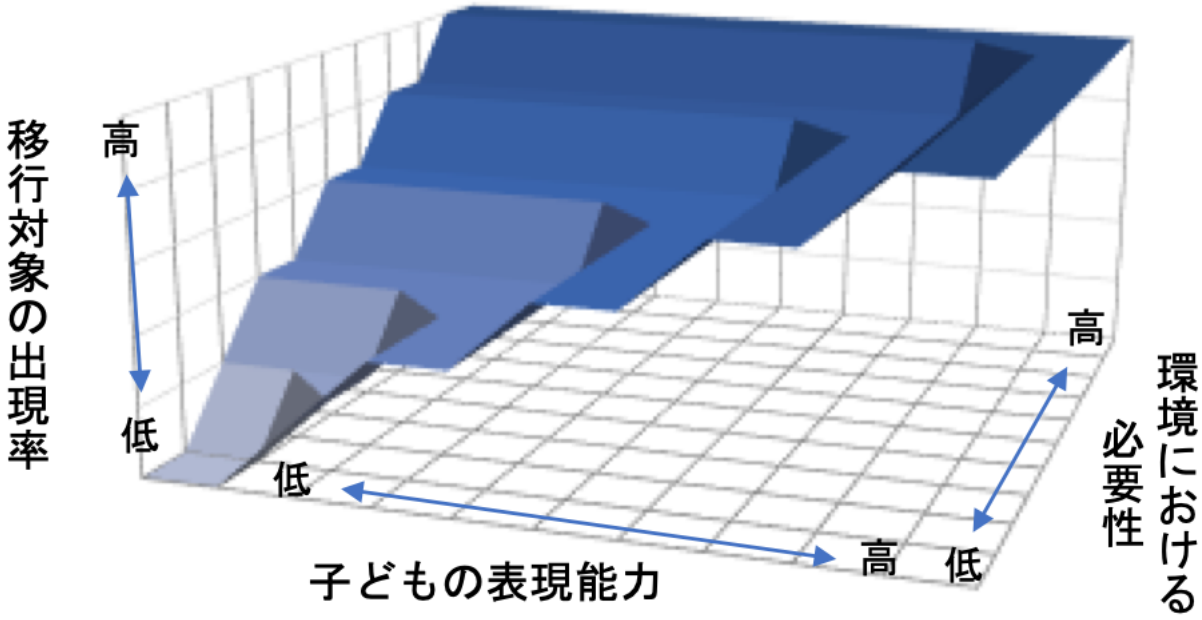


図4-2　移行対象の発現機序

第２項　　移行対象概念とアタッチメント理論の援用

筆者は，希薄になりつつある「自己」を支え，自立の前提となる「自己の確立」へと導く支援が，個人の成熟と社会の要請の不一致が生じる現代社会において必要とされていることを踏まえ，「自己を確立するための支援」について検討してきた．ここで，「自己の確立」を定義する際に援用した理論の一つにアタッチメント理論があり，重要他者との関係性を可視化できる対象物である移行対象から，重要他者との関係性が「自己の確立」に寄与することを実証した．移行対象は，乳児の母親への強烈な依存性が弱まっていく母子分離時の移行期に見られる，母親との分離不安を和らげるための物理的な愛着対象というばかりでなく，自己への肯定的な働きかけ[4]により所有者の揺らいだ自己感を支え，慰めてくれる対象としても機能し，「自己の確立」に寄与しているものと考えられた．すなわち，移行対象は「養育者の代理」というだけではなく，「自己を補助するもの」として自己の確立に寄与し，個人の成長をサポートしていると考えられる．

そこで，本章では，移行対象の機能を支援者が担うという形で臨床場面に応用することで，問題を呈した子どもと，子どもの重要他者との関係性にアプローチする介入について検討した．提示した臨床場面は，第２節では摂食障害，第３節では発達障害の子どもたちの症例から抜粋した．これらの症例は，他者との関係不良が症状悪化に影響を与えていると推察されることが共通しており，自己を補助する移行対象を必要とする環境でありながら，移行対象を見出すまでに気持ちを言語化する能力が不十分であることが推察された．症例の子どもたちは，個人の成熟と社会の要請の不一致に対して折り合いをつけることに困難をきたしていた．こうした「自己の確立」が難しい症例において，移行対象が現れる場をつくることの治療効果を検討したい．

第２節　神経性無食欲症３症例への介入

第１項　　はじめに

[4] 移行対象の所有者が肯定的な家族とのかかわりを想起することにより，移行対象そのものが肯定的な働きかけをおこなっているように感じられる．

神経性無食欲症（anorexia nervosa；以下，AN）は，生物―心理―社会的因子の相互作用による多因子疾患と考えられている．AN の治療においては，いかなる治療法についても大規模な無作為割付比較試験における効果は示されていないが，対人関係療法（interpersonal psychotherapy）や再養育療法（reparenting therapy）のように，AN の症状に安心を求めて「痩せ」にしがみついた結果と捉えて，安心の提供を治療の必要条件とする治療法が効果をあげている（日本摂食障害学会,2012).

AN 患者の強烈な不安感は対人関係での安心感が得られないことに由来すると考えられているが，この点について，再養育療法では乳幼児期の母親の情緒応答性（emotional availability）の機能不全によって，子どもが早期に自律せざるをえなかった状況が影響しているとする（日本摂食障害学会，2012)．母子関係の問題が AN の心理的要因の 1 つとする報告（Bruch，H.，1979 ；馬場・吉田，1984 ；石川ら，1960 ；梶山，1992）は，この影響を裏付けるかもしれない．また，対人関係療法を AN の治療に導入した水島（2010）が主張する,「自分一人で努力すれば何とかなる」という AN 患者の強迫的な思考も，他者に助けを求められないという点では同様であると考えられる．対人関係療法では，自分一人で何とかしようとする孤独な強い思いが否認傾向を強めて症状を強固にすると考えるが，AN 患者が心理的な葛藤を強く否認する傾向はこれまでも報告されており（加嶋ら，2002；高橋，1994)，患者自身による不安の隠蔽は病識の欠如につながり，治療困難の要因になると考えられている（松木，2008)．信頼できる他者との間で不安や怖れなどの情緒的混乱を調節する仕組みを持ち得ず不安自体を否認するという AN 患者の心理特徴と，安心の提供が AN 治療の必要条件となることからは，AN 患者が重要他者との関係性に困難をきたしていることが示唆される．加えて，ちょうどよく他者に依存できずに破綻をきたすという点においては，まさに自立の問題を抱えた疾患と言える．自己のまとまりを補助し，自立を促す移行対象を必要とする環境でありながら，移行対象を見出すまでに気持ちを言語化する能力が不十分であり，表現されなかった気持ちを否認することで対処した為に症状を呈したことが推察される．

Zeanah ら (2000) は，このような重要他者との関係性の問題を，特殊な環境のみならず，広く特定の養育者が存在する状況で発生し得るものも含めて，より包括的に理解すべきだとして，反応性愛着障害（reactive attachment disorder）にあたる最重度のアタッチメントの障害に，アタッチメントの問題を持った乳幼児の臨床記載である安全基地の歪み（secure base distortions）を加える形で構成された診断基準を提唱している．安全基地

（secure base）に歪みが無ければ，子どもは探索行動を行う際に，不安になると養育者の元に戻り，安心感が得られると再び探索行動に出かける（図 4-3）．一方で，安全基地に歪みがあると，養育者へのしがみつきが強かったり，養育者に過剰に服従したり，危険な行動を敢えてとったり，養育者の役割を自らが担うなどして，探索行動が妨げられる（Boris & Zeanah, 1999）．上述の AN 患者の心理特徴からは，AN がアタッチメント障害であることを示唆している．

アタッチメントとは，生物学的にプログラムされたシステムであり，「個体がある危機的状況に接し，あるいはまた，そうした危機を予知し恐れや不安の情動が強く喚起された時に，特定の他個体への接近を通して習慣的な安全の感覚（felt security）を回復・維持しようとする傾性」と定義される（数井・遠藤，2005）．アタッチメント・システムの機能は 2 つあり，①人が心理的安全感，すなわち安心感（feeling secure）を得ることと，②アタッチメント対象となった個体の保護(care giving)行動を引き起こすことである(Bowlby, 1995/1973)．ボウルビー（1995/1973）は，アタッチメント・システムの活性化水準が上がった時の多様な経験により，個人の中に形成されるアタッチメント対象の利用可能性（availability）の予測が個人の恐怖に対する過敏性を左右すると論じ，この予測を「作業モデル（working model)」という概念で示した．つまり，アタッチメント・システムそのものは生物学的にプログラムされたものであるが，作業モデルは個人の自己および他者表象に由来するものであり,心理的アプローチにより変容可能な部分といえる(林,2010)．なお，利用可能性とは，対象が近接可能（accessible）であることと応答性（responsive）があることの両者を含んでおり，Ainsworth ら（1978）は，アタッチメント対象の単なる不在ではなく，利用可能性が欠如している時に分離不安（separation anxiety）が生じると述べる．したがって，アタッチメント関係に安心感がある （secure）ということは，接近可能で応答的なアタッチメント対象がいるということである（図 4-4）．一方で，非安心（insecure）であるということは，危機的な状況において，アタッチメント欲求が意識的に抑制されたり無意識的に抑圧されたりして抑え込まれるか，あるいは逆に過剰に高まるために適切なアタッチメント行動を取ることができず，接近を回避したり過剰な接近をしたりして，その結果アタッチメント対象から保護的な行動を引き出すことに失敗し，安心できないということを指している（林，2010）（図 4-5）．

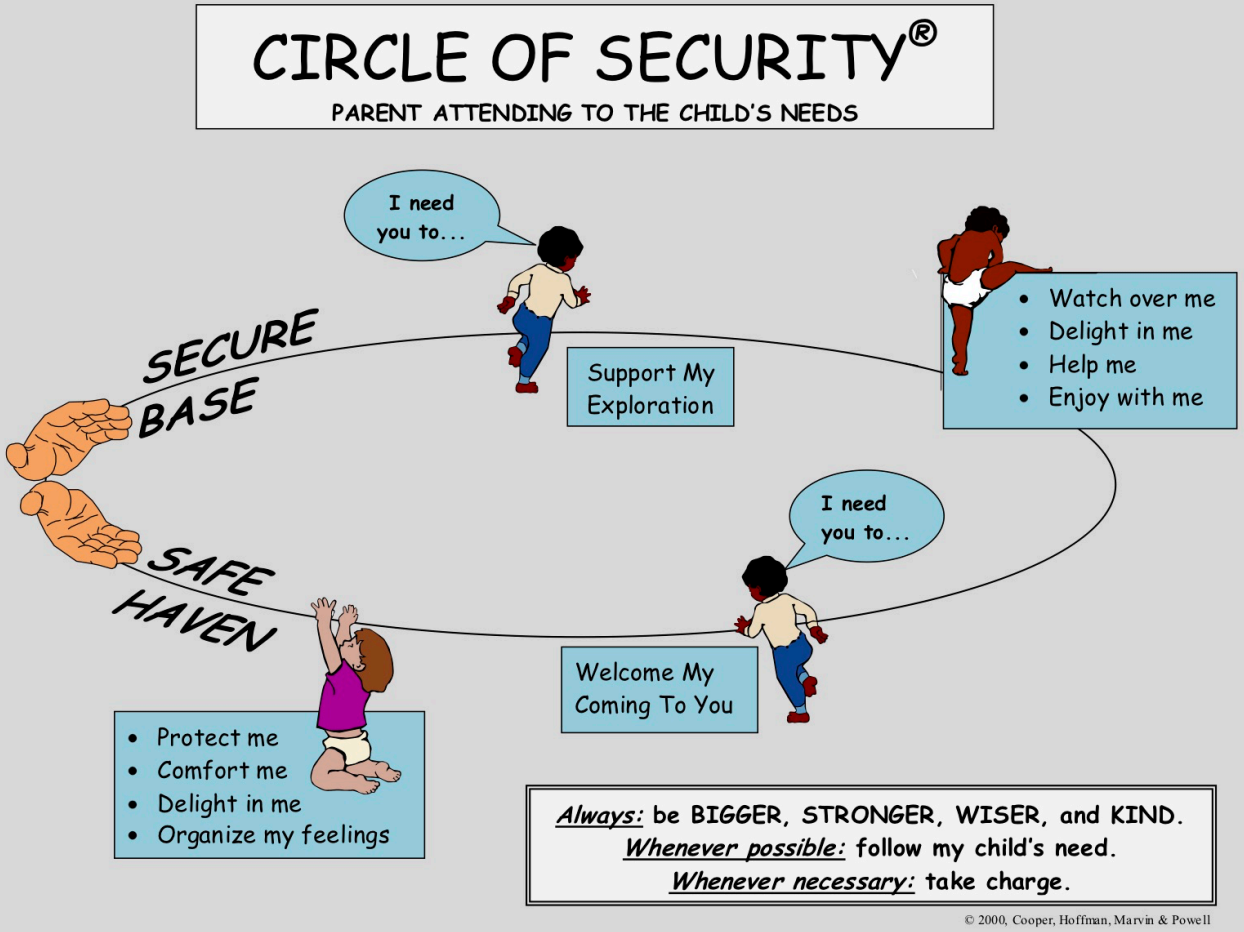
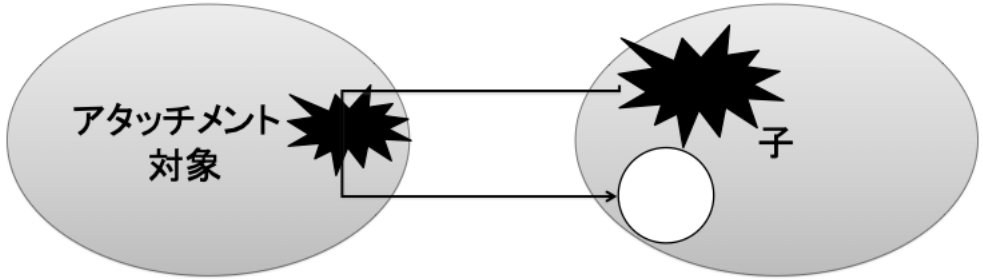


図4-3 安心感の輪（http://circleofsecuritynetwork.org/the_circle_of_security.html）



アタッチメント対象が利用可能（availlable）であり、接近すると保護されるため安心感（feeling secure）が得られる

✸は不安な情緒をあらわし、◯は安心感をあらわす

図4-4　安心感のある（secure）アタッチメント関係

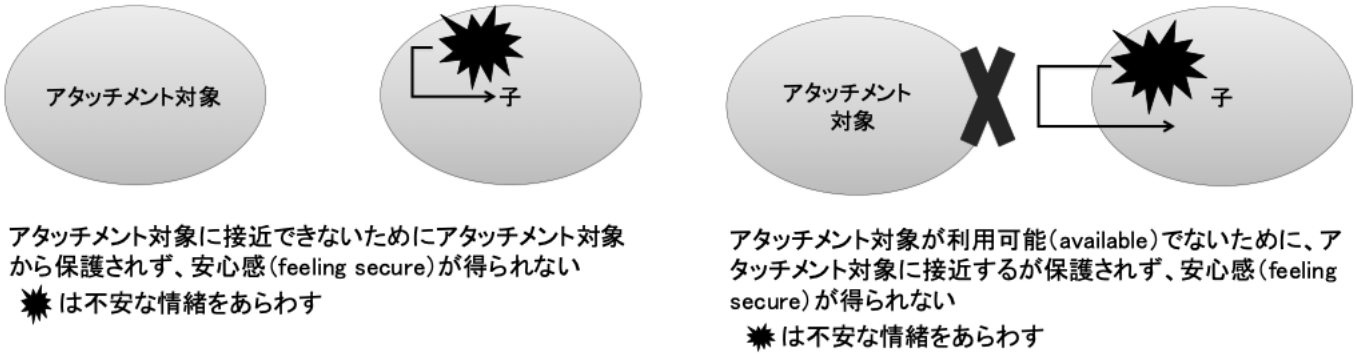


図4-5　安心できにくい（insecure）アタッチメント関係

第２項　　目的

AN を重要他者との関係性の障害とみれば，重要他者，すなわちアタッチメント対象とのあいだに安心感のあるアタッチメント関係を築くことが治療目標となる．児童思春期の主なアタッチメント対象は身近で世話をしてくれる養育者である．摂食障害治療ガイドライン（2012）においても，児童思春期の場合は家族への心理的対応に効果があるとされている．特に小児科において治療に家族が参加することは基本であり，安心の提供が養育者，とりわけ母親になる場合が多い．そこで，本研究においては，重要他者として母親を位置づけ，AN 患児と母親双方へ，子どもの自己感を築き支える土台となる，安心感のある肯定的な関係性を築くことを目的とした介入をおこなった．その際に支援者は，母子間の相互作用を安心感のあるものにするために気持ちの表現の媒介者となり，母子の不安を慰め，自己のまとまりを補助する移行対象の機能を担うことを意図した．

第３項　　対象と方法

対象は DSM-Ⅳにおける神経性無食欲症の診断基準を満たし，X 年に Y 病院小児精神科で入院治療を行った 3 症例であり，入院治療では児への行動制限療法，薬物療法と併行して，母子双方への心理カウンセリングを実施した．心理査定として，児には WISC-Ⅳ，SCT，バウムテスト，P-F スタディまたはロールシャッハテストを行い，母親には日本版アタッチメント・スタイル面接（Attachment Style Interview；以下，ASI）（吉田・林・Bifulco,A, 2003）を用いて母親のアタッチメント・スタイルを評価した．ASI は「Very Close Others（非常に親しい人）」との現在進行形の関係についての語りを含み，人間関係における自律性，親密性／距離，恐れまたは怒りなどの態度について質問することによりアタッチメント・スタイルを測定する半構造化面接である．アタッチメント・スタイルは，現在の対人関係における態度と行動の全体的な尺度とみなされ，対人関係における機能障害の程度は，サポートの欠如の程度と，他者に対する否定的な態度の強さにより評価される．アタッチメント・スタイルの分類は，明らかな安心型（clear secure），とらわれ型（enmeshed），恐れ型（fearful），怒り−拒否型（angry-dismissive），引っ込み型（withdrawn）に分類される（表 4-1）．なお，本研究において ASI を採用した理由は，アタッチメント対象を養育

者との関係に限定していないために思春期以降のアタッチメント対象との関係についても測定できることと，心理社会的脆弱性の 1 つである社会的サポートの欠如に関連する項目が含まれていることから,心理社会的支援を行う上でより有益と考えたためである.また，測定方法が面接であるため，質問紙に比べてより詳細に多くの情報が得られ，精緻な測定ができることも利点である．方法は，カルテへの記載事項の確認と，心理査定結果に基づいて臨床経過の検討を行う後方視的研究（retrospective study）とした．なお，本症例報告は Y 病院の倫理委員会の承認の後，対象者へも症例報告の趣旨や倫理的配慮を十分に行う旨を説明して承諾を得た.

表4-1　ASIにおける総合的なアタッチメント・スタイル（Bifulco & Thomas, 2013）

非安心性が高い		いくらか非安心		安心	
「１」	非常に非安心 とらわれ型	「９」	軽く非安心 とらわれ型	「13」	明らかな安心型
「２」	中程度に非安心 とらわれ型				
「３」	非常に非安心 恐れ型	「10」	軽く非安心 恐れ型		
「４」	中程度に非安心 恐れ型				
「５」	非常に非安心 怒り―拒否型	「11」	軽く非安心 怒り―拒否型		
「６」	中程度に非安心 怒り―拒否型				
「７」	非常に非安心 引っ込み型	「12」	軽く非安心 引っ込み型		
「８」	中程度に非安心 引っ込み型				

網掛けは非安心型のアタッチメント・スタイルをさす.

第４項　　症例提示

Y 病院小児精神科で入院治療を行った AN の 3 症例について提示する．症例の親子については誌上発表への同意を得ているが，個人情報の観点から，問題の本質を損なわない範囲の細部において変更を加えている．

症例１

＜概要＞

症例は 11 歳女児で，主訴は食欲不振，体重減少であった．児の発達歴は，在胎 39 週，出生体重 2,800g で，乳幼児期より手がかからず育てやすい子であった．乳児期には指しゃぶりがみられたが，それ以降，移行対象はみられなかった．家庭は，母方祖父母，両親，兄（15 歳）の 6 人暮らしである．X−１年より父親の仕事が忙しくなり，父親とは週 2 日顔を合わせる程度の交流しか持てなくなっていた．

既往歴に特記事項はないが，月経は未発来であった．家族歴においても特記事項はなかった．

病前性格は，真面目で引っ込み思案であり，家庭では夕飯作りの手伝いや菓子作りをよく行なっていた．勉強は自主的に取り組み，体を動かすことも好きだった．

＜現病歴＞

X-1 年秋頃，友人に「身長のわりに体重があるんだね」と言われたことを契機に食事制限によるダイエットを始めた．体重減少は著しく，同年冬頃には「寒い」「疲れた」と言って友人に遊びに誘われても外出しなくなった．X 年 1 月以降はほとんど食事が摂れなくなり，祖母や母親に注意されても「食べられない」と応じ，食事量は増えなかった．X 年 2 月，起立歩行困難となり当院を受診し，入院となった．病前 25kg の体重は 19.4kg まで減少していた．

入院時，身長は 133cm，体重は 19.4kg であり，BMI は 11.0 であった．体温は 35.9℃で血圧は 80/50mmHg，心拍数は 56 回/分であった．表情は乏しく寡黙で活気がなく，るい痩が著明であった．

＜心理査定結果＞

児の心理査定結果を表 4-2 に示した．WISC-Ⅳにて FSIQ 94（VCI 109,PRI 82,WMI 94,PSI 94）であり，知的発達水準は平均の範囲内であった．SCT，バウムテスト，P-F スタディの結果からは，強い自己主張はあるものの押し込めやすい過剰適応傾向，低い自己評価，注目してかかわってほしい気持ちの存在が示唆された．

母親は，ASI より，特定の相談相手を持ち得る能力は有しているものの，対人場面で拒絶されることへの恐れを抱きやすいことから，アタッチメント・スタイルは「軽く非安心の恐れ型」に該当した．

＜経過＞

入院後，ベッド上安静等の行動制限療法と，中途覚醒，焦燥感など体重減少に伴う過覚醒状態を改善するためオランザピンによる薬物療法を実施し，併行して母子双方への心理カウンセリングが開始された．入院当初，児からの言語的な要求は全くないものの表情は険しく，食事も 6 割程度しか摂れなかった．児の表情からは，不本意な入院に対する戸惑いや抵抗感だけではなく，家庭からの強制的な分離に対する怒りも感じられたが，気持ちが言葉として表現されることはなかったため，推測の域を出なかった．

児は，主治医や看護師が質問する場面では，身体を強張らせて返答にかなりの時間を要し，単語レベルの返答しか行わず，質問されるタイミングで相手から視線をそらすことが常であった．心理士は，児の気持ちを言葉で表現することの困難さを鑑みて，心理カウンセリングにおいては，児のまとまりのつかない脆弱な自己を脅かさないよう，はじめは折り紙やオセロなど共に作業をしながら非言語的な気持ちの表現を促した．その際に，心理士は言葉による質問をなるべく避け，簡単で和やかに作業が進むものを用意するよう心がけた．何度か共に作業をしていくと，児は時折笑顔を見せるようになり，楽な姿勢で過ごすことが増え，好きなお菓子の話などをするようになった．そこで，気持ちを言葉で表現する機会となるよう,心理士からも積極的に話しかけ,お互いの会話が増えるよう試みた．児との会話の多くは好きなことや楽しいことについてであったが，入院から３週間が経つ頃には,「看護師さんが何を考えているかわからない」,「ママが話を聴いてくれない」などの不満を訴え，心理士に対しても,「なんでわかんないのかなー」と不満を露骨に表明するようになった．これらの言動と呼応するように，食事は完食できるようになった．

母親の心理カウンセリングでは，母親は当初，「面会がしんどい」，「なんでこの子は他人にはっきりものを言えないのか」などと苛立ったり呆れたりしながら，途方に暮れた表情で語っており，児の気持ちを心理士と共有する場面は見られなかった．心理士は，児の気持ちを代弁したい気持ちに駆られたが，母親の言動を遮らずに受け入れることで，母親が回避せざるを得ない不安や不満を言葉として吐き出せる環境作りに力を注いだ．具体的には，母親自身の語りを受け流さずに傾聴し，母親の語りに共感していることを積極的に伝え，子育てに対する指摘や解決策の提示等は控えた．そうすることで，母親の自己にまとまりを持たせ，母親自身の気持ちの言語化を促すよう試みた．母親の語る内容は，はじめは不満ばかりであったが，次第に，「あの子がどうしてこういうことをするのかわからなくて否定してしまった」，「友達とのいざこざの話を聞くと，自分もそうだったから辛くて，正直聞きたくない」など言葉で表現されるようになり，「どうすればいいですか」と児への対応について助言を求めるようになった．母親が自ら児への対応を検討し始めるようになって初めて，心理士は児の心理検査結果からわかる性格特徴や陥りやすい対処パターン等の説明をしながら，児が必要としている母親の対応を積極的に助言することで，母親が児の対応で困ったときに心理士に頼ることができるよう努めた．

児の体重が徐々に回復し，母親も児の聴き手となるにつれて，児は「わかってない！」，「そうじゃない！」などと母親の言動を否定する言葉を母親にぶつけるようになった．母親はその度にひどく動揺したが，主治医や看護師，心理士に気持ちを打ち明けることができ，児の言動の意味についてフィードバックを得ることができた．そのため，母親が児に言い返したり，児の言動を無視したり否定したりすることはなかった．入院から 5 週間が過ぎると，「暇だからもっとテレビをみたい」，「外出してアイスが食べたい」などと行動制限の枠を崩そうとする児の発言を認めたが，その都度母親や主治医と話し合うことができた．また，その際に母親は，「確かにそうだよね」，「早く自由の身になりたいね」などと児の気持ちに寄り添いながら，今行うべきことを児と確認し，励ましていた．児も母親の励ましに対して，「お菓子の材料の賞味期限見ておいてよ」と応じており，不快感情が母親によって減じられ，前向きにこの先を想像する様子がうかがえた．その後，児は母親のみならず，看護師にも日常の些細な心配事を訴えられるようになり，過度な気遣いが減っていった．約 10 週間の入院を経て目標体重に達したため，外来通院となった．経過は順調で体重は 29kg まで回復し，退院の翌年に初潮を迎えた．

症例２

＜概要＞

症例は 14 歳女児で，主訴は食欲不振，体重減少であった．児の発達歴は，在胎 40 週，出生体重 3,200g で，保育園年少時は，登園時の母子分離時に泣いていた．常に母親を追いかけている子であり，移行対象はみられなかった．家庭は，母親，兄（16 歳），姉（15 歳）の 4 人暮らしである．父親から母親への家庭内暴力があり，2 歳の頃に両親が離婚している．幼少期は近所に住む母方祖母が主な養育者であった．児は，父親のことは嫌いで，中学生以後はほとんど会っていない．

既往歴に特記事項はないが，月経は未発来であった．家族歴としては，母親が離婚後抑うつ状態となり 2 年間精神科に通院し，服薬していた．

病前性格は，真面目で神経質であり，家事を積極的に手伝っていた．勉強は自主的に取り組んでおり，成績は良かった．体を動かすことが好きで，運動部に所属していた．

＜現病歴＞

X-1 年夏頃，体重を頻回測って気にするようになり，同年秋頃にはテレビの前で激しく踊るなど過活動を認めた．同年冬頃には食事量が低下し，体重減少を心配した伯母より経口栄養剤を勧められ摂取するも改善せず,「食べられない」とケーキなど好きな物しか口にしなくなった．X 年 1 月に貧血で倒れたことをきっかけに，養護教諭に勧められて当院を受診し，入院となった．病前 46kg の体重は 36.4kg まで減少していた．

入院時，身長は 171cm，体重は 36.4kg であり，BMI は 12.4 であった．体温は 36.5℃で血圧は 86/54mmHg，心拍数は 94 回/分であった．常に笑顔で従順に応じるがるい痩は著明であり，動作は緩慢であった．

＜心理査定結果＞

児の心理査定結果を表 4-2 に示した．WISC-Ⅳにて FSIQ 119（VCI 111,PRI 124,WMI 106,PSI 113）であり，知的発達水準は平均の上であった．SCT，バウムテスト，ロールシャッハテストの結果からは，複雑な情緒刺激を回避する傾向，感情表出を恐れて抑制する過剰適応傾向が示唆された．

母親は，ASI より，対人場面で拒絶されることへの恐れを抱きやすいタイプであったが，心を打ち明けて話す他者がいないことから，アタッチメント・スタイルは「非常に非安心の恐れ型」に該当した．

＜経過＞

症例 1 と同様に，行動制限療法，薬物療法，母子双方への心理カウンセリングを開始した．児は入院当初から愛想が良く，何を聞かれても「大丈夫です」，「元気です」と笑顔で振る舞い，食事もほとんど完食した．年齢の若い看護師とは，流行りのファションやドラマの話題など，非常に楽しそうに会話していた．ただ，ダイエットの契機や家庭，学校での心配事などを尋ねられると，その場では「大丈夫です」と応じるものの，その後しばらく寝入ってしまうことが多く，人を寄せ付けなかった．児は，特に不安な状況やネガティブな気持ちになった際に，自己をまとめ表現することに困難を抱えている印象であり，児の心理カウンセリングでは，自己を脅かしかねない不用意な質問や気持ちの言語化に対しては慎重なかかわりを行いながら，言語面接を行なった．入院から２週間が過ぎた頃には，行動制限についての不満を心理士や母親に訴えることができるようになった．しかし，母親は，児よりも強い口調で，「こうなったのはあなたのせいでしょ」と言い返し，児を泣かせてしまうことがたびたびであった．そのため，児が入院生活の不満を看護師や主治医に訴えることは滅多になかった．

母親の心理カウンセリングでは，症例 1 と同様に肯定的なかかわりを意識した中で，母親が児の強い口調に対して言い返さずに，そうせざるを得ない児の心情を理解し，児を慰められるようになることを意図して，心理士も母親に反論せずに労い慰めるアプローチに徹した．母親は，はじめは「入院したのはあの子のせいなのに，本人は全く理解していない」，「疲れているのに頻繁にお見舞いに来なきゃいけない私の気持ちを考えてほしい」などと児への不満に終始していたが，心理士が共感的に聴き入れ，母親の苦労を労い続けると，母親は「あの子は父親似でよくわからない」，「どう付き合っていけばいいのか」と，児の言動の特徴を知りたいと話すようになった．そこで，心理士は児の心理検査結果からわかる性格特徴や陥りやすい対処パターン等の説明をしながら，児が必要としている母親の対応を積極的に助言した．その後，母親は治療者や看護師に頻回に助言を仰ぐようになったが，児の訴えを受け止めることはなかなかできずに，児が心配事を母親に話すと，「主治医に聞いてみれば？」とあしらってしまうことが多かった．

入院から5週間が過ぎると，児は心理カウンセリングで，「認めたくないけど自分はおかしい」，「ネガティブな自分になるとどんどん不安になって抑えられなくなる」と語るようになった．しかし，その後体重が回復し外泊が許可されると，不安と向き合う語りはなくなった．約10週間の入院を経て目標体重に達したため外来通院となったが，外来通院時には，「受験勉強が大変ですけど，大丈夫です」，「今朝お母さんと口喧嘩しちゃったけど，今はもう気にしていません」などと，心配事を訴えてもそれ以上に深めることはなかった．体重は半年経過しても41kgのまま停滞したが，高校受験は成功し，友人関係も問題なく社会適応は良好であった．

症例３

＜概要＞

症例は13歳女児で，主訴は食欲不振，体重減少であった．児の発達歴は，在胎37週，出生体重2,650gで，ことばの遅れがあり相談機関に通っていたが，母親と担当者の折り合いが悪く中断となった．乳児期より一人で静かに過ごしている子であり，移行対象はみられなかった．発語は2歳過ぎであった．幼稚園での母子分離はスムーズだったが，人見知りが強く姉と遊んでばかりいた．

家庭は，父親，母親，姉（14歳），弟（9歳）の4人暮らしである．

既往歴に特記事項はないが，月経は未発来であった．家族歴としては，母親が20歳頃に職場の対人関係のストレスで食事が摂れなくなる時期があったが，転職して改善しており，通院，服薬はしていない．

病前性格は，真面目で潔癖であり，人見知りが強かった．家事を積極的に手伝っていた．勉強は自主的に取り組み，成績は中程度だった．体を動かすことが好きで運動部に所属していた．

＜現病歴＞

X−１年４月，中学校に入学し勉強と部活で忙しく食欲が減退した．食欲は戻らず，同年夏過ぎには「あばら骨すごいよ」と姉より母親へ報告があったが，母親は児が一生懸命頑張っているので口出しできなかった．同年秋頃には児の体調が悪くなり，母親や姉が休む

ように言ったが，児は「休めない」と泣いて抵抗した．X 年 1 月中旬に他院精神科クリニックを受診し，経口栄養剤を処方され摂取するも改善せず，X 年 2 月に脱水症状で当院を受診し入院となった．病前 26kg の体重は 18.9kg まで減少していた．

入院時，身長は 131cm，体重は 18.9kg であり，BMI は 11.0 であった．体温は 35.8℃で血圧は 92/54mmHg，心拍数は 50 回/分であった．寡黙で怯えたような表情をしており，るい痩は著明であった．

＜心理査定結果＞

児の心理査定結果を表 4-2 に示した．WISC-Ⅳにて FSIQ 99（VCI 105,PRI 89,WMI 103,PSI 99）であり，児の知的発達水準は平均の範囲内であった．SCT，バウムテストの結果より，強い孤立感や無力感を抱いていることが示唆され，P-F スタディより，欲求不満場面において不満の率直な表明を避けて不満自体を否認する過剰適応傾向がうかがわれた．

母親は，ASI より，アタッチメント・スタイルは「非常に非安心の恐れ型」に該当した．母親は小・中学生の頃にいじめられており，「旦那以外は信じられない」と怯えた表情で背中を丸めていた．手洗いによるひどい手あれや，院内の待合い椅子には腰掛けられないといった強迫症状も認めた．

＜経過＞

症例 1，症例 2 と同様に行動制限療法，薬物療法，母子双方への心理カウンセリングを開始した．児は入院当初から無表情で警戒心が強く，自ら話すことは滅多になかったが，食事はほとんど完食した．児の心理カウンセリングでは，交互色彩分割法やトランプといった非言語的なやりとりでは表情も緩み穏やかな時間が流れたが，言語的なかかわりにおいては一問一答が多く，緊張感に包まれることもあった．そのため，心理士は返答が必要となるような言葉かけは控え，児の行動を実況中継するような声かけや，ぬいぐるみを介した間接的な言語的かかわりにとどめた．入院から 2 週間が過ぎた頃に，初めて，「シャワーを浴びたい」と行動制限についての不満を母親に訴えたが，母親は動揺するのみで，児の訴えに返答することはなかった．その後は，児は母親や主治医に対しても涙をみせるのみで，言語的な訴えはなくなった．

母親の心理カウンセリングでは，母親は児が家族内の潤滑油として機能していることを語り，「小さくてかわいい」，「このままの児でいてほしい」と，児の成長を拒むような歪ん

だ認知が明らかとなった．心理士は症例 1，2 と同様に，母親が心理士を頼る言動が出てくるまで母親の問題を指摘することは控え，積極的に共感していることを伝えるに留めた．母親は，カウンセリングが進む中で，「児は学校のことなど何もしゃべってくれない」，「怒るときもムッとするだけ」などと児への対応の困り感を訴えるようになったが，児と同様に，対応の助言を求めるなど，状況を好転させるための術を言葉で求めることはなかった．そこで，心理士は母親の困り感が出た段階で，児の心理検査結果からわかる性格特徴や陥りやすい対処パターン等の説明をしながら，児が必要としている母親の対応を積極的に助言した．しかし，心理士が水を向けない限り，母親の口から日々の苦労や困り感などは語られないままであり，母親自身も言葉での表現能力に難しさを抱えているようであった．

入院から 7 週間が過ぎた頃には，本人は心理カウンセリングにおいて，「どうせ言っても変わらないから」と，不満や不安は誰にも言わないのだと語った．約 13 週間の入院を経て目標体重に達したため外来通院となったが，児の気持ちの言語化は変わらず困難であった．体重は退院時の 26.4kg を維持するに留まったが，中学校生活は問題なく過ごした．

表4-2　3症例の心理査定結果

	症例1	症例2	症例3
WISC-Ⅳ	FSIQ:94 VCI:109, PRI:82, WMI:94, PSI:94	FSIQ:119 VCI:111, PRI:124, WMI:106, PSI:113	FSIQ:99, VCI:105, PRI:89, WMI:103, PSI:99
SCT	筆圧が濃い，空欄無し 食への関心やかまってほしい気持ち，自信のなさ	空欄が多い 否定的な内容は少なく「家の手伝いは楽しいです！」と記載，過剰適応傾向	筆圧が濃い，空欄は無いが単文が多い 「ひそかに隠しているものがある」と記載，防衛が強い
バウム・テスト	考え過ぎる傾向，土台の不安定さ，強迫傾向	強い自己主張，精神的な幼さ，感情表出を恐れて抑制する傾向	精神的なエネルギーの乏さ，強い無力感や孤立感，両価的感情
P-Fスタディ	GCR=78% 主要反応 I(6)>m(3.5)>M’=E=M(3) 反応転移 I-A←(+0.67)，(-0.67)→M-A 自分の気持ちを抑え過剰適応することで対処する傾向	―	GCR=67% 主要反応 I’(4.5)>e(3.5) 反応転移 0.5→M-A 不満の率直な表明を避けて不満自体を否定する傾向
ロールシャッハ・テスト	―	R=20，L=2.33，P=8，W:M=3:1，CDI該当 複雑な情緒刺激は回避する傾向，知的に高いが社会性は未熟	―

第５項　　結果

AN 患児の臨床経過

AN 患児の臨床経過を表 4-3 に示した．3 症例の児は，①成育歴より問題なく「いい子」であること，②心理検査より，活動性は高く強い自己主張を持つが，考え方は自分本位で幼く気持ちを押し込める傾向が強いこと，③入院時は過剰に気を遣い，不安や不満を容易には訴えなかったことの 3 点が共通していた．移行対象においては，症例 1 は生理的な指しゃぶりのみであり，症例 2，症例 3 においては出現することさえなかった．自己のまとまりを維持するために自らを慰める機能が弱く，社会的な要請に対して過剰に適応するか拒絶するかといった選択を取っているようであった．アタッチメント理論からみると，アタッチメント対象の保護（care giving）行動を引き起こすこと，つまり他者に困難さを訴え，他者の助けを得ることの苦手さが顕著であった．そこで，心理カウンセリングにおいては，まずは困ったことや助けてほしいことがあるときに困り感を表現したり，不安なときに誰かに近寄ったりするなどの接近行動が促されるよう，心理士自身の保護機能を自ら働かせて積極的に児に接近し，保護行動を行った．つまり，児の利用可能なアタッチメント対象となれるようにかかわった．アタッチメント・システムそのものは生物学的にプログラムされたものであるが，作業モデルは個人の自己および他者表象に由来するため心理的アプローチにより変容可能な部分であり（林，2010），心理士との間で肯定的な作業モデルを築くことで，症状に影響し得る重要なアタッチメント対象である母親との関係性に汎化させることを試みた．その際には，児の脆弱な自己感を想定し，児の予測しうる範囲内でアプローチするように気を配った．

症例 1 は体調が回復し，周囲の接触頻度が高まるにつれて母親や心理士，特定の看護師への接近行動がみられるようになった．児の接近行動が受け容れられる機会が増えると，不安なことへの対処方法も話し合えるようになり，不安を回避するという対処は少なくなった．退院後は，母親に些細な心配事でも相談できるようになり体重も増加した．入院時と退院時のバウム・テストを比較しても，幹は枠からはみ出すほど大きく成長していることがうかがえる（図 4-6）．

症例 2 は，心理検査結果でも示されたように，自分を表現することに対しては非常に拒否的で，入院当初から「大丈夫です」と辛さを否認していた．行動制限が窮屈になると母

親に対しては不満を訴え，心理士に対しては自分一人では対処しきれない不安な気持ちを吐露したが，看護師には変わらず「大丈夫です」と笑顔で応じるのみであり，接近行動は部分的な達成に留まった．図 4-7 のバウム・テストの経過をみると，大きさに変化はみられないものの，頭と身体をつなぐ樹冠と幹の境界線がなくなっており，自分の病気について気付いていく入院経過を表しているとも考えられる．一方で，退院後は，心配事を訴えても「気にしていません」と否認による対処スタイルが維持されており，体重は停滞した．

症例 3 は，行動制限が窮屈になると一度は不満を訴えたが，状況が変わらないことがわかるとそれ以降は何も訴えなかった．表情一つ変えず，他者からの要求には拒まず応じるが，自らはどのような要求もせず，頑に気持ちの表出を避け続けた．一方で，心理カウンセリングでは，描画など非言語的なやりとりで表情が和らぎ情緒的接近がうかがわれた．心理士の介入効果について，児からの言葉による裏付けは得られなかったものの，退院時のバウムは大きく葉もつけており（図 4-8），カウンセリングでの自己を脅かさないような肯定的かかわりが寄与した可能性を示唆した．

以上より，患児の脆弱な自己感を脅かさないよう配慮しながら，自己のまとまりを促す肯定的なかかわりにより「自己の確立」を目指すかかわりにおいては一定の効果が得られ，低体重の改善という意味でも転帰はいずれも「軽快」であった．一方で，退院後の様子を踏まえた長期的な効果としては，各症例において違いがみられ，この違いは母親の臨床経過の違いと重なっていた．

AN 患児の母親の臨床経過

表 4-3 に示したように，3 症例の母親のアタッチメント・スタイルはいずれも「恐れ型」であった．「恐れ型」は，拒絶されることやがっかりさせられることへの恐れを特徴とするスタイルであり，他者から傷つけられることを恐れて結果的に相手に近づくことを自分で抑えてしまう場合が多い．このアタッチメント・スタイルが極端に出た場合には，相手の保護システムを働かせるのに失敗して，その結果安心を求めて得られない失望から孤独感が強くなったり，自暴自棄の攻撃性が生まれたりすることもある（林，2010）．3 症例の母親も，自らを慰める機能が弱く，拒絶されることを恐れて不安を扱わずに回避してしまう傾向があり，それゆえに患児の不安も取り扱わなかった可能性が推察された．児のアタッ

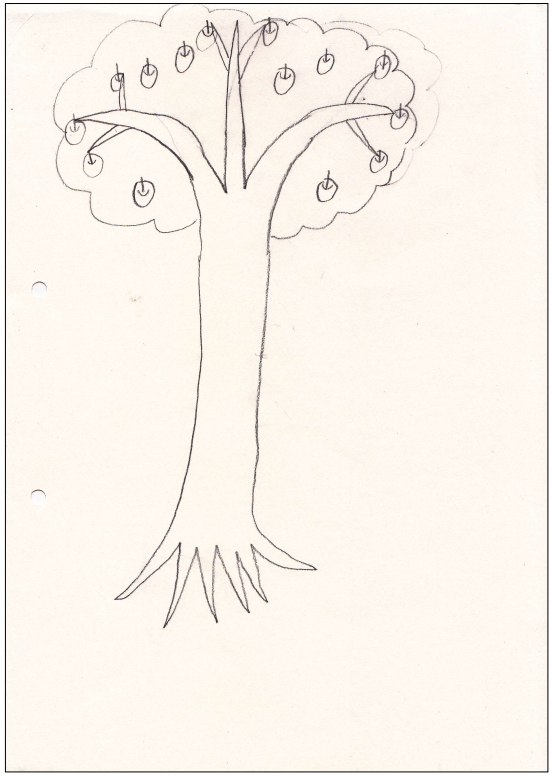
チメント対象であるはずの母親は，不安を受け止めて児を保護し，児の自己をまとめる機能が弱かったのかもしれない．したがって，母親へのアプローチにおいては，母親が児の不安を共感的に取り扱い，慰め，共に解決策を考えられる聴き手となれることを目標とした．心理カウンセリングでは，まずは母親の言動がどんなに理不尽であろうと，遮らずに受け入れ，不安を回避せざるを得ない心情を吐き出せる環境作りに力を注いだ．これは，報復しない移行対象の対応そのものであった．その上で，母親が要求した段階で，児の心理検査結果を根拠として性格特徴や子どもの対処パターンを説明しながら，児が必要としている母親の対応を積極的に助言した．心理士は，児のみならず，母親に対しても母親の自己をまとめ，表現することを促す移行対象の役割を担い，そうすることで，児と母親が互いに表現することができ，安心できる関係性を築けるように努めた．

症例 1 の母親は介入が奏効し，治療が進むにつれて心理士に積極的に児の対応における困難点を提示し，助言を求めることができるようになり，児の回復にもつながった．一方で，症例 2 の母親は，児の対応における困難点を提示して心理士に助言を求めるものの，児に寄り添う言動を行うことは難しかった．症例 3 の母親は，自ら不安を口にすることは少なく，心理士に言葉で助けを求めることはほとんどなかった．これらの母親の表現能力の違いは,児の退院後の臨床経過と共通する部分であった.母親が困り感を言葉で表現し，児に対しても肯定的な言葉かけを行うといった表現能力の程度に応じて，児の長期的な臨床経過も改善していた．

表4-3　3症例の臨床経過

	症例1	症例2	症例3
年齢，身長,体重（BMI）	11歳，133cm,19.4kg（11.0）	14歳,171cm,36.4kg（12.4）	13歳,131cm,18.9kg（11.0）
入院時現症	表情が乏しく寡黙，活気無し，るい痩著明	常に笑顔で従順，動作は緩慢，るい痩著明	寡黙で表情は怯えている，るい痩著明
児の心理査定所見	FSIQ:94 強い自己主張，低い自己評価，気持ちを押し込める傾向	FSIQ:119 複雑な情緒刺激は回避する，感情表出を恐れる傾向	FSIQ:99 強い無力感，不満の率直な表明を避けて不満自体を否認する傾向
母親のASI-J結果	軽く非安心の恐れ型	非常に非安心の恐れ型	非常に非安心の恐れ型
心理カウンセリングのねらい	児：自己が脅かされることへの過度な不安を抱かずに他者とかかわり，気持ちを言葉で表現し，他者の保護行動を引き出す		
	母：児の心理的特徴の理解を深め，児を慰めるアタッチメント対象としての役割を促す		
入院中の変化	児：自ら心配事を話し，積極的に助けを求めるようになった	児：特定の相手に対して不安を訴えるようになった	児：非言語的な訴えは増えたが，言語的なやりとりには発展しなかった
	母：児の訴えを受け流さずに聴き入れられるようになった	母：児の訴えに対して言い返さなくはなったが，受け流すことは多かった	母：児へのかかわり方に特筆する変化はみられず，児の訴えに対して動揺するのみであった
退院時の身長,体重	134cm，29kg	171cm，41kg	131cm，26.4kg
退院後の経過	体重は増加し，外来通院時も児の言語的訴えは増え，母は応答的にかかわっていた	体重は増加したが，外来通院時の児の言語的訴えは減り，母は問題がないように振る舞った	体重は増加したが，外来通院時も児の言語的訴えはなく，母は問題がないように振る舞った

入院時



退院時

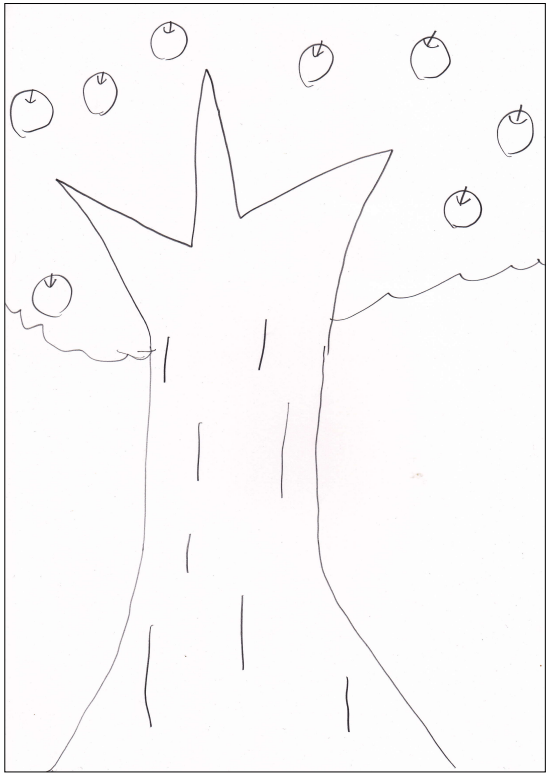
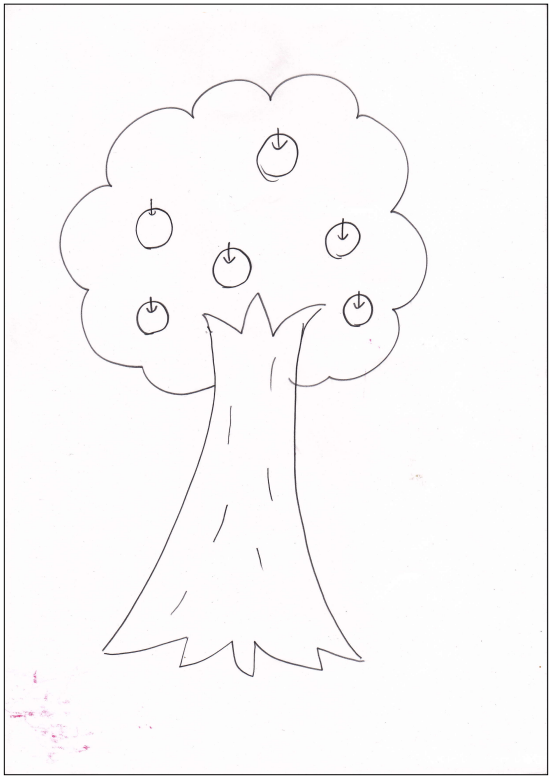


図4-6　バウム・テストの経過（症例1）

入院時



退院時

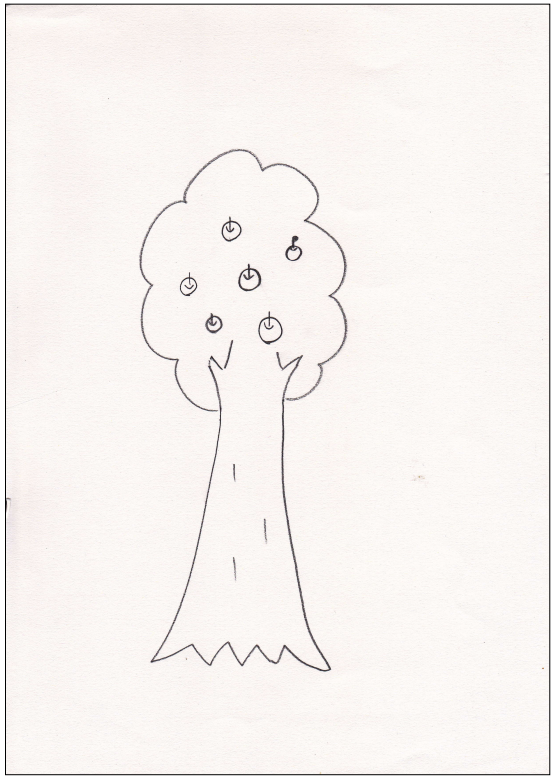
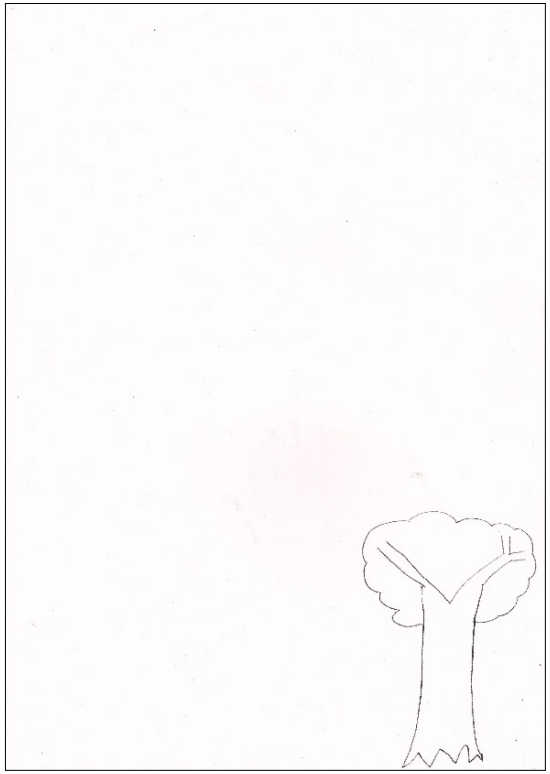


図4-7　バウム・テストの経過（症例2）

入院時



退院時

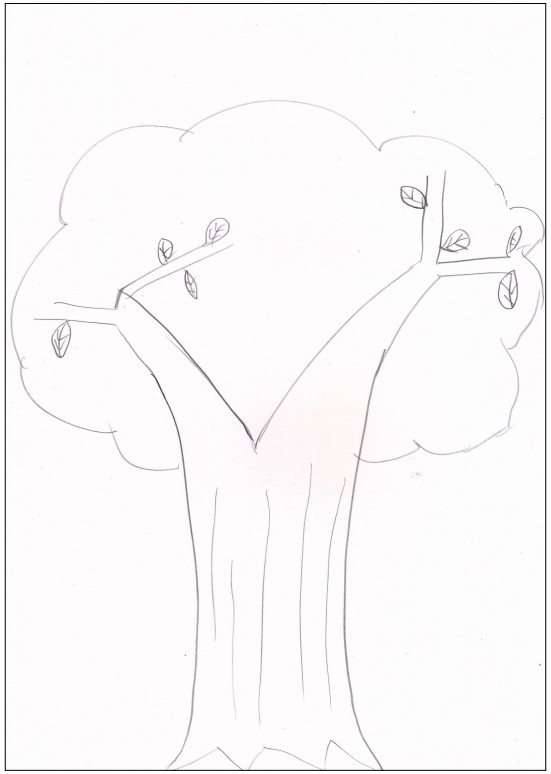


図4-8　バウム・テストの経過（症例3）

第６項　　考察

自己のまとまりに寄与する重要他者との関係性

AN 患者は対人関係での安心感が得られず強烈な不安感を抱いているとされるが（日本摂食障害学会，2012），本症例も同様であり，入院当初の児の防衛的な言動からは，「誰も私を不安定にさせないでください」，「もう誰も近寄ってこないでください」と言わんばかりの様子であった．あまりにも自己が脆弱なために，他者とのかかわりにより自己が脅かされることを防衛している状態であると考えられた．幼少期に客観的な対象物としての移行対象が出現しなかったことからも，他者に慰められる体験の少なさが示唆された．そこで，心理士は児の自己が守られるような，安心感が得られるはたらきかけを行った．具体的には，言葉でのやりとりは目で見て共有できるものを確認する程度にとどめ，児の気持ちを尋ねたり評価したりするような，児の自己を脅かしかねない言動は控えた．その上で，肯定的な態度で側に居続け，児の自己のまとまりを促す移行対象としての役割を担うことを意識してかかわった．

また，退院後のことを考えると，一般的に児の年齢においてアタッチメント対象であると考えられる母親とのあいだに安心感が持てる関係性を築くことも重要なテーマであった．本症例をアタッチメント理論から捉えると，アタッチメント対象である母親に応答性がないために，児はアタッチメント対象として母親を利用できない状態にあったと推測できる．Ainsworth ら（1978）は，アタッチメント対象の単なる不在ではなく，利用可能性が欠如している時に分離不安（separation anxiety）が生じると述べる．児の過剰な抑制や警戒，服従などの言動も，安全基地の歪み（Boris & Zeanah, 1999）として捉えられる．このことから，児のみならず，母親へのアプローチが必要であると考えられた．そこで，心理士は，保護機能を自ら働かせて積極的に母子に接近し，移行対象として自己を補助する行動をとり，アタッチメント対象となるよう努めた．

以上の心理士のかかわりは，母子が自己を脅かされずに，他者の保護行動を引き起こすという生物学的にプログラムされたアタッチメント・システムを回復させることにつながったと考えられる．加えて，母親は心理士とのあいだで作業モデルを安心型（secure）に変化させることで，心理士の言動をモデルとして，児が引き起こした保護行動に応じて児を慰め，まとまらない児の自己を補助できるように応答性を獲得していったものと考えら

れる（図 4-9）.

結果より，他者の保護行動を引き起こすことにおいては，症例 3 の児を除いていずれの症例の母子も成功したと考えられるが，応答性においては，症例 2 や症例 3 の母親は成功し得なかったと推測できる．症例 1 の母親は，応答的に振る舞うことで児のアタッチメント対象となることに成功し，母子のアタッチメント関係も安心しにくい状態から安心感を得られる状態へと変化したと考えられる．症例 1 が症例 2 や症例 3 と比較して，退院後も良好な経過をたどったことからは，母子双方の自己感を強化することで，他者の保護行動を引き起こさせる力を支援するだけでは十分ではなく，養育者においては，アタッチメント対象としての応答性を支援するアプローチが功を奏する可能性が示唆される.すなわち，養育者には，SOS を出すための表現能力に加えて，子どもに安心感を抱かせ，自己のまとまりを維持させるための表現能力が必要と言えるのではないだろうか.

母親に実施した ASI（吉田・林・Bifulco, A., 2003）は,「Very Close Others（非常に親しい人)」との現在進行形の関係についての語りを含む半構造化面接であるため，面接の中で母親自身の育ちや母子関係が明らかとなる．3 症例の母親は，実母との関係は悪くはないものの，母親が幼少期の頃から何かを相談しても具体的な助言をもらったり対応策をともに話し合ったりする体験はしてこなかった．そのため，何事も深く考えないようにしてその場を凌いできていた．症例 3 の母親は，職場の対人関係のトラブルで精神的に追い込まれて食事が摂れなくなった際に，転職という選択肢を何のためらいもなく選んだと語った．他者に助けてもらえる期待よりも，裏切られることへの不安の方が優っていたようである．問題に直面することを回避することで対処してきた母親にとっては，児の心配事に対しても，受け流したり気にしないようにしたりすることで対処していたことが想定された．心理カウンセリングでみせた途方に暮れた表情に表されるように，その他のやり方で，どのように対処すればよいのか分からなかったのかもしれない．そのため，児は幼少期より母親とのあいだで十分な情緒的やりとりが行われず，気持ちを言語化して相互交流することで情緒的混乱に対処する機会が得られ難かったことが推察された.

母親自身も社会的要請に応えられない際に,自身を慰め自己感を維持する力が弱い場合，心理士が母親のアタッチメント対象として機能することで，母親が実母との間で体験し得なかった情緒的やりとりを行うことが必要だと考えられる．母親がネガティブな情緒的かかわりを回避せずに，対処しきれない時には解決策を他者と共に考える力を身につけることができれば，児への対応方法も回避的ではなくなることが期待できる.

心理士が母親のアタッチメント対象として機能するためには，児と同様に，脆弱な自己を想定したかかわりが有効であることが示唆される．すなわち，安易に問題に直面させることは控え，母親の語りを受け流さずに傾聴し，共感していることを言葉で伝え，慰めていくかかわりにより自己のまとまりを強化していく．そうすることで，母親のアタッチメント・スタイルに特徴的な「他者から傷つけられることを恐れて，結果的に相手に近づくことを自分で抑えてしまう傾向」を軽減させることができ，ネガティブな気持ちも表現しやすくなる可能性がある．母親が問題を言語化できるようになった段階では，心理士は支持的に助言したり具体的な対処策をともに考えたりするような積極的なかかわりを行い，実際に母親に行動してもらい成功体験を積ませることが必要であろう．そうすることで，母親は他者に頼ることが不安を掻き立てるものではなく，自身の成功のために必要な方法だと考えられるようになると推測できる．このような心理士とのやりとりを母親がモデルとして取り入れることで他者にも汎化することができ，児への対応も変化していく可能性が示唆される．関係性障害への治療的アプローチをモデル化した Stern（1995）は，母親との援助関係において，援助者への良いお祖母さん転移（good grandmother transference）が持続し，母親になることを一貫して支えられているという体験こそが最も重要だとして，解釈や言葉による洞察よりも，前言語的な情動体験が重要で，それを通して母親が自らの子ども時代を疑似体験し，それらにまつわる説話（discourse）を生み出す作業に専念できると論じている．本症例の母親においても Stern の援助関係と同様のプロセスが進んだと考えられ，それを可能にしたものが，支援者が母親の移行対象として自己のまとまりを維持し，表現させる過程であったと考えられる．

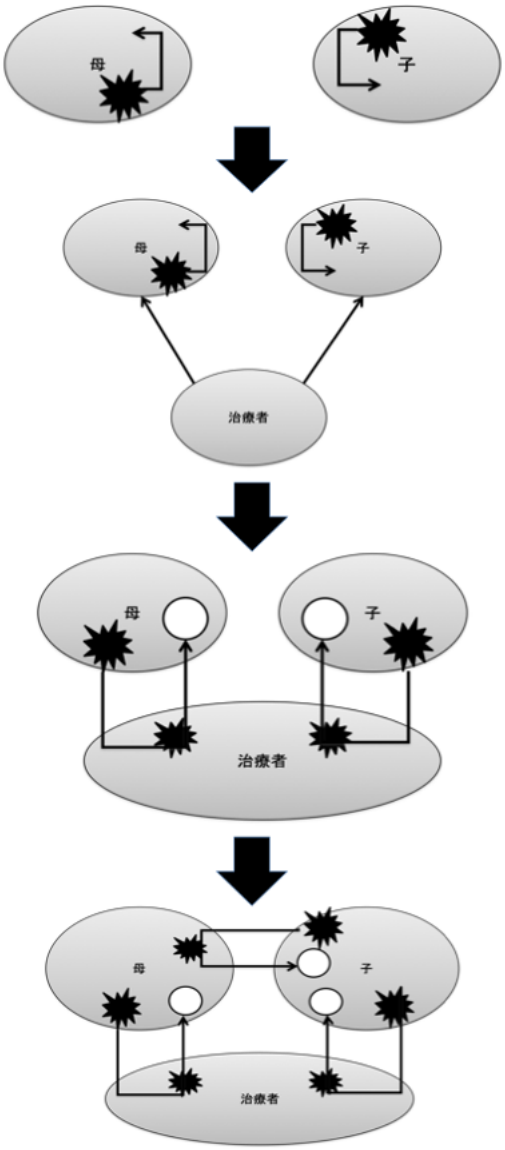


図4-9　本症例における重要他者との関係性に介入するアプローチ

✸ は不安な情緒をあらわし、◯は安心感をあらわす

母子の関係性に影響を及ぼす指標

母子の関係性の問題は，その持続期間や固定度，またその影響の及ぶ範囲や程度によって幾つかのレベルに分けて捉えられており，Sameroff（1992）は，動揺（perturbation），阻害（disturbance），障害（disorder）の３段階に分けて捉えている．また，関係を構築している当事者の非対称性も関係性障害を特徴づけており，親の子へのかかわりあるいは親の表象の果たしている役割が相当に重要視されている(Stern,1995).本症例においても，母親の児へのかかわりの変化，すなわち関係性のレベルの変化が症状に影響を与える可能性が示唆された．つまり，アタッチメント対象である母親に気持ちを表現し，応答的にかかわってもらう体験は，AN 患者が苦手とする不安や怖れなどの情緒的混乱を他者との間で調節する行為を可能とし，症状を左右するようである．特に，治療が進むにつれて表出した患児の不平や不満は，扱うべき情緒的混乱の表出として有益な表現であったと考えられた．しかし，母親の児へのかかわりが変化し，このような児の不安を聞き入れられるようになる程度には各症例で違いがみられた．特に，母親が「軽く非安心」のアタッチメント・スタイルであった症例１と，「非常に非安心」のアタッチメント・スタイルであった症例２と症例３では，児の経過にも明らかな違いがみられた．母親のかかわりの変化の程度の予測には，関係性の問題を考える場合と同様に，母親自身の安心感の得られやすさの評価が有効である可能性が示唆される.安心感の得られやすさは,自己のまとまりを維持できる，自らを慰める力とも言い換えることができる．症例２や症例３の母親のように，アタッチメント・スタイルが「非常に非安心」で，なかなか安心感を得られない母親の場合には，母親自身の自己の脆弱さに配慮する必要があるだろう．具体的には，心理教育的なかかわりは自己を脅かすアプローチとなりかねないため，まずは母親自身の悩みや不安を共有して支持的な姿勢を呈示することで，母親の接近行動を引き出すようなかかわりが必要であると考えられる．

また，児の心理的特徴として，自分の気持ちを押し込めやすい傾向がすべての症例で示唆された．客観的な対象物としての移行対象はいずれの児にもみられなかったが，幼少期の分離不安のエピソードからは環境における必要性の高さが推察されるため，移行対象の発現機序から考えると，児の表現能力の弱さが示唆される（図 4-10）．齋藤（2013）は成熟の指標として，感情のコミュニケーション能力と欲求不満耐性を挙げている．この２つの軸は直交し，たとえば欲求不満耐性が高く我慢強い人（抑圧する形で適応してきた人）は，

しばしば相手の感情や自分の感情に対しては鈍感なことがあるという．本症例の児は，気持ちの表現に著しく問題を抱えていたと考えられる．水島（2010）は AN 患者の特徴として，強迫的に自分の欲求をコントロールすることで不安に対処していると述べる．欲求を言葉で表現して外へ出しても良いことはないので，自分の内で済ませてしまおうという努力かもしれない．しかし，思春期という特に養育者からの分離の時期を迎えて味わう不安感は，非安心なアタッチメント・スタイルをもつ養育者との間ではたやすく対処することはできなかったのではないだろうか．本症例の母親はいずれも分離を恐れて近づくことのできないアタッチメント・スタイルを有しており，子どもの分離不安を抱え，慰めることは非常に困難であったことが推察される.言葉は他者との関係性を身体的レベルでの「今，ここ」から解放するが，その分，心理的距離を拡大させる．その際には，自立した主体としての自己を強めたい気持ちと，身体的レベルで直接的な共有を得たい気持ちが葛藤状態に陥ることが予想される．Mahler（1975）や Blos（1962）の分離―個体化過程における最接近期危機は，これらの相克として捉えることが可能であろう．したがって，言葉での表現は分離不安の強い本症例の児にとっては，余計母親との距離を遠のかせる事態であり，避けられてきたとも考えられる．その分，児は食欲をはじめとする非常に生理的で根源的な欲求さえもコントロールせざるをえなかったのかもしれない．3 症例の児がいずれも非常に熱心にスポーツに取り組み，入院中も「部活に出たい」と訴えるほどであったことを考えると，生き生きと活動する源ともいえる攻撃性をも自由に表現できない状況におかれていたことが推測できる．ルールという強固な制限により外部からコントロールされた安全な環境においてのみ，欲求を出せていたのではないだろうか．入院中はどの症例も気持ちの表現が促されたが，退院後はその程度に明らかな違いがみられたことも，入院による行動制限が児の守りとして機能していたことを推察させる．

一方で，症例 1 は，退院後も気持ちを過度に押し込めることなく，他者に頼りながら不安に対処し体重増加につながっている．この違いに影響を与えたと考えられるのは，言葉による気持ちの表現の程度であった．例えば，順調に体重が増加した症例 1 は些細な心配事も言葉で母親に訴えることができるようになったが，体重が停滞した症例 2 と症例 3 は言葉での表出はほぼなく，表情の変化や涙といった非言語的な訴えに留まった．情緒面の応答性に乏しい母親にとって，非言語的な訴えをキャッチし，児の要求を的確に推測することは困難であり，児がいかに自分の気持ちを言語化して母親に伝えるかが重要であったと考えられる．児の知的発達水準は正常範囲内にあり，言語理解能力による問題ではない

ことから，言語表現能力，つまり自分の気持ちを言語化して相手に伝える能力の程度が，経過に影響を与える可能性が示唆される．Stern（1985）は言語自己感を検討する際に，2歳の誕生日を迎える前後の女児の「お寝床でのお話」において，「移行現象に没頭している」様子を提示し，お話は彼女の内部に存在する養育者を再活性化するだけでなく，言語の練習にもなっていたことを考察している．症例2や症例3の患児には，まずは非言語的かかわりの中で，playful に移行現象に没頭できる環境を整えてあげることも必要かもしれない．「遊び」は，アタッチメント理論で言えば「探索行動」であり，それを可能にするのが安心感の輪（図4-10）である．その中で育まれる確固たる自己感が，自分の気持ちとしてまとまりを持たせ，言葉を紡ぎ出すのではないだろうか．家族が「語る存在」になることで，母子の間に適度な心理的距離が生まれ，母子分離もうまくいくことが示唆される．

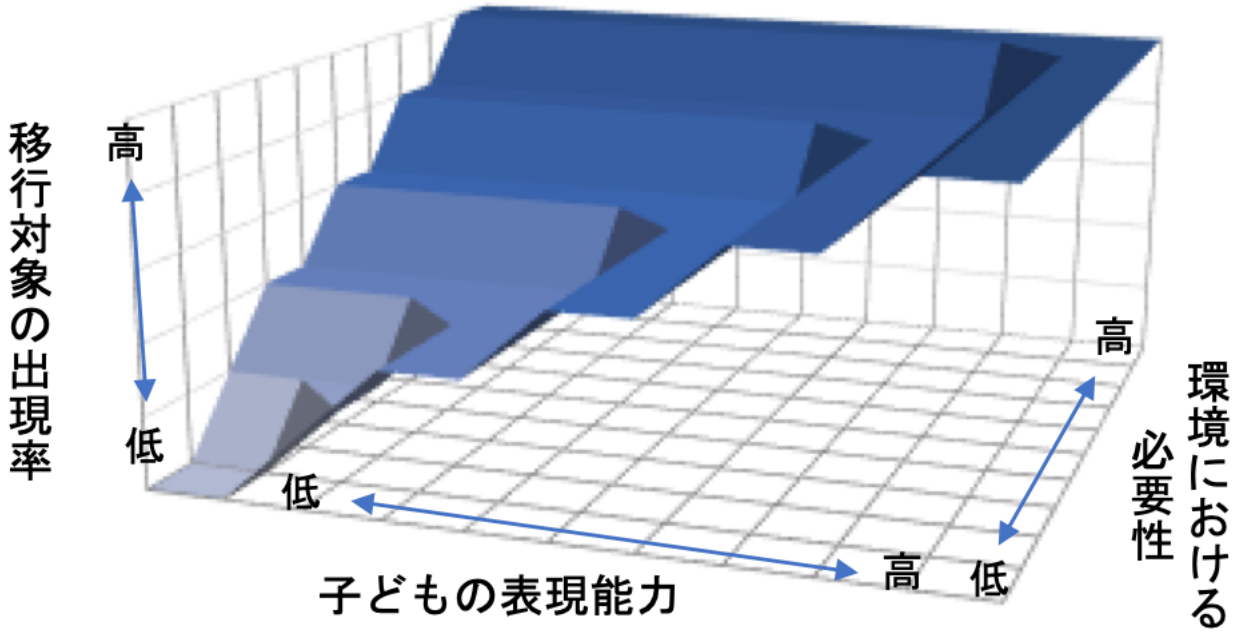


図4-10　移行対象の発現機序

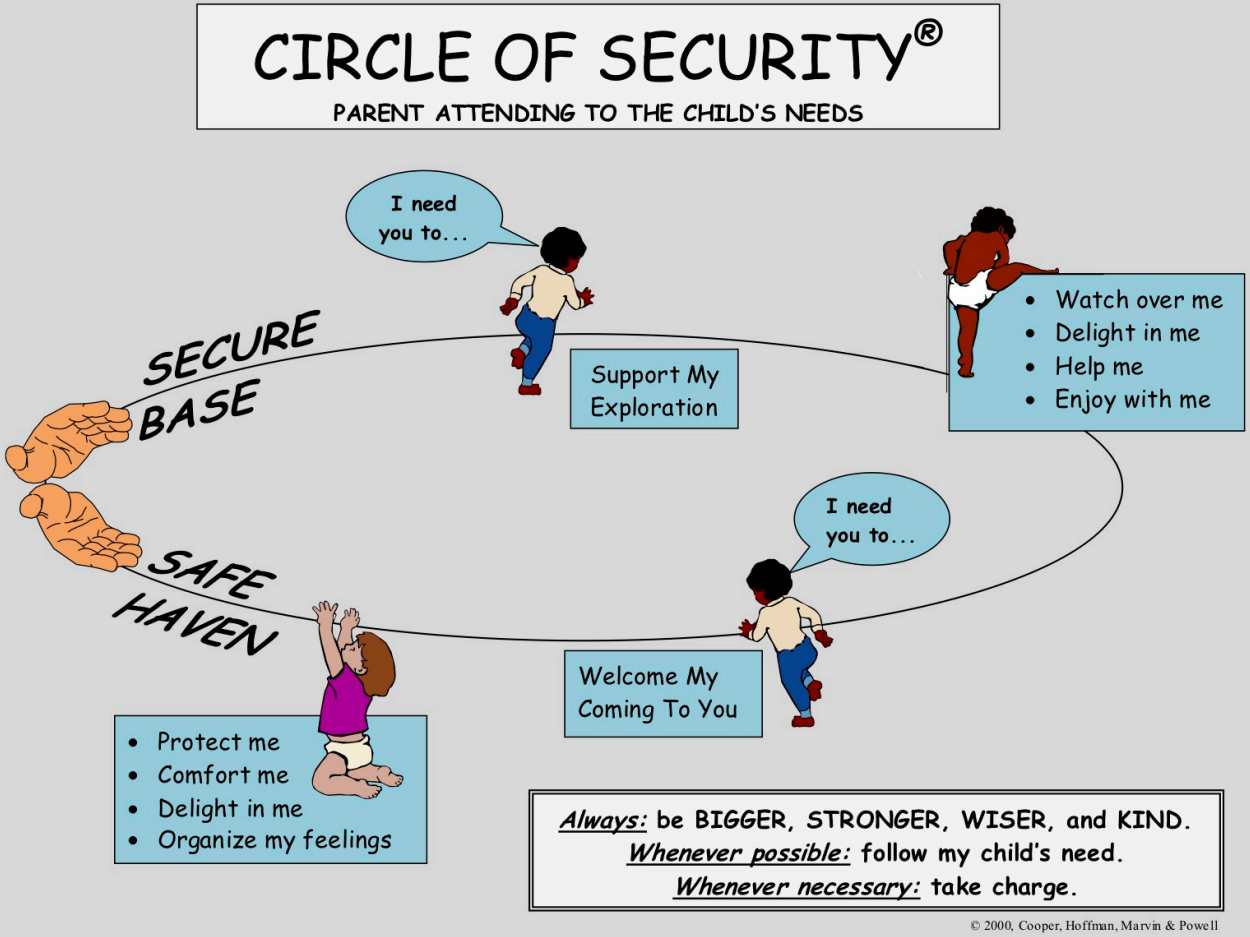


図4-11 安心感の輪（http://circleofsecuritynetwork.org/the_circle_of_security.html）

第３節　継続支援に支障をきたした発達障害児６症例の母親への介入

第１項　　はじめに

前節より，アタッチメント理論を援用し，移行対象概念を用いて，問題を呈した子どもと子どもの重要他者との関係性にアプローチする介入においては，重要他者である母親のアセスメントも重要であることが示唆された．近年，社会問題となっている養育の問題においても，養育者の強い育児不安がその引き金となっている場合が多く，ペアレンティング・アセスメントの重要性が指摘されている（中村，2007）．幼児を持つ母親 281 名を対象とした調査によると，母親の作業モデルの違いによって効果的な社会的サポートが異なることが明らかとなっている（中西，岩堂，2004）．作業モデルとは，乳幼児期における養育者との相互作用によって個人内に内在化される対人情報処理のテンプレートであり(内田，河合，大田，2010)，他者への期待あるいは確信として，実際の対人関係に反映される（林，2010）．作業モデルはアタッチメント・スタイルと呼ばれるいくつかの型にわけられるが，母親のアタッチメント・スタイルが非安心型の場合に，その学齢期の子どもたちは安心型アタッチメントの母親の子どもたちよりも強い不安を示すことが知られている（Muris et al.，2000）．移行対象の提唱者であり，小児科医である Winnicott（1965a）は親の心身の状態が子どもの症状や問題行動として反映されることを目の当たりにして，親の側への援助を重視するようになったとされる．彼は，子ども病院での診療を，「母親や父親の心身症を管理するためのクリニックと考えるようになりました」と述べている．精神科医の武井（2012）も，「思春期外来では子どもたち本人と向き合うことよりも，彼らの親，とくに母親と話をしている時間の方が長い」として，「思春期外来」というより，「母親外来」がふさわしいと述べている．すなわち，児童思春期の子どもたちの治療では，子どもとともに母親とも安定した治療関係を作ることが不可欠と言える．

本症例の患児は児童期であるが，Kerns（2008）によれば，児童期のアタッチメント対象は依然として養育者のままであることが圧倒的に多く，その養育者の情緒的な利用可能性の知覚に関しては児童期全体にわたって大差なく，基本的に高く維持される傾向があるという．前節では，母親自身も，社会的要請と自己との不一致に対して，自身を慰め折り合いをつけていく機能が弱い傾向が示唆され，母親自身が自己を慰めることがうまくいかな

い場合には，児の治療効果が持続しない可能性がうかがえた．

第２項　　目的

他者からの勧めで受診した養育者のなかには，育児不安も含めて困り感がないように振る舞う場合があり，継続的な治療関係を維持しにくいことがある．そのために治療からドロップアウトしてしまう養育者もいるが，それでは子どもの問題も未解決のまま放置されることとなり，親子ともに心理社会的な支援を受ける機会を逃してしまいかねない．筆者は，このような養育者が，困り感は持ちながらも自己開示できにくい心理状態であることを推察し，それゆえに児の問題改善に結びつかない可能性を想定した．そこで，心理士が母親の気持ちの表現を促し，不安を慰め，自己のまとまりを補助する移行対象の機能を担うことで，間接的に児へアプローチする介入の有用性について検討した．

第３項　　対象と方法

対象は，継続的な治療関係を持ちにくく，心理社会的支援のために工夫を要した発達障害児６症例であった．６症例は，DSM-Ⅳにおける広汎性発達障害（pervasive developmental disorder ； PDD）あるいは注意欠如・多動性障害（attention-deficit/hyperactivity disorder ； ADHD）の診断基準を満たし，X 年４月～X＋1 年３月に Y 病院小児精神科を受診した発達障害児のなかで，治療継続のために養育者の心理面接を繰り返し実施した症例であった（表 4-4）．すなわち，発達障害児を持つ母親への一般的支援である，児の発達評価を早期に実施し，発達検査結果により理解を深めて子どもの強みに着目したかかわりを促す心理教育や，園や学校と連携した環境調整等の継続指導において支障をきたした症例であった．

母親が治療に前向きになり始めた段階で，児への心理査定として親面接式自閉スペクトラム症評定尺度（PARS），ADHD 評価スケール（ADHD-RS）に加えて，WPPSI または WISC-Ⅳを実施した．また，母親へは日本版アタッチメント・スタイル面接（Attachment Style Interview;以下，ASI）（吉田・林・Bifulco, A, 2003）をおこなった．なお，本症例報告

はＹ病院の倫理委員会の承認の後，対象者へも症例報告の趣旨や倫理的配慮を十分に行う旨を説明して承諾を得た.

表4-4　対象児の概要

症例	初診時 年齢/性別	初診時 主訴	初診時 児の様子	発達評価					診断
				PARS		ADHD-RS		WISC-Ⅳ/WPPSI	
				回顧	現在	家庭	学校/園		
A	9歳/男児	登校渋り こだわり	うつむきがちで「学校は嫌い」と話す	10点	19点	2点	9点	FSIQ:113 VCI:121,PRI:115,WMI:91,PSI:102	PDD
B	10歳/女児	多動 暴言	口数多く、「友達とけんかが多い」と話す	0点	4点	17点	28点	FSIQ:102 VCI:99,PRI:102,WMI:94,PSI:113	ADHD
C	6歳/男児	多動	次々に玩具を出し、一つの遊びが続かない	2点	16点	28点	36点	FSIQ:113 VCI:113,PRI:98,WMI:118,PSI:110	ADHD
D	6歳/男児	多動 他児への暴力	「友達のせいでけんかをする」と話す	2点	8点	49点	37点	FIQ:74 VIQ:87,PIQ:69	ADHD
E	7歳/女児	かんしゃく	緊張が強く質問に答えられない	28点	26点	0点	9点	FSIQ:106 VCI:105,PRI:111,WMI:115,PS: 86	PDD
F	7歳/男児	多動 他児への暴力	「叱られることが多くて嫌だ」と話す	6点	11点	21点	30点	FSIQ:109 VCI:101,PRI:115,WMI:109,PSI:102	ADHD

第４項　　結果と症例提示

母親のアタッチメント・スタイルと心理士のかかわり

6 症例の母親のアタッチメント・スタイルの評価結果とその評価を踏まえた心理士のアプローチについて表 4-5 にまとめた．初診時はいずれの母親も困り感を訴えず，発達評価に懸念を示したり拒んだりしたことが共通していた．また，児の言動の問題について話題が及ぶと,園や学校の不満に終始し,問題解決のための話し合いが出来ない状態であった．発達障害児を持つ母親への一般的な心理教育では，発達検査結果を用いて子どもの発達的特徴の理解を深め，子どもの強みに着目したかかわりを促すことと，園や学校と連携して環境調整を行うことが主に行われる．しかし，6 症例においては，これらのかかわりを行っても児の行動改善はほとんどみられず，むしろ母親は園や学校批判を強めて児へのかかわりを改善しようとはしなかった．そこで，心理士は母親自身の自己の脆弱さや，それゆえの気持ちの表現力の乏しさを想定し，母親のみの心理カウンセリングの機会を設け，①母親の自己の脆弱さを想定した支持的アプローチにより，母親自身の語りを傾聴し，積極的に共感して慰めることと，②母親の困り感を言語化させて，その解決のために母親機能を補うキーパーソンの協力を得ていくなどの工夫をおこなった．母親のみの心理カウンセリングを導入した後には，母親には児の困り感を訴え主治医や心理士を頼るといった言動の変化が見られ，児にも母親に相談したり甘えたりするといった言動の変化が見られるようになった．

以下に，典型例と思われる 2 症例を提示する．症例の親子については誌上発表に関する同意を得ているが，個人情報の観点から，問題の本質を損なわない範囲の細部において変更を加えている．

表4-5　母親へのアプローチの概要

症例	母親の アタッチメント・スタイル	母親へのアプローチ	心理面接での 母親の変化	母親の変化に伴う 児の変化
A	非常に非安心/ 恐れ型＋とらわれ型	母親個人の心理カウンセリングを設定し，以下の対応をおこなった ① 母親自身の語りを受け流さずに傾聴する ② 母親の語りに共感していることを積極的に伝え，慰める ③ 子育てに対する指摘は控え，子育てで母親を助けてくれるキーパーソンを探す	児の言動への困り感を訴えるようになり，父親をキーパーソンとして面接に同席させるようになる	学校での困り感を話すようになり，登校渋りの訴えが減少する
B	中程度に非安心/ 恐れ型		児の言動への困り感を訴えるようになり，解決策を話し合えるようになる	母親だけでなく担任にも友達関係の悩みを話すようになる
C	中程度に非安心/ 恐れ型		児の言動への困り感を訴えるようになり，継父をキーパーソンとして面接に同席させるようになる	母親だけでなく継父にも甘えるようになる，一人遊びが減る，一つの遊びが続くようになる
D	中程度に非安心/ 恐れ型		児の言動への困り感を訴えるようになり，父親をキーパーソンとして面接に同席させるようになる	今まで父親の注意しか聞かなかったが，母親の注意も聞くようになる，他児への暴力はなくなる
E	軽く非安心/ 恐れ型		児の言動への困り感を訴えるようになり，担任にも相談するようになる	母親だけでなく担任にも学校での困り感を訴えるようになる，かんしゃくの頻度が減少する
F	非常に非安心/ 恐れ型		児の言動への困り感を訴えるようになり，解決策を話し合えるようになる	母親に甘えるようになる，他児への暴力はなくなり，落ち着きのない言動も減少する

症例 A

＜概要＞

症例は 9 歳男児で，主訴は登校渋り，こだわりであった．児の発達歴は，3 歳児健診で言葉の遅れを指摘されたが，療育機関などに通所することはなかった．分離不安はなく，移行対象もみられなかった．幼少期より電車の玩具で一人遊びをしていることが多く，休日は家族で過ごすことが常で，友達と遊ぶことはほとんどない．家庭は，会社員の父親と専業主婦の母親の 3 人暮らしで，祖父母を含めた親戚とは年に１度会う程度とのことであった．

既往歴，家族歴においては特記事項はなかった．

＜受診までの経過＞

児は幼い頃よりおとなしく，幼稚園では友達と遊ぶよりも保育士と過ごすことが多かった．３歳児健診で言葉の遅れを指摘されるも，療育機関など相談機関を訪れることはなかった．小学校では１人で過ごすことが多く，自分の意見を押し通すために班での話し合いができなかったり,間違いが許せないためにテストで正答できないと泣いてしまったりと，学校生活に支障をきたしていた．担任は母親へ児の状態を伝えたが，母親の困り感はなく相談機関へはつながらなかった．その後，児が友達からいじめられると訴えたことをきっかけに，担任の強い勧めにより当科の受診に至った．

＜経過＞

初診日に母親は児の発達評価を拒み,「担任が代われば問題ない」と訴えた．児は「学校は嫌い」とだけ言うとうつむき，主治医や心理士の問いかけには無反応だったが，プラレールを見つけると断りなく遊び始めた．その時，母親は制止することなく児を見ているだけであった．心理士は，児の言動から推測される児の困り感とその対処策を提案するなどして母親への心理教育を試みたが，母親は「担任が病院へ通うべきだ」と訴え，児の問題を心理士と共有することすら難しかった．心理士が母親の子育てにおける苦労を心配すると，母親は「家では問題ありませんから」と言い切り，心理士は肩透かしを食らったようであった．母子の通院はしばらく続いたが，児の学校生活場面における改善は乏しかったことから，母親個人の心理面接を設定し，母親自身の語りを丁寧に扱うこととした．具体

的には，母親の脆弱な自己を不用意に傷つけないことを意図して，母親自身の語りを受け流さずに傾聴し，母親の語りに共感していることを積極的に伝え，子育てに対する指摘は控えた. 当初, 母親の語る内容は, 学校への批判や母親自身の生い立ちの話などに終始し, 児の問題行動を語ることはなかった. それでも母親への共感を積極的に伝え続けていくと, 数回目の心理面接において，母親は「児の言動の意味がわからない」,「児の扱い方がわからない」と子育ての悩みを訴えるようになった．その後，心理士の勧めで父親が面接に同席して児の問題に介入するようになると，母親は「問題行動は児の性格だと思っていたけど違った」と話し,「時間通りに行動させるにはどうしたらよいか」などを尋ねてくるようになり，父親と相談しながら児の行動改善に取り組むようになった．同時期に，電車旅行へ出かけるなど母子の友好的なかかわり合いも増え, 診察室では,「ママって車体黄色が好きだったよね？」と児の絵画の中に母親の姿が見えたり,「電車雑誌の発売日に習い事で買いに行けないんだけど，どうしよう？」と言って，児が母親を頼る言動が増えていた．また，学校の環境調整（少人数指導やクールダウン用の教室を用意してもらうなど）をおこなうと，児の登校渋りの訴えは減少した.

症例 F

＜概要＞

症例は 7 歳男児で, 主訴は多動, 他児への暴力であった. 児の発達歴に特記事項はなく, 乳幼児健診における指摘もなかった．乳児期から幼児期にかけて指しゃぶりは続いたが, 移行対象はみられなかった. 家庭は, 児の出生後より父親から母親への身体的暴力があり, 児が 5 歳の時に約 1 年間母子で保護施設に入所した．その後両親は離婚し，現在はパート勤めの母親と児の 2 人で生活している．父親や父方の親戚とは疎遠で，母方の親戚も遠方のため年に 1 度会う程度である.

既往歴，家族歴においては特記事項はなかった.

＜受診までの経過＞

児は幼い頃より活発だったが，幼稚園では目立った問題は見られなかった．小学校に入学すると，授業中に離席したり大声を出したり，友達とけんかをすることが多くなった.

母親は担任からスクールカウンセラーや特別支援コーディネーターに相談するよう勧められたが，拒否していた．その後，児が友達に大けがを負わせたことがきっかけで，学校の強い勧めにより当科の受診に至った．

＜経過＞

初診日に母親は「レッテルを貼られているようで嫌だ」と児の発達評価を拒んだ．主治医の問いかけに，児が「叱られることが多くて学校が嫌だ」と話し始めると，母親は「やっぱり！」と児の言葉を遮り，「学校の対応が悪い」と訴えた．主治医は児の問題行動を改善するために母子への定期的な外来受診を設定したが，母子は予約時間に遅刻したりキャンセルしたりすることが続いた．そこで，症例 A と同様に母親個人の心理面接を設定し，心理士が母親自身の語りを丁寧に扱うこととした．当初，母親は「私は大丈夫なんです」と個人面接に戸惑っていたものの，心理面接を重ねていくなかで母親自身の身の上話が多く話されるようになっていった．心理士はその話を遮ることなく聴き続け，積極的に共感を示し，随所で労った．すると，「児が落ち着かない」，「児が友達に対しても（暴力的だった）父親のように振る舞っている」などの言葉が時折聴かれるようになった．その後，数回の心理面接を通して母親自身の身の上話が一段落すると，現在の子育てに対する不安や児に対する困り感が母親から話されるようになった．そこで，心理士は支持的な助言を行ったり，母親と一緒に対処策を考えたりするような心理教育的なかかわりを行うなかで，改めて児の発達評価を提案すると，母親は快諾した．児が ADHD と診断され，アトモキセチンによる薬物療法と学校での環境調整，母親へのペアレント・トレーニングが開始されると，児の暴力的な他害行為はなくなり，授業中の離席や落ち着きのない言動も減少した．また，家庭では，児が「一緒に寝たい」，「ぎゅっとして」など，母親へ身体接触を求める言動が多くみられるようになり，母親が応じると児の行動に落ち着きが出てきたとのことであった．

第５項　　考察

母親の脆弱な自己を考慮したかかわりの重要性

児の発達支援が必要ということが自明でも，児の問題行動を受け入れられず，逆に治療や支援を拒否してしまう養育者がいる．本症例の母親はいずれも，児の発達支援が必要と言われても児の問題行動を受け入れられず，逆に治療や支援を拒否していた．また，この母親たちのアタッチメント・スタイルは全員が恐れ型と評定された．恐れ型の人は，社会不安や対人場面で拒絶されたりがっかりさせられたりすることへの恐れを抱きやすいことを特徴とする回避的な対人関係の特徴をもつとされる（林，2010）．6 症例の母親たちは，児の問題を指摘されたことで園あるいは学校から拒絶されることに対する恐れが強まり，問題を直視できない状態にあったと考えられる．特に，濃厚な母子一体性を特徴とする我が国においては,母親たちは子どもの傷を自分の傷と受け止めてしまいがちである(田中，2009)．近年は，発達障害の子どもを持つ母親にうつ状態が高頻度に見られることが報告されており，その影響や対策に関心が高まっている（野邑ら，2010 ；岡田，2011）．我が子の発達は親にとって重大な関心事であり，検診や学校などで遅れや異常を指摘されることは大変な衝撃である．日々の対処に疲れ，慢性的なうつ状態が見られるケースも少なくないという．母親の精神的失調が子どもの成長に及ぼす影響を考えると，それは二重に不幸な事態であり，子どもの発達にさらに悪影響を及ぼすことも懸念される．したがって，特に，拒絶されることへの恐れを強く抱く「恐れ型」の母親たちは，自身の傷を露呈させ，問題に直面させる可能性のある発達評価を提案した支援者に対して拒否感を強め，一方で支援者側は，治療関係を結ぶことに対する困難を感じたのではないだろうか．本症例の母親も，前節の母親と同様に，子どもが不適応を起こすという状況の中で，母親として対処しなくてはならないという社会的要請に対して，自己を維持しながら対処することに問題を抱えていたものと考えられる．

6 症例では，支援の継続のために，母親の語りを聞くための母親自身の面接枠の設定が必要であり，そこで心理士との安心感のある関係が構築されて初めて「児の問題行動」や「これからどうすればいいのか」という，一般的には診察初期に聞かれる不安や悩みが語られるようになっている．つまり，母親たちは問題を認識していないのではなく，問題を言葉で表現できるほどに自己がまとまっておらず，他者と困りごとを共有して助けを求めることができない状態にあったことが推察される．Brisch（2002）は，アタッチメント障害のクライエントの治療において，面接の間隔を相手のアタッチメントの作業モデルのタイプにより調節した事例を報告している．6 症例においても，治療者側から早々に問題を指摘することは避け，積極的な共感的かかわりと慰めにより母親の自己を補助し，母親の

困り感を言語化させたうえで心理教育的なかかわりを行う方法が奏効した．このような支援者のかかわりは，自己の内と外につながりを見出し，対人コミュニケーションの前駆的な働きを洗練させる移行対象と重なる．

以上より，発達支援や治療に対して後向きになる母親へは，脆弱な自己感を想定し，不用意に傷つけないように，支援者が移行対象となり支援の場につなげることが有効であると考えられる．

母親の安心感の回復に伴う言語表現の増加が児の症状改善に及ぼす影響

母親が安心感を得にくい状況においては，母親のアタッチメント対象としての利用可能性（availability）は弱まることが推測される．「利用可能性」とは，危険にさらされたり危機的な状況で恐怖や不安を感じたりした時に，アタッチメント対象に近づいて接触することができ，かつ，アタッチメント対象が自分の感情に対して共感し，適切なかかわりをして恐怖や不安を鎮め，安心できるような働きかけをしてくれる可能性のことをいう．Ainsworth ら（1978）は，アタッチメント対象の単なる不在ではなく，利用可能性が欠如した時に，子の分離不安（separation anxiety）が生じるとする．子どもは，利用可能性が弱まった母親に不安を鎮めてもらうことができずに不安をより一層強め，たとえば症例 F においては，これまで「活発」という形容詞で済んでいた行動特徴が，「不適応行動」として悪化したものと考えられる．これは，発達障害ゆえの不適応行動というよりも，安全基地の歪み（Boris & Zeanah, 1999）から引き起こされる広義のアタッチメント障害としての不適応行動と言えるのではないだろうか．Bowlby（1993/1988）は，「母親が子供に見ないことは，子供も自分自身でみる機会を失う」と論じている．子どもが過度に不安に脅かされずに自己のまとまりを維持するためには，アタッチメント対象が子どもの不安に圧倒されずに，アタッチメント対象自身の自己のまとまりを維持しながらかかわることが重要であると言える．本症例の母親は，個別面接において，母親自身の語りを聴いて共感してもらう経験を通して，困り感を言葉で表現することができるようになった．これは，支援者が母親の気持ちを外に表現させる媒介者，すなわち，移行対象として機能していたと言える．このことは，母子の安心感のある関係性を育むことに繋がり，子どもの困り感を

言語化することにもつながったと考えられる．本症例の児が客観的な対象物としての移行対象を持ち得なかったことや，困り感をなかなか口には出さず行動で表現していたことからは，言語表現能力の弱さを推察することができる．これは，言語表現を育む場としての養育者との関係性が築かれていなかったことも影響していたのかもしれない．

養育者に利用可能性があり，子どもと養育者のアタッチメント関係が安心できるものであることが子どもの発達を促進しストレスから保護するという見地から，親子関係への早期介入の試みがさまざまになされ，その効果の実証研究が報告されつつある（数井・遠藤，2007）．6 症例からも，児の問題行動の改善のみを治療目標とするのではなく，母親のアタッチメント対象としての機能の回復，すなわち，子どもが不安に圧倒された時に，その不安を言語化して慰めることによる母子の関係性の改善も治療目標とすることが有効であることが示唆される．その前提として，母親が問題を直視できる状態，つまり母親の自己が不安に圧倒されずにまとまりを持ち，不安な気持ちを言葉で表現することで心理社会的支援を受け入れられ状態になることは重要であり，この前提がなければ児の行動改善は難しくなることが考えられる．

第４節　症例による検討の限界と展望

本章では，移行対象の機能を支援者が担うという形で臨床場面に応用することで，問題を呈した子どもと，子どもの重要他者との関係性にアプローチする介入について検討した．提示した摂食障害と発達障害の子どもたちの症例による検討では，限界として，後方視的研究であり症例数が少ないことや，治療介入を行わない対照群を設定できていないこと，児の症状改善が客観指標で示されていないことが挙げられ，今後症例数を増やして検討を重ねる必要があると考えられる．

展望としては，保育や教育現場で「モンスターペアレント」や「気になる養育者」（楠，2008）と呼ばれる関係性構築が難しい養育者と，本症例の安心感を得られにくい養育者との関連が示唆されることから，医療のみならず様々な領域での多面的な知見がペアレンティング・アセスメントに組み込まれることが期待される．

第５章　総合考察と課題

第１節　自己と社会の媒介者としての移行対象

本研究は，個人の成熟と社会の要請の不一致が生じる現代社会において喫緊の課題とされ，必要とされている，希薄になりつつある「自己」を支え，自立の前提となる「自己の確立」へと導く支援を検討することを目的とした．そのために，まずは自己の発達的視点に着目し，分離―個体化理論やアタッチメント理論等から，自立へと導く「自己の確立」について検討した．その結果，重要な他者から分離し，自立できるということが，重要な他者への十分な依存を体験し，重要な他者からの十分な保護を前提としており，このような安心感のある関係性を再現できる表象能力を用いて達成されるものであることが示唆された．したがって，本研究では，自立へと導く「自己の確立」を，幼少期の養育者に代表される,「重要な他者との安心感のある（secure）関係性から育まれる表象を用いて，自立に際する不安に対処し，まとまりのある自己を維持する」ことと定義した．そして，この事象を可視的に表す移行対象（transitional objects）を媒介にして研究を進めた．移行対象を概念化したWinnicott（1965b）は，自己は重要な他者との関係の中で育まれ，その関係性によってその性質が大きく左右されることを論じて,「発達促進的環境」という重要な他者との関係性の果たす役割を体系的に理論化している．その際に，移行対象は，自己が健全に発達したときに，一個人として重要な他者から自立する際に，その移行をサポートする働きがあるとされる．

「自己の確立」が自立に寄与するか否かを検討するために，第２章では，自立の指標の一つでもある「自己開示」と移行対象の関連を検討した．その結果，移行対象は自己開示を促すことが示唆され，移行対象を持つということが，自己表現力を養い，自立を容易にさせる可能性が考えられた．そこで，どのように移行対象が自己開示，すなわち自立へと結びつくのかを検討するために,第３章では移行対象の所有者へのインタビューを通して，移行対象の主観的役割を考察した．その結果，移行対象の主観的役割は，幼少期から青年期へと変遷をたどることが示唆され，その変遷は,「移行対象によって自己感を強め，個体化を成し遂げるプロセス」として一つの中心となるカテゴリーに集約された.移行対象は，乳児の母親への強烈な依存性が弱まっていく母子分離時の移行期に見られる，母親との分離不安を和らげるための物理的な愛着対象というばかりでなく，自己への肯定的な働きかけにより所有者の揺らいだ自己感を支え,慰めてくれる対象としても機能し,「自己の確立」に寄与しているものと考えられた．すなわち，特に青年期における移行対象は,「養育者の

代理」というだけではなく,「自己を補助するもの」として自己の確立に寄与し，個人の成長をサポートしていると考えられる．したがって，自立に困難を抱える人々の支援においては，移行対象概念が治療の指針になることが示唆された．

そこで，第 4 章では，重要な他者との関係不良が症状悪化に影響を与えていると推察される症例に対して，支援者が移行対象の機能を担うという形で臨床場面に応用する介入を試みた．提示した症例は，母子ともに，自己を補助する移行対象を必要とする環境でありながら，移行対象を見出すまでに気持ちを言語化する表現能力が不十分であることが推察された．介入では，支援者は母子それぞれの自己の脆弱さに配慮する中で，表現できなかった気持ちを理解する，内と外の媒介者として機能し，母子が自ら他者に表現できるようサポートする支援が奏功した．移行対象概念を臨床に応用することで，母子ともに安全な自己表現が可能となり，快復に寄与したと考えられる．

本研究の流れで強調すべきことは，移行対象を発見する場としての重要な他者の存在である．移行対象は，重要な他者との安心感に満ちた関係性を前提としており，子どもが自立に際する不安を慰めようとして，その関係性を再現するために創り出した対象物であると言える．加えて，移行対象が自己の発達，すなわち自立において重要なものであるということも，乳幼児期以降の移行対象を扱う本研究の，先行研究にはない新たな知見と言える．これは，移行対象に個人の内と外をつなぐ役割があるためであり，自己と社会が共存し，さらには互恵的な関係を構築するために重要な役割であると考えられる．

第２節　心身の媒介者としての移行対象

移行対象を用いて自己の確立を検討した結果，自己の確立においては重要な他者との関係性が重要であることが示唆された．自己は常にまとまりを維持しようとするものであり，まとまりがつかない時に人は不安になり，対処の仕方によっては諸々の精神的不調が生じると考えられる．第 4 章においては，重要な他者との関係不良が症状悪化に影響を与えていることが推察される症例を提示し，移行対象の機能が自己のまとまりを維持し，言葉による気持ちの表現が行われる経過を報告した．第 1 章および第 2 章の研究においても，移行対象が自己開示を促すことや，

移行対象を所有し続ける方の語りが豊かであることが明らかとなっており，移行対象と言語表現能力との関連が示唆される．

言葉は他者との関係性を身体的レベルにおける「今，ここ」から解放するが，その分，心理的距離を拡大させるものである．乳幼児にとって，いつでも一緒で互いに何でも知っていると思っていた，いわば自分とイコールの存在の母親から，「待っててね」「うん，わかった」という言葉によって離れられることは，自分とは別の存在として，すなわち，自分にはコントロールすることができない存在として母親を受け入れることであり，心理的には非常に勇気のいることと言える．そのため，自立した主体としての自己を強めたい気持ちと,身体的レベルで直接的な共有を得たい気持ちが葛藤状態に陥ることが想定される．このような葛藤は，言葉でやりとりを行うことが常である表象的な近接優位の状態にある我々にとって,乳幼児期に限った問題ではないと考えられる.そして,この葛藤を克服し,個人が社会的に自立する際に，個人の内面における身体的レベルの共有を維持しながら,言葉を用いて外へと表現することを可能にする移行対象という概念が役に立つのではないだろうか．Winnicott は，人間にとっては分離というような事態は存在せず，ただ分離の恐れのみがあるという逆説を論じている（Grolnick, 1998/1990）．創造的な遊びや象徴の使用，すなわち言葉によって心理的な距離を埋めることによって，分離は回避されているということなのであろう．

症例でみたような,自己のまとまりを維持するために言葉を放棄してしまうことは,我々の日常においても,圧倒される出来事を前に言葉にならない体験として生じる事態である．その際には，児童期以降であれば複数存在することが想定される重要な他者の存在に慰められることで，徐々に自己のまとまりを回復させ，言葉での気持ちの表現を通してその出来事を客観的に眺めることができ，落ち着きを取り戻していくものと考えられる．したがって，臨床場面において言語面接が行えるようになるには，自己のまとまりが維持できるような場が必要であり，支援者は重要な他者として位置づけられる必要があろう．その際には，人生早期の自己が育まれる場における移行対象の心理的役割が参考になる．そこでは，感触や匂いなどによって安心感を得られるといった，より生理的で身体的な要素が中心であり，身体的なレベルによる安心感をもたらす必要があると考えられた．また，このような身体感覚は，青年期に至っても通奏低音として流れていることが示唆されている．乳児と養育者のかかわりは，身体的コミュニケーションから成り立つものであるが，それに基づいて認知・言語発達が行

われるとすれば，この感覚は人間のコミュニケーションにとって普遍的なものであり，本質的な重要性をもっていると考えられる．Emde（1983）は生後３年までの乳幼児の自己を，表象段階以前の自己（prerepresentational self）と表現し，この時期の自己の発達は養育者との関係性の中での情動経験を核として生じるとしている．情動という言葉は，感情よりも身体的次元を巻き込んだ心身にまたがる経験を指すときに用いるものであり（石谷，2007），まとまりを維持する際の感覚は身体的な感覚が深く関わっていると考えられる．身体感覚から，感情がうまれ，自己が育まれるとすれば，この「身体性」なくしては，自己はまとまりを実感することができないと言えよう．したがって，言語面接においても，言葉によってどのように身体的なレベルで安心感をもたらすかかわりが行えるかということは，非常に重要だと考えられる．症例において，支援者が移行対象の役割を担い，母子の情動の媒介者となったことが奏功した背景には，以上のことが関係していたのではないだろうか．

重要な他者との関係性は自己の発達における第一義的文脈であると考えられるが，安心感のある関係性から育まれた非言語的・情動的体験があってこそ，自己は健康に発達していくと考えられる．したがって，臨床例のように，重要な他者との関係性に支障をきたしている場合には，言語領域外にある自己の発達に気を配ることが必要不可欠と言えるのではないだろうか．支援者が移行対象として機能するということは，支援者が言語領域外にある情動を媒介する重要な他者として機能するということであろう．この支援者との関係性を通して自己がまとまり言語表現に結びつくことが，症状の改善を促すと考えられる．

第３節　課題と展望

本論文は，現代社会の喫緊の課題である，希薄な自己をどのように支えるかというリサーチクエスチョンに対して，「自己の確立」を可視化する移行対象を媒介にして，移行対象を持つ人たちがどのように自己を発達させていくのかを検討することで明らかにすることを試みた．課題としては，移行対象の発現率が約 30%とされる日本において，移行対象の所有者は限られた存在であると考えられることから，本論文で導かれた考察を普遍的なものとして扱うことには慎重になるべきであると考えられる．一方で，日本は欧米化して久

しく，近年は移行対象の発現率を調査した研究も見当たらないことから，改めて発現率について調査することも有益であると考えられる．個が尊重される自己責任社会となった日本においては，重要な他者である養育者の養育態度も変化していると考えられ，子どもの自己の発達も変化がみられる可能性がある．移行対象の発現機序は，環境における必要性と子どもの表現能力であると仮定されるため，移行対象の発現率にも変化がみられることは，十分にあり得るのではないだろうか．

また，移行対象の所有と自立にかかわる指標として採用した自己開示についての関連については，自己開示に影響を与えると考えられるパーソナリティ特性について考慮していないことから，移行対象の所有と自己開示量について，直接的な因果関係を想定することは難しいと考えられた．今後移行対象の所有と自立にかかわる指標の関連を検討する際には，個人特性を精査した上で，因果関係について考察する必要がある．

加えて，本論文では乳幼児期に発現した移行対象のみに限定したために，重要な他者として母親のみを対象としたが，養育者以外の相手との関係性により作業モデルが変化する獲得安定型（earned secure）（Roisman et al., 2002）という考え方に拠れば，父親や祖父母，園や学校の先生，友人といった子どもの身近にいる人物も，重要な他者として対象とすべきであり，移行対象も，自立を問題とする移行期に現れるとすれば，乳幼児期以降に発現したものも含めるべきかもしれない．これに関連して，乳幼児期以降に初めて発現する移行対象も存在する可能性があり，移行対象を乳幼児期に限ることについてはさらなる検討が必要であると考えられる．さらに，移行対象の使用状況についても，自立が課題となる時期に使用頻度が高まったりリバイバルしたりする可能性が想定できる．どのような状況で自立の課題が現れ，どのようにそれを乗り越えていくのかということについてさらに検討することは,自立支援における臨床心理学的知見をより豊かにすると考えられる．

最後に，臨床研究における移行対象が現れる場づくりについての知見は観察研究から得られたものであったため，今後は客観的指標を用いた介入研究を行うことでより妥当性が高められる可能性が考えられる．

付録 3-1

インタビューガイド

１はじめに

１−１自己紹介

１−２承諾書に沿いながら説明を行い，不明な点，不安な点などを伺う．

１−３承諾書に署名をいただく．

１−４持参した移行対象あるいは写真を見せていただくか，画用紙に描いていただく．

１−５移行対象を見ながら，時系列で幼少期の様子を語っていただく．

２移行対象の特徴について

２−１どのようなところが気に入っていましたか？

２−２どの程度，必要としていましたか？（ex．いつも傍にないとだめ，就寝時のみ）

２−３名前は付けていましたか？

２−４所有感は強かったですか？

２−５どのような状況で使っていましたか？（ex．外出時，一人でいるとき）

２−６どのように使っていましたか？

３移行対象とのかかわりについて

３−１家族（特に母親）は，移行対象に好意的でしたか？

３−２移行対象に心，気持ちがあると思ったことはありましたか？

３−３移行対象に喜びや怒りなど，感情，気持ちをぶつけたことはありましたか？

３−４今も記憶に残るエピソードについて教えていただけますか.

４移行対象からの卒業について

４−１移行対象を手放したのはいつですか？また，きっかけは何ですか？

４−２過去の移行対象を思い出すことはありますか？

４−３移行対象を手放せないのはなぜですか？

引用文献

Ainsworth, M.D.s., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation. Oxford, England: Lawrence Erlbaum.

Allport, G. W. (1943) The ego in contemporary psychology. *Psychological Review*, 50, 451-478.

Allen, J. P., Hauser, S. T., Bell, K. L., & O'Connor, T. (1994). Longitudinal assessment of autonomy and relatedness in adolescent family interactions as predictors of adolescent ego development and self-esteem. *Child Development*, 65, 179-194.

天野 洋子・安里 葉子・新城 正紀・上田 礼子 (2001). 自己開示性と重要他者との関係―青年期について― 沖縄県立看護大学紀要, *2*, 36－44.

安藤 清志 (1986). 対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要論集, *36*, 167-199.

安藤 清志・小口 孝司 (1989). 自己開示 大坊郁夫・安藤清志・池田健一(編) 社会心理学パースペクティブ１ 誠心書房

青木 豊 (2005). 乳幼児期の愛着障害について 児童青年精神医学とその近接領域, *46*, 537-549.

青木 豊 (2012). 乳幼児―養育者の関係性：精神療法とアタッチメント 福村出版

Arkema, P. H. (1981). The borderline personality and transitional relatedness. *The American Journal of Psychiatry*, 138, 172-177.

Arthern, J., & Madill, A. (1999). How Do Transitional Objects Work?: The Therapist's view. *British Journal of Medical Psychology*, 72, 1-21.

Arthern, J., & Madill, A. (2002). How Do Transitional Objects Work?: The Client's view. *Psychotherapy Research*, 12, 369-388.

馬場 謙一・吉田 直子 (1984). Anorexia Nervosa 患者の家族力動の一考 臨床精神医学, 13, 1183-1189.

Bachar, E., Canetti, L., Galilee-Weisstub, E., Kaplan-DeNour, A., & Shalev, A. Y.

(1998). Childhood vs. adolescence transitional object attachment, and its relation to mental health and parental bonding. *Child Psychiatry and Human Development*, 28(3), 149-167.

Bifulco, A. & Thomas, G. (2013). Understanding Adult Attachment in Family Relationships. Routledge.

(ビフィルコ, A. &トーマス, G. 吉田 敬子・林 もも子・池田 真理訳 (2017). アタッチメント・スタイル面接の理論と実践 金剛出版)

Blos, P. (1962). On adolescence. Free Press.

(ブロス, P. 野沢 栄司訳 (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)

Boris, N. W. & Zeanah, C. H. (1999). Disturbances and disorders of attachment in infancy: An overview. *Infant mental health journal*, Wiley Online Library.

Bowlby, J. (1973). Attachment and Loss, vol.2 : Separation: Anxiety and Anger. Basic Books.

(ボウルビィ, J. 黒田 実郎・岡田 洋子・吉田 恒子訳 (1995). 母子関係の理論Ⅱ: 分離不安 岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1988). A secure base : Clinical application of attachment theory. Routledge.

(ボウルビィ, J. 二木 武監訳 (1993). 母と子のアタッチメントー心の安全基地 医歯薬出版)

Brenda, K.T., Rico, A.F., Steven, C., Amanda, R., Kate, H., Paul, H., & John, A.B. (2017). Sex differences in children's toy preferences: A systematic review, meta-regression, and meta-analysis. *Infant and Child Development* Wiley Online Library.

Brisch, K.H. (2002). Treating Attachment Disorders: From Theory to Therapy. Guilford.

(ブリッシュ, K. H.・数井 みゆき・遠藤 利彦・北川 恵訳 (2008). アタッチメント障害とその治療 誠信書房)

Bronstein,A.(1992). The Fetish, Transitional Objects, and Illusion. *Psychoanalytic Quarterly*,239-260.

Bruch, H. (1978). The golden cage : The enigma of anorexia nervosa. Harvard

University Press.
(ブルック, H. 岡部 祥平・溝口 純二訳 (1979). 思春期やせ症の謎-ゴールデンケージ- 星和書店)
Busch, F., Nagera, H., McKnight, J., & Pazzarossi, G. (1973). Primary Transitional Objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 12, 193-214.
Coates, D., & Wiston, T. (1987). The dilemma of disclosure. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 6, 111-112.
Compas, B. E., Orosan, P. C., & Grant, K. E. (1993). Adolescent stress and coping : Implications for psychopathology during adolescence. *Journal of Adolescence*, 16, 331-349.
Cooley, C. H. (1902). Human nature and social order. Scribner's.
(クーリー, C. H. 納武津 譯訳 (1921). 社会と我：人間性と社会秩序 日本評論社)
Coppolillo, H. P. (1976). Maturational Aspect of the Transitional Phenomenon. *International Journal of Psycho Analysis*, 58, 479-486.
土居 健郎 (2007) 「甘え」の構造 弘文堂.
Dolto, F. (1987). Dialogues Québécois. Seuil.
(ドルト,F 小川 豊昭・山中 哲夫訳 (1994). 子どもの無意識 青土社)
Downey, T. W. (1978). Transitional phenomena in the analysis of early adolescent males. *Psychoanalytic Study of the child*, 33, 19-46.
Emde, R. (1983). The prerepresentational self and its affective core. *The psychoanalytic study of child*, 38, 165-192.
遠藤 公久 (1989). 開示状況における開示意向と開示視範からのズレについて―性格特徴との関連― 教育心理学研究, 37, 20-28.
遠藤 利彦 (1989). 移行対象に関する理論的考察―特にその発現の機序をめぐって― 東京大学教育学部紀要, 29, 229-241.
遠藤 利彦 (1990). 移行対象の発生因的解明―移行対象と母性的関わり 発達心理学研究, 1, 59-69.
遠藤 利彦 (1991). 移行対象と母子間ストレス 教育心理学研究, 39, 243-252.
榎本 博明 (1982). 青年期における自己開示性（１） 日本心理学会第46回大会発表論文集, 299.

榎本 博明（1984）．青年期における自己開示性（３） 日本心理学会第48回大会発表論文集，563.

榎本 博明 （1987）． 青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究，58，91－97.

榎本 博明（1997）自己開示の心理学的研究 北大路書房.

Erikson, E. H. (1959). Identity and the Life Cycle. Norton.
（エリクソン，E.H. 小此木啓吾訳（1973）．自我同一性 誠信書房）

Erkolahti, R., & Nyström, M. (2009). The prevalence of transitional object use in adolescence: is there a connection between the existence of a transitional object and depressive symptoms?. *European Child & Adolescent Psychiatry*, 18, 400-406.

Free, K., & Goodrich, W. (1985). Transitional object attachment in normal and in chronically disturbed adolescents. *Child Psychiatry and Human Development*, 16, 30-44.

Freud, S. (1900). Die Traumdeutung. Franz Deutike
（フロイト，S. 高橋 義孝訳（1968）．夢判断 フロイト著作集２ 人文書院）

Freud, S. (1920). Jenseits des Lustprinzips. Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
（フロイト，S. 竹田 青嗣編 中山 元訳(1996)．快感原則の彼岸 筑摩書房）

藤井 京子（1985）．移行対象の使用に関する発達的研究 教育心理学研究，33，106-114.

古市 真智子（2008）．自閉症児の初期発達における「数字に対する強い関心」がもつ意味 心理臨床学研究，26，592-602.

Gaddini, R. & Gaddini, E. (1970). Transitional object and the process of individuation. A study in three different social groups. *Journal of American Academy of child Psychiatry*, 9, 347-365.

Gaddini, R. (1975). The concept of transitional object. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 14, 731-735.

Gaddini, R. (1979). Early psychosomatic pathology. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 31, 121-127.

Green, K., Groves, M., & Tegano, D. (2004). Parenting practices that limit

transitional object use: an illustration. *Early Child Development & Care*, 174, 427-436.

Greenacre, P. (1969). The fetish and the transitional object. *Psychoanalytic Study of the Child*, 24, 144-163.

Greenacre, P. (1996). Fetishism. Rosen, I. (Ed) Sexual deviation (3rd ed). Oxford University Press, 88-110.

Grolnick, S. A. (1990). Work and Play of Winnicott. Jason Aronson Inc.

(グロールニック, S. A. 野中 猛・渡辺 智英夫訳 (1998). ウィニコット著作集 別巻2：ウィニコット入門 岩崎学術出版社)

Grotevant, H. D. & Cooper, C. R. (1985). Patterns of Interaction in Family Relationships and the Development of Identity Exploration in Adolescence. *Child Development*, 56, 415-428.

橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.

服部康子 (2009). 思春期・青年期における移行対象の時代的検討 兵庫教育大学学校教育研究科修士論文 (未公刊)

林 もも子 (2010). 思春期とアタッチメント みすず書房

林 もも子 (2012). アタッチメント・スタイル・インタビュー 小林 隆児・遠藤 利彦編 「甘え」とアタッチメント 遠見書房

Heckman, J. J. (2013). Giving Kidsa Fair Chance. MIT Press.

(ヘックマン, J. J. 古草 秀子訳 (2015). 幼児教育の経済学 東洋経済新報社)

Hobara, M. (2003). Prevalence of transitional objects in young children in Tokyo and New York. *Infant Mental Health Journal*, 24, 174-191.

Hong, K. M. (1978). The transitional phenomena: A theorical integration. *Psychoanalytic Study of the Child*, 33, 47-79.

Hong, K. M., & Townes, B. D. (1976). Infant's attachment to inanimate objects: A cross-cultural study. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61.

Horton, P. C. (1981). Solace: the Missing Dimension in Psychiatry. The University of Chicago.

(Horton, P.C. 児玉 憲典訳 (1985). 移行対象の理論と臨床―ぬいぐるみから大洋体験へ 金剛出版)

Horton, P. C., Lony, J. W., & Coppolillo, H. P. (1974). Personality disorders and

transitional relatedness. *Archieves of General Psyciatry*, 30, 618-622.

福岡 欣治 (2006). 日常ストレス経験の友人への自己開示とソーシャル・サポートが気分状態に及ぼす効果―予備的検討― 静岡大学芸術大学研究紀要, 6, 43-47.

五十嵐 透子 (2005). ストッキングが主なフェティッシュ対象の男性とのサイコセラピー 心理臨床学研究, 23, 521-532.

井原 成男・木村 涼子 (1986). 移行対象の発達的意味―移行対象の様々な表れ方をした２症例からの検討 小児精神と神経, 26, 57-63.

井原 成男 (1987). 移行対象の発達的意味 (2) ―移行対象が治療中に現れた 5 症例からの検討― 小児の精神と神経, 27, 83-89.

井原 成男 (1988). 移行対象の発達的意味 (4) ―心身症児とその同胞にあらわれた移行対象― 小児の精神と神経, 28, 116-122.

井原 成男 (1989). うちの子これが手放せない プチ・タンファン, 9, 94-99.

井原 成男・庄司 順一 (1993). 移行対象と気質―その２― 日本小児保健学会第 40 回大会発表論文集, 556-557.

井原 成男 (1996). ぬいぐるみの心理学―子どもの発達と臨床心理学への招待― 日本小児医事出版社

井原 成男 (2004). Anorexia Nervosa 症例に施行した連続 S-HTP 小児の精神と神経 44, 251-258.

井原 成男編 (2006). 移行対象の臨床的展開 岩崎学術出版社.

井原 成男 (2009). ウィニコットと移行対象の発達心理学 福村出版.

池内 裕美・藤原 武弘 (2004) 移行対象の出現・消失に関する心理学的規定因の検討―生育環境と夫婦間ストレスの視点から― 社会心理学研究, 19, 184-194.

今林 俊一 (1991). 青年期の自己開示性に関する研究―対人関係の親密さとの関連について― 教育心理学会総会発表論文集, 33, 421-422.

井上 芙美・相模 健人 (2005). 大学生における自己開示傾向とハーディネス性格特性の関連についての研究 愛媛大学教育学部紀要, 52, 89-96.

石川 清・岩田 由子・平野 源一 (1960). Anorexia Nervosa の症状と成因について 精神神経 62, 1203-1221.

石谷 真一 (2007). 自己と関係性の発達臨床心理学-乳幼児発達研究の知見を臨床に生かす培風館

James, W. (1890). The principles of psychology. Harvard University Press.
（ジェイムズ, W. 今田 寛訳（1992）. 心理学（上）岩波書店）
Jonsson, C. & Taje, M. (1983). “Good enough” mothering and the incidence of transitional objects after infantile colic. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 22, 545-548.
Jourard, S. M. (1958). A study of self-disclosure. *Scientific American*, 198, 77-82.
Jourard, S. M. (1971). The transparent self. D. Van Nostrand.
（ジュラード, S. M. 岡堂 哲雄訳（1974）. 透明なる自己 誠信書房）
Jung, C. G. (1931). Ziele der Psychotherapie. Walter Verlag.
（ユング, C. G. 林 道義訳（1989）. 心理療法の目標みすず書房）
加嶋 晶子・山下 達久・岡本 明子・名越 泰秀・和田 良久・福居 顯二（2002）. 摂食障害と養育体験-世代間での比較- 臨床精神医学 31, 1101-1106.
梶山 有二（1992）. 思春期やせ症 公衆衛生 57,570-573.
数井 みゆき・遠藤 利彦（2005）. アタッチメント-生涯にわたる絆- ミネルヴァ書房
数井みゆき・遠藤利彦（2007）. アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房
Keren, M., Ron-Miara, A., Feldman, R., & Tyano, S. (2006). Some Refelections on infancy-Onset Trichotillomania. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 61, 254-272.
菊池 彰夫（1988）. 思いやりを科学する 川島書店
木下 康仁（2003）. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
木下 康仁（2007）. ライブ講義 M-GTA 弘文堂
北浦かほる（2004）. 「世界の子ども部屋」子どもの自立と空間の役割 井上書院
木谷 智子・岡本 祐子 （2018）. 自己の多面性とアイデンティティの関連―多元的アイデンティティに注目して― 青年心理学研究, 29(2), 91-105.
北山 修 （2003）. インタビュー/ウィニコットと日本語臨床 妙木浩之編 ウィニコットの世界 現代のエスプリ別冊 至文堂
小林隆児・遠藤利彦（2012）. 「甘え」とアタッチメント 遠見書房
Kohut, H. (1971). The analysis of the self. International Universities Press.
（コフート, H. 水野 信義・笠原 嘉監訳（1994）. 自己の分析 みすず書房）
Kohut, H. (1977). The restoration of the self. International Universities Press.

（コフート，H. 本城 秀次・笠原 嘉監訳（1995）．自己の修復 みすず書房）
工藤 晋平 （2004）． 「見立て」における成人愛着スタイルの利用とそのアセスメント 心理臨床学研究 4 406-416.
熊野 道子（2002）．自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違 教育心理学研究，50，456-464.
黒川 嘉子（1999）．乳幼児の就眠時行動に関する理論的考察-狭義の移行対象論から自己調節論へと視点をうつして 京都大学大学院紀要，45，342-352.
黒川 嘉子（2004）．移行対象・移行現象に関する２つの視点 心理臨床学研究，22，285-296.
楠 凡之（2008）．「気になる保護者」とつながる援助―「対立」から「共同」へ かもがわ出版
Lacan, J. (1966). Écrits. Seuil
（ラカン， J. 宮本 忠雄・竹内 迪也・高橋 徹・佐々木 孝次訳 （1972）． エクリⅠ．佐々木孝次・海老原 英彦・葦原 眷訳（1981）．エクリⅢ 弘文堂.）
Laura, K. N. (1995). Treasured possessions and their meanings in adolescent males and females. *Adolescence*, 30, 301-318.
Lieberman, A., & Zeanah, C. (1995). Disorders of attachment in infancy. Child and Adolescent *Psychiatric Clinics of North America*, 4, 571-587.
Litt, C. J. (1986). Theories of transitional object attachment: An overview. *Internal Journal of Behavioral Development*, 9, 383-399.
Lobel, L. (1981). A study of transitional objects in the early histories of borderline adolescents. *Adolescent Psychiatry*, 9, 199-213.
Lundy, A., & Potts, T. (1987). Recollection of a transitional object and needs for intimacy and affilistion in adolescents. *Psychological Reports*, 6, 767-773.
Mahalski, P. A. (1983). The Incidence of Attachment Objects and Oral Habits at Bedtime in Two Longitudinal Sample of Children Aged 15-7 years. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 24, 283-295.
Mahalski, P. A., Silva, P. A., & Spears, G. F. (1985). Children's attachment to soft objects at bedtime, child rearing, and child development. *Journal of the*

American Academy of Child Psychiatry, 24, 442-446.

Mahler, M. (1975). The Psychological Birth of the Human Infant. Basic Books.
(高橋 雅士・織田 正美・浜畑 紀訳 (1981). 乳幼児の心理的誕生―母子共生と個体化―黎明書房)

Mannoni, M. (1982). D’un impossible a l’auture.
(松本 雅彦・山口 俊郎・西田 稔訳 (1984). 母と子の精神分析 人文書院)

丸山 利弥・今川 民雄 (2001). 対人関係の悩みについて自己開示がストレス低減に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 1, 107－118.

丸山 利弥・今川 民雄 (2002). 自己開示によるストレス反応低減効果の検討 対人社会心理学研究, 2, 83-91.

松木 邦裕 (2008). 摂食障害というこころ 新曜社

McAdams, D. P. (1993). The stories we lived by : personal myths and the making of the self. Guilford Press.

Mead, G. H. (1934). Mind, Self and society : From the standpoint of a social behaviorist. The University of Chicago Press.
(稲葉 三千男・滝沢 正樹・中野 収訳 (1973). 精神・自我・社会 青木書店)

Miller, A., & Parker, A. (1963). Jane’s Blanket. New York: Crowell-Collier Press.
(厨川 圭子訳 (1971). ジェインの毛布 偕成社)

Milne, A. A. (1926). Winnie-the-Pooh. London: Methuen & Co. Ltd.
(石井 桃子訳 (1940). くまのプーさん 岩波書店)

Miyake, K., Chen, S.-j., & Campos, J. J. (1985). Infant temperament, mother’s mode of interaction, and attachment in Japan: An interim report. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50(1-2), 276-297.

三毛 美予子 (2003). 生活再生にむけての支援と支援インフラ開発―グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく退院援助モデル化の試み 相川書房

水島 広子 (2010). 摂食障害の不安に向き合う―対人関係療法によるアプローチ 岩崎学術出版社

Morelli, G. A, & Tronick, E. Z. (1992). Efe Fathers :One among many? A comparison of forager children’s involvement with fathers and other males. Social Development, 1, 36- 54.

森定 美也子 (1999). 乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在 心理臨床学研究, 16, 582-591.

森定 美也子 (2001). 思春期における慰める存在:移行対象の観点から 心理臨床学究, 19, 535-541.

Muris, P., Meesters, C., Merckelbach, H., et al. (2000). Worry in children is related to perceived parental rearing and attachment. *Behavior Research and Therapy* 38, 487-497.

内閣府 (2005). 若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告 https://www8.cao.go.jp/youth/suisin/jiritu/houkoku2.pdf. [2019.09.06 アクセス]

中村 敬 (2007). 地域における子育て支援-育児ストレスとその生成要因について- 大正大学研究紀要 92,316-336.

中村 俊哉 (2004). 西洋発祥の発達理論は日本人にどれほど当てはまるか 教育実践研究, 12, 161-165.

中根 淑子 (1994). 移行対象経験と青年期の母親イメージとの関係 日本教育心理学会総会発表論文集, 97.

中西 美紀・岩堂 美智子 (2004). 幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感-内的ワーキングモデル尺度を用いて- 生活科学研究誌 3, 107-114.

Neisser, U. (1988). Five kinds of self-knowledge. *Philosophical Psychology* 1, 35-59.

Neisser, U. (1993). The self perceived. In U. Neisser (Ed.), The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge (pp. 3-21). Cambridge University Press.

Nelson, C. A., Fox, N. A., & Zeanah, C. H. (2014). Romania's Abandoned Children: Deprivation, Brain Development, and the Struggle for Recovery. Harvard University Press.

(ネルソン, C. A. フォックス, N. A. & ジーナー, C.H. 上鹿渡 和宏・青木 豊・稲葉 雄二・本田 秀夫・高橋 恵里子・御園生 直美監訳 (2018). ルーマニアの遺棄された子どもたちの発達への影響と回復への取り組み : 施設養育児への里親養育による早期介入研究(BEIP)からの警鐘 福村出版)

Newson, J., Newson, E., & Mahalski, P.A. (1982). Persistent infant comfort habits and their sequelae at 11 and 16 years. *Journal of Child Psychology and*

Psychiatry, 23, 421-436.

日本摂食障害学会（2012）．摂食障害治療ガイドライン 医学書院

Ogden, T. H. (1986). The Matrix of the Mind : Object relations and the psychoanalytic dialogue. J. Aronson.

（オグデン，T. H. 狩野力八郎監訳（1996）．こころのマトリックス 岩崎学術出版社）

岡田 尊司（2011）．シック・マザー 筑摩選書

岡田 努 (1991). 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究，1，11-18.

尾関 友佳子 (1994). 大学生の心理的ストレス過程の共分散分析構造　健康心理学研究，7，20-36.

Provence, S. & Ritvo, S. (1961). Effects of Deprivation on Institutionalized Infants. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 16, 189-205.

Roisman, G. I., Padron, E., Sroufe, L. A., & Egeland, B. (2002). Earned-secure attachment status in retrospect and prospect. *Child Development*, 73, 1204-1219.

戈木 クレイグヒル 滋子（2006）．グラウンデッド・セオリー・アプローチ 理論を見出すまで 新曜社

斎藤 環（2013）．承認をめぐる病 日本評論社

斎藤 環（2012）．生き延びるためのラカン 筑摩書房

斎藤 環（2008）．法制審議会民法成年年齢部会第５回会議（平成２０年７月１日開催）http://www.moj.go.jp/content/000012450.pdf. [2020.05.06 アクセス]

Sameroff, A. & Emde, R. (Eds.). (1992). Relationship disturbances in early childhood. Basic Books.

（サメロフ，A. & エムディ，R. 小此木 啓吾監修（2003）．早期関係性障害 岩崎学術出版社）

三宮 真智子（2004）．思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案：メタ認知の観点から　鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，19，151-161.

政府広報オンライン（2018）．https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201808/2.html. [2019.09.06 アクセス]

Shafii, T. (1986). The prevalence and use of transitional objects : A study of 230 adolescents. *American Academy of Child Psychiatry*, 25, 805-808.

Sherman, M., & Hertzig, M. E. (1983). Treasured object use: A cognitive and

developmental marker. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 22, 541-544.

Stanjek, K. (1979). Children's mental attachments to material objects. *Paper presented at the international congress psychology of the child, Paris*.

Stern, D. (1985). The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology. Karnac Books, p.35.

（スターン, D. 小此木 啓吾・丸田 俊彦監訳 (1989). 乳児の対人世界 岩崎学術出版社）

Stern, D. (1995). The motherhood constellation; a unified view of parent-infant psychotherapy. Basic Books.

（スターン, D.馬場 禮子,青木 紀久代訳, (2000). 親-乳幼児心理療法, 岩崎学術出版社）

Stern, D. (2000). The Interpersonal World of the Infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology; First paperback edition. Basic Books, p.xxv.

Steude, P. G. (1985). Teenage teddybears: Recognition and utilization of transitional objects in the treatment of adolescents. *Psychiatric Forum*, 13, 21-27.

Stevenson, O. (1954). The first treasured possession. *Psychoanalytic Study of the Child*, 9, 199-217.

Strauss, A. & Corbin, J. (1998). Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory (2nd ed.).

（ストラウス, A. & コービン, J. (2004). 質的研究の基礎―グラウンデッド・セオリーの技法と手順（第2版） 医学書院）

Sullivan, H. S. (1962). Schizophrenia as a Human Process. W. W. Norton & Company.

（サリヴァン, H. S. 中井 久夫・安克 昌他訳, (1995). 分裂病は人間的過程である みすず書房）

Svendson, M. (1934). Children's imaginary companions. *Achieves Neurology and Psychiatry*, Ⅱ, 985-999.

Tabin, J. K. (2005). Transitional Objects in Play Therapy with Adolescents. *Jason Aronson*. 68-80.

Takahashi, K. (1986). Examining the strange-situation procedure with Japanese mothers and 12-month-old infants. *Developmental Psychology*, 22(2), 265-270.

Takahashi, K. (1990). Are the key assumptions of the "Strange Situation" procedure universal? A view from Japanese research. *Human Development*, 33(1), 23-30.

高橋 誠一郎 (1994). Parental Bonding Instrument (PBI) を用いた摂食障害患者における両親の養育態度の評価 臨床精神医学 23, 1035-1046.

武井 明 (2012). ビミョーな子どもたち 日本評論社

田中 千穂子 (2009). 母と子のこころの相談室 山王出版

Tolpin, M. (1971). On the Beginning of a Cohesive Self. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 26, 316-352.

富田 昌平 (2007). 乳幼児期の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究 中国学園紀要, 6, 127-138.

Triebenbacher, S. L. & Tegano, D. W. (1993). Children's use of transitional objects during daily separations from significant caregivers. *Perceptual and Motor Skills*, 76, 89-90.

内田 利広・河合 三奈子・大田 千登世 (2010). 日本における内的作業モデルに関する研究の現状と今後の展望 京都教育大学紀要 117, 99-114.

牛島 定信 (1982). 過渡対象をめぐって 精神分析研究, 26, 1, 1-9.

Volkan, V.D. & Kavanauh, J. G. (1978). The cat people. In Gronock, S. A,, Barkin, L., & Muenstenver, W. (ed.) Between reality and fantasy. Jason Aroson.

Winnicott, D. W. (1952). Anxiety Association with Insecurity

(北山 修監訳 (1989). 安全でないことと関連した不安 小児医学から児童分析へ―ウィニコット臨床論文集Ⅰ 岩崎学術出版社)

Winnicott, D. W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first not-me possession. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97.

(橋本 雅夫訳 (1979). 移行対象と移行現象 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)

(北山 修監訳 (1990). 移行対象と移行現象 児童分析から精神分析へ―ウィニコット臨床論文集Ⅱ 岩崎学術出版社)

Winnicott, D. W. (1958). A Capacity to be Alone. *The International Journal of*

Psychoanalysis, 39, 416-420.
(牛島 定信訳 (1977). 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)
Winnicott, D. W. (1965a). The Family and Individual Development. Tavistock Publications.
(牛島 定信監訳 (1984). 子どもと家庭 誠信書房)
Winnicott, D. W. (1965b). The Maturational Processes and the Facilitating Environment. Tavistock Publications.
(牛島 定信監訳 (1977). 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)
Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality*. Tavistock Publications.
(橋本 雅夫訳 (1979). 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)
Winnicott, D. W. (1975). *Through paediatrics to psycho-abnalysis.* Basic Books.
(北山 修監訳 (1990). 児童分析から精神分析へ 岩崎学術出版社)
Wolf, A. W. & Lozoff, B. J. (1989). Object attachment, thumbsucking, and the passage to sleep. *Journal of the American Academy of the Child and Adolescent Psychiatry*, 28, 287-292.
Wulf, M. (1946). Fetishism and object choice in early childhood. *Psychoanalytic Quarterly*, 14, 450-471.
山下 親子 (2009). 憤怒と抑うつ感に苦しむ男性の変容過程.心理臨床学研究, 26, 675-686.
山崎 篤 (2003). ウィニコットとタスティン―こころの中の自閉のポケット 妙木浩之編 ウィニコットの世界 現代のエスプリ別冊 至文堂
屋宮 公子 (2008). 学生相談室におけるサポート・グループ―大学に居場所のない学生によってつくられた「三間の器」 学生相談研究, 29, 25-36.
吉田 敬子・林 もも子・Bifulco, A. (2003). アタッチメント・スタイル面接による養育者の対人関係能力の評価方法-日本版Attachment Style Interview(ASI)の信頼性と有用性の検討- 精神科診断学 14, 29-40.
吉田 里美 (2002). ユング心理学の源流について 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要3, 118-130.
Zeanah, C., Larrieu, J., Heller, S. & Valliere, J. (2000). Infant-parent relationship assessment. In Zeanah, C. (Eds.). Handbook of infant mental health, 2nd ed., pp.222-235, Guilford Press.